兵庫県文化財調査報告　第319冊

大中遺跡 Ⅲ

兵庫県立考古博物館建設に伴う
大中遺跡（第22次）発掘調査報告書

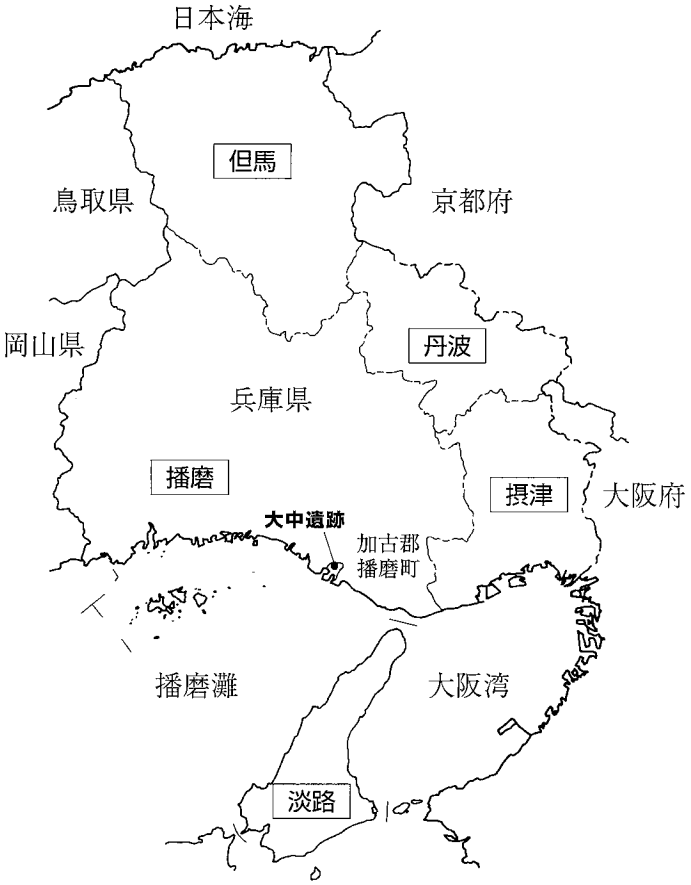
2007年10月

兵庫県教育委員会

兵庫県文化財調査報告　第319冊

大中遺跡 Ⅲ

兵庫県立考古博物館建設に伴う
大中遺跡（第22次）発掘調査報告書



2007年10月

兵庫県教育委員会

大中遺跡全景（南西上空から）

調査区の位置（南西上空から）

巻頭図版２

調査区全景空中写真（下が南東）

旧石器調査区全景航空写真（下が南東）

巻頭図版４

調査区南部全景（上が南東）

調査区北部全景（下が南東）

巻頭図版６

調査区南東部全景（西から）

SH2202 ～ SH2204（南西から）

SH2202 遺物出土状況１（南から）

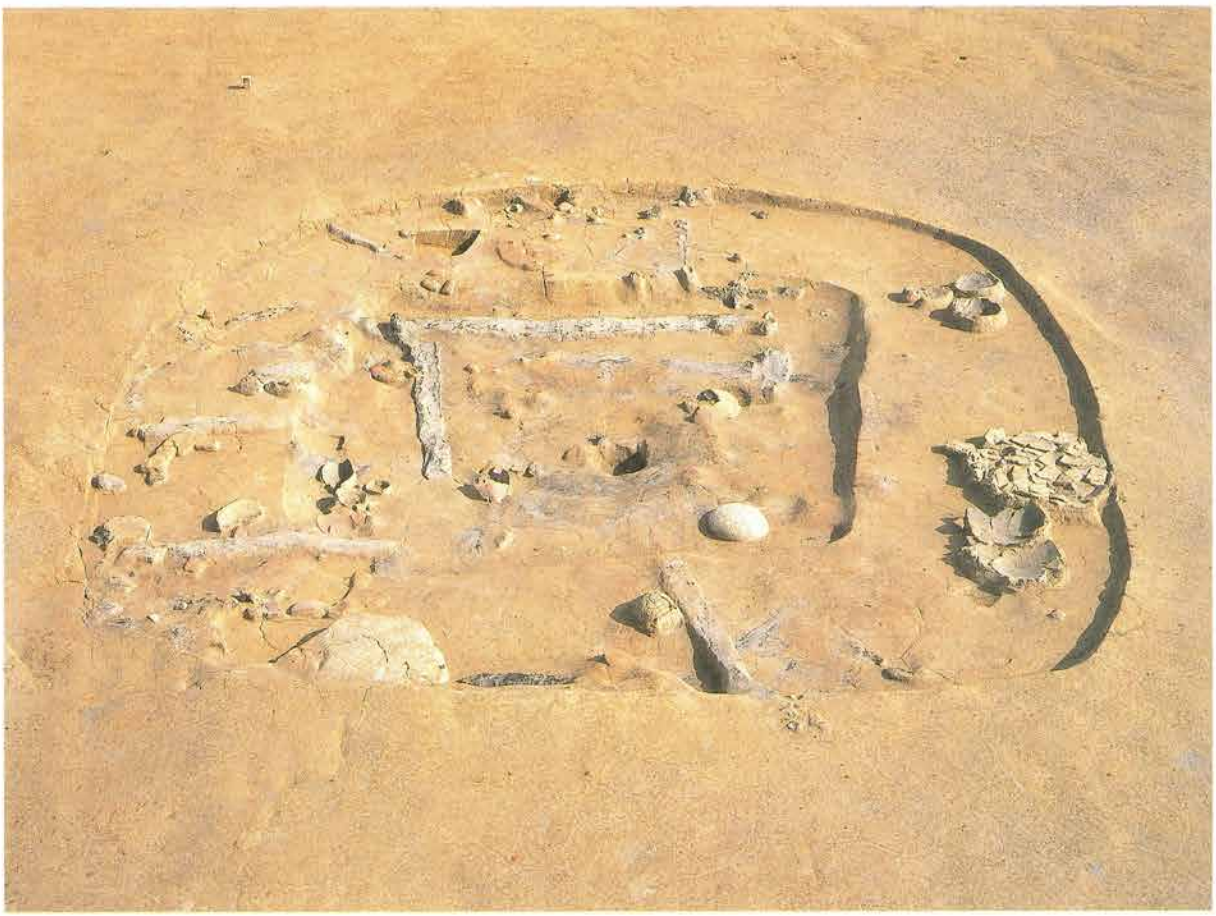
SH2202 遺物出土状況１（南東から）

巻頭図版８

SH2202 遺物出土状況１（南西から）

SH2202 主柱・梁桁炭化状況（南西から）

SH2202 遺物出土状況２（南から）

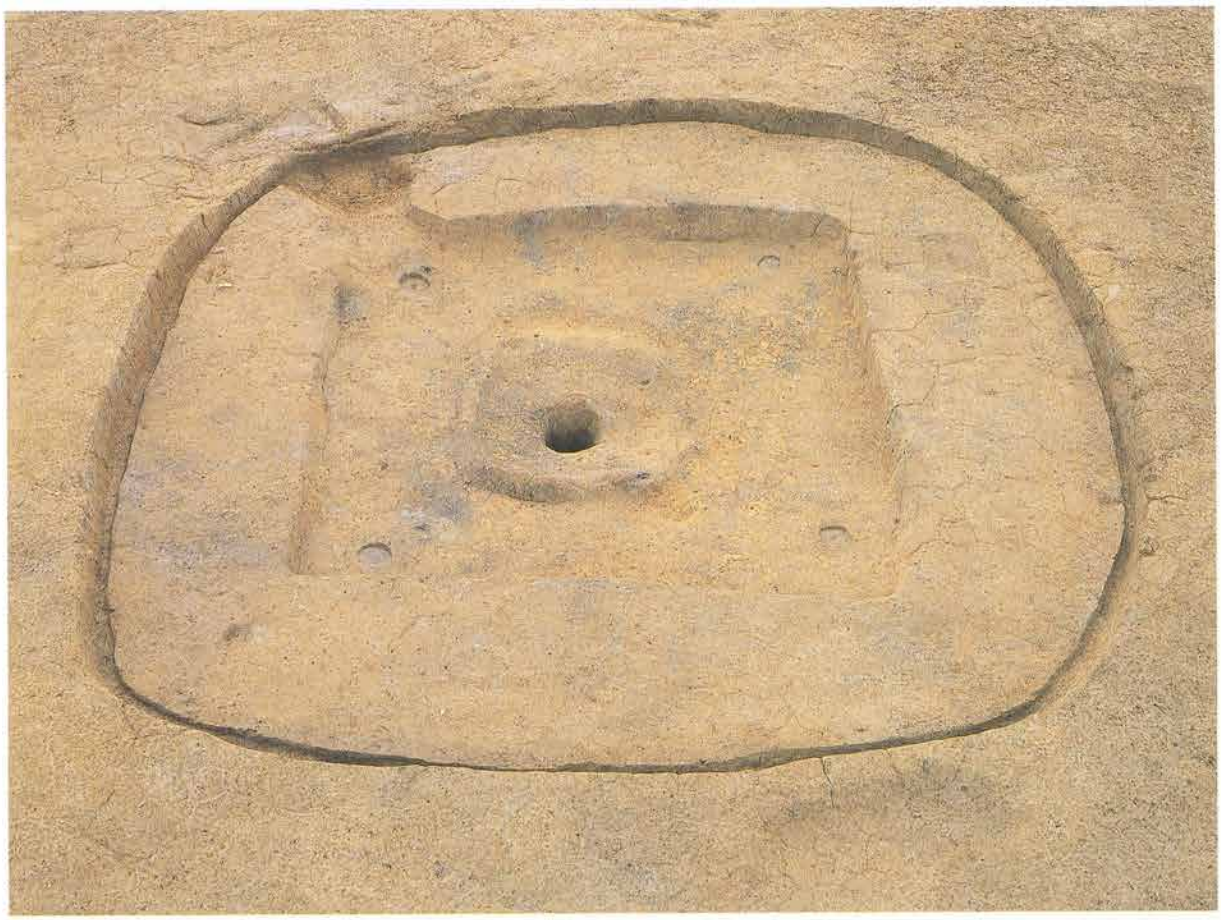


SH2202 遺物出土状況２（南西から）

SH2202 遺物出土状況３（南から）

SH2202 遺物出土状況３（南東から）

SH2202 完掘状況（南から）



SH2202 完掘状況（南東から）

SH2203 全景（北東から）

SH2203 内壁際土坑 SK22191 遺物出土状況（北西から）

SH2204 全景（南西から）

SH2204 内壁際土坑 SK22131 遺物出土状況（西から）

巻頭図版 14

SH2201 および周辺遺構出土土器

SH2202 出土土器

SH2203・SH2204 出土土器

SX22188 出土土器

例　　言

1．本書は兵庫県加古郡播磨町大中500番地ほかに所在する大中遺跡（おおなかいせき）の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は兵庫県教育委員会による兵庫県立考古博物館建設に伴って兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が平成16年度（2004年）に発掘調査を実施した。大中遺跡の発掘調査次数は今回の調査で第22次となる。また、今回の調査区については平成9年度に試掘調査を実施しており、本発掘調査の範囲設定はその成果に基づくものである。なお、試掘調査分については平成10（1998）年3月に報告書が刊行されている。試掘調査と本発掘調査の調査年度・次数・遺跡調査番号は以下のとおりである。

（試掘調査）　平成9年度（1997年）

（本発掘調査）平成16年度（2004年）遺跡調査番号2004238

3．出土品整理事業は平成17（2005）年度から埋蔵文化財調査事務所で実施した。主として嘱託員等が整理作業を担当し、発掘調査担当者のうちの事務所所属職員が作業指示等を行い、これに工程管理の職員が加わって実施した。また、金属器保存処理は事務所職員の指導のもとに当事務所で行った。

　2年にわたる出土品整理事業の担当者は下記のとおりであるが、異動等により年度毎の変動があった。

工程管理担当職員　岡田章一・別府洋二・岸本一宏

作業指示担当職員　岸本一宏・久保弘幸（現：兵庫県立歴史博物館）・篠宮　正

保存処理担当職員　岡本一秀

作業担当嘱託員等　接合・復元関係　眞子ふさ恵・西口由紀・木村淑子・小野潤子・三好綾子・奥野政子・又江立子・荒木由美子・藤池かづさ・嶺岡美見

実測・トレース関係　宮田麻子・西村美緒・村上京子・溝上くみ

4．発掘調査にあたっては、調査第2班　岸本一宏・久保弘幸・篠宮　正・深江秀憲を担当者とし、吉田建設株式会社に委託して実施した。調査補助は、小谷義男・柴田妃三光・森崎由紀子・赤壁千恵子・山本香織、現場事務・室内作業は井守芳美・覚野郁子があたった。

5．発掘調査時の遺構の実測は、空中写真測量図化としてワールド航測株式会社に委託した。その他の実測は調査員および補助員が実施した。また、出土品整理時の遺物実測および遺構・遺物図の浄写は嘱託員が行なった。

6．本書に使用した写真のうち、遺構については調査員が撮影したもの、発掘中の空中写真撮影は空測会社に委託して撮影したものを使用した。また、遺物写真については株式会社タニグチ・フォトに委託して撮影したものである。なお、第13図の写真は播磨町郷土資料館の提供によるものである。

7．出土試料の自然科学分析については、パリノ・サーヴェイ株式会社、株式会社加速器分析研究所に委託して実施した。また、住居跡 SH2202 の被熱温度の推定について、大阪市立大学井上　淳氏に玉稿を戴いた。

8．本書の執筆は、発掘調査担当者である岸本・篠宮・久保が行い、分担は本文目次に示した。また、本書の構成・編集は、嘱託員の補助のもと、岸本が行った。

9．本報告で使用した図面・写真および遺物は、兵庫県立考古博物館で保管している。

10．発掘調査および報告書作成にあたっては、以下の方々から御教示、御協力を得た。記して感謝の意を表します。（順不同敬称略）
青木哲哉、上田哲也、岡本一士、角南聡一郎、森岡秀人、山本三郎

凡　　例

1．本書に使用した方位は、第Ⅴ系国土座標（世界測地系）を基準とし、標高の数値は国土地理院１等水準点を利用した海抜高（Ｔ．Ｐ．）を使用した。また、方位は座標北をさす。

2．本書で使用した遺構番号は、調査次数を冠し、全体を通し番号とした。また、遺構略号は次のように（SB →掘立柱建物跡、SD →溝、SE →井戸、SH →住居跡、SK →土壙・土坑、SP →柱穴、SX →墓・不明遺構）呼称している。

3．遺構図の炭・炭化材部分は 40%、焼土部分は 25%、土器出土部分は 15%の網かけにしている。

4．遺構等の土層色調名および土器の色調名は『新版標準土色帳』（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修）によるものである。

5．土層名のうち、堆積物の粒度区分については、『新版地学ハンドブック』（大久保雅弘・藤田至則編著、築地書館株式会社発行）により、調査担当者が経験的に触感により判断したものがある。

6．遺物番号は本文・挿図・写真とも同一とし、遺物の種類ごとに通し番号としている。遺物略号については、石製品→Ｓ、金属器→Ｍとし、土器類には略号は付していない。

7．本書に掲載した挿図のうち、第１図は国土地理院発行の 1/25,000 地形図、第２図は加古川市発行の 1/2,500 地図をそれぞれ使用したものである。

本　文　目　次

第１章　遺跡の環境

第１節　地理的環境……1（岸本）

第２節　歴史的環境……2（岸本）

第２章　調査の経緯と概要

第１節　調査に至る経緯……3（岸本）

第２節　調査の経過と体制……3（岸本）

第３節　調査の概要……5（岸本）

第３章　調査の結果

第１節　基本土層……7（岸本）

第２節　弥生時代の遺構とその遺物および掘立柱建物跡 ……7（篠宮・岸本）

第３節　古墳時代の遺構とその遺物……39（岸本）

第４節　中世の遺構とその遺物……40（岸本）

第５節　時期不明の遺構……44（岸本）

第６節　包含層出土の遺物……52（岸本）

第７節　旧石器～弥生時代の石器……55（久保）

第４章　自然科学分析結果

第１節　竪穴住居 SH2202から採取した炭の反射率測定に基づいた被熱温度の推定……59

（大阪市立大学　　井上　淳）

第２節　大中遺跡出土遺物の炭化材樹種同定報告……61

（パリノ・サーヴェイ株式会社）

第３節　大中遺跡出土遺物の胎土分析……65

（パリノ・サーヴェイ株式会社）

第５章　総　括

第１節　竪穴住居 SH2202の構造復原と空間復原……79（篠宮）

第２節　壁際土坑の敷き石……83（篠宮）

第３節　大中遺跡の住居跡と土器……87（岸本）

補　遺

大中遺跡第21次調査出土土器の補遺……91（岸本）

巻頭写真図版目次

巻頭図版1　上：大中遺跡全景（南西上空から）
　　下：調査区の位置（南西上空から）
巻頭図版2　調査区全景空中写真（下が南東）
巻頭図版3　旧石器調査区全景航空写真（下が南東）
巻頭図版4　調査区南部全景（上が南東）
巻頭図版5　調査区北部全景（下が南東）
巻頭図版6　上：調査区南東部全景（西から）
　　下：SH2202～SH2204（南西から）
巻頭図版7　上：SH2202遺物出土状況1（南から）
　　下：SH2202遺物出土状況1（南東から）
巻頭図版8　上：SH2202遺物出土状況1（南西から）
　　下：SH2202主柱・梁桁炭化状況（南西から）
巻頭図版9　上：SH2202遺物出土状況2（南から）
　　下：SH2202遺物出土状況2（南西から）
巻頭図版10　上：SH2202遺物出土状況3（南から）
　　下：SH2202遺物出土状況3（南東から）
巻頭図版11　上：SH2202完掘状況（南から）
　　下：SH2202完掘状況（南東から）
巻頭図版12　上：SH2203全景（北東から）
　　下：SH2203内壁際土坑SK22191遺物出土状況（北西から）
巻頭図版13　上：SH2204全景（南西から）
　　下：SH2204内壁際土坑SK22131遺物出土状況（西から）
巻頭図版14　上：SH2201および周辺遺構出土土器
　　下：SH2202出土土器
巻頭図版15　上：SH2203・SH2204出土土器
　　下：SX22188出土土器

挿図目次

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡……1
第2図　大中遺跡調査地区……4
第3図　SH2201断面図……8
第4図　土器棺ST01遺構および遺物実測図……32
第5図　SH2202炭検出状況……59
第6図　SH2202における炭の分布と炭試料採取地点およびその反射率ヒストグラム……60
第7図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(1)・(2)……71・72
第8図　孔隙・砂粒・基質の割合……73
第9図　胎土中の砂の粒径組成(1)・(2)……74・75
第10-1図　竪穴住居跡SH2202復原模式図……80
第10-2図　竪穴住居跡SH2202土器復原位置図……80
第11図　竪穴住居SH2202イイダコ壺出土位置図……82
第12図　大中遺跡の敷き石のある竪穴住居位置と関連住居図……84
第13図　大中遺跡第34号住居址壁際土坑（写真）……86
第14図　大中遺跡住居跡位置図……88
第15図　大中遺跡出土弥生土器の変遷……90

表目次

第1表　出土石器一覧表……58
第2表　樹種同定結果……63
第3表　遺構別種類構成……64
第4表　胎土分析試料一覧および胎土分類……66
第5表　胎土分析結果(1)～(4)……67～70

図 版 目 次

図版１　調査区内遺構配置図
図版２　調査区壁土層断面図
図版３　SH2201
図版４　SH2201および周辺遺構詳細図
図版５　SH2202
図版６　SH2202炭化材検出状況
図版７　SH2202土器出土位置図
図版８　SH2202詳細図
図版９　SH2203
図版10　SH2203土器出土位置図
図版11　SH2203詳細図
図版12　SH2204
図版13　SH2204土器出土位置図
図版14　SH2204詳細図
図版15　SX22002・SX22003・SH2205
図版16　SH2205詳細図
図版17　SH2206
図版18　SH2206土層断面・SH2207
図版19　SH2208
図版20　SH2208詳細・SB2201
図版21　SB2202
図版22　SB2203・SB2206
図版23　SB2204・SB2205
図版24　木棺墓等
図版25　SX22188(1)
図版26　SX22188(2)
図版27　SK22063・SK22080
図版28　SK22089・SK22118
図版29　SK22193・SD22311
図版30　柱穴・土壙(1)
図版31　土壙(2)
図版32　土壙(3)
図版33　土壙(4)
図版34　土壙(5)
図版35　土壙(6)
図版36　SX22235・土壙(7)
図版37　土壙(8)・溝(1)
図版38　溝(2)
図版39　溝(3)
図版40　溝(4)
図版41　溝(5)
図版42　旧石器調査区配置図
図版43　旧石器平面確認部分地形図
図版44　旧石器確認４・７・９トレンチ土層断面図
図版45　旧石器確認・断ち割りⅡトレンチ土層断面図
図版46　旧石器確認トレンチ１ｂ土層断面図
図版47　SH2201および周辺遺構出土遺物(1)
図版48　SH2201および周辺遺構出土遺物(2)・土壙出土土器(1)
図版49　SH2202出土遺物(1)
図版50　SH2202出土遺物(2)
図版51　SH2202出土遺物(3)
図版52　SH2202出土遺物(4)
図版53　SH2203出土土器
図版54　SH2204・SH2208出土遺物
図版55　SH2205出土遺物
図版56　SH2206出土遺物
図版57　土壙出土土器(2)
図版58　SX22188出土土器(1)
図版59　SX22188出土土器(2)・土壙出土土器(3)・木棺墓出土土器・溝出土遺物(1)・包含層出土鉄器
図版60　溝出土遺物(2)・柱穴出土遺物
図版61　包含層出土遺物(1)
図版62　包含層出土遺物(2)
図版63　包含層出土遺物(3)
図版64　出土石器(1)
図版65　出土石器(2)
図版66　大中遺跡第21次調査出土土器

写 真 図 版 目 次

写真図版１　上　遺跡遠景（北東上空から）
　　下　遺跡遠景（南西上空から）
写真図版２　上　調査区（南西上空から）
　　下　調査区（北西上空から）
写真図版３　上　調査区全景（北東上空から）
　　下　調査区全景（南東上空から）
写真図版４　上　調査区北部（南西上空から）
　　下　旧石器調査終了後調査区全景（南西上空から）
写真図版５　上　調査区南部（東から）
　　下　調査区南部の詳細（東から）
写真図版６　上　調査区南部（西から）
　　下　調査区南部の詳細（西から）
写真図版７　上　調査区南部（南西から）
　　下　調査区南部の詳細（南西から）
写真図版８　上　調査区南部の詳細（北東から）
　　下　調査区南東部の詳細（北西から）
写真図版９　上　SH2202およびその周辺（北東から）
　　下　SH2201・SH2202およびその周辺（南東から）
写真図版10　上　調査区南部の詳細（南西から）
　　下　調査区南半部（南東から）
写真図版11　上　調査区中央南部（南東から）
　　下　調査区中央部（西から）
写真図版12　上　調査区北部（南東から）
　　下　調査区北部の詳細（南東から）

写真図版目次

写真図版13　上　調査区北部中央の遺構（南西から）
　　下　調査区北端東側の遺構（北西から）
写真図版14　上　調査区北端西側の遺構（北西から）
　　下　調査区北端東側全景（北西から）
写真図版15　上　SH2201検出状況（西から）
　　中　SH2201完掘状況（西から）
　　下　SH2201完掘状況アップ（西から）
写真図版16　上　SH2201完掘状況（南から）
　　下　SH2201完掘状況アップ（南から）
写真図版17　上　SH2201内 SK22016（東から）
　　下　SH2201内 SK22016（北から）
写真図版18　上　SH2201内 SK22016（西から）
　　中左　SK22016内土器出土状況（南から）
　　中右　SK22016埋土土層断面（南から）
　　下左　SK22016全景（北から）
　　下右　SK22016敷石詳細（西から）
写真図版19　①　SH2201内 SP22011土器出土状況（南西から）
　　②　SH2201内 SP22011土器出土状況アップ（南西から）
　　③　SH2201内中央土壙（炉）埋土土層断面（東から）
　　④　SH2201内中央土壙（炉）完掘状況（西から）
　　⑤　SH2201低床部分埋土土層断面（南西から）
　　⑥　SH2201床面付近の埋土土器出土状況（西から）
　　⑦　SH2201北側周壁溝埋土土層断面（西から）
　　⑧　SH2201屋内高床部東西断ち割り断面西側（南から）
写真図版20　上　SX22002全景（東から）
　　中　SX22002土器出土状況全景（東から）
　　下　SX22002下層土器出土状況全景（東から）
写真図版21　上　SH2202～ SH2204・史跡大中遺跡遠景（南西から）
　　下　SH2202～ SH2204全景（南から）
写真図版22　上　SH2202北西－南東土層断面（南西から）
　　中　SH2202南西－北東土層断面（南東から）
　　下　SH2202土層断面（南から）
写真図版23　上　SH2202遺物・炭化材検出状況（南西から）
　　下　SH2202遺物・炭化材検出状況（北西から）
写真図版24　上　SH2202北柱周辺遺物・炭化材検出状況（南西から）
　　下　SH2202北柱周辺遺物・炭化材検出状況（南から）
写真図版25　①　SH2202炭化材３・４（南東から）
　　②　SH2202炭化材３～５（北西から）
写真図版25　③　SH2202炭化材３・４断面（南東から）
　　④　SH2202炭化材３～５（南西から）
　　⑤　SH2202低床部北東壁材炭化状況（南西から）
　　⑥　SH2202東柱（南西から）
　　⑦　SH2202低床部北東壁材アップ（南西から）
　　⑧　SH2202東柱周辺（南から）
写真図版26　①　SH2202土器１・炭化材11～13（西から）
　　②　SH2202炭化材５（南西から）
　　③　SH2202炭化材11～13（北東から）
　　④　SH2202炭化材５断面（南西から）
　　⑤　SH2202北柱周辺床面（南西から）
　　⑥　SH2202東柱周辺床面（南西から）
　　⑦　SH2202イイダコ壺83・85・86・88
　　⑧　SH2202イイダコ壺87・86
写真図版27　①　SH2202甕168
　　②　SH2202壺64
　　③　SH2202壺65-1
　　④　SH2202壺51、甕71・75
　　⑤　SH2202壺57
　　⑥　SH2202壺50-1・55・56
　　⑦　SH2202壺52
　　⑧　SH2202甕70
写真図版28　①　SH2202砥石 S2（南東から）
　　②　SH2202砥石 S2砕片出土状況（南西から）
　　③　SH2202壁溝炭化草本科検出状況（南西から）
　　④　SH2202壁溝炭化草本科断面（南西から）
　　⑤　SH2202炭化ケヤキ材（南西から）
　　⑥　SH2202粘土塊（南西から）
　　⑦　SH2202SK22317（東から）
　　⑧　SH2202粘土塊断面（南東から）
写真図版29　上　SH2202（南から）
　　中左　SH2202炭化南柱と台石（北から）
　　中右　SH2202炭化東柱（西から）
　　下左　SH2202炭化南柱と台石（北東から）
　　下右　SH2202高床部土坑（南西から）
写真図版30　上　SH2202（南東から）
　　下　SH2202中央土坑（北東から）
写真図版31　上　SH2202断割状況（南から）
　　中左　SH2202西柱穴断面（北から）
　　中右　SH2202北柱穴断面（西から）
　　下左　SH2202南柱穴断面（東から）
　　下右　SH2202東柱穴断面（南から）
写真図版32　①　SH2202型取り作業①
　　②　SH2202型取り作業②
　　③　SH2202型取り作業③
　　④　SH2202型取り作業④
　　⑤　SH2202型取り作業⑤
　　⑥　SH2202型取り作業⑥

写真図版目次

写真図版32 ⑦ SH2203壁際土坑型取り作業①
⑧ SH2203壁際土坑型取り作業②
写真図版33 上 SH2203遺物出土状況（南東から）
下 SH2203（北東から）
写真図版34 上 SH2203壁際土坑遺物出土状況（北東から）
下 SH2203壁際土坑遺物出土状況（北西から）
写真図版35 上 SH2203壁際土坑敷石状況（南西から）
下 SH2203壁際土坑完掘（南西から）
写真図版36 ① SH2203壁際土坑遺物出土状況（北東から）
② SH2203壁際土坑土器124
③ SH2203壁際土坑土器
④ SH2203壁際土坑土器128
⑤ SH2203壁際土坑土器127
⑥ SH2203壁際土坑土器123
⑦ SH2203壁際土坑粘土１・２
⑧ SH2203壁際土坑敷石断面
写真図版37 上 SH2203中央土坑（北西から）
中左 SH2203東柱穴断面（東から）
中右 SH2203南柱穴断面（北から）
下左 SH2203北柱穴断面（北から）
下右 SH2203西柱穴断面（西から）
写真図版38 上 SH2202・SH2204全景（南西から）
下 SH2204全景（南西から）
写真図版39 上 SH2204壁際土坑遺物出土状況（西から）
下 SH2204壁際土坑遺物出土状況（南東から）
写真図版40 ① SH2204北西壁際床面遺物出土状況
② SH2204壁際土坑遺物出土状況（北西から）
③ SH2204北東壁際床面遺物出土状況（南東から）
④ SH2204土器150・156出土状況
⑤ SH2204北柱穴断面（東から）
⑥ SH2204東柱穴断面（北から）
⑦ SH2204西柱穴断面（南から）
⑧ SH2204南柱穴断面（東から）
写真図版41 上 SH2205検出状況（西から）
下 調査区北端東側遺構群（南東から）
写真図版42 上 SH2205全景（北から）
下 SH2205埋土土層断面（南から）
写真図版43 上 SH2205内 SK22309（北から）
下 SH2205内 SK22308（西から）
写真図版44 上 SH2205内 SK22308（北から）
下 SH2205内 SK22310（南から）
写真図版45 ① SH2205南北方向南側埋土土層断面（東から）
② SH2205南北方向北側埋土土層断面（東から）
③ SH2205南北方向埋土土層断面（東から）
写真図版45 ④ SH2205内 SK22309埋土土層断面（東から）
⑤ SH2205内 SK22310埋土土層断面（南から）
⑥ SH2205内高床部飯蛸壺出土状況（西から）
⑦ SH2205内南壁際土器出土状況（北東から）
⑧ SH2205砂による埋め戻し状況（南東から）
写真図版46 上 SH2206上面検出状況（北東から）
下 SH2206遺物検出状況（北東から）
写真図版47 上 SH2206遺物検出状況（北西から）
下 SH2206遺物出土状況（北東から）
写真図版48 上 SH2206土器出土状況アップ（北西から）
中左 SH2206土器出土状況（南西から）
中右 SH2206南半部炭・焼土検出状況（南東から）
下左 SH2206南半北部焼土検出状況（南から）
下右 SH2206内南東炭化柱検出状況（南東から）
写真図版49 上 SH2206内焼土・炭等検出状況（北東から）
下 SH2206内焼土・炭等検出状況アップ（南西から）
写真図版50 上 SH2206調査終了時の状況（北西から）
下 SH2206調査終了時の状況（北東から）
写真図版51 上 SH2206埋土土層断面（北東から）
下 SH2206埋土土層断面（南東から）
写真図版52 上 SH2208上面検出状況（北東から）
中 SH2208遺物検出状況（北東から）
下 SH2208完掘状況（北東から）
写真図版53 ① SH2207南側周壁溝埋土土層断面（西から）
② SH2208埋土土層断面（南東から）
③ SH2208内土器１～６出土状況（北東から）
④ SH2208内土器７・８、石１出土状況（北東から）
⑤ SH2208内土器８出土状況（北から）
⑥ SH2208内土器４・５出土状況（北から）
⑦ SH2208内土器１出土状況（南東から）
⑧ SH2208内土器６出土状況（東から）
写真図版54 ① SB2201全景（南から）
② SB2201SP22136断ち割り断面（西から）
③ SB2201SP22137断ち割り断面（南から）
④ SB2201SP22138断ち割り断面（南から）

写真図版目次

写真図版54 ⑤ SB2201SP22139断ち割り断面（東から）
⑥ SB2201SP22140断ち割り断面（西から）
⑦ SB2201SP22141断ち割り断面（南東から）
⑧ SB2201SP22142断ち割り断面（南東から）
写真図版55 上 SB2202全景（南西から）
中左 SB2202SP22251断ち割り断面（北東から）
中右 SB2202SP22252断ち割り断面（北東から）
下左 SB2202SP22253断ち割り断面（北東から）
下右 SB2202SP22255断ち割り断面（南西から）
写真図版56 ① SB2203全景（東から）
② SB2204SP22068断ち割り断面（南東から）
③ SB2205全景（北西から）
④ SB2205SP22036断ち割り断面（南東から）
⑤ SB2205SP22037断ち割り断面（北西から）
⑥ SB2205SP22109断ち割り断面（北西から）
⑦ SB2205SP22110断ち割り断面（南東から）
⑧ SB2207SP22218断ち割り断面（南東から）
写真図版57 上左 SB2206SP22205断ち割り断面（南東から）
上右 SB2206SP22206断ち割り断面（南東から）
中左 SB2206SP22207断ち割り断面（北西から）
中右 SB2206SP22208断ち割り断面（北西から）
下 SX22014埋土土層断面（北西から）
写真図版58 上 SX22014全景（北西から）
下 SX22267全景（南西から）
写真図版59 上 SX22304・SX22305全景（東から）
下 SX22304・SX22305全景（北西から）
写真図版60 ① SX22014埋土土層断面（南西から）
② SX22266埋土土層断面（南西から）
③ SX22267埋土土層断面（北東から）
④ SX22288上面土器出土状況（東から）
⑤ SX22304埋土土層断面（南東から）
⑥ SX22305埋土土層断面（東から）
⑦ SX22188埋土土層断面（北東から）
⑧ SX22188完掘状況（北西から）
写真図版61 上 SX22188第1面土器出土状況（北西から）
中 SX22188第2面土器出土状況（北西から）
下 SX22188第3面土器出土状況（北西から）
写真図版62 ① SX22188土器17出土状況（北西から）
② SX22188土器9～11・18～21出土状況（北西から）
③ SX22188土器10・19出土状況（東から）
④ SX22188土器12・14・22出土状況（北西から）
⑤ SX22188土器13～15・22出土状況（北西から）
⑥ SX22188土器16出土状況（北西から）
⑦ SX22188埋土土層断面（北東から）
⑧ SX22188土器29出土状況（北西から）
写真図版63 ① SK22063埋土土層断面（南西から）
② SK22063土器出土状況（東から）
③ SK22063土器出土状況アップ（東から）
④ SK22089炭層検出状況（北東から）
⑤ SK22089炭層面（北東から）
⑥ SK22089焼土面（北西から）
⑦ SK22080埋土土層断面（南西から）
⑧ SK22080土器出土状況（北東から）
写真図版64 上 SK22080全景（北東から）
中左 SK22118検出状況（南西から）
中右 SK22118埋土土層断面（南西から）
下左 SK22118全景（西から）
下右 SK22193埋土土層断面（南西から）
写真図版65 ① SK22001埋土土層断面（南東から）
② SK22009検出状況（西から）
③ SK22009埋土土層断面（南西から）
④ SK22009土器出土状況（南から）
⑤ SK22012埋土土層断面（南東から）
⑥ SK22013埋土土層断面（東から）
⑦ SK22015埋土土層断面（東から）
⑧ SK22017埋土土層断面（南西から）
写真図版66 ① SK22018埋土土層断面（南東から）
② SK22019埋土土層断面（南西から）
③ SK22043埋土土層断面（南西から）
④ SK22044埋土土層断面（南西から）
⑤ SK22046埋土土層断面（南西から）
⑥ SK22047埋土土層断面（南西から）
⑦ SK22048埋土土層断面（南西から）
⑧ SK22049埋土土層断面（南西から）
写真図版67 ① SK22050埋土土層断面（南西から）
② SK22051埋土土層断面（北西から）
③ SK22052埋土土層断面（南西から）
④ SK22053埋土土層断面（北西から）
⑤ SK22054埋土土層断面（南西から）
⑥ SK22055埋土土層断面（北西から）
⑦ SK22058埋土土層断面（南西から）
⑧ SK22065埋土土層断面（南西から）

写真図版目次

写真図版68 ① SK22067埋土土層断面（南西から）
② SK22069埋土土層断面（南西から）
③ SK22070埋土土層断面（西から）
④ SK22072埋土土層断面（西から）
⑤ SK22079埋土土層断面（西から）
⑥ SK22081埋土土層断面（南西から）
⑦ SK22082埋土土層断面（南東から）
⑧ SK22090埋土土層断面（北東から）

写真図版69 ① SK22091埋土土層断面（南西から）
② SK22093埋土土層断面（西から）
③ SK22094埋土土層断面（西から）
④ SK22095埋土土層断面（西から）
⑤ SK22107埋土土層断面（南西から）
⑥ SK22108埋土土層断面（西から）
⑦ SK22111埋土土層断面（南西から）
⑧ SK22113埋土土層断面（北東から）

写真図版70 ① SK22120埋土土層断面（南西から）
② SK22122埋土土層断面（南西から）
③ SK22126埋土土層断面（南西から）
④ SK22154埋土土層断面（南西から）
⑤ SK22184埋土土層断面（東から）
⑥ SK22189埋土土層断面（南西から）
⑦ SK22192埋土土層断面（南西から）
⑧ SK22195埋土土層断面（西から）

写真図版71 ① SK22222埋土土層断面（南西から）
② SK22223埋土土層断面（南西から）
③ SK22228埋土土層断面（南東から）
④ SK22229埋土土層断面（南東から）
⑤ SK22230埋土土層断面（南から）
⑥ SK22231埋土土層断面（南東から）
⑦ SK22232埋土土層断面（南東から）
⑧ SK22233埋土土層断面（南東から）

写真図版72 ① SK22235埋土土層断面（南東から）
② SK22249遺物出土状況（南西から）
③ SK22249遺物出土状況アップ（南から）
④ SK22249埋土土層断面（北東から）
⑤ SK22258埋土土層断面（南東から）
⑥ SK22265土器出土状況（北東から）
⑦ SK22265埋土土層断面（南東から）
⑧ SK22306埋土土層断面（南東から）

写真図版73 ① SK22314埋土土層断面（南東から）
② SK22316埋土土層断面（南東から）
③ SD22311遺物出土状況①（南から）
④ SD22311遺物出土状況②（東から）
⑤ SD22311遺物出土状況③（西から）
⑥ SD22311埋土土層断面（西から）
⑦ SD22289遺物出土状況（南東から）
⑧ SD22289埋土土層断面（南西から）

写真図版74 ① SD22020埋土土層断面（西から）
② SD22033埋土土層断面（南東から）
③ SD22197・SD22033埋土土層断面④（南東から）
④ SD22033埋土土層断面④（南東から）
⑤ SD22033埋土土層断面③（南東から）
⑥ SD22033・SD22032埋土土層断面②（南から）
⑦ SD22033・SD22034埋土土層断面①（南東から）
⑧ SD22035埋土土層断面（南西から）

写真図版75 ① SD22059埋土土層断面（南西から）
② SD22060埋土土層断面（南西から）
③ SD22064埋土土層断面②（南西から）
④ SD22064埋土土層断面①（南西から）
⑤ SD22119埋土土層断面（南西から）
⑥ SD22130東部埋土土層断面（南西から）
⑦ SD22130西部埋土土層断面（南西から）
⑧ SD22170・SD22169埋土土層断面（南東から）

写真図版76 ① SD22183東部埋土土層断面（北東から）
② SD22183西部埋土土層断面（南東から）
③ SD22197埋土土層断面②（南西から）
④ SD22197埋土土層断面①（南東から）
⑤ SD22197土器出土状況（南西から）
⑥ SD22247埋土土層断面①（南西から）
⑦ SD22247埋土土層断面②（南西から）
⑧ SD22248埋土土層断面（南東から）

写真図版77 ① SD22262埋土土層断面（南東から）
② SD22277埋土土層断面（南東から）
③ SD22278埋土土層断面（北から）
④ SD22290埋土土層断面（南西から）
⑤ SP22106上面土器出土状況（南西から）
⑥ SP22106下層土器出土状況（北東から）
⑦ SP22215柱痕検出状況（南西から）
⑧ SP22215断ち割り土層断面（南西から）

写真図版78 ① SP22087埋土土層断面（南西から）
② SP22125断ち割り土層断面（南西から）
③ SP22156断ち割り土層断面（南西から）
④ SE22039全景（南西から）
⑤ SE22039全景（北東から）
⑥ 東西方向畔包含層土層断面部分①（南東から）
⑦ 東西方向畔包含層土層断面部分②（南東から）
⑧ 東西方向畔包含層土層断面部分③（南東から）

写真図版79 上 旧石器調査A地区全景（北西から）
下 旧石器調査C地区全景（南東から）

写真図版目次

写真図版80	①	調査区南西隅付近側溝内石鏃 S14出土状況（南西から）
	②	旧石器調査７トレンチ部分土層断面（南から）
	③	SK22009内ナイフ形石器 S25出土状況（南東から）
	④	弥生時代遺構面石器 S23出土状況（南西から）
	⑤	断ち割り調査Ⅰａトレンチ土層断面（南から）
	⑥	断ち割り調査Ⅱトレンチ土層断面（東から）
	⑦	Ⅱトレンチ東端深掘り土層断面（東から）
	⑧	Ⅱトレンチ東端深掘り土層断面アップ（東から）
写真図版81	①	学校厚生会明石見学状況
	②	上田哲也氏現地指導状況
	③	角南氏等現地指導状況
	④	文化庁禰宜田調査官視察状況
	⑤	森岡秀人氏現地指導状況
	⑥	兵庫県文化財審議委員視察状況
	⑦	播磨北小学校３～５年生見学状況
	⑧	現地説明会開催状況
写真図版82		SH2201および周辺遺構出土土器
写真図版83		SX22002出土土器(1)
写真図版84	上	SX22002出土土器(2)
	下	SX22002出土土器(3)
写真図版85		SH2202出土土器(1)
写真図版86		SH2202出土土器(2)
写真図版87		SH2202出土土器(3)
写真図版88		SH2202出土土器(4)
写真図版89		SH2202出土土器(5)
写真図版90		SH2202出土土器(6)
写真図版91		SH2203出土土器(1)
写真図版92		SH2203出土土器(2)
写真図版93		SH2204出土土器(1)
写真図版94		SH2204出土土器(2)
写真図版95		SH2202出土石製品(1)
写真図版96	上	SH2202出土石製品(2)
	下	SH2202出土礫
写真図版97		SH2205・SH2206・SH2208出土土器
写真図版98		SH2208・SH2205出土土器
写真図版99	上	SH2205出土土器
	下	SH2206出土土器(1)
写真図版100	上	SH2206出土土器(2)
	下	SX22014出土土器
写真図版101		SK22063・SK22080・SK22091・SX22188出土土器
写真図版102		SX22188出土土器(1)
写真図版103		SX22188・SK22193・SK22265・SP22106出土土器
写真図版104	上	SK22063・SK22064・SK22080・SK22089・SK22091出土土器
	下	SK22118・SK22189・SK22222・SK22265・SK22288・SX22305出土土器
写真図版105	上	SX22188出土土器(2)
	下	SK22249出土土器
写真図版106	上	SD22197出土土器
	下	SD22033・SD22064・SD22130・SD22234・SD22289・SD22311出土土器
写真図版107		SP22085・SP22106・SP22125・SB2201内 SP22141・SP22156・SP22194・SX22235・SP22315・包含層出土土器
写真図版108	上	SH2204・SH2206・SX22202出土石製品（a 面）
	下	SH2204・SH2206・SX22202出土石製品（b 面）
写真図版109	上	包含層出土遺物(1)
	下	包含層出土遺物(2)
写真図版110	上	包含層出土遺物(3)
	下	包含層出土遺物(4)
写真図版111	上	包含層出土遺物(5)
	下	包含層出土遺物(6)
写真図版112	上	包含層出土遺物(7)内面
	下	包含層出土遺物(7)外面
写真図版113	上	包含層出土遺物(8)
	下	出土金属器
写真図版114		出土石器(1)
写真図版115		出土石器(2)
写真図版116		炭化材組織顕微鏡写真(1)
写真図版117		炭化材組織顕微鏡写真(2)

カラー写真図版目次

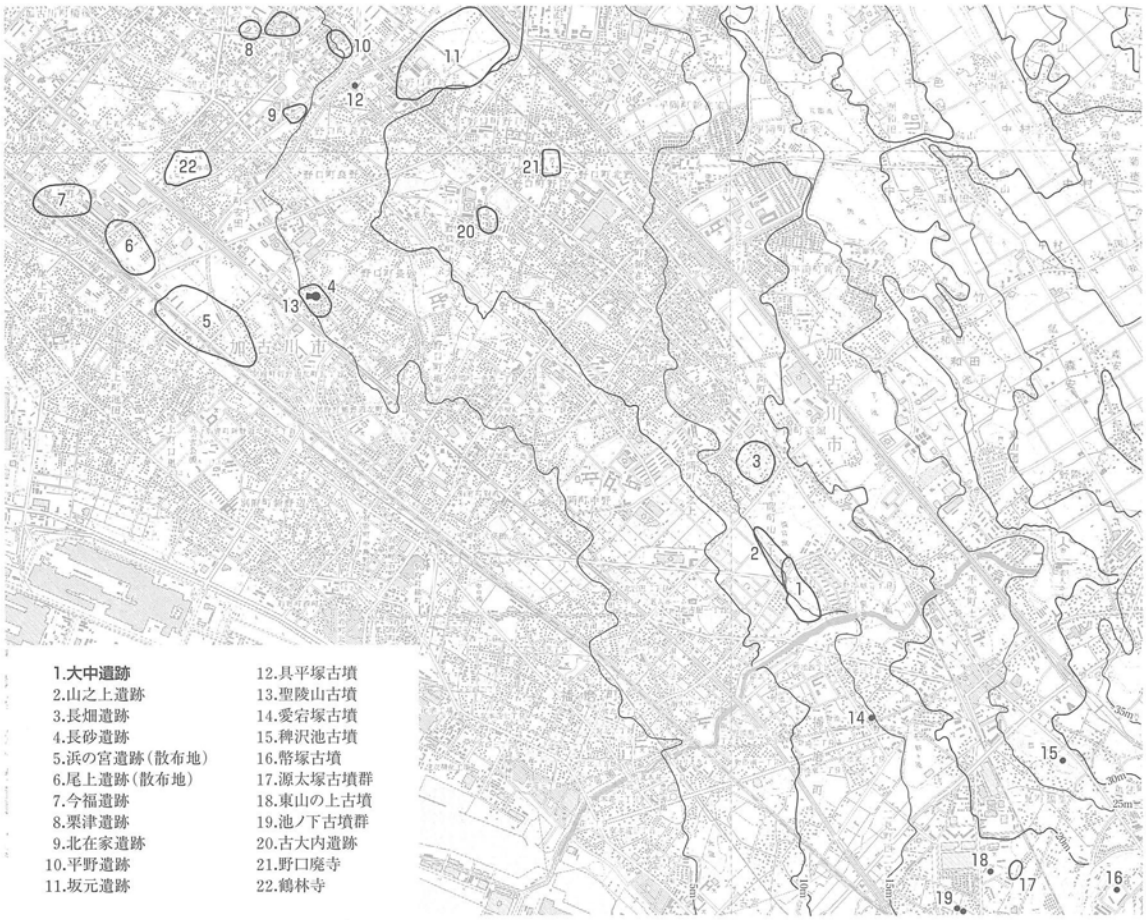
カラー写真図版１	土器胎土薄片顕微鏡写真(1)
カラー写真図版２	土器胎土薄片顕微鏡写真(2)
カラー写真図版３	土器胎土薄片顕微鏡写真(3)
カラー写真図版４	土器胎土薄片顕微鏡写真(4)
カラー写真図版５	土器胎土薄片顕微鏡写真(5)

第１章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

大中遺跡が所在する加古郡播磨町は兵庫県本州側の南端中央に位置し、東は明石市、西は加古川市と境を接し、播磨灘に面している。面積は 9.09 ㎢という県下で最小ながら、人口は 33,529 人（平成 18 年２月１日現在）と県下各町の中では最も多い。

播磨町大中に所在する大中遺跡は、現在の海岸線から直線距離で約 2.2 ㎞内陸側に位置しているが、標高は 11 m～ 14 mの間で、地形的には段丘上にあたり、今回の調査区は埋立前には水田および畑地となっていた部分にあたる。大中遺跡が存在する段丘は田中眞吾氏によれば、野口段丘４面のうち、上から１・２番目の野口第１・２段丘面にあたり、史跡指定地の大半は野口段丘１－２面、今回の調査区は２－１面に分類されている。また、この段丘が形成された年代を第１面は約 12 万年前、第２面は約 10 万年前と推定されている。野口段丘はいなみの台地に含まれ、いなみの台地北東側の高い方から順に加古段丘、日岡段丘、野口段丘と南西側に下がってゆき、すべて北西から南東方向にのびている。いなみの台地は第４紀の大阪層群が基部、土台となっているが、野口段丘付近ではその上に沖積層が覆っている。この沖積層が海成あるいは河成であるのかは意見の分かれるところであるが、今回断ち割り調査を実施した部分では、少なくとも海成ではないと想定される砂礫層が地山下に堆積していることが判明した。



第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

第２節　歴史的環境

大中遺跡およびその周辺で最も古い遺跡は山之上遺跡（第１図２）で、ナイフ形石器を主とした旧石器が採集され、角錐状石器や有舌尖頭器のほか、石鏃も多数含まれている。また、大中遺跡の範囲内で今回の調査時にもナイフ形石器や縄紋時代の石鏃が出土している。ただし、いずれも遺構面に伴うものではなく、包含層出土のものである。なお、北方の寺田池でもナイフ形石器が採集されている。

弥生時代の遺跡のうち、中期に属するものでは溝ノ口遺跡および坂元遺跡（11）、長畑遺跡（３）などで住居跡が検出されているが、大中遺跡同様、時期的には中期後半が主体である。

弥生時代後期後半には大中遺跡で数多くの住居跡数が検出されているが、周辺の弥生時代後期後半～古墳時代初頭の遺跡では前述の３遺跡のほか、西方の今福遺跡（７）、北在家遺跡（９）などで住居跡が認められる。ほかにこの時期の遺跡では長砂遺跡（４）、平野遺跡（10）、粟津遺跡（８）などがあり、散布地である浜の宮遺跡（５）、尾上遺跡（６）を除外すれば、水田可耕地に近い段丘崖付近の微高地上に集落が営まれていることがわかる。大中遺跡では、北側や西～南西側の低地に生産地が推定されるが、高橋学氏は喜瀬川も潰目池築造以前には大中遺跡の北から西側を経て別府川の河口へ向けて流れていたことがあったと推定され、その根拠に喜瀬川が段丘の微高地を直角に横切っていることをあげられている。人為的に付け替えがなされたかは別にしても、等高線をみれば、別府川の河口付近につながる南西方向の谷状低地が認められることから、その可能性も考えられる。また、室町時代の応永32（1425）年から34年の頃、喜瀬川がそれまで西の高畑へ流れていたのが、洪水で今の流れに変わったとの伝承や、応永32年には死者が千人も出るほどの洪水があったとの記録もある。つまり、大中遺跡においては、生産地は喜瀬川の旧流路と推定される部分の脇にあたる水利上の可耕地に営まれていたものと推定される。なお、大中遺跡は加古川市山之上遺跡東部と連続した集落跡であることは以前から判明している。

古墳時代の集落跡は溝ノ口遺跡以外には乏しいが、推定全長70ｍの前期前方後円（方）墳である聖陵山古墳（13）、中期後半には直径21ｍの円墳である愛宕塚古墳（14）や直径34ｍの円墳の幣塚古墳（16）などが築造されており、当該期の集落跡は未発見のものが多く存在していると想定される。中期後半から後期の古墳は主として段丘上の不可耕地に築造されているが、坂元遺跡でも埋没古墳が発見され、形象埴輪も出土するとともに、埴輪窯も調査された。

律令期以降の遺跡のうち、野口廃寺（21）では講堂跡・塔跡などが検出され、白鳳時代の寺院跡であることが判明している。また、古大内遺跡（20）は出土瓦の型式から賀古駅家と推定されているが、遺構は残存していないようである。また、約１㎞北側の坂元遺跡では和同開珎や円面硯などとともに数多くの奈良時代の掘立柱建物跡が検出されていることから、駅家関連の遺跡であると推定されている。

なお、鶴林寺（22）は平安後期に遡るとされる伽藍配置と堂宇をもつ寺院であり、創建もそのころと考えられている。

第２章　調査の経緯と概要

第１節　調査に至る経緯

播磨大中遺跡は昭和 37（1962）年の発見以降９次にわたる調査の結果、竪穴住居跡 29 棟のほか舶載連弧文鏡片などの発見により、昭和 42（1967）年に国史跡に指定された。その後、史跡の環境整備事業が実施され、昭和 49（1974）年に別府鉄道以北が「播磨大中古代の村」としてオープンした。また、平成４（1992）年には別府鉄道以南の整備も完了した。

平成９(1997)年には史跡指定地南側に「はりま文化ゾーン総合整備構想」に伴う古代の丘(考古博物館)の建設が予定されたため、同年に当該地の試掘調査（大中遺跡第 18 次調査）が実施された。その結果、竪穴住居跡・土壙・土器棺などの遺構が存在していることが判明した。

平成 11 年には兵庫県教育委員会による県立考古博物館の整備検討が始まり、平成 14 年度には埋蔵文化財調査事務所と一体化した考古博物館とする基本構想を策定し、平成 15（2003）年には基本計画を策定した。また、大中遺跡のガイダンス施設としての播磨町郷土資料館と異なる点は、史跡公園の機能を最大限に活かした体験学習をはじめとする歴史学習の機会を広く兵庫県全域の住民を対象として提供するとともに、考古博物館・埋蔵文化財調査事務所の調査研究能力を活かして大中遺跡の調査研究をすすめ、国史跡としての大中遺跡の価値をさらに高めることであった。

この事業計画および試掘調査の結果にもとづき、博物館の建物建設範囲および工事により遺跡が破壊される部分について本発掘調査を実施することになった。

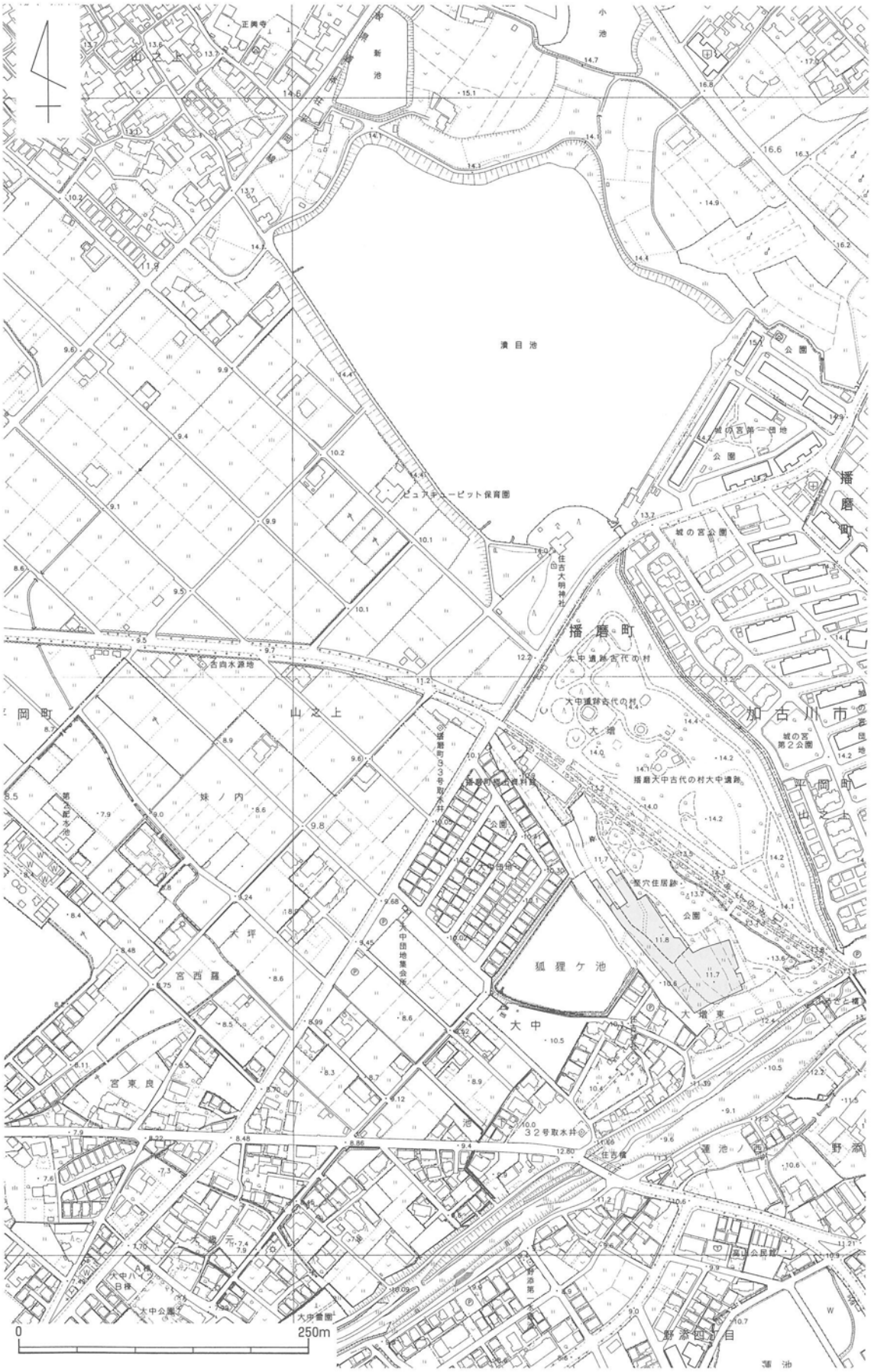
なお、大中遺跡の調査次数は、平成９年度の試掘調査（第 18 次調査）以降、史跡地内の調査が３度おこなわれており、今回の調査は第 22 次調査となる。

第２節　調査の経過と体制

第 18 次調査の結果にもとづき、遺構が存在している範囲のうち、博物館建設により破壊される部分について本発掘調査の範囲を設定し、記録保存調査を実施した。調査の過程で土器・石器が原位置の状態にある焼失住居（SH2202）が発見されたため、遺物出土状況の表面剥ぎ取りを実施し、博物館で出土状況を復元して展示することとなった。また、調査過程で工法変更により地下保存が決定した竪穴住居跡（SH2201・SH2205・SH2206・SH2208）については、調査方法を記録保存から地下保存の際の方法に切り替えて調査をおこなったが、保存決定時の調査の進行状況によって調査方法は各住居跡で異なる。なお、保存が決定した住居跡は調査終了後、砂で埋め戻した。

また、調査の過程で、初期の大中遺跡の調査を担当された上田哲也氏、試掘調査を担当された角南聡一郎氏（元興寺文化財研究所）、焼失住居について森岡秀人氏（芦屋市教育委員会）に来跡いただき、また、地理学の立場から青木哲哉氏（立命館大学）にも来跡いただき、微地形復原などのご教示を得た。

調査は最上層の埋立盛土および耕土・床土をバックホーで掘削し、それより下の掘削および遺構の検出については人力でおこなった。また、調査期間の短縮をはかるため、分割して空中写真測量を実施し、撮影後は順次旧石器確認調査や断ち割り調査を実施した。



第２図　大中遺跡調査地区

発掘調査は平成16年11月22日に開始し、平成17年3月24日に終了した。実働日数は75日であった。調査面積は本発掘調査が4,857㎡、旧石器調査が897㎡で、合計5,754㎡である。

なお、報告書作成のための出土品整理作業は平成17年度から開始した。

発掘調査体制は以下のとおりである。

調査担当職員　　調査第2班　岸本一宏、久保弘幸、篠宮正、深江英憲

調査補助員　　小谷義男、柴田妃三光、森崎由紀子、赤壁千恵子、山本香織

現場事務員・室内作業員　　井守芳美、覚野郁子

出土品整理の体制は以下のとおりである。

整理担当職員　　岡田章一（工程管理）、別府洋二（工程管理）、岸本一宏、久保弘幸、篠宮正

非常勤嘱託員　　宮田麻子、西村美緒、村上京子、溝上くみ、眞子ふさ恵、西口由紀、木村淑子
小野潤子、三好綾子、奥野政子、又江立子、荒木由美子、藤池かづさ、嶺岡美見
金属器保存処理　　栗山美奈、大前篤子、藤井光代

第3節　調査の概要

調査は弥生時代以降の本発掘調査と旧石器調査の2段階に分かれていたため、調査の工程上、調査区を大きく4分割して南東側から順に開始した。

弥生時代以降の本発掘調査では、竪穴住居跡8棟のほか、掘立柱建物跡・墓・土壙・溝・井戸・不明遺構などを検出した。竪穴住居跡はすべて弥生時代後期後半～古墳時代初頭に属し、古いものではSH2202の隅丸方形、新しいものではSH2205などのように方形の平面形を呈する。また、SH2202は焼失住居であり、多量の炭化材とともに土器・石製品が出土した。住居内から出土した多数の土器はほぼすべて火災のため住居内に残されたものであり、ほぼ原位置を保っているものと判断できることから、屋内の利用区分を考える上で重要な資料となっている。ただ、残念なことに土器のほとんどが口縁部を欠失しており、直立していた多数の土器の口縁部は、後世の削平時に失われたものと思われる。一方、SH2201やSH2203では住居内南東側壁中央に土壙を有しているが、その壁際土壙の周囲には小礫が敷かれていた。この形態の屋内壁際土壙をもつのは第7次調査の第34号住居址があるが、それ以外には他遺跡はおろか本遺跡でも類例が限定され、この3棟が近接した位置に存在していることも含めると興味深い。機能的には防湿や足場を固めるためといったことが考えられるが、今後検討を要するであろう。

木棺墓や土壙墓と考えられるものは調査区北西部の東側で集中して存在していた。一部住居跡と重複しているが、集落の南西部であるこの部分が墓域のひとつであったことが判明した。また、墓の中には小規模なものも含んでいることから、小児などの子供も同一墓域に葬られていたと考えられるが、乳幼児の墓である土器棺墓は調査区南東部に単独で存在しており、土器棺は必ずしも一般墓域に造営されないという弥生時代に一般的な葬法が、弥生時代後期中頃までは引き続きおこなわれていたと判断できる。

数多く検出した土壙のうち、SK22188では数多くの土器が出土した。弥生時代後期後半の土器が細長い窪みに捨てられたと考えられる状況で検出したが、土層断面の検討の結果、この土壙は風倒木跡であると判断している。この風倒木跡がいつの時点のものか不明であるが、弥生時代当時にはすでに窪みがあり、そこに土器が捨てられたものと考える方が自然であると思われる。なお、SK22264・SK22265などでもこのような風倒木の窪みから土器が出土している。

その他の土壙では、内部から土器が出土しているものについてはある程度時期が判断できるが、大半の土壙からは土器が出土しなかったため、所属時期の判断材料に欠ける。ただし、土壙から出土した土器の大半は弥生時代後期～古墳時代初頭の土器であることから、他の土壙についてもその時期に属する可能性が高い。その機能は不明であるが、形態的には平面が直径１ｍ前後の円形～楕円形を呈するものが多く存在し、類似形態のものについては同様の機能を有していたと思われる。

また、土壙等には弥生時代の所産と考えられるものの他に、古墳時代、中世と判断できるものがある。

溝状遺構は弥生時代に属するものが少なく、古墳時代と中世のものがあるが、それらの大半は中世と考えている。特に、地形に沿って、北西－南東方向にのびる長い溝については、水田に伴う用水路としての機能が考えられ、その出土土器から、少なくとも 14 世紀には畑以外に水田としての利用がおこなわれていたようである。ただし、それは本調査区南西側最下段にほぼ限られていたようであり、中央部の SD22064 がその可能性を含んでいる程度であって、調査区内上段および中段は中世段階では居住地もしくは畑あるいは、いわゆる「野」であったと思われる。

なお、掘立柱建物跡はほとんど遺物が出土しておらず、その所属時期を確定することができないものの、少なくとも SB2202・SB2203・SB2206 については中世以降の可能性が高いと考えており、SB2201 は弥生時代の可能性も残しつつ、それ以降の可能性があると思われる。ただし、SB2204・SB2205 については、建物の方向が竪穴住居跡と似ていることにあわせて、その規模と存在位置から弥生時代後期～古墳時代初頭に属する可能性がある。ただし、いずれの建物からも時期を決定できる遺物が出土していないため、断定することはできない。

なお、今回の調査により、弥生時代～古墳時代初頭の大中遺跡の居住地の南側範囲がほぼ確定できたと思われる。地形的にも南西～南側に急激に下がっていくことから、当該時期の生活遺構は本調査区以南にはほぼ存在しないと判断できよう。

大中遺跡は、北西側の山之上遺跡の一部と連続したひとつの集落跡であることがすでに明らかとなっているが、旧石器についてもこれまでから大中遺跡の範囲内においても多く採集され、出土している。このことから、今回の調査区内においても旧石器時代の遺構・遺物確認のための試掘調査を実施した。

弥生時代以降の遺跡調査の際に、土壙からナイフ形石器、遺構面から剥片といった旧石器に加え、側溝内より縄紋時代の石鏃も出土したことから、プライマリーな旧石器面を確認するために調査区内の 10 箇所にトレンチを設定し（図版 42）、弥生時代以降の遺構面を人力により掘削した。しかし、トレンチ内においては旧石器はおろか縄紋時代の石器も出土せず、旧石器時代の文化層と確認できる面は存在しないようであった。ただし、トレンチ調査では旧石器面の有無が以上のように確定できないことから、面的な発掘に切り替え、調査を実施した（図版 42・43）。Ａ～Ｃの３箇所は合計 653 ㎡におよんだが、いずれの地区においても石器は出土せず、旧石器時代の文化層も確定できなかった。したがって、本地区内で弥生時代以降の遺構面から出土した石器についても、その出土状況から、その遺構面が旧石器時代の面とはならず、本来はもう少し上部にあったものが二次堆積によって運ばれてきた、あるいは、削平されてしまったものであろうとの判断にいたった。このことは、これまでの大中遺跡をはじめ、山之上遺跡および潰目池での調査所見とほぼ似た結果となった。

なお、さらに下層の状況および基盤層の確認のため、重機による断ち割り調査を実施した。その結果、弥生時代以降の遺構面となっている砂質の層は数十㎝にとどまり、その下層は砂礫層となり、遺構面から約３ｍ掘り下げた標高 8.7 ｍ付近以下で激しい湧水をみた。

第３章　調査の結果

第１節　基本土層

今回の調査区は全体に北東側が高く南西側が低い地形であるが、同時に、南東端では急に低くなる。

最上層からの土層の観察は調査区南東側および南西側の壁でおこない、調査区南東部では北東－南西方向に数箇所の畔を残して遺物包含層以下の土層堆積状況の観察をおこなった。

基本層序　図版２

今回の調査区は畑や水田の耕土上に厚く盛り土がなされており、最大で1.2ｍの厚さであった。この盛土の大部分では砂礫分が多く含まれており、喜瀬川底浚渫の際に発生した土砂を運び入れたといわれている。盛土除去後の耕土下の土層は、各段差部分によって異なっている。最上段では耕土直下が橙色に近いいわゆる地山で、弥生時代および古墳時代と中世の遺構が同一面で検出された。もともとは傾斜面であったはずの地山が水平面として検出されたことから、水田構築のための削平によるものと判断できる。中段では地山そのものは緩やかな傾斜面をなすが、その上部には遺物包含層が存在する。傾斜面であるため包含層は東が薄く西が厚く堆積している。この包含層は大きく３層に分けることができ、最下層には弥生土器を含んでおり、単純層の可能性が高い。包含層３と呼称した。調査区東壁土層断面の第７層・第14層～第16層にあたり、最下段では明瞭な遺物包含層３が認められず、やや疑問が残るものの、第24層も可能性がある。調査区中央部東西方向土層断面では第６層・第17層である。また、その上層には古墳時代の土器を主として含む包含層２がある。調査区東壁土層断面では第６層・第12層・第13層・第18層・第19層で、第24層も可能性がある。調査区中央部東西方向土層断面では第４層・第５層・第15層・第16層である。ただし、東西方向土層断面をみると、自然堆積ではなく客土された可能性が高い。包含層２の上層にも遺物包含層が認められ、包含層１と呼称した。包含層１は主として耕作土地盤の盛土にされており、中世後期に降る遺物も含んでいることから、その時期に田畑が形成された可能性が考えられる。調査区東壁土層断面では第５層・第11層・第17層・第22層・第23層にあたり、調査区中央部東西方向土層断面では第１層・第３層・第13層・第14層である。

なお、いわゆる地山とした調査区東壁土層断面の第８層上面から旧石器、最下段の同じ層上部から石鏃が出土している。弥生時代遺構面以下の層序については旧石器の項で述べる。

第２節　弥生時代の遺構とその遺物および掘立柱建物跡

今回の調査で検出した遺構には、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、墓、土壙（土坑）、溝などがある。第２節では弥生時代と判断した遺構を中心に掘立柱建物跡も加えて述べる。なお、風倒木の跡と判断できたものについても、時期不明であるが、弥生土器が出土していることから本節で記述している。

竪穴住居跡

SH2201　図版３・４　第３図　写真図版15～20

検出状況

調査区南東隅に位置する竪穴住居跡である。検出当初は東側の一部が調査区外となっていたが、協

議の結果調査区を拡張して住居跡全体を調査することとなった。また、当初は南側斜面部に存在したSX22002・SX22003も本住居跡に関連したものと考えられため、本項で記述したが、時期的には異なる。

埋土は10YR4.4/3褐色の細粒砂～極細粒砂が主であるが、検出面から最深部まで10㎝程度の深さしか遺存しておらず、屋内高床部上面まで削平を受けていた。

精査中および床面、埋土下層から土器が出土している。

形態・規模

SH2201の平面は東西5.85 m、南北5.90 mの方形で、内部には幅約1.2 mの屋内高床部が凵形にめぐる。ただし、住居跡東部は削平のため屋内高床部はおろか床面までもほとんど残っていなかった。

柱　穴

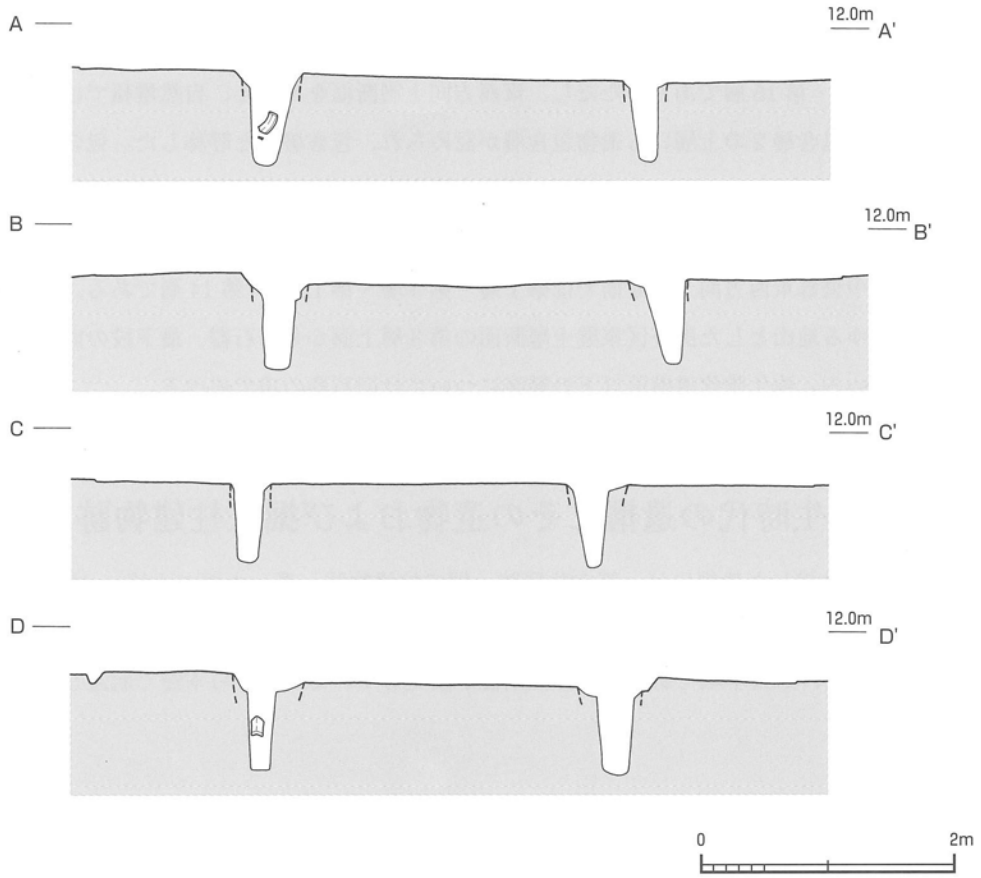
主柱穴は4本であり、屋内高床部の内側コーナー部に位置する。SP22011は北西隅、SP22010は南西隅、SP22056は北東隅、SP22057は南東隅にそれぞれ存在する主柱穴である。

柱痕および掘り方は平面円形で、柱痕は径23㎝～30㎝、掘り方は径32㎝～57㎝を測る。柱痕間は南北が2.46 m・2.55 m、東西が2.72 m・2.76 mで、東西が長くなっている。柱穴の深さはSP22011が最も深くて76㎝、最も浅いSP22056は63㎝であった。SP22011の柱痕およびSP22010から土器が出土した。

なお、調査途中で保存が決定したため、掘り方は完掘しておらず、屋内高床部もサブトレンチで土層断面を記録するにとどめた。

屋内施設

住居跡中央では炉を検出し、南側の壁際中央には土壙SK22016が存在していた。周壁溝は北側中央



第3図　SH2201断面図

部分で検出したのみであり、他は削平のためか検出できなかった。

屋内高床部

南側のSK22016が存在する部分で約1mの空間があると判断できるが、それ以外は全周しているものと思われる。幅は約60cm、高さは8cm程度遺存していた。すべて盛土による構築と思われる。

中央炉

SH2201中央に存在する浅い土壙で、深さは最大12cm、最大径63cmのほぼ円形を呈する。埋土は上下2層に分かれ、下層には炭・焼土が少量混じり、上層下部には壺体部が集積していた。

SK22016

SH2201内東壁中央に存在する屋内壁際土壙である。土壙の南側壁は住居跡壁とほぼ同じラインでとどまり、外側へは張り出さない。平面形は三角に近く、上面での規模は東西105cm、南北120cm程度で、深さは最大で47cmを測る。本土壙の北側にはφ1cm～4cm大の礫を床と同じ面に敷いていた。礫が存在しない部分もあるが、南北75cm、東西90cmの方形に近い範囲にわたっている。礫は円～亜円礫で、土壙北側を一度掘削した後に埋め戻し、その上面に礫を敷いたことが土層観察から判断できた。

このような土壙の傍に礫を敷く例はSH2203や第1次調査の34号住居跡に認められ、いずれもSH2201に近接した位置に存在している。機能としては、ぬかるみ防止や防湿効果があったものと思われる。

遺物は、南端上部で甕、南西隅埋土上部から直口壺口縁部、東端上部からは壺口縁部と底部がそれぞれ出土し、埋土上半部からは底部や脚部が出土している。

周辺遺構

住居跡南部は地形的には徐々に傾斜が強くなっているが、その部分で溜まり状遺構を2基検出した。これらの遺構からは土器が多く出土していることから、調査時には住居跡で使用していた土器の廃棄遺構と推定していたが、検討の結果時期的に異なることが判明している。

SX22002　図版4　写真図版20

SH2201の南側斜面途中に存在する長い土壙状の落ち込みで、東側は調査区外にのびる。検出長5.5m、幅1.1～1.7mで、検出面からの深さは17cm程度であるが、一部に深い部分があり、最深部では37cmの深さがある。検出面は北側が高く南側が低い地形となっており、肩部での高低差は20cm程度である。

西半部の中央で数多くの土器が出土した。それらは大きく2面に分かれるが、上面では甕・壺・鉢・高杯および砥石のほか不明粘土板、下面では一段窪んだ部分から手焙・鉢・高杯などが出土している。上面の土器出土層は第1層、下面は第2層にあたる。

SX22003　図版4　写真図版20

SH2201の南側で、SX22002のさらに南斜面下に存在する長い落ち込み状遺構である。SX22002とは約1mの距離である。検出面はSX22002とは異なり、水平面に近いが、一帯が東西方向の溝底のような地形である。平面形は東西に3.76m、南北1.2mと長い形状を示し、深さは10cm～20cm程度であるが、中央部は1.4m×50cmの範囲がさらに約14cm窪んでいる。

埋土は1層で、埋土から壺・底部が出土している。

出土遺物

土　器　巻頭写真図版14　図版47・48　写真図版82～84

SH2201出土土器

6は壺頸部と思われる破片で、外面に箆描文様が認められる。断片であるため文字か記号文のいずれ

であるのか断定はできない。SH2201 の精査中に出土している。

7は甕と思われる平底底部で、外面はタタキ、内面ハケ調整である。底径 5.6 cmを測る。SK22016 と柱穴 SP22010 の間の床面から出土している。

10 は SH2201 南東区の埋土下層から出土した底部である。底径 4.3 cmの平底である。

柱穴出土土器

5は北西の柱穴 SP22011 の柱痕から出土した複合口縁の壺口縁部である。口縁部は外反したのち、屈曲して外上方にのびるが、器壁が薄くなっている。口径は 21.0 cmを測り、頸部は短い。

9は柱穴 SP22011 の柱痕から5とともに出土した底部である。径 4.5 cmの平底で、外面にはタタキ痕が残り、内面は板ナデ調整のようである。

12 は底部であるが、ミニチュア土器あるいは蛸壺の可能性もある。径 4.1 cmの平底で、周囲には丸みがある。柱穴 SP22010 から出土している。

中央炉出土土器

2は甕口縁部で、中央炉の埋土上部から出土したものである。口縁部は単純に外反し、端部は丸くおさめ、口径 15.0 cmを測る。体部は肩が張らないもので、外面は太筋のタタキ調整で、口縁部もタタキ出し技法による。体部内面は板ナデと思われる。中央炉からはほかに壺体部の破片が出土している。

SK22016 出土土器

SK22016 から出土した土器には1，3，4，8，11，13，14 がある。

1は甕で、口径 12.8 cm、器高 19.9 cm、体部最大径は中央付近にあり、17.2 cmを測る、体部はやや肩が張るが丸い。底部の内面も尖底気味であるが丸い。底部外面は平底であるが、ドーナツ状の上げ底となっており、木葉痕を残している。底径は 3.8 cmを測る。体部外面はやや太筋の平行タタキで、分割整形をおこなっているが、タタキは連続螺旋状を意識してはいない。体部内面は斜め方向の板ナデである。口縁部は単純に外反し、端部は丸くおさめる。口縁部はタタキ出し技法である。SK22016 の埋土上部から出土している。

3は直口壺口縁部で、「ハ」字形に開き、口径は 9.6 cmを測る。頸部での外径は 4.9 cmである。外面調整は板ナデのちヨコナデのようであり、内面はヨコナデののち縦方向のヘラミガキと思われる。SK22016 の埋土上部から出土した。

4は壺口縁部で、SK22016 埋土上層から出土している。単純に外反して端部に面をもつ短い口縁部で、端部は若干窪む。口径は 14.8 cmである。

8は SK22016 埋土上部から出土した底部である。径 4.1 cmの平底で、内面は板ナデ調整である。

11 はミニチュア土器と思われるが、口縁部が欠失しているか不明である。丸みをもった平底で、底径は 2.4 cm、残存高は 3.4 cmを測る。SK22016 埋土から出土している。

13 は SK22016 北部の埋土上層から出土した高杯と思われる脚部である。直線的に開く裾部で、脚端径 22 cmを測り、端部は尖り気味に丸くおさめる。円形の透し孔が1箇所残存している。

14 も高杯脚裾部であるが、径が 16 cmと小さく、透し穴も認められない。やや外反気味に開く形態を示す。SK22016 埋土から出土している。

SX22002 出土土器　図版 48　写真図版 83・84

15 は体部が丸みをもったやや長胴の甕で、底部は尖底に近い。体部はタタキ整形で、太筋のタタキ目が残るが、その方向は3分割されている。口縁部は体部から「く」字状に曲折し、直線的に外上方に

短かくのびる。端部は丸みがある。体部内面の調整は残存状況があまりよくないが、ヘラケズリのようである。体部には粘土の接合痕が明瞭に残る。口径 12.8 cm、器高 20.4 cmで、体部最大径は中位にあり、17.5 cmを測る。

16 は尖底気味の丸底の甕で、下半のみの破片であるが、タタキは連続螺旋状に施している。残存部分での最大径は 14.8 cmを測り、粘土接合痕が明瞭に残る。

17 は壺と思われる底部である。残存部分での最大径は 23.7 cmである。突出する小さな平底から横外方にのびる体部で、底径は 4.7 cmである。体部内面はハケ調整、外面は不明瞭であるが、ハケおよびヘラミガキを加えているようである。

18 は SX22002 埋土下部から出土した壺である。口縁部は外反しながら外上方にのび、端部は丸くおさめる。口径 8.2 cmと小さく、肩も張らない器形である。

19 は複合口縁壺の破片で、口縁部は屈折したのち外上方に直線的にのび、端部は丸い。口径は 10.8 cm。頸部は断面逆台形の筒形になるようである。他の土器と違って 10YR8/4 浅黄橙色～ 7/4 にぶい黄橙色を呈する。

20 は器高 11.3 cmを測る有稜高杯で、杯部口径 16.2 cm、杯部深 4.3 cmを測り、杯部深指数（杯部深／杯部径× 100）は 26.5 である。下田遺跡編年では高杯杯部を指数で分類されているが、本高杯を指数であてはめてみると、下田Ⅱ－１～Ⅱ－２（古相）式となり、河内庄内Ⅰ～Ⅱ式にあたるとされる（西村歩・池峯龍彦 2006「和泉地域」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター）。高杯脚柱部は中実で、脚裾部は脚柱部から曲折して下外方に直線的に開く。円形透かし孔が４方向に認められる。脚端部は丸くおさめる。器高 11.3 cm、脚端径 11.6 cmである。裾の一部を除き完形品である。調整痕は磨滅のため不明瞭である。

21 も有稜高杯であるが、口縁部のみの破片である。杯上部は横外方に大きく広がり、端部は丸くおさめる。小片のため傾き・径は不正確であるが、口径 20.0 cmとした。

22 は高杯と思われる脚柱部である。裾部に向かって「ハ」字形に開く短いものである。外面調整はヘラミガキのようである。

23 は手焙形土器の鉢部である。底は丸く、下部には断面三角形の突帯が水平に１条貼り付けられているが、突帯の形状はやや歪である。鉢部径は 16.4 cmを測り、残存高は約８cmである。覆部につながる屈曲した部分が認められることから、鉢部の高さも残存高とほぼ同じであろう。覆部の形状は不明である。内外面板ナデ調整で、一部ケズリ状に施している。粘土接合痕や表面の凹凸が認められ、あまり丁寧なつくりではない。

24 は甕底部と思われ、尖底気味の平底である。外面にはタタキ痕が認められる。

25 も底部で、丸底に近いが、外面は径 3.7 cmの平らな面がある。内外面ともハケ調整である。

26 は底径 4.0 cmの平底である。外面全体が黒斑となっている。

27 は鉢または小型壺の体部以下の破片である。径 3.8 cmのやや突出した平底で、残存部分の体部最大径は 9.4 cmである。

28 は台付鉢と思われる脚台部である。脚部は高さ 1.0 cm、脚径は 4.4 cmである。体部は内外面ともハケ調整である。脚端部は丸くおさめる。

29 は小さな脚台がつく椀形の鉢で、口径 12.9 cm、器高 5.9 cmを測る。脚部の現状から、「ハ」字形の脚台部が接合する可能性がある。現状の脚部径は 3.8 cmを測り、体部は完形である。

30・31は平底の椀形鉢で、30は口径10.8㎝、器高5.7㎝、底径3.4㎝で、底面には木葉痕が残る。やや厚手の完形品である。体部外面はハケ調整。31もほぼ完形で、口径8.5㎝、器高5.1㎝、底径3.1㎝と30よりも小ぶりである。底面はドーナツ状の上げ底気味で、木葉痕が残る。体部には粘土紐の接合痕が残るが、磨滅のため調整は不明である。

32は体部から一度弱く屈曲して口縁部となる鉢で、口縁部は内湾気味となり、端部は丸くおさめている。底部は丸底に近いが、径3.1㎝程度のドーナツ状上げ底の形状を示す。体部外面はタタキ、内面はナデ、口縁部内面は板ナデである。粘土紐接合痕や表面の粘土ひび、形状の歪みが認められ、あまり丁寧なつくりとはいえないが、ほぼ完形品である。口径9.8㎝、器高5.8㎝を測る。

33は出土位置が特定できない台付鉢であるが、完形に近い。口径12.8㎝、器高6.4㎝を測り、「ハ」字状に外反しながら下外方にのびる脚台部は径6.0㎝である。内外面とも磨滅のため調整は不明である。

34は下層から出土した脚台付鉢の体部以下の破片で、脚台部は「ハ」字形に短く下外方にのび、端部は丸い。脚端径は5.5㎝である。体部は内外面ともハケ調整。

35は不明の粘土板である。横断面は扁平な蒲鉾形を呈し、最大厚は約1.5㎝である。図の下端部は多くが欠損するが、厚みが薄くなってゆく部分があり、ほぼ端に近いと思われる。したがって、平面形状は歪な卵形に近い。長径8.3㎝、短径6.3㎝程度であろう。表面には両面とも植物の茎状の繊維を押し付けたような圧痕が認められるが、規則性は無いようである。7.5YR1/4褐灰色を呈し、用途不明である。

SX22003出土土器　図版48　写真図版82

36は壺の体部下半の破片で、径6.1㎝の平底である。体部最大径は上位にあり、13.8㎝を測る。体部は逆無花果形に近い。

37は壺と思われる底部の小片である。径7.4㎝の平底から外上方に直線的にのびる体部である。内外面とも調整は不明である。やや大型の壺になると思われる。

石製品

SX22002出土石製品　図版48　写真図版108

S1はSX22002出土の砥石で、図の下部が欠損し、平面三角形を呈する。残存長13.6㎝、幅11.0㎝、厚さ4.3㎝を測る。砥面は上下面と図左側側面であるが、使用頻度が高く特に平滑になっているのは上面の1面のみである。重量は945ｇである。砂岩と思われる。

SH2202　巻頭写真図版6～11・14　図版5～8・49～52　写真図版21～32・85～90・95・96

竪穴住居SH2202は竪穴住居SH2201の西南西方向、約13mに位置する。切り合い関係は無く、耕土直下で輪郭を確認した。平成9年度の確認調査では、トレンチTr-8と東側に拡張した部分でSH01として竪穴住居SH2202の一部を確認しており、部分的に深く掘削をして焼失家屋であることを確認していた。またSH01の東側で円形の土坑（SK03・SK04・SK05）を検出して土器を確認していたが、本発掘調査の結果、竪穴住居SH2202の一部であり、その位置関係から高床部の床面に存在した土器65-1をSK03、土器64をSK04と認識していたようである。調査は直交する十字の土層観察の畦を残して進め、記録をとった後、畦をはずし、最終的に盛土部の確認をするため断割りを行い、盛土をはずし完掘した。なお、県立考古博物館に展示するため、調査途中段階の炭化材や土器の出土状況がわかる状況での剥ぎ取りを実施した。

平面形は東北－西南5.3m、南東－北西5.4m、南北対角6.1ｍ、東西対角6.0mの隅丸方形で、床面積

は約 28.6 ㎡である。南東－北西の中軸方向は北から西に 36° 振っている。

埋土は大きく２層に分かれ、上層は焼土と炭化物を含んだ土層で、遺物は少なく土器は細片がほとんどであり、焼失後に堆積したと考えられる。床面に近い下層は土器の大きな破片、焼土塊、炭灰を多量に含んでおり、焼失時に堆積したと考えられる。南東側高床部は比較的、焼土や炭化材の出土が少ない。なお、検出面において土器の上部や粘土塊の上面が確認できたため、本来は良好に残っていた住居内の遺物が、後世に削平された可能性が高い。

屋内区分および施設は低床部・柱穴・中央土坑、高床部・周壁溝・土坑がある。高床部からの壁の立ち上がりは 10 ㎝～ 12 ㎝と浅く、低床部の標高は 11.30m、高床部の標高は 11.50m 前後である。

低床部は住居の中央部に位置し、一辺 3.1m の方形で、柱穴と中央土坑が存在している。南西南低床部の南主柱の西北 10 ㎝の床面に花崗岩の扁球形の台石 S1 を置いていた。

主柱穴は低床部の四隅に存在しており、４本である。北主柱と東主柱と南主柱は床面より上部が炭化して残っていたが、床面より下は掘形内に僅かに空洞として残っている柱痕跡が残り、炭片や焼土片が少量混じっている。柱掘形の直径は 20 ㎝、柱痕跡の直径は 15 ㎝～ 18 ㎝を測る。深さは、北主柱穴が 62 ㎝、東主柱穴が 46 ㎝、南主柱穴が 50 ㎝、西主柱穴が 48 ㎝である。柱間距離は北東間と東南間、南西間が 2.3m、西北間が 2.1m である。

中央土坑は低床部床面中央部の僅かに南東寄りに位置し、周囲に低い土手が巡り、一部赤変し、炭や焼土混じりの土で埋まっていた。直径 0.40m、床面からの深さ 0.48m である。周囲約 30 ㎝には南東－北西 1.5m、南西－北東 1.0m の隅丸方形で、幅 25 ㎝前後、高さ 10 ㎝～ 6 ㎝の土手が巡っている。北西側のみ土手の外側に三日月形の浅い溝が存在している。

高床部は低床部の周囲に全周し、南西方向と南東方向は基盤層を一旦掘削した後に盛土を行って成形している。北東方向の低床部周囲と高床部との間は土留めを行い、壁を作っており、横長の板材（炭化材 22）が炭化していた。高床部の幅は 1.1m で、盛土は南面で 10 ㎝～ 15 ㎝である。

周壁溝は幅 10 ㎝前後、深さは 5 ㎝前後あり、全周している。北側を中心に西から東側の周壁溝の一部には炭化した草本科植物が斜めに数㎝間隔で立っていたことから壁を構築していた材の一部と考えられる。

土坑は高床部西角に位置しており不定形である。長さは高床部の幅と同じ 115 ㎝、幅 60 ㎝前後、深さ 11 ㎝を測る。埋土は炭や焼土が混じっており、土器の細片と拳大のチャートの亜円礫７点が出土した。

炭化材の状況

この住居は火災によって焼失した焼失住居であり、炭化した建築材が良好な状態で出土している。主柱は低床部の四隅に存在しており、４本である。北主柱と東主柱と南主柱は炭化して一部が残っていた。北主柱は直径 12 ㎝、高さが 23 ㎝、東主柱は直径 8 ㎝、高さが 11 ㎝、南主柱は直径 13 ㎝、高さが 2 ㎝のいずれも焼け細りの炭化材が遺存していた。いずれの柱も床面下は火災時には焼け残った部分であり、柱の痕跡が腐朽による土質の違いとして残っていた。北主柱と東主柱はコナラ属コナラ亜属クヌギ節、南主柱はコナラ属コナラ亜属コナラ節である。

炭化材４は北主柱と東主柱の間から出土した。床面から 8 ㎝程度浮いており、灰化が著しいが、長さ 210 ㎝、幅 15 ㎝程度のコナラ属コナラ亜属クヌギ節である。炭化材４の下からは炭化材 21 や無頸壺 62 や器台破片 77、イイダコ壺 93 が出土しており、ある程度の時間が経た後、落下したものと考えられる。

炭化材５は北主柱と西主柱の間から南柱方向に７° 振って出土した。床面から１㎝程度浮いており、

灰化が著しく、南西側はさらに延びると考えられる。長さ150㎝以上、幅16㎝程度のコナラ属コナラ亜属クヌギ節である。

炭化材3は炭化材4の内側から出土した。床面から5㎝程度浮いており、灰化が著しく、部分的に途切れているが、長さ148㎝以上、幅16㎝程度のコナラ属コナラ亜属コナラ節である。

炭化材10は東南東の低床部の東柱の南西側に壁と平行して出土した。長さ45㎝以上、直径18㎝程度のコナラ属コナラ亜属クヌギ節である。

炭化材1は南西南の高床部から低床部にかけて出土した。壁に向って上方に傾斜している。長さ117㎝以上、直径11㎝程度のコナラ属コナラ亜属クヌギ節である。

炭化材1の南東側の下の床面からは炭化材11・炭化材12・炭化材13・炭化材14が並行して出土した。炭化材11は長さ29㎝、幅6㎝　炭化材12は長さ55㎝、幅5㎝　炭化材13は長さ40㎝、幅6㎝　炭化材14は長さ36㎝、幅4㎝でいずれもコナラ属コナラ亜属クヌギ節である。

炭化材2は西北西の高床部の壁際の周壁溝の中から出土した。直径8㎝の杭状をなす。コナラ属コナラ亜属コナラ節である。

炭化材6は西北西の高床部床面から壁にほぼ直交して出土した。長さ62㎝、幅13㎝である。

炭化材7は西北西の高床部から西西南の低床部にかけて出土した。長さ157㎝、幅17㎝程度のコナラ属コナラ亜属コナラ節である。

炭化材9は西北西の低床部の高床部寄りの土器53-1の下から出土した。長さ38㎝、幅10㎝である。

炭化材15は北北西の高床部床面から出土した。長さ50㎝、幅10㎝のコナラ属コナラ亜属コナラ節である。

炭化材16は北東北の高床部床面から壁に直交して出土した。長さ55㎝、幅8㎝である。

炭化材18は東東北の高床部床面から東西方向に向いて出土した。長さ27㎝、幅6㎝のコナラ属コナラ亜属クヌギ節である。

炭化材19と炭化材20は東東北の高床部床面から並行して壁に直交して出土した。炭化材19は長さ38㎝、幅7㎝である。炭化材20は長さ74㎝、幅8㎝である。

炭化材21は北東北の低床部の床面に密着して出土した。長さ63㎝、幅8㎝のコナラ属コナラ亜属クヌギ節である。

炭化材17は東東北の低床部と高床部との間の板材で、長さ62㎝、幅4㎝である。中央部に垂直の杭が打たれていた。

炭化材22は北東北の低床部と高床部との間の板材で、長さ85㎝、幅15㎝が残存しており、周囲は灰化している。コナラ属コナラ亜属クヌギ節である。

炭化材8は西西南の高床部壁際の床面から出土した。長さ53㎝、幅10㎝のケヤキの板材である。すぐ北西側には粘土塊が存在している。

北東から北西の壁溝内には部分的に炭化した草本科植物が遺存していた。

遺物の出土状況

火災により、使用当時に近い状況で遺物が出土しており、竪穴住居内部の空間利用状況がある程度復原可能である。

壺50は体下半部と体上半部から頸部とが約0.7m離れて出土した。体下半部の50-1は西北西の低床部の炭化材7の下から底部が床面に接し出土した。体上半部から頸部の50-2は西西南の高床部床面か

ら出土した。壺51は東南東の高床部から、底部が床面に接し、床につぶれた状態で出土し、上部は後世の削平を受けている。壺52は西北西の高床部の壁際から横たわって、上部は後世の削平を受けた状態で出土した。壺53は口頸部を欠き、体部が縦に割れており、約0.6m離れて出土した。底部が残る53-1は西北西の低床部の高床部際から底部を高床部に向け横たわった状態で出土した。53-2は西北西の高床部の低床部際で横たわった状態で出土した。

壺55は上下真二つに割れて、約1.4m離れて出土した。下半部55-1は北北西の低床部から倒立して一部炭化材5の下から出土した。上半部55-2は西北西の低床部から正位の状態で出土した。壺56は西北西の低床部の床面から口縁部を欠く上半部が正位の状態で出土した。壺57は北北西の高床部の低床部際から底部が床面に接して出土した。壺58は西北西の低床部西柱の傍から底部が床面に接し、つぶれた状態で出土した。壺60は西西南の高床部の床面に接した炭化材8の上から出土した。

小形の無頸壺62は北東北低床部の北主柱脇の梁桁と考えられる炭化材4の下の床面から出土した。壺63は東南東の低床部の中央土坑東側から出土した。土器の下には焼土の塊が存在していた。

大形壺64は南南東の高床部で底部が床面に接して出土した。口縁部から体部上半の一部は後世の削平を受けている。大形壺65は二つに分かれて、約0.6m離れて出土した。下半部65-1は南南東の高床部で底部が床面に接して出土した。体部の一部65-2は低床部の南主柱の南東側から出土した。接合はしないが胎土や文様などの特徴から同一個体と考えられる42がSK2214から出土している。

甕68は南西南高床部の床面から口縁部を南に向けて横たわった状態で出土した。甕70は西北西低床部の中央土坑西側の床面に底部を南に向けて横たわった状態で出土した。甕71は南東南高床部の床面から上部は削平を受け、横たわって床につぶれた状態で出土した。甕75は東南東の高床部の床面に横たわってつぶれた状態で出土した。上部は削平を受けている。

器台77は東東北の低床部の炭化材4の下の床面から出土した。

イイダコ壺82～87は北東北の高床部から出土した。イイダコ壺88・89は北東北の低床部から出土した。イイダコ壺90～92・94は東東北の低床部から出土した。イイダコ壺93は東東北の低床部の炭化材4の下から出土した。

焼成粘土塊（103～106）は東部を中心に東部から南部の第1層で出土している。

砥石S2は被熱破損して飛び散っており、S2-1を核に6点が接合した。S2-1は東東北高床部のから出土している。そのほかの砕片はS2-1から北西方向の北東北の高床部の壁際の1.3m × 0.8mの範囲に飛び散っていた。砥石S3は南西南低床部の南主柱の西側から出土した。

このほかに縄文時代と考えられる凹基無形式石鏃が炭化材4と炭化材21の間から出土した。

西西南高床部の床面に壁に接して、白色の粘土塊が存在していた。上部は後世の削平を受けており、北西側面は被熱赤変していた。60㎝× 60㎝の不整形で、厚さ10㎝、重量38.5㎏である。

出土遺物（50～106・S2～S4）

SH2202からは土器・石器が出土した。土器は二次的な被熱により変色したり、調整が不明瞭になっているものが多い。

下層（50～53・55～58・60・62～65・68・70～73・75・77・82～101）

下層から出土した遺物には土器と石器がある。土器は壺・甕・器台・イイダコ壺があり、石器は砥石・台石がある。

壺50は縦長の体部に突出した厚い底部を作る。外面にタタキ痕跡が僅かに残る。壺51は球形の体部

で、全体に磨滅が著しいが、体部最下端にハケ調整の痕跡が残る。体部下半に接地黒斑が存在する。壺52は球形の体部で、外面は体部上半は縦方向、最大径部は横方向、体部下半は縦方向のミガキを行っている。内面は部分的に粘土紐接合痕が残り、横方向のハケ調整を行っている。壺53は大きく張った体部に頸部が僅かに残る。外面は体部上半から頸部は縦方向、最大径部は横方向、体部下半は縦方向のミガキを行っている。内面は上半部に粘土紐接合痕が残り、指押さえの痕跡がある。底部から体部下半にかけて接地黒斑が残り、対する体部上半には覆接触黒斑が残る。

二重口縁壺55は大きく張った体部に頸部が外反し、直線的に外傾する口縁部がつく。頸部上端にはキザミを入れている。体部内面には部分的に粘土紐接合痕が残り、斜め方向のハケで調整している。壺56は体部上半に直立する頸部がつく。外面は磨滅のため調整が不明であり、内面は粘土紐の接合を縦方向に指で押さえた痕跡が残る。壺57は大形壺の体部下半で、外面は縦方向のミガキを行っている。

壺58は大きく張った体部下半の破片で、最大径部は横方向、下半は斜め方向のミガキ痕跡が僅かに残る。体部下半に接地黒斑が存在し、底部内面は窪む。底部60は体部に向って直線的に開くため甕の可能性が高い。無頸壺62は球形の体部に短く直立する頸部がつく小形品である。底部は窪んでいる。外面はミガキで仕上げている。壺63は球形の体部の大形品である。口頸部と体下半を欠く。磨滅が著しい。壺64は口頸部を欠く大形品である。体部の破片は多量に存在するが、磨滅により接合が不確実なため、図上で復原した。体部上端に断面三角形の突帯を貼り付けている。突帯頂部はキザミを付け、側面には二段の小円の列点文を付けている。同一個体の突帯の一部がSK22014から出土している。壺65は小さな平底に球形の体部を作る。器表面は磨滅しており、粘土紐の痕跡が見える。

甕（68・70～72・75）は中形甕（71・75）と小形甕（68・70・72）とがある。甕71はやや膨らんだ体部で、全体に磨滅が著しいがタタキ後、縦ハケが残る。底部は窪んでいる。体部外面最大径部やや下に黒斑が残る。甕75は底部の破片で磨滅のため調整は不明である。甕68は縦長の体部に外反する口頸部がつく。外面は下半が右上がり、上半は横方向のタタキ痕跡が残る。内面下半は平滑にナデを行っている。甕70はやや体部の膨らんだ縦長の体部に右上がりのタタキ痕跡が残る。甕72は底部の破片である。鉢73は底部の破片で、底面にヘソを作っている。器台77は口縁部の破片で、複合口縁の端部に擬凹線文を施文する。

イイダコ壺（82～102）は口縁直下に1個の円形の紐穴を穿つ。基本的には丸底であるが、82・88・95・98・100・101は平底、83・102は窪み底である。内面は指などでナデ上げている。

砥石S2は砂岩製で被熱破損している。破損する前の原面は黒色化しており、破損後の割れ面は新鮮であり、容易に見分けがつく。長さ21.6㎝、幅14.2㎝以上、厚さ7.0㎝以上、1354gである。砥面は1面であり、凹状に砥ぎ減りしている。他に被熱破損の未接合の小破片が226点、482gあり、合計1836gである。

砥石S3は不定形な形状で、一面に割れ面がある。砥面は1面で僅かに擦痕が残る。長さ13.2㎝、幅15.8㎝、厚さ6.1㎝である。

台石S4は南西南低床部の南主柱のすぐ北側の床面に置かれていた。直径32㎝、厚さ16㎝の扁球形の花崗岩である。被熱してひびが入っているため、使用痕の観察は難しい。

上層（59・66・67・76・78・79・80・103・104・106）

上層からは壺・甕・鉢・器台・焼成粘土塊が出土した。

壺59は底部の細片で、ドーナツ底で外面は右上がりのタタキで整形している。甕（66・67）は口縁

部の破片で、大きく外反する。鉢76は底部の破片で、外面にタタキを施す。底面には植物質の圧痕が残る。器台78は脚裾の破片である。高坏79は有稜高坏の口縁部の一部である。高坏80は短い脚部で大きく開く。

焼成粘土塊（103・104・106）は3㎝～4㎝前後の小さなもので、103は偏平な塊で表面には植物繊維の痕跡が残る。106は偏平で、中砂から粗砂を含む焼土の塊で表面はざらついている。

上層2（54・102）

二重口縁壺54は口縁部の破片で、内外とも横方向のミガキを行っている。イイダコ壺102は中央部が窪む丸底で内面は指でナデ上げている。

高床部盛土（74・81）

高床部盛土からは甕と鉢の小片が出土した。甕74は平底の底部の破片で、体部外面はタタキ痕跡が残る。底部81は短い脚台が付く。

層位不明（61・69・105）

層位不明のものは壺・甕・焼成粘土塊がある。

壺61は口縁部の小片で口縁端部を強くナデている。甕69は屈折して開く口縁で端部は丸くおさめる。体部外面は右上がりのタタキである。焼成粘土塊105は偏平で、中砂から粗砂を含む焼土の塊で表面はざらついている。

SH2203　巻頭写真図版12・15　図版9～11・53　写真図版32～37・91・92

竪穴住居SH2203は竪穴住居SH2202の北北西方向、約15mに位置する。耕土直下で輪郭を確認し、中世の掘立柱建物のSP22106に部分的に切られている。

平面形は東北－西南6.5m、南東－北西6.2mの隅丸方形で、床面積は40.3㎡である。南東－北西の中軸方向は北から西に38°振っている。屋内施設は高床部・周壁溝・主柱穴・中央土坑・壁際土坑がある。

高床部は上層の耕作の影響で面は残っていない。南東部に位置する壁際土坑部分を除いて全周し、南東面の幅1.4m、南西面の幅1.3m、北西面の幅1.4m、北東面の幅1.4mである。低床部からの高さは削平されているため0.1m以上で、標高は現状で11.72mある。南西側の高床部は盛土を行っている。

周壁溝は壁際土坑部分を除いて全周しており、幅は15㎝～20㎝前後、深さは2㎝～5㎝である。

低床部は住居の中央部に位置し、東北－西南4.0m、南東－北西3.5mの長方形で、標高は11.68mである。四隅には主柱穴、中央部には中央土坑が存在する。

主柱穴は低床部の四隅に存在しており、4本である。柱掘形の直径は20㎝～30㎝、柱痕跡の直径は15㎝～20㎝である。深さは北主柱が68㎝、東主柱が69㎝、南主柱が83㎝、西主柱が71㎝である。柱間距離は北東間と南西間が3.2m、東南間が3.3m、西北間が3.5mである。

中央土坑は低床部床面中央の壁際土坑寄りに存在し、南東側は中世の掘立柱建物の柱穴に一部切られている。南東－北西55㎝程度、東北－西南40㎝の楕円形で、床面からの深さは15㎝である。埋土は焼土粒が混じる極細砂である。

壁際土坑は南東壁中央に接して存在し、周壁溝が接続している。土坑は床面から続く周囲の部分と中央の深くなる部分とがある。周囲は160㎝×100㎝の範囲に小亜円礫が敷き詰められており、残りのよい西南側は土坑中央部に向って約18°傾斜している。土坑中央部は東北－西南55㎝、南東－北西35㎝の隅丸長方形で、深さ85㎝で直線的に掘り込んでいる。土坑内部はしまりのない極細砂が堆積しており、

土が徐々に埋まった堆積状況である。

遺物の出土状況

遺物は中央土坑周辺の低床部床面と壁際土坑から出土した。低床部床面西主柱穴付近からは壺口縁107が、低床部東部からはイイダコ壺109が出土した。中央土坑からは壺口縁111が、中央土坑及び付近からはイイダコ壺108が35㎝離れて出土し、接合した。

壁際土坑からは壺・鉢・高坏・小型器台が多数出土している。土坑周囲の礫敷上から出土するものと土坑内部に落ち込んだ状態のものとがある。

白色の粘土塊は4個が2箇所から出土しており、合計20.8㎏の重量があった。壁際土坑北部の敷石上面には粘土塊が2個（粘土1・粘土2）置かれていた。粘土1は北東側に位置し、高さ15㎝、直径30㎝の円形で、8.5㎏である。粘土2は北西側に位置し、高さ7㎝、南北40㎝×東西30㎝の楕円形で、4.8㎏である。

低床部の床面には粘土塊が2個（粘土3・4）置かれていた。いずれも上部は削平のため粘土3は中央土坑の東側に位置し、高さ8㎝、南北60㎝×東西35㎝の楕円形で重量5.4㎏である。粘土4は中央土坑の北西側に位置し、高さ8㎝、南北25㎝×東西20㎝の楕円形で重量2.1㎏である。

出土遺物（107～137）

低床部床面及び中央土坑（107～109・111）

壺･イイダコ壺がある。壺107は二重口縁壺の口縁部で外反している。イイダコ壺108･109は丸底に、直線的な細身の体部で、口縁直下に一孔を穿つ。底部は厚く作っている。直口壺111は口頸部の破片で直線的に僅かに外傾する。

壁際土坑（113～137）

壺・甕・鉢・高坏・小型器台がある。広口壺113は球形の体部に外傾する口頸部が付く。壺底部114は大きく張る体部下半にドーナッツ底が付く。直口壺115は口縁部が内弯気味に立ち上がる。粘土紐積上げに伴う粘土の色の違いが見られる。壺底部116は小形品で外面に縦方向のミガキを行う。壺底部117は大形品である。壺126は二重口縁壺の口縁部で大きく外反している。

甕118・119は口縁部の破片で、118は外傾する口縁部に口縁端部は内側に僅かに段を作る。119は口縁端部を丸く作る。甕120は口縁部から体部の破片で口縁部は外反しており、口縁部の中ほどが膨らんでいる。磨滅が著しい。甕底部121・122は121が平底、122がやや突出した底部である。鉢123は手づくねで作った小形の製品で、体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。直口鉢124は口縁部が直線的に外方に開き、底部は上げ底風につまみ出している。丸底鉢125は半球形である。内面はナデで仕上げている。

有稜高坏127～129は坏部の稜を突出させ口縁部が直線的に外傾する。127は脚柱部が中実である。130有稜高坏の坏部の破片、131は高坏の坏部から脚柱部にかけての破片である。椀形高坏132は半球形の坏部に短い脚柱部が付く。脚部は大きく開き、4方向の円形透かし部分で欠けている。高坏133～136は坏部が存在していないが132と同様に椀形高坏と考えられる。脚部135・136は直線的に大きく開き、136は4箇所の円形透かしを穿つ。小型器台137は受け部から脚部にかけては貫通しており、脚部に円形の透かしを穿つ。外面は縦方向のミガキ調整を行っている。

高床部盛土（110）

甕110は外傾する口縁部の破片で、口縁端部を斜め上方につまみ上げる。

SH2204　巻頭写真図版 13・15　図版 13・14・53　写真図版 38 ～ 40・93 ～ 94・108

竪穴住居 SH2204 は竪穴住居 SH2202 の西側 2 m に位置し、耕土直下で輪郭を確認した。平成 9 年度の確認調査で中央部分に確認トレンチ Tr-8 を掘っており、北西壁・床面・中央土坑・主柱穴 4 本が存在していたが、中央土坑付近の床面を SK06 として調査しているだけで、竪穴住居と認識はできていなかった。南西側の約 1/3 は現在の水田造成により大きく削平を受けていた。

平面形は東北－西南が残存 4.0m で推定 5.1m、南東－北西 5.1m の方形で、推定床面積は約 26.0 ㎡である。南東－北西の中軸方向は北から西に 55° 振っている。屋内施設は周壁溝・主柱穴・壁際土坑・中央土坑がある。床面の標高は 11.40m であり、検出面からの深さは、北東側で 0.25m を測る。南西壁は後世の削平により残っていない。

周壁溝は壁際土坑部分と壁が残っていない南西壁部分と確認トレンチ部を除いてほぼ全周しており、幅は 10 ㎝～ 20 ㎝前後、深さは最深 8 ㎝である。

主柱穴は 4 本である。直径は 20 ㎝、深さは北主柱が 70 ㎝、東主柱が 60 ㎝、南主柱が 55 ㎝、西主柱が 60 ㎝である。柱間距離は北東間と東南間、西北間が 1.7m、西北間が 1.8m である。

壁際土坑は南東壁中央に接して存在し、周壁溝が接続している。南北 0.95m、東西 0.85m、床面からの深さ 0.6m である。土坑内部はしまりのない極細砂が堆積しており、土が徐々に埋まった堆積状況である。

中央土坑は住居中央部に存在し、平成 9 年の確認調査で変形しているが、南西側の一部が赤変していた。東西 1.3m 程度、南北 0.8m の不整楕円形で床面からの深さ 0.08m である。

遺物の出土状況

床面からの遺物は、壁際土坑及びその周辺、北東壁際、北西壁際の大きく 3 箇所から出土している。壁際土坑及びその周辺からは鉢・甕・高坏・イイダコ壺と砥石が出土した。北東壁際の床面付近からは甕底部（139）とイイダコ壺（142）が出土した。北西壁際の床面付近からはイイダコ壺 2 点（143･144）が出土した。

出土遺物（138 ～ 156・S5）

SH22004 から出土した遺物には土器と石器がある。

床面（139 ～ 145）

甕・鉢・イイダコ壺が出土した。

甕（139・140）は、139 が口縁部の破片で、140 が底部の破片である。鉢 141 は低い脚台が付く。イイダコ壺（142 ～ 145）は、いずれも丸底である。142・143 は口縁部から底部まで存在するが、紐穴部分は欠損している。142 は非常に薄く作っている。143 の底部は厚い。144・145 は底部の破片である。

壁際土坑（149 ～ 156・S5）

壁際土坑からは土器（鉢・高坏・イイダコ壺）と石器が出土した。

鉢は外反口縁鉢と直口鉢がある。外反口縁鉢 149･150 は丸い体部(149) と直線的な体部(150) とがあり、かろうじて 149 の内面にミガキ調整が残る。直口鉢 151・152 は口縁部が外方に直線的に開く小形品で、底部は 151 が単純な平底、152 が突出した平底である。高坏（153 ～ 155）は口縁形態が判明するものは椀形高坏 154 のみである。脚柱部はいずれも中実で短い。153 の脚裾部の広がりは短い。透孔は 154 でかろうじて確認できるが個数は不明である。155 は脚柱部破片である。イイダコ壺 156 は丸底で口縁下に円孔を穿つ。底部は薄く作っている。

砥石 S5 は偏平な不整三角形をしており、表裏の二面を使用している。長さ 13.0 cm、最大幅 12.1 cm、最大厚 3.9 cmで、重量は 680 g である。

埋土上層（138・147・148）

埋土上層からは甕とイイダコ壺が出土している。138 は小形の甕口縁部の小片である。147・148 はイイダコ壺の口縁部の破片である。口縁下に円孔を穿つ。

SH2205　図版 15・16　写真図版 41 ～ 45

検出状況

調査区北部の東側に位置する方形の竪穴住居跡で、その主軸は方位に近い。

本住居跡は比較的深さが残っており、埋土は周囲から埋まった状況である。壁付近のにぶい黄褐色および褐色系の埋土は壁の崩落土が主体を占めると思われ、その後堆積した中央部分の第２層・第３層・第５層は周囲からの流入土であろう。人工的に埋めた痕跡は認められない。

本住居跡も調査途中で地下保存が確定したため、埋土観察用の畔は残したまま調査終了した。また、屋内高床部も一部断ち割りによる土層観察を行うにとどめ、柱穴も掘削しなかった。

埋土第１層～第３層および床面に加え、住居内の土壙などからも土器が出土した。

形態・規模

平面は方形であるが、西半分のコーナー部はやや丸みがある。東西 4.10 m、南北 4.30 mで、南北にやや長いが、西側がやや広い台形状を呈しているところが注意される。

住居内には屋内高床部が凹形にめぐり、南側中央部には認められないが、かわりに土壙が存在する。検出面から屋内高床部までの深さは 27 ～ 38 cmである。

床面は南北 2.3 m、東西 2.1 mが最大規模で、南北にやや長い矩形である。床面中央部は湧水があり、軟弱な地盤であるため、埋め土により床面を形成していた可能性があるが、確認することができなかった。なお、検出面から床面までの深さは 48 ～ 57 cmを測り、屋内高床部上面とは 17 ～ 25 cmの落差がある。放射性炭素年代測定では SH2202・SH2206 よりも 100 年程度新しい値が出ている。

柱　穴

４本の主柱穴は屋内高床部四隅の下端に位置しているが、北側の２本は屋内高床部とは 20 ～ 30 cm程度の間隔がある。柱痕間は東西方向北側が 1.68 m、南側で 1.38 m、南北方向西側で 1.58 m、東側で 1.44 m とややばらつきが大きい。柱穴掘り方は円形で、柱痕は径 12 cm～ 18 cm、掘り方は径 14 cm～ 35 cmである。

以上の点は、本住居跡の保存が決定したため、柱痕および掘り方ともに完掘しておらず、確実なことはいえない。なお、調査終了後は砂で埋め戻した。

屋内施設

SH2205 は周壁溝がめぐる屋内高床部を有し、南側壁中央部に土壙 SK22309、南西および北西コーナー部にもそれぞれ土壙 SK22308・SK22310 が存在していた。

周壁溝

周壁溝は南東部分では検出できなかったが、もともとは全周していたものと考えられる。幅 10 cm程度、深さも 10 cm程度を測る。また、所々に杭穴のような直径５cm程度の小穴が認められる。

南西部の周壁溝から小形壺体部（175）が出土している。

屋内高床部

屋内高床部は南側中央部の長さ80㎝にわたって途切れているが、そこには土壙SK22309が存在している。周壁溝を除く屋内高床部の上端幅は70㎝～80㎝で、第15層の褐色砂質シルトを盛ることによって構築している。なお、屋内高床部の床面側は崩れて傾斜面をなす部分がある。

出土遺物は、北西隅近くの高床部上から飯蛸壺195が出土している。

SK22309

SH2205内の南壁に接して中央に存在する土壙である。屋内高床部から10㎝程度低い位置から掘り込まれている。上面は東西60㎝、南北45㎝の長方形で、上面から5㎝程度下がったところで平坦となり、さらに東西37㎝、南北35㎝の方形範囲が深く掘り込まれ、二段になっている。周壁側は垂直に近い。2段目の底面は平坦で、20㎝×20㎝で円形に近い。一段目下端からの深さは30㎝である。2段目が掘り込まれているのは1段目長方形の中央からやや西に偏っている。この形状を示す類例にはSH2203の土壙SK22191がある。ただし、本例にはSK22191のような礫敷きは認められなかった。

埋土は3層に分かれ、第2層には炭が含まれ、すべての土層に土器片を含んでいた。土壙上面よりもさらに上部の住居跡南壁横から甕（170)、土壙埋土第2層の下部付近から甕体部、埋土から甕と思われる底部（182)、土壙検出面から甕と思われる底部（186）が出土している。

SK22308

SH2205内の南西隅に位置する平面円形に近い土壙で、高床部上面から掘り込んでいる。長径82㎝、短径75㎝で、壁は垂直に近く、検出面からの深さは約60㎝であった。埋土は最下の第7層が粘質であることから、帯水していた可能性が高い。第5・6層は壁の崩落土と思われ、第4層の上に堆積している第2・3層は住居跡周壁崩落土であろう。

底部中央から横倒し状態で台付鉢（188）が出土し、第1層からも196の飯蛸壺片が出土している。

SK22310

SH2205内の北西隅に存在する円形の土壙で、高床部上面から掘り込まれており、上面で南北70㎝、東西60㎝の規模である。壁面は垂直に近く、底は平坦で、南北40㎝、東西37㎝を測り、方形に近い。深さは55㎝である。

埋土は大きく4層に分けられ、最下の第5層は壁面崩落土、第2層は住居壁面の崩落流入土であろう。なお、第3層には炭片を含んでいる。183の底部が埋土から出土している。

出土遺物

土　器　図版55　写真図版97～99

SH2205埋土ほか出土土器

168は甕の上半部である。やや太筋の平行タタキを連続ラセン状に施している。体部は非常に丸い。口縁部は体部から屈曲し、大きく外反しながら外上方にのび、端部は丸く仕上げている。口径13.6㎝、体部最大径19.1㎝を測る。埋土2層出土。

169は肩が張らない体部から内面に稜をもって「く」字状に屈折して外反しながら外上方にのびる甕口縁部である。端部はヨコナデによりはねあげ状を呈するが、磨滅している。口径17.2㎝で、体部外面はやや細筋のタタキで、口縁部下部はタタキ出し技法による。埋土3層出土。

171は外反する甕口縁部片で、端部は磨滅しているためか丸い。口径は17.6㎝で埋土3層出土である。

172は器台もしくは壺の口縁部片で、埋土3層から出土している。複合口縁の形態で、口径は14.3㎝を測る。口縁上部外面はハケ調整、口縁下部は内湾する。

173は埋土1～2層出土の広口壺口縁部片で、端部を下方に大きく拡張する。端面には2条の凹線を施し、竹管円形浮文を加飾する。口径は17.6㎝を測る。

174は直口壺口縁部で、埋土第3層から出土した。口径8.0㎝、頸部径5.0㎝の断面逆台形を呈する。器表は剥離している。

175はミニチュアと呼べるほど小型の壺体部で、周壁溝から出土した。体部最大径は6.8㎝を測り、残存高は4.4㎝であるが、上端はほぼ端部に近いと思われる。指オサエによる成形である。

176は大型鉢口縁部の小片で、埋土第3層出土である。緩やかに外反する口縁部で、体部との境は曲折している。口縁端部には1条の凹線を施している。小片のため口径は不正確であるが、26.0㎝である。

177～181・184・185・187は底部である。多くが平底であるが、185のようにドーナツ状上げ底のもの、184のように中央部のみ小さく窪むものもある。また、184のように有孔の底部も存在する。外面にタタキ痕を残す177・178・181・185や、180のようにハケ調整のものも認められる。

埋土第3層からは177・178・181・184が出土し、その他は埋土第1・2層出土である。

189は台付鉢と思われるが、脚部を欠失する。188とは杯部形状が異なり、杯部深7.9㎝と深い。口径は13.6㎝を測る。外面はハケ、内面は板ナデ調整で、埋土第3層から出土した。

190～193は高杯脚柱部である。いずれも中実で長い190～192と脚柱部が短い193がある。193には4方向の円形透孔が残存し、191にも透孔が存在する可能性がある。190のみ埋土第2層出土で、その他は埋土第3層出土である。

194は高杯脚部で、裾部は外反し、径16.4㎝を測る。端部は丸い。円形透孔が1箇所残存している。埋土第2～3層出土である。

195・197・198は飯蛸壺で、195は屋内高床部から、198は埋土第3層、197は埋土第1層からそれぞれ出土したものである。195は1/2強の破片であるが、孔は残存していない。丸底で、口径6.8㎝、器高9.3㎝を測る。197は比較的厚手の破片で、口径5.1㎝を測る。198の口径は5.9㎝で、197・198ともに孔は残存していない。

SK22308出土土器

188はSK22308の底から出土した台付鉢で、裾部を除いて完形品である。椀形杯部の口径は12.2㎝、杯部深4.7㎝を測る。端部は丸く仕上げている。脚柱部は短く、脚部は「ハ」字形に大きく開き、裾部手前ではやや内湾する。直径6㎜の円形透孔を4方向に穿っている。脚端径は14.1㎝を測る。

196は底部を欠損する飯蛸壺の破片で、口径6.1㎝に比べて下部腹径7.8㎝と下膨れの器形である。孔は残存していない。

SK22309出土土器

170はSK22309出土の甕上半部で、体部最大径が中位にある体部から「く」字状に屈折して直線的に外上方にのびる口縁部となる。端部は丸い。口縁部の大半はタタキ出し技法による。体部外面にはやや太筋の平行タタキが残る。体部内面は板ナデのようである。口径12.2㎝で、体部最大径は13.3㎝程度である。

182は平底の底部、186は尖底で、ともに外面にタタキ痕を残している。

SK22310出土土器

183は突出気味の平底底部で、底径5.2㎝を測る。

以上、SH2205出土土器は、住居廃絶時に置き去りにされたと思われるSK22309出土の甕170や

SK22308 出土の台付鉢 188 からみて、後期末～庄内併行期の住居と判断してもよいであろう。

鉄　器　図版 55

SK22310 出土鉄器

残存長 3.8 cm、最大幅 2.0 cm、最大厚 0.4 cmを測る。形状から鉄鏃片のようにもみえるが、片面の縁が蒲鉾状の細い突帯のようなものが存在するため、確定できない。

SH2206　図版 17・18　写真図版 46 ～ 51

検出状況

調査区北西端に位置する隅丸方形の竪穴住居跡である。住居跡の西半分は調査区外にひろがる。この住居跡は検出段階で盛土による現状保存が決定したため、住居跡の時期および構造について最低限の情報を得るための調査にとどめることとし、検出部分の南側半分すなわち、住居跡の約 1/4 を掘削した。

形態・規模

南北 6.3 m程度、東西 2.6 m以上を測り、今回検出した住居跡の規模としては SH2203 と並び、隅丸方形では最も大きい。

本住居跡では検出面から最大 18.5 cmの深さに屋内高床部があり、そこから床面までの高さは最大 25 cmであった。したがって、検出面から床面までの深さは最大で 43.5 cmとなる。

本住居跡の検出段階から埋土に焼土・炭が多く含まれていることが観察でき、東側壁の一部が赤褐色～黄褐色に変色していたため、焼失住居であることが想定できた。掘削の結果、主柱・垂木などが炭化して残存し、高床部の一部が熱を受けて窯壁のように変色・硬化していたため、焼失住居であることが判断できた。また、焼失後の住居部分には多くの土器片が層状に堆積しており、土器の廃棄場所として使用されていたことが推定できる。

土層関係では、東西方向断面の第 11 層・第 19 層～第 21 層・第 23 層・第 25 層が焼失時に屋根や壁などが落ち込んだものと考えられ、南北断面の第 13 層も同様の性質と思われる。また、第 10 層や南北断面の第 12 層も同様の起源である可能性がある。

遺物は主として第 8 層～第 10 層・第 12 層から出土しており、土器量は非常に多い。ほかに金属器・石製品がある。

柱　穴

床面まで掘削した範囲内で柱穴を 1 基検出した。高床部コーナー部下端より中心に向かって約 60 cmのところに位置する。その位置から、主柱穴と考えられ、全体では 4 本になるものと思われる。柱掘り方は上面を少し掘り下げたのみであるが、東西 33 cm、南北 28 cmの楕円形に近い。掘り方内のやや南東に寄った位置には炭塊があり、炭化した柱の根元と思われる。それより下部には炭が認められないことから、立ったまま炭化した主柱であり、炭化しなかった部分はすでに腐朽してしまったと判断される。炭化部分は径 10 cm、最大高約 3 cmで上面中央部が山形を呈する低い円柱状となっている。炭化材樹種同定ではコナラという結果を得ている。なお、樹種同定をおこなった炭化材サンプルのうち、掘削範囲西壁中央部下の床炭 2 としたものがコナラ属コナラ亜属クヌギ節である以外はすべてコナラ属コナラ亜属コナラ節という結果であった。放射性炭素年代測定では SH2202 と近い値が出ている。

屋内施設

今回の調査範囲で確認できた屋内施設には周壁溝と屋内高床部がある。中央土壙の有無については住

居形状から存在する可能性が高いと考えられるが、調査範囲が限られたため不明である。

周壁溝

周壁溝は調査範囲内全域において検出できた。幅15㎝程度、高床部からの深さ3㎝ほどであるが、腰板と判断できる炭化材は検出できなかった。

屋内高床部

屋内高床部は周壁にそって幅約90㎝でめぐっており、上面はほぼ水平である。この部分で検出された炭化材は検出時の方向等により垂木と判断できよう。なお、高床部下と床面との境には幅10㎝、深さ2～3㎝程度の小溝が存在しており、この部分に腰板のように板を立てるための溝である可能性が高いが、板と判断できる炭化材は検出できなかった。

出土遺物

SH2206から出土した遺物には、土器・飯蛸壺、石製品のほか、鉄器がある。

土器類　図版56　写真図版97・99・100

199～205は甕である。口縁部が外反し端部を丸くおさめる199・200は口縁部外面中央がやや外膨らみになる。199は口径15.7㎝で体部は丸く、体部外面は右上がりのタタキ、内面はハケ調整である。土器B-2で取り上げた。200の体部外面は右上がりの細筋タタキで、口縁部はタタキ出し技法による。

201は口縁端部がやや内傾する面をもつもので、端部は欠損するが、口径12.8㎝と推定される。体部最大径は上部にあり、15.4㎝を測る。体部内面は板ナデ調整のようである。

202も201と似た口縁部形態であるが、端部外面に2条の擬凹線を施している。口径は11.0㎝で、体部最大径は上部にあると思われる。

203は緩やかに屈曲する口縁部をもつものであるが、器壁が薄く、他器種の可能性がある。口径は14.2㎝を測る。

204は口縁端部に垂直の面をもち、上端を僅かにつまみ上げるもので、口径19.6㎝を測る。

205は甕下半部で、残存高は7.7㎝である。突出する径4.9㎝の平底から、内湾しながら外上方にのびる体部となる。体部外面は右上がりのタタキ、内面は板ナデのようである。底面には木葉痕が残っている。

206は複合口縁の壺で、口径は16.6㎝を測る。口縁部外面には櫛描波状文を2段に施し、頸部下端には円形浮文が1箇所残存している。

207は壺または器台の口縁部である。口径は14.7㎝で端部は下方に拡張し、端面に3条の凹線を施すが残存状況は悪い。

208は高杯口縁部の小片で、大きく外反し、端部には面をもつ。口径24.9㎝と推定される。上層出土。

209は有稜高杯杯部である。口縁端部と脚部を欠失する。口径22㎝以上で、外面はヘラミガキ調整。土器B-5。

210は高杯脚柱部で、外面にはヘラミガキが認められる。

211は器台口縁部で、端部は丸い。複合口縁を呈し、口径15.7㎝である。

212は器台口縁部のようであるが、脚部の可能性もある。口径13.3㎝で、端部には面をもつが、若干凹面をなす。

213は注口部をもつ鉢の破片である。細片のため口径等は不明。外面にはタタキが認められる。

214～221は底部である。214は径4.7㎝の突出した平底で、底面に木葉痕が残る。215も突出した平

底で径 5.2 cmを測る。216 は突出しない径 3.4 cmの小さな平底で、体部外面には右上がりのタタキが施されている。217 は径 4.9 cmの突出した平底で、底面はやや丸みをもっている。内面は板ナデ調整。218 も突出した平底であるが、押しつぶされたように側面が盛り上がっている。底面の径は 4.5 cm。219 は底径 4.0 cm。220 は上げ底となっており、底径 2.4 cmと小さい。221 は有孔で尖底に近い形状を示している。

222 ～ 226 は飯蛸壺である。222 の器高は 9.5 cm、底径 2.4 cmの平底で、体部最大径は中位にあり 5.9 cmを測る。紐通し孔部分は欠損している。223 は尖底に近いもので、残存高 10.1 cm、体部最大径は 7.3 cmを測る。口縁部を欠失し、体部外面にはタタキ痕が残る。224 は径 5.4 cmの口縁部片で、紐通し穴部分が残存している。225・226 はともに口縁部片で、225 の口径は 5.2 cm、226 は口径 5.7 cmを測り器壁は薄い。

227 ～ 229 の 3 点は管状の有孔土錘である。227 は外径 3.5 cmで、孔径は 1.5 cm、残存長は 7.3 cm。228 は完形で、全長 6.2 cm、外径 3.1 cmを測り、孔は歪な形状となっているが、径約 1.2 cmである。重さは 56.5 g を測る。229 は残存長 5.0 cmの破片で、外径 3.3 cm、口径 1.4 cmを測る。53.8 g。

以上、SH2206 から出土した土器はそれらの特徴から、弥生時代後期末と考えられ、これらが住居廃絶後に捨てられたものと推定できることから、SH2206 の時期は後期末以前に遡ると判断できよう。

なお、高床部から周壁溝にかかる位置で出土した甕 199 は時期が遡る可能性が高いものであると同時に、住居廃絶時に残された土器の可能性がある。

金属器　図版 56　写真図版 113

M1 ～ M3 はすべて鉄製角釘と思われるが、最上層から出土したものであり、土器群とは様相を異にする。M1 は釘先端部分で、残存長 2.4 cm、幅 3.5 mm、厚さ 3.0 mmである。M2 は頭の部分が残存しているが、先端は不明である。残存長 3.5 cm、幅 3.0 mm、厚さ 2.5 mmで、頭の部分は幅 6.0 mmに広げられている。M3 は頭と先端を欠失する。残存長 4.0 cm、断面は三角形に近く、幅 4.0 mm、厚さ 5.0 mmを測る。

石製品　図版 56　写真図版 108

S6 は凝灰質砂岩製の砥石片である。砥面は平面図部分のみである。残存長 8.5 cm、残存幅 4.3 cm、残存厚 2.1 cmで、重量は 100 g を測る。

S7 も砥石片である。砥面は 1 面のみ確認でき、擦痕が多く残存している。残存長 5.8 cm、残存幅 1.6 cm、残存厚 1.5 cmで、重量は 13.4 g である。頁岩と思われる。

S8 は花崗岩製と思われる磨石であろう。全面が平滑になっているが、一部分のみ、2 cm × 1.5 cmの範囲が平坦になっている。長さ 5.6 cm、幅 4.3 cm、厚さ 4.0 cmで、重さは 130 g である。

SH2207　図版 18　写真図版 53

検出状況

調査区中央北東部に位置する方形の竪穴住居跡で、東側の大半は調査区外にひろがっている。本住居跡が存在する部分は地形的に高いため、水田構築時の削平が著しく、検出できたのは周壁溝に限られ、住居本体の埋土はすでに除去されていた。

形態・規模

平面矩形の住居跡であるが、規模は不明である。深さも不明で、周壁溝を挟んだ内外は同じ高さである。主軸方向は方位と合致し、現状での規模は南北 3.2 m以上、東西 2.4 m以上である。

屋内施設

屋内施設で確認できたのは周壁溝のみである。南西隅に存在する柱穴は位置的に本住居跡のものではなく、後述する柱列もしくは掘立柱建物跡の一部であろう。また、屋内高床部についても、検出面が床面かどうかすら確認できないため、不明といわざるを得ない。ただし、他の住居跡の例から、高床部をもつ住居跡である可能性は高いと思われる。

周壁溝

検出面での幅13㎝程度、深さ2㎝～5㎝の周壁溝を検出したが、周壁溝からも遺物は全く出土していない。

SH2208　図版19・20　写真図版52・53

検出状況

調査区北東端に近い位置に存在し、SH2205とSH2206の中間に位置する方形の竪穴住居跡で、西側半分は調査区外にひろがっている。本住居跡も現状保存が確定したため、柱穴掘り方は掘削していない。ただし、住居跡埋土は非常に薄かったため、すべて掘削した。

形態・規模

平面方形と思われる竪穴住居跡であるが、東西規模は2.4ｍ以上と正確な規模は確定できない。南北方向は約4.8ｍである。コーナー部はやや丸みがある。

本住居跡が立地するのは南西への傾斜面であると同時に、かなり削平を受けており、検出面から床面までは約6㎝ほどであった。また、周壁溝や屋内高床部も検出はできたが、削平により傾斜面となっていた。したがって、高床部が水平であったと仮定すると、床面から高床部までの高さは20㎝程度であったと推定される。ただし、現状では4㎝程度である。

埋土は褐色を呈するが、中央に近い部分では暗褐色の土層も土壙状に堆積していた。

住居跡内の床面が残存する範囲には甕・高杯・飯蛸壺などの土器が遺存していたが、土器下面と床面との高さの差が10㎝以下であるため、住居廃絶時に床面に残されたものと判断できよう。

柱　穴

本住居に伴うと考えられる柱穴は2箇所で検出したが、掘り方を一段掘り下げたのみである。掘り方間は2.2ｍで、どちらも高床隅部に接した位置である。

北側柱穴の掘り方には礫が2点詰められており、柱の根固め目的と思われる。

屋内施設

屋内施設では周壁溝と屋内高床部が認められた。

周壁溝

周壁溝は全周するようなかたちで検出した。幅約10㎝で、高床部からの深さは約1.5㎝を測るが、削平のため、当初の深さは不明である。

屋内高床部

前述のように、上部が削平を受けていたため、高床部の東側上面は西に低い傾斜面となっている。上面での幅は55㎝～74㎝で、調査範囲内では途切れ部分は存在しない。

埋土はほとんどなく、高床部上面が住居検出面にほぼ等しい。

出土土器　図版54　写真図版97・98

SH2208から出土した遺物には、甕・高杯・飯蛸壺といった土器がある。

157は甕の体部以上の破片で、「く」の字に外反する口縁部は端部がやや受け口状を呈する。口径は16.8㎝を測る。体部は丸く、外面のタタキはやや細めで、連続ラセン状を呈する。体部内面の調整は上部がヘラケズリのようである。

158・159は高杯で、同一個体の可能性が高い。158の杯部は複合口縁状を呈し、口径は21.5㎝、杯部の深さは6.3㎝を測る。外面の調整はヘラミガキのようである。159の裾部径は21.0㎝で、直径1.7㎝程度の円形透しを穿つが、方向は不明である。158・159が同一個体であれば、推定高は19㎝程度と思われる。

160は平底の底部である。底径は3.2㎝を測る。

161～167は口縁部下の1箇所に円形孔を穿つ飯蛸壺である。161は口径5.4㎝で器高10.2㎝、162は器高9.8㎝で口径5.5㎝であるが、最大径が7.4㎝と下部にある。163は平底の飯蛸壺で、底径3.7㎝、口径5.3㎝、器高10.3㎝を測る。内面下部は板ナデ状仕上げである。164の口径は4.6㎝で器高は9.3㎝、最大径は中央部にあり6.4㎝である。内面は板ナデ調整。165の器高は10.8㎝、口径は5.4㎝で最大径は中位にあり、7.0㎝を測る。166は口縁部の破片で口径4.0㎝、167は透し孔は残存していないが、口径5.2㎝の口縁部片で、外面にはタタキ痕が残る。

これら住居廃絶時と判断される土器は弥生時代後期末～古墳時代初頭と考えられ、住居跡もその時期と推定される。

SB2201　図版20　写真図版54

位置・検出状況

調査区中央部東端に位置する掘立柱建物跡であるが、調査区外にひろがるため、北側および北東側柱列は確定しておらず、規模は定かでない。地形では北東が高く南西が低い。

SB2201に伴う柱穴で検出したのは全部で7基である。

形態・規模

側柱の南北棟で、南北の桁行は3間以上で4.20ｍ以上、東西の梁行は2間で3.75ｍの規模である。西側の南北桁柱間は北から1.20ｍ、1.10ｍ、1.13ｍ、梁柱間は西から1.55ｍ、1.65ｍを測る。建物の棟方向はN 10° Wである。

柱穴個別の遺構名は東列の北側から時計回りにSP22136、SP22137、SP22138、SP22139、SP22140、SP22141、SP22142である。柱穴掘り方および柱痕はすべて円形で、柱痕径は12㎝～18㎝、掘り方径は20㎝～36㎝を測る。柱痕の深さは17㎝～44㎝、掘り方は深さ20㎝～58㎝である。

SP22141から土器片が出土している。

出土土器　図版60　写真図版107

322はSP22141から出土した弥生土器底部である。径4.4㎝の短く突出した平底である。

SB2202　図版21　写真図版55

位置・検出状況

調査区北部南東側に位置する側柱の掘立柱建物跡で、西方約3ｍに柱列、東側約1ｍに溝SD22247が存在するが、建物の主軸方向とは異なっているため、本建物跡に伴う可能性は少ないものと考えられる。比較的高所に位置するため、削平が激しい。

形態・規模

北西－南東方向を主軸とする２間×１間の側柱建物跡で、棟と思われる主軸の規模は約 3.6 m、梁と推定される方向の規模は約 3.2 mである。建物を構成する柱穴は６基であり、南東隅の柱穴遺構名が SP22251 で、そこから左回りの順に SP22252、SP22253、SP22254、SP22255、SP22256 である。

棟方向の柱間は 1.44 m～ 1.64 mで、棟方向はN 50.5° Wである。柱穴柱痕および掘り方はすべて平面円形で、柱痕径は 10 cm～ 15 cm、掘り方径は 18 cm～ 26 cmである。柱痕の深さは 4 cm～ 20 cmで残存状況は悪い。掘り方の深さも柱痕と同じであった。

柱穴等から遺物は出土していない。

SB2203　図版 22　写真図版 56

位置・検出状況

調査区北東部に位置する掘立柱建物跡で、西側は SH2208 と重複するが、本建物跡の方が新しいと判断できた。南西に向かって低くなる地形に立地しているうえ、大きく削平を受けており、建物東部は柱穴を検出することができず、北側についても現状の北端柱列が建物跡の北端にあたるかどうかは確定できない。

形態・規模

２間四方の総柱建物跡と考えられる。建物の南北規模は 4.5 m、東西規模は 4.85 mで、東西方向がやや長い。南北軸はN 4° Eである。南北方向の柱間は 1.94 m～ 2.06 mとばらつきが少ないが、東西方向は 2.1 m～ 2.34 mとばらつきが多く、南北方向よりも間隔が広い。柱痕および掘り方は平面円形で、柱痕径は 10 cm～ 15 cm、掘り方径は 15 cm～ 32 cmを測る。柱痕の深さは 9 cm～ 20 cmで、削平により遺存状況は悪い。掘り方については、遺構の保存が決まったため、掘削しなかった。

SB2203 に伴う柱穴のうち、検出できたのは７基である。柱穴の遺構名は南辺中央が SP22271 で、そこから北側へ逆時計回りに SP22272、SP22273、SP22274、SP22275、SP22276 と呼称した。南東隅の柱穴遺構名は付してない。

柱穴からは遺物は出土していない。

SB2204　図版 23　写真図版 56

位置・検出状況

調査区南東部の北寄りに位置する側柱掘立柱建物跡である。

形態・規模

東側のみ２間となっているが、この部分のみ２間であるのか、他の部分も２間であったが、柱穴が削平されてしまったのか不明である。ただし、東側中央の SP22073 の掘り方深が５cmと浅いことから、柱穴ではなかった可能性もある。

建物の規模は 2.76 mと 2.85 mであり、東西に近い方向が若干長い。規模が長い方向を東西として以下記述する。東西を軸とした建物の方向はN 56° Wで、東側の柱間は 1.08 mと 1.20 mである。

柱痕は確認できなかったが、掘り方は円形で、径 18 cm～ 26 cm、深さ５cm～ 24 cmを測る。残存状況は悪い。

SB2204 に伴う柱穴で検出できたのは４基ないし５基である。柱穴遺構名は南東隅から逆時計回りに

順にSP22068、SP22073、SP22074、SP22078と付したが、南西隅の柱穴は無名である。

建物跡に伴うと考えられる遺物は出土していない。

SB2205　図版23　写真図版56

位置・検出状況

調査区南部中央で、SH2202とSH2203の中間に位置する掘立柱建物跡である。

形態・規模

1間四方で、やや歪な形態である。建物の方向はSB2204と似ており、最も近い数値では北東側がN 55° W、南西側ではN 52° Wとなっている。SB2204と同様にこれらの方向を東西方向として記述する。

南北方向西側では2.6 m、東側では2.76 m、東西方向北側での規模は2.43 m、南側では2.55 mとなっており、東西方向よりも南北方向が長い。

柱穴の遺構名は南東隅がSP22036で、そこから時計回りにSP22037、SP22109、SP22110とした。柱痕はSP22037とSP22109で検出し、径12 cm・15 cmの円形で、深さは14 cm・27 cmである。掘り方もすべて平面円形で、径17 cm～24 cm、深さは27 cm～36 cmであった。

本建物跡に伴うと考えられる遺物は出土していない。

なお、本建物跡ではSK22044、SB2204ではSK22070がそれぞれ似たような位置に存在している。2棟が規模・方向ともに非常に似ていることから、建物跡と土壙との関連や、同じ構造や性格の建物として関連があるものと思われる。

SB2206　図版22　写真図版57

位置・検出状況

調査区中央北部の東寄りに位置する小規模な掘立柱建物跡である。SH2207の約6 m西側に存在する。

形態・規模

非常に小規模で、東西長軸方向で1.0 m、東西短軸方向ではわずかに0.65 mである。このような規模で建物跡と考えるのには躊躇するが、柱穴掘り方が径30 cm程度、深さも20 cm～25 cmと大きなものであるため、建物跡とした。ただし、小規模な小屋のようなものが想定される。

柱穴の遺構名は、南西隅がSP22205、そこから左回りにSP22206、SP22207、SP22208である。

なお、建物跡の短軸方向は、N 28° Wである。本建物跡に伴うと考えられる遺物は出土していない。

SB2207　図版18　写真図版56

位置・検出状況

調査区中央北部の東端に位置する柱列で、東側に展開する建物跡の可能性が高い。仮にSB2207と呼称しておきたい。

形態・規模

南からSP22211、SP22214、SP22218と柱穴を呼称している。SP22218はSH2207と重複するが、前後関係は不明である。この柱列の延長方向および西側では柱穴は検出していないことから、仮に建物跡とすれば、この柱列は西端にあたるものとすることができる。柱痕・掘り方平面は円形で、柱間は1.80 mと1.85 mを測り、柱痕も50 cm・57 cmの深さがある。

柱列の方向はN 44°Wである。なお、柱穴からは遺物は出土しなかった。

SX22014　図版24　写真図版57・58・60

位置・検出状況

調査区南部中央に位置する土壙状の遺構である。SH2202の南西方向約10.6 mの距離に存在し、試掘調査時の土器棺墓ST01の東側3 mの位置に存在する。

形態・規模

検出時には墓状の形態を示していたため、木棺墓等を想定して注意深く調査したが、調査後の形状は木棺墓らしくない。風倒木の可能性もあるが、明確でなく、土壙の性格は不明である。埋土は底および周囲と内部で堆積のしかたが異なり、第8層～第11層は地山の可能性が高い。

最も外側での上面規模は長軸1.7 m、短軸0.9 mで、内側落ち込みの長軸は1.1 m、短軸0.6 mを測る。深さは、検出面から最深部まで54 cm、内側落ち込みの深さは検出面から40 cmである。

検出面直下から飯蛸壺片、南西部埋土から壺片、北東部埋土から底部片が出土している。

出土土器　図版48　写真図版100

42は壺頸部片で、断面三角形の突帯を貼り付けている。この突帯外面には円形の列点文を斜め方向に連続して刺突しており、上端には刻み目も施している。この突帯の胎土は体部のものとは異なっている。すなわち、体部は10YR7/3.5にぶい黄橙色で細かな砂粒を多く含むのに対し、突帯は10YR8/2灰白色で細かな砂粒をあまり含まないきめ細かな胎土を使用している。なお、同一個体（64）がSH2202から出土している。

43は鉢に似た形の体部と思われる底部片で、径2.6 cmの突出した小さな平底である。

44は飯蛸壺の底部片である。体部径は6.5 cm程度で、平底に近い。

SX22266　図版24　写真図版60

位置・検出状況

調査区北東端近くに存在し、SH2206とSH2208の中間でSX22267と近接平行する位置関係にある。

形態・規模

長軸75 cm、短軸30 cmの平面長楕円形の土壙である。断面は「U」字形に近く、底も丸みがある。検出面からの最大深は17 cmを測る。形態・規模から土壙墓の可能性が考えられる。埋土は2層からなる。

遺物は出土していない。

SX22267　図版24　写真図版58・60

位置・検出状況

調査区北東端近くに位置し、SH2206とSH2208の中間にSX22266と平行して存在する。削平により遺存状況はあまりよくない。保存が決定したため、完掘はせず、埋土観察用の畔も除去しなかった。

形態・規模

平面長方形を呈し、棺の痕跡も検出できたことから、木棺墓と判断される。棺部分は西側がやや不定形であるが、幅約33 cm、長さ98 cmを測り、検出面からの深さは10 cm遺存していた。木棺墓としては、長さ1 m以下の小規模であるため、子供用の可能性がある。埋土は2層からなる。墓壙は長さ1.25 m、

幅56㎝で、深さは10㎝遺存していた。サブトレンチで観察した結果、埋土は1層で、掘削角度は緩めである。なお、SX22267は、先述のSX22266と近接し、平行関係にあることが注意される。

墓壙埋土南東部から土器細片が出土したが、図示できなかった。

SX22288　図版24　写真図版60

位置・検出状況

調査区北東端近くに位置し、SH2206とSH2208の間で、SX22267と近接して存在するが、主軸は異なる。SD22289と重複するが、本遺構のほうが古く、重複部分は破壊されている。また、削平により遺存状況は良くない。

形態・規模

平面長方形と思われるが、北端はSD22289に切られて焼失している。残存部分の長さは80㎝、幅は50㎝を測り、深さは約8㎝遺存していた。底は比較的平坦で、遺構の形状・規模から墓と思われ、棺の痕跡が検出されなかったことから、土壙墓の可能性が高い。埋土上面から底部が出土している。

出土土器　図版59　写真図版104

288は突出する平底であるが、中央が上げ底状になっている。底径6.5㎝、周囲はユビオサエである。

SX22304　図版24　写真図版59・60

位置・検出状況

調査区北東端に位置し、SH2206とは一部先行重複して存在し、SX22305とも一部重複するが、本遺構が新しい。現状保存のため、一部しか掘削しなかった。

形態・規模

形状・規模から木棺墓と考えられる。墓壙は検出面での長さ1.97m、幅78㎝以上で、深さは30㎝であり、法面は垂直に近い。

棺痕跡部分は長さ1.58m、深さ23㎝、幅は45㎝以上であるが、土層断面に棺側板痕跡のような土が認められ、それを棺とすれば、棺幅は推定50㎝となる。棺部分についてはほぼ全掘調査したが、墓壙はサブトレンチにより一部分を掘削したにすぎない。

図示できる遺物は出土していない。

SX22305　図版24　写真図版59・60

位置・検出状況

調査区北東端に位置し、SX22304とは一部重複するが、先後関係は確認できていない。一部のみ掘削した。北西部は調査区外にひろがっており、全容はうかがえない。

形態・規模

平面長方形に近く、本遺構も木棺墓の可能性が高い。墓壙長は1.85mまで検出できたが、2m程度と推定される。幅は85㎝である。検出面からの深さはサブトレンチで確認した結果、最深部で16㎝である。棺痕跡については、墓壙全体を検出面から13㎝掘り下げたが、平面的には確認できなかった。しかし、サブトレンチを掘削した結果、墓壙底に長側板の痕跡と思われる溝状窪みを検出し、埋土断面でも棺痕跡のような土層（第3層）を確認できた。したがって、棺長は不明であるものの、棺幅は50㎝

程度であることが推定できた。

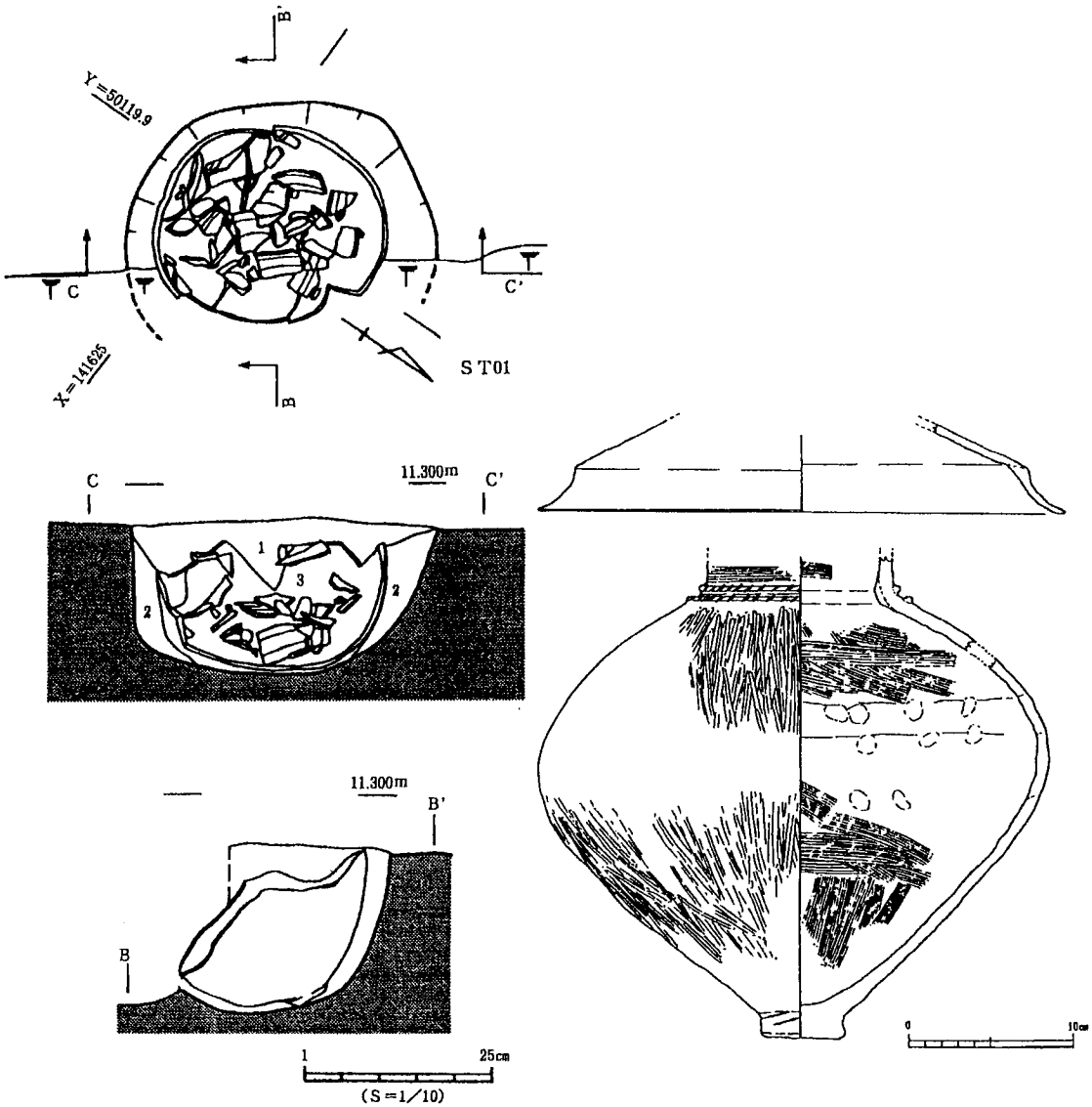
中央の畔を挟んだ西側の棺内と思われる部分の埋土で土器片が数点出土した。

出土土器　図版 59　写真図版 104

289 は甕または鉢と思われる平底底部である。底径 4.4 cmでほとんど突出しない。体部はタタキ成形。

土器棺（ST01）　第４図

調査区南部中央西寄りに位置する土器棺墓で、平成９年度の試掘調査時に Tr-6 中央で検出されたものである。その報告によると、「高坏の坏部を棺蓋に、口縁部を打ち欠いた壺を棺身にそれぞれ転用している。棺蓋は土圧によって壺内に落ち込んだ状態で出土した。復元図では、高坏の脚部を打ち欠いてそのまま壺に被せた状態を想起させるかもしれないが、実際高杯は約 1/4 程度しか出土しておらず、もともと破片の坏部を棺蓋にした可能性もある。埋め土（墓壙埋土－筆者註）は単一層から、埋まり土（棺内および上部埋土－筆者）は２層からなる。高坏と壺は共に弥生時代終末のものであるため、この時期に帰属すると考えられる。」とある。



第４図　土器棺 ST01 遺構および遺物実測図（第 18 次調査報告書より）

SX22188　図版 25・26　写真図版 60 ～ 62

位置・検出状況

調査区中央部中央付近に位置する南西－北東方向に長い土壙である。上面検出段階で完形品を含む多数の土器が列状に確認された。

形態・規模

検出面での長軸は 2.75 m、最大幅 1.05 m、最大深 67 cmを測る。横断面での形状は底が狭く「V」字形に近い。土器は平面的にはほぼ全面にわたり、立面的には主として上半部から出土している。埋土は黄褐色系の極細砂～粗砂であるが、南東側の確認調査グリッドの土層断面状況から、グリッド中央までの幅をもつ風倒木跡の可能性が高い。

出土土器　巻頭写真図版 15　図版 58・59　写真図版 102・103・105

SX22188 から出土した土器は図示できたものが 22 点と非常に多い。

260 は平底甕のほぼ完形品で、口径 12.8 cm、器高 26.6 cm、底径 5.4 cmを測る。体部はやや長く、最大径は中位にあり径 19.4 cmである。体部はタタキ成形で、内面調整はハケであるが、下半は縦方向、上半は横方向に近い。口縁部は外上方に直線的にのび、端部は現状では丸いが、磨滅によるもので、元来はほぼ垂直の面をもっていた可能性が高い。土器 8 ・12・15・16（出土時取り上げ番号－以下同じ）。

261 は球胴の甕で、完形品である。口径 13.1 cm、器高 19.3 cmで、胴部最大径は中位にあり、径 16.9 cmを測る。底部は突出せず、大まかにみると尖底の感がある。底径 3.3 cmで、底部周囲はユビオサエのようである。口縁部は外上方に外反するが、端部は外面のナデにより複合口縁状を呈し、丹波・丹後系の「ナデ甕」にもやや類似する。体部はタタキ成形の後、体部外面中位全体に縦ハケを加える。体部内面は横ハケ調整である。土器 22。

262 は大きく外反し端部に面をもつ口縁部を有する甕上半部片である。口縁端部は上下に若干拡張する。口径 13.8 cm。体部は長胴でほとんど肩が張らず、最大径は中位にあると思われ、径 19.2 cmを測る。体部はタタキ成形の後、外面には縦ハケを施し、内面下部は縦方向のヘラケズリ、中位は左上がりの斜め、上部は横方向のハケを施している。土器 17。

263・264 も 262 と似た口縁部形態を示すが、端部は拡張しない。263 の体部はやや丸く、体部最大径は 16.9 cmを測る。体部はタタキ成形後、外面に縦ハケを施し、タタキ痕を消している。内面はヘラケズリ調整である。口径は 15.5 cmを測る。土器 18。264 は口径 14.6 cmで、体部はタタキ成形後縦ハケを加える。内面はヘラケズリを施す。土器 17。

265 は小型甕で、口径 12.6 cm。口縁部は体部からゆるやかに外反し、外上方にのびる。端部は丸い。口径 12.6 cmを測る。体部は最大径が下位にあり、12.5 cmである。磨滅により調整不明。土器 10。

266 は壺体部で、突出気味の平底を有する。体部最大径は中位にあり、径 17.4 cm。体部外面はハケ、内面下部はハケであるが、上位はナデのようである。内面に粘土紐接合痕が目立つ。底径は 5.6 cm。土器群 8 ・土器 14。

267 は体部下半で、甕の可能性がある。突出する平底で、径 4.4 cm。体部は底部から外上方に直線的にのび、あまり開かない。体部はタタキ成形で、内面は刷毛調整である。土器 20。

268 は完形に近い壺であるが、口縁部を欠損する。体部は球形に近く、最大径 23.4 cmで、体部から筒状にのびた後外反する口縁部となる。底部は突出した平底で、径 5.3 cmである。体部調整は内外面とも刷毛であるが、粘土紐接合痕が目立つ。残存高は 25.9 cmである。土器 25・12・23・29。

269は底部を欠失する壺で、体部は扁平と思われ、最大径は20.6㎝を測る。口縁部は短い頸部から横外方に曲折し、短くのびるもので、端部には面をもち、端面に2条の凹線をめぐらす。口径11.3㎝で、内面はヘラミガキ調整である。体部の調整は外面がハケ後ヘラミガキを施すが、体部中位は横方向、上部は縦方向に施している。内面は縦ハケである。土器16・23・24・25。

270は広口壺口縁部で、口径は13.8㎝を測る。体部から外上方に外反しながらのびた後、さらに外反して短くのびる口縁部で、端部はほとんど拡張しない。内外面の調整はハケで、外面にヘラ描沈線を1条めぐらす。土器12。

271・272は直口壺口縁部で、どちらも端部は丸くおさめ、内外面の調整はハケである。271の口径は10.7㎝、土器17。272の口径は9.4㎝で、土器28。

273・274は壺と思われる平底の底部である。ともに体部は内湾気味に外上方にのびる。273は突出しない底部で、径は5.6㎝。土器15。274は底径6.7㎝で、突出気味である。内面はハケ調整、外面はヘラミガキのようである。土器16・8・12・32。

275～277は底部である。275は丸底に近い尖底で、土器群6。276は径2.6㎝の小さな平底である。277は有孔で丸底に近い尖底。外面にはタタキ痕が残る。土器9。

278は小型器台で、杯部径9.0㎝、器高10.0㎝、脚端径10.6㎝を測る。杯部は横外方にのび、端部上端を上方に少し引き伸ばすもので、脚部は内湾気味に下外方にのび、端部には丸みをもたせている。脚部中央には径0.9㎝の円形透孔を4方向に穿つ。磨滅のため調整は不明である。土器群2。

279は器台もしくは高杯であるが、脚柱部の大きさから、高杯杯上部が剥離したものの可能性が高い。ただし、小型器台として使用していた可能性は否めない。残存する擬口縁は径10.9㎝、残存高は9.5㎝を測る。脚柱部は中実で太い。脚部は脚柱部から曲折するようなかたちで、横下外方にのび、端部は下方に少し拡張する。脚端径は11.3㎝である。脚部には径約1.4㎝の円形透孔を4方向に穿つ。土器19。完形。

280は中実の脚柱部と思われ、径4.0㎝である。ただし、上端が欠損ではない可能性もあり、蓋のつまみかもしれない。土器群5。

281は器台または高杯の脚部で、有段のものである。脚柱部から曲折して横外方にのびた後、屈曲して外反しながら下横外方にのびる脚部で、端部は丸くおさめる。脚端径は20.1㎝を測る。脚上部に径1.3㎝の円形透孔を4方向に穿つ。外面調整はハケ後ヘラミガキである。土器群7。

SK22063　図版27　写真図版63

位置・検出状況

調査区中央南部付近に位置する円形の土壙である。

形態・規模

直径1.2ｍを測り、検出面からの深さは約35㎝遺存していた。底面はほぼ平坦で、直径約1ｍである。北西側の壁際で飯蛸壺・甕片が出土した。

出土土器　図版57　写真図版101・104

230は口径16.2㎝の甕口縁部で、口縁部は外反し、端部には垂直な面をもつが欠損部分が多い。土器4。

231・232は底部で、231の底径は4.3㎝、232は4.5㎝を測る。

233・234は飯蛸壺で、ともに完形品である。233は平底に近く底径3.2㎝、器高10.4㎝、口径5.0㎝で、体部最大径は6.3㎝を測る。紐通し孔は径約1.2㎝の円形である。土器2。234は端部のみ磨滅しているが、

口径 6.3 cm、器高 10.0 cmであろう。体部最大径は上位にあり、径 7.0 cmで、平底状を呈し、底径 4.2 cmを測る。紐通し孔は円形で径 1.2 cm、器壁は薄い。土器３。

SK22080　図版 27　写真図版 63・64

位置・検出状況

調査区中央部東端付近に位置する。

形態・規模

東西にやや長い楕円形で、長軸約 1.5 m、短軸 1.0 mを測る。断面形状は皿形で、法面傾斜も緩やかである。埋土は単一層であるが、堆積の中央部分で多くの土器片が出土した。いずれも小片である。

出土土器　図版 57　写真図版 101・104

235･236 は壺あるいは器台の口縁部で、外面に文様を有する。235 は櫛描波状文が２段分残存している。端部は垂直に近い面をもつ。236 も外面に櫛描波状文を施すが、磨滅により不鮮明である。端部は丸い。

237 は脚部で、径 16.8 cmを測る。高杯と思われるが、台付鉢や器台の可能性も残す。土器７。

238 は高杯脚柱部で、中実で径３cm弱の柱状部で、長い。土器 10。

239 は甕の下半部と思われ、体部はかなり丸い。底部は少し突出し、ドーナツ状を呈する。底径は 3.9 cmである。体部外面にはタタキ痕が残り、内面はハケ調整である。土器３。

240 は器壁の厚さから鉢の体部下半と思われる。突出気味の平底は径 3.8 cmを測り、体部は内湾しながら外上方にのびる。内外面とも磨滅により調整不明である。土器 11・13。

241・242 は底部である。241 はドーナツ状上げ底で、木葉痕と籾痕を残し、径 4.1 cmを測る。外面はタタキ、内面にはハケが残る。242 は突出しない平底で、径 3.2 cmである。壺の可能性がある。土器６。

SK22089　図版 28　写真図版 63

位置・検出状況

調査区中央部南西端付近に位置する円形の土壙であるが、水田段差直上に存在することから、水田構築により西端部が消失している。

形態・規模

南北は２mを測るが、東西は 2.2 mのみ残存している。長方形に近いと思われるが、深さは 18 cmと浅い。残存部分西端で焼土・炭が検出された。放射性炭素年代測定では 1010 ± 30B.P. の値となっている。

出土土器　図版 57　写真図版 104

243 は平底底部で、径 3.9 cmを測る。炭層より上位で出土している。

244 は平底の飯蛸壺片と思われ、底径 4.2 cmほどである。口縁部は残存していない。

SK22091　図版 33　写真図版 69

位置・検出状況

調査区中央部南寄りに位置する楕円形の土壙で、柱穴 P22125 と重複し P22125 が新しい。

形態・規模

南西－北東方向に長い楕円形で、長軸 2.25 m、短軸 1.3 mを測る。南西側が深く、検出面から 73 cmの深さである。北東側では深さ 20 cmである。埋土は３層に分かれ、土器片が出土しているが、層位は不明。

出土土器　図版 57　写真図版 101・104

245 は端部に面をもつ甕口縁部で、体部外面はタタキ、内面はハケである。口縁部は外反し、中央部が内側にやや肥厚する。口径 15.8 cmである。

246 は器台あるいは壺口縁部と思われる。複合口縁状を呈し、端部は丸い。口縁部外面に 2 条の櫛描波状文を施している。

247 ～ 249 は底部である。247 は壺底部の可能性が高く、底径 6.8 cmと大きい。外面はハケ調整。248 は甕底部と思われ、底径 5.5 cmで底面に木葉痕を残す。体部外面にはタタキ痕が残る。249 は突出する平底で、径 4.6 cm。壺底部の可能性がある。

250 は器台の脚部と思われ、脚柱部は中空である。脚端部へは下外方に直線的にのび、端部は丸くおさめる。脚端径は 9.7 cmである。

251 は台付鉢または高杯と思われ、短い脚柱部である。

SK22118　図版 28　写真図版 64

位置・検出状況

調査区中央部東寄りに位置し、南北方向に長い形状で、東側が上下 2 段になっている。

形態・規模

上面では長軸 2.2 m、短軸 1.55 mであるが、下段は幅 90 cmで長方形に近い。検出面から最深部までの深さは 48 cmを測る。埋土は 4 層に分けられるが、最下層に弥生土器片が含まれていた。

出土土器　図版 57　写真図版 104

252 は平底の鉢あるいは蛸壺と思われるが、飯蛸壺とするには径 8.3 cmとやや大きく、薄手である。

253 は外反し端部を丸くおさめる甕口縁部で、口径 14.3 cmを測る。口縁部内面中央の器壁がやや厚い。体部にはタタキ痕が残る。土器 9。

254 は注口部を持つ大型鉢の口縁部で、口径は 21.0 cmである。口縁部は上外方に直線的にのび、端部は丸くおさめる。体上部に肩部がくるようである。外面にはタタキ痕が残る。

255 は鉢と思われる。体部から緩やかに屈曲して、外上方に直線的にのびる口縁部となり、端部は丸くおさめる。口径 9.2 cmで、体部の張りはほとんど認められない。土器 4。

256 ～ 259 は底部である。256 はやや上げ底気味の平底で、底径 5.9 cmとやや大きい。体部外面はヘラミガキ調整のようであり、壺と思われる。257 は底径 4.7 cmを測る平底で、若干ドーナツ状を呈する。底面に葉脈のような圧痕が認められる。体部外面にはタタキ痕が多く残る。258 は丸い体部から突出する平底で、底径 4.8 cmである。底面には文様のようなものが認められる。体部外面にはタタキ痕が残る。土器 1。259 は尖底に近いドーナツ状の底部で、体部は丸いようである。土器 6。

SK22193　図版 29　写真図版 64

位置・検出状況

調査区中央北部に位置する浅い溜まり状遺構で、西端は水田段差により消失している。

形態・規模

南西－北東に主軸をもつ不整形な楕円形の溜まり状遺構である。残存部分での長軸は 2.4 m、短軸は 1.45 mを測り、検出面からの深さは 25 cmである。北部に偏って弥生土器等が出土している。

出土土器　図版 59　写真図版 103

282 は壺に分類されることが多い器形である。口縁部は、体部から曲折して直立した頸部から、大きく外反して横外方にのびる。端部は現状では丸くなっているが、本来は上方に少し引き伸ばす形態であろう。口径は 14.6 cmを測る。体部はタタキ成形である。全体に 5YR6/8 の橙色を呈している。土器１。

283 は飯蛸壺形の完形品である。紐通し孔は存在しない。口径 4.6 cm、器高 9.5 cmで丸底である。土器４。

284 は大型器台の中央部である。最も狭い所で直径 9.8 cmを測る。残存部分では直径約 1.1 cmで６方向の円形透孔を上下２段の同じ位置に穿っている。外面縦ハケ後縦方向のヘラミガキ、内面はヨコハケ調整である。土器１。

SK22009　図版 30　写真図版 65

位置・検出状況

調査区南東隅付近に位置する楕円形の土壙で、SK22012 とほぼ接して存在している。

形態・規模

南北に長軸方向をもつ楕円形の土壙で、長軸 90 cm、短軸 60 cmを測る。検出面からの深さは５cmと浅く底面は平坦である。上面に近い部分で弥生土器片が出土している。

出土土器　図版 48　写真図版 82

38 は体部から「く」字状に屈折する口縁部をもつもので、口縁端部は少し外反し、尖り気味である。口径は 14.8 cmを測る。

39 は有稜高杯杯部上半と思われる破片である。口径は 12.2 cmと小さい。

40 は平底で、ドーナツ状上げ底を呈する甕と思われる底部である。底径は 4.7 cmを測り、かすかに木葉痕が残る。体部外面にはタタキの痕跡が残り、内面は板ナデ調整のようである。

なお、ナイフ形石器 S25 が出土している。

SK22012　図版 30

位置・検出状況

調査区南東隅付近に位置する円形の土壙で、SK22009 とほぼ接してその斜面上部に存在している。

形態・規模

長軸 75 cm、短軸 60 cmの平面楕円形で、検出面からの深さは７cmと浅い。弥生土器小片が出土している。

出土土器　図版 48　写真図版 82

41 は複合口縁壺あるいは器台と思われる口縁部細片である。外反する口縁部で端部は上方に引きのばしたようになっている。外面には鋸歯文に近い波状文が櫛描きで施されている。細片のため口径は不明。

SK22249　図版 35　写真図版 72

位置・検出状況

調査区北部の南寄り西端に位置する不定形の土壙で、長軸は東西方向である。

形態・規模

長軸の規模は 2.1 m、短軸は 1.1 mを測る。深さは 65 cmで、埋土は６層に分けられる。埋土の状況から、北方向に倒れた風倒木の痕跡と思われる。第２層から弥生時代末～古墳時代初頭の土器が出土した。

出土土器　図版 48　写真図版 105

45 は甕の肩部以上の破片で、口径は 18.1 cmを測る。やや厚手で器表の凹凸が多く、口縁端部は下側に小さく丸く肥厚させるが、歪である。口縁部は外反気味で、体部から屈折し、体部と口縁部境の内面には鋭い稜が認められる。

46 も体部から屈折して内面に稜を有する甕口縁部である。口縁部は外反しながらのび、端部でさらに外反している。口径は 15.2 cmで、口縁端部は尖り気味である。

47 は薄手の甕口縁部で、体部から「く」字状に屈折して外反しながら外上方にのびる。端部は側方からナデることにより、はねあげ状を呈し、端部はやや尖る。庄内式土器の形態に似る。口径は 13.5 cm。

48 は球形の甕体部で、体部最大径は中位にあり、径 15.6 cmを測る。やや厚手で外面にはタタキ目が残る。タタキの方向は下部とそれ以外で異なっている。

49 はほとんど尖底であるが、小さく径 1.9 cmの平底となる。壺体部の可能性が高く、内面はハケ調整、外面にはタタキ目がかすかに残るが、消されているようである。

SK22265　図版 36　写真図版 72

位置・検出状況

調査区北部の中央付近に位置する風倒木跡である。風倒木が倒れた方向の南側半分のみ掘削した。

形態・規模

断面土層の状況から、北東側に倒れたことがわかる。第 1 層から弥生土器等が出土している。風倒木の根株は直径 1.3 m程度である。検出面からの深さは約 90 cmで、検出面では中央部が盛り上がっていた。

出土土器　図版 59　写真図版 103・104

285 は平底の飯蛸壺で、厚手のつくりである。紐通し孔の直径は約 1.2 cmを測る。器高 8.1 cm、口径 4.9 cm、底径 5.3 cm、胴部最大径 6.4 cmの完形品である。

286 は突出した平底の甕下半部で、底径 5.1 cmを測る。底面は木葉底で、体部はタタキ成形である。

SD22311　図版 29　写真図版 73

位置・検出状況

調査区北部中央東側に位置する東西方向の細い溝で、両端は調査区外にのびている。西端は途中で途切れるようであり、西側の調査区では検出されていない。

形態・規模

溝幅は 20 cm～ 40 cm、深さ 13 cm～ 20 cmであるが、西側が幅広く深い。調査区内で長さ 7.8 mにわたって検出したが、深さの高低差は 36 cmあり、東側が高いことから、溝は西流していたことがわかる。埋土は 2 層で上層から土器が出土した。

出土土器　図版 59　写真図版 106

293 は飯蛸壺である。口径 5.5 cm、器高 9.3 cmで、体部最大径は上位にあり、8.0 cmを測る。底部は平底に近く、径 4.6 cmである。

294・295 は底部である。294 は突出した平底で、底径 5.1 cmを測る。壺と思われる。295 は尖底・有孔のもので、外面はタタキ痕を残す。

SD22289　図版 41　写真図版 47・73

位置・検出状況

調査区北東隅付近に位置する東西方向に近い溝であるが。東部は自然消滅するかたちで途切れ、西端は調査区外にのびるがあまり長くはならないようである。SH2206 に水が入り込まないようにするための排水溝である可能性がある。保存が決定したため、一部のみ掘削した。

形態・規模

検出できた延長は 4.5 m である。幅は中央部が最も広く 85 cmを測る。中央部での検出面からの深さは 20 cmである。埋土は 4 層に分かれるが、ほぼ全体から土器片が出土した。

出土土器　図版 59　写真図版 106

298 は管状土錘の半欠である。全長 6.4 cm、直径 4.3 cm、口径 1.7 cmを測る。

第 3 節　古墳時代の遺構とその遺物

古墳時代の遺構としてほぼ確定できたものは、調査区中央部の東西に近い溝とそれに一部重複するかたちで存在する土壙 1 基に限られる。

SK22189　図版 35　写真図版 70

位置・検出状況

調査区中央部のほぼ中央に位置する楕円形の土壙で、SD22130 と一部重複するが、本遺構が新しいようである。また、SD22171 と重複し、本遺構が古い。

形態・規模

長軸は南西－北東方向に近く 1 m、短軸は 45 cmを測る。ほぼ垂直に掘り込まれており、検出面からの深さは 38 cm、また、北側には一段深い部分があり、約 15 cmの深さである。須恵器高杯が出土している。

出土土器　図版 59　写真図版 104

287 は短脚高杯の脚部である。脚端部は上方に拡張し、脚端径 11.0 cmを測る。三角形に近い長方形の透かしを 4 方向に穿つ。KM-1 型式併行期の可能性が高い。

SD22130　図版 39　写真図版 75

位置・検出状況

調査区中央部のほぼ中央に位置する溝で、傾斜面の方向すなわち東西方向に近い。西端は最下段の水田段差部分で削平のため消失し、東は調査区外にのびている。

形態・規模

検出できた総延長は約 21.8 m、最大幅 1.35 m、検出面からの最大深は西部で約 50 cmを測る。約 5 %の傾斜で、高低差は 1.06 m もある。東端付近では畦畔になっていたため埋土残存状況は良好であった。

出土土器　図版 60　写真図版 106

309 は須恵器の椀口縁部と思われ、口径 11.0 cmを測る。端部は丸く仕上げ、口縁下に 2 条の突帯をめぐらす。TK-23 型式期の所産と思われる。

310 は台付鉢と思われるが、確証はない。脚部は内湾気味に「ハ」字形に開く。

311～314は底部である。311は突出した平底で、少しドーナツ状を呈する。底径は5.1㎝を測る。312は、突出するが扁平なドーナツ状の平底で、底径4.6㎝を測る。体部外面にはタタキ痕が残る。313は飯蛸壺の底部である。径3.3㎝程度の平底で、厚手のつくりである。314は有孔の平底で、突出する底部の径は3.5㎝を測る。

第4節　中世の遺構とその遺物

検出できた遺構の多くは中世のものと思われるが、出土土器などから中世と判断できたものには既述の掘立柱建物跡のほか、土壙・柱穴・溝などがある。

SK22222　図版35　写真図版71

位置・検出状況

調査区中央北部の東寄りに位置する長い土壙で、SB2206の南約1.5ｍに存在している。

形態・規模

平面長方形に近く、長軸は南西－北東方向で、長さ173㎝、幅60㎝、検出面からの深さ32㎝を測る。形状･規模および埋土から小皿が出土していることから､墓の可能性が高いと思われるが､断定できない。

出土土器　図版59　写真図版104

290は土師器小皿で、口径7.6㎝、器高1.3㎝を測る。器表磨滅が著しい。

SX22235　図版36　写真図版72

位置・検出状況

調査区中央西北部に位置する不明遺構である。溜池遺構の可能性もあるが、西側が水田段差部分で消失しているため判断できない。

形態・規模

平面三角に近い形状で、南西－北東方向の規模が4.5ｍ、北西－南東方向では4.2ｍを測る。底はほぼ平坦で、検出面からの深さは60㎝、埋土は水平堆積である。近世以降の円形井戸が北東寄りに存在する。

出土土器　図版59　写真図版107

291・292はこね鉢である。291は口縁部で、端部を上下に拡張するが、特に上方に大きく引き伸ばし端部を内傾させる。口径33.4㎝を測る。292は底部で､輪高台を貼り付けている。高台径は12.2㎝である。底部内面は平滑になっており、使用によるものと思われる。

SD22197　図版38　写真図版2・3・10・14・74・76

位置・検出状況

調査区中央部から北端にかけて調査区西壁にほぼ沿う形で存在する溝であり､北端は弱く屈曲するが､その他は直線的で、調査区北端からさらに北にのびている。検出できた部分の総長は約90ｍである。

形態・規模

断面「U」字形を呈し、最大幅1.35ｍ、最大深50㎝を測る。調査区中央部付近から北西端では底の

比高差は約 20 cmで、調査区中央部が高い。他の溝 SD22032・SD22033 などとは違って北流する。

出土土器　図版 60　写真図版 106

299 は須恵器杯身である。口径 11.3 cmで、底部を欠失する。小片のため径はやや不正確と思われる。たちあがり部はやや内傾し長い。端部は面をもつ。TK-23 ないし TK-47 型式期と思われる。

300 は弥生甕口縁部で、口径 15.7 cmを測る。口縁部は外反し、端部は上下に少し拡張し、垂直な面をもつ。端面には３条の凹線文をめぐらす。弥生後期前半の所産と思われる。

301 は管状土錘の完形品である。全長 6.1 cm、直径 4.3 cm、孔径 1.5 cmで、重量は 119.0 g を測る。

302・303 は高杯脚柱部で、どちらも中空のものである。

304 ～ 308 は底部である。304・305 は平底で、ともに甕と思われる。304 は底径 5.6 cmとやや大型で、体部外面はタタキ成形である。305 の底径は 4.0 cmを測り、体部はタタキ成形で、底面にもタタキ痕を残す。306 は鉢の脚台部と思われ、脚端径は 6.2 cmである。307・308 は有孔で尖底に近い形態を示す。307 はタタキ成形で、内面は丁寧なナデを施す。308 の外面は板ナデ調整のようである。体部径は小さくなるものと思われる。

SD22033　図版 38　写真図版２・３・６・７・10・74

位置・検出状況

先述の SD22197 とほぼ平行ないし一部重複しながら、調査区南端から北部までの水田段差直下に存在する溝で、SD22197 より新しいと考えられる。溝の北端は調査区内で自然消滅している。

形態・規模

検出できた部分の総延長は 111.3 mで、最大幅 1.3 m、最大深 30 cmを測る。底の比高差は 10 cm程度と僅かであるが、北西側が高い。断面は「U」字形を呈する。

出土土器　図版 60　写真図版 106

316 は備前焼Ⅳ期の擂鉢である。口縁部は上方に大きく拡張し、口径 27.8 cmを測る。擂目はわずかに２条残存し、6.5 cm以上の間隔がある。口縁部外面は 2.5YR3/1 暗赤灰色、体部外面は 2.5YR4/2 灰赤色を呈する。15 世紀代。

317 は平底の飯蛸壺で、底径 3.2 cmを測る。

318 は上げ底の平底で、底径 4.4 cmを測る。

319 は一端を欠失する管状土錘で、残存長 6.0 cm、直径 4.2 cm、孔径 1.4 cm程度である。

320 は白磁碗底部で、削り出しの高台径は 6.5 cmを測る。残存部外面は露胎であり、高台部の形態からも横田・森田分類の白磁碗Ⅳ類にあたる。

321 は青磁碗底部で、高台径は 6.0 cmである。残存部分の内外面全体に施釉されており、横田・森田分類の龍泉窯系青磁碗Ⅰ類にあたると思われる。13 世紀前半頃。

SD22034　図版 38　写真図版７・74

位置・検出状況

調査区南西端の最下段に位置し、調査区外に続いている溝である。

形態・規模

延長 6.8 m、幅 80 cm、深さ約 30 cmを測る。法面は急傾斜であるが、底面はゆるやかな「U」字形である。

SD22032　図版38　写真図版2・6・7・74

位置・検出状況

SD22033と平行方向で、重複しながら調査区中央部北端近くまでのびる溝で、水田段差部分に位置する。SD22033よりも新しい。

形態・規模

総延長約60 m、幅50 cm、深さ15 cmで、断面「U」字形を呈する。底の高さは北西側が10 cm程度低いため、北流していたものと思われる。

SD22064　図版38　写真図版2・6・11・75

位置・検出状況および形態・規模

調査区中央部に位置する溝で、長さ約55 mの部分を囲むように「コ」字形に存在すると思われる。南端および中央部では溝底に細かな凹凸がみられ、足跡と思われる。溝で囲まれた部分に掘立柱建物跡は検出されなかった。南東側では南西方向に曲折した部分の長さは6.5 mを測る。溝幅は広いところで約1 m、狭いところでは40 cm程度である。深さは浅く、10 cm程度である。

出土土器　図版59　写真図版106

296・297はともに平底の底部である。296は底径3.6 cmで、体部にはタタキ痕が残る。297は突出気味で、径4.9 cmを測る。内面にはハケが残存している。

SD22234

位置・検出状況および形態・規模

調査区中央北部に位置する。検出時には溝と認識していたが、掘削後に不明瞭となり、遺構図を作成しなかった。

出土土器　図版60　写真図版106

315は須恵器椀の口縁部片で、端部は丸く仕上げている。

SP22085

位置・検出状況および形態・規模

調査区中央部南端付近に存在し、SK22089の東側に位置する。直径26 cm、深さ6 cmで、柱痕は不明。

出土土器　図版60　写真図版107

323はほとんど突出しない平底の底部で、径4.2 cmを測る。内面はナデ調整である。

SP22087　写真図版78

位置・検出状況および形態・規模

調査区中央部中段に位置する径60 cmの柱穴としてはやや大きめの遺構である。深さは27 cmであるが、柱痕は確認できなかった。

SP22125　図版 33　写真図版 78

位置・検出状況および形態・規模

調査区中央南部で SK22091 内に重複して存在し、SK22091 より新しい。直径 60 cm、深さ 20 cmの規模であるが、柱痕は確認できなかった。

出土土器　図版 60　写真図版 107

325・326 はともに中実の高杯脚柱部である。325 は転地逆の可能性もある。

SP22194

位置・検出状況および形態・規模

調査区中央部北寄りの中段に単独で存在する。直径 50 cm、柱痕は径 25 cm程度、深さは約 30 cmを測る。

出土土器　図版 60　写真図版 107

324 はやや突出した平底の弥生土器で、底径 5.3 cmを測る。外面はナデ調整、内面は板ナデであろう。

SP22215　写真図版 77

位置・検出状況および形態・規模

調査区中央北部東端に存在し、SH2207 のすぐ南側に位置する。直径 33 cm、深さは 84 cmを測る。

SP22315

位置・検出状況および形態・規模

調査区北部南西隅付近の最下段に単独で存在する。直径 20 cm、深さ 53 cmであるが、柱痕は確認できなかった。

出土土器　図版 60　写真図版 107

327 は突出しない小さな平底の底部で、体部外面はタタキ成形。底径 3.2 cmで、木葉底である。

SP22106　図版 30　写真図版 77

位置・検出状況

調査中央南東部に位置する SH2203 の中央炉と重複して存在する柱穴で、周辺の柱穴とあわせて建物跡になる可能性がある。

形態・規模

直径 25 cm前後の掘り方をもち、柱痕は径 20 cm程度である。検出面からの深さは 15 cmを測る。柱抜き取り後の柱痕内には、下側に須恵器椀を転地逆に、上側には土師器椀または杯を正立状態で底部が合うように入れていた。

出土土器　図版 60　写真図版 103・107

329 は須恵器椀で、口径 15.6 cm、器高 4.6 cm、底径 7.0 cmを測る。底部は無高台で、回転糸切り痕が明瞭に残る。口径に比して器高が低い形態で、時期的に降るものと思われる。13 世紀前半頃であろうか。

330 は有孔の弥生土器底部で、突出しない平底である。底径は 4.6 cmを測る。SP22106 上部出土。

331 は土師器の椀または杯底部で、底面は回転糸切りである。SP22106 上部出土である。

SP22156　写真図版 79

位置・検出状況および形態・規模

調査区中央部東端に位置する。掘り方の直径は 28 cm、柱痕は直径 15 cm弱で、検出面からの深さは 25 cmを測る。

出土土器　図版 60　写真図版 107

328 は青磁碗で、蓮弁文には鎬は認められない。横田・森田分類の龍泉窯系青磁碗 I 類と思われる。

第 5 節　時期不明の遺構

数多く検出した遺構のうち、遺物が出土しなかったため所属時期が判断できないものおよび近世以降のものを時期不明の遺構として扱う。また、土壙・溝について記述する。

SK22001　図版 30　写真図版 65

調査区南東部に存在する土壙で、SH2201 の北側約 1.5 mに位置する。位置関係から SH2201 に関係する移行の可能性も残す。北西－南東方向に長い楕円形で、長軸 1.2 m、短軸 0.9 mを測る。検出面からの深さは 25 cmで、埋土は 4 層に分層できた。図示できる遺物は出土していない。

SK22013　図版 30　写真図版 65

調査区南東部に存在し、SH2201 の南西側に約 1 mの距離をおいて位置する。本土壙も位置関係から SH2201 関係の可能性がある。ほぼ東西方向に長い三角形状を呈し、長軸 1.3 m、東端での短軸は 60 cmを測る。埋土は単一層で、断面「U」字形を呈する。検出面からの深さは 22 cmである。

SK22015　図版 30　写真図版 65

調査区南東部で、SH2201 の西側約 2.5 mに位置する。位置関係から SH2201 に関係するものかも知れない。平面円形に近く、長径 80 cm、短径 70 cm、検出面からの深さは 17 cmである。

SK22017　図版 30　写真図版 65

調査区南部中央付近の中段に位置する。SH2202 とは約 4.5 mの距離にある。南西－北東方向主軸の隅丸長方形を呈する。長軸 1.5 m、短軸は約 70 cmで、検出面からの深さは 25 cmで、断面「U」字形である。

SK22018　図版 30　写真図版 66

調査区南部中央に位置し、SH2204 と接するかたちで存在する。試掘トレンチにより北西部が消失している。溝状遺構になるかもしれないが、残存長 1.6 m、幅 63 cmで、深さは 6 cmと浅い。

SK22019　図版 30　写真図版 66

調査区南部中央で SK22018 のすぐ西側に位置する。南西－北東方向に主軸をもつ不整楕円形を呈する。長さ 1.6 m、最大幅 97 cmで、深さは 20 cmである。埋土は単一層。

SK22043　図版 31　写真図版 66

調査区南部中央北端に位置し、SH2204 の北側に約 50 cmの距離で存在する。平面は不整隅丸長三角形に近く、南西－北東方向に主軸をもつ。長軸長は 2.0 m、南西端の幅は 95 cmを測る。埋土は 3 層に分けられ、検出面からの深さは 28 cmである。

SK22044　図版 31　写真図版 66

調査区南部中央北端に位置し、SB2205 と重複して存在するが、時期的関係は不明である。円形に近いが、長径 86 cm、短径 75 cmである。深さは 16 cmを測る。

SK22046　図版 31　写真図版 66

調査区南部中央北東端に位置する。直径50cm前後の平面円形を呈し、深さは10cmで断面は皿形である。

SK22047　図版 31　写真図版 66

調査区南東部北西端に SK22048 とともに存在する。南西－北東方向に長軸をもつ楕円形を呈し、長径 90 cm、短径 55 cmを測る。断面は底が平坦な「V」字形を呈し、深さは約 20 cmで、埋土は単一層である。

SK22048　図版 31　写真図版 66

調査区南東部北西端に SK22047 と 50 cm程度の間隔で存在する。南西－北東方向に長い楕円形で、長径 66 cm、短径 40 cmと小規模である。深さも 11 cmと浅い。

SK22049　図版 31　写真図版 66

調査区南部中央北端付近に位置し、SK22050 と 50 cm程度の間隔で並んで存在する。楕円形に近い平面形で、長径 1.4 m、短径約 1 mの規模である。断面は「U」字形を呈し、深さは 63 cmである。埋土は大きく 3 層に分けられ、最下層からは土器小片が出土した。

SK22050　図版 31　写真図版 67

調査区南部中央北端付近に位置し、SK22049 と 50 cm程度の間隔で並んで存在する。幅 30 cm程度の細長い溝状を呈するが、深さは 50 cm近くもある。長さは 1.35 mである。埋土は 2 層に分かれていた。

SK22051　図版 31　写真図版 67

調査区南西隅部に位置する。北西－南東方向に長い楕円形で、長径 83 cm、短径 53 cmを測る。横断面は「U」字形で、検出面からの深さは 20 cmである。埋土は単一層。

SK22052　図版 31　写真図版 67

調査区南西部西端で SK22053 と並んで存在する、平面不整円形の土壙である。直径 75 cm程度と思われるが、南西部が削平されているため、やや小さくなっている。底はほぼ平らで、深さは 30 cmを測る。

SK22053　図版 31　写真図版 67

調査区南西部西端で SK22052 と並んで存在する長円形の土壙である。長径 87 cm、短径 68 cm、検出面からの深さは 20 cmを測る。

SK22054　図版 32　写真図版 67

調査区東端中央部北寄りに位置する、やや規模の大きな長方形に近い平面形の土壙である。主軸方向は南西－北東方向で、長さ 1.8 m、幅 1.1 mを測る。検出面からの深さは 30 cm程度で、底は丸い。

SK22055　図版 32　写真図版 67

調査区東端中央部に位置し、長径 90 cm、短径 70 cmの不整長円形を呈する。底はほぼ平坦で、検出面からの深さは 23 cmを測る。埋土は 3 層に分けられる。

SK22058　図版 32　写真図版 67

調査区南東部壁ぎわに位置する溝状に長い土壙で、SH2201 と重複し本土壙が古い。長さ 2.3 m、幅約 60 cm、深さ 12 cm残存していた。主軸方向は南西－北東方向である。底は平らに近く、埋土は単一層であった。

SK22065　図版 32　写真図版 67

調査区南東部壁ぎわに位置する楕円形の土壙である。長径 1.33 m、短径 96 cmとやや規模が大きいが、検出面からの深さは 20 cm程度である。埋土は 3 層に分けることができた。

SK22067　図版 32　写真図版 68

調査区中央南西部の中段西端に位置する。平面は楕円形に近く、長径 90 cm、短径 58 cmを測る。SP22086 と重複し、柱穴のほうが新しい。検出面からの深さは 13 cmとやや浅いが、埋土は 2 層に分けられ、上層には炭化物片を多く含んでいた。放射性炭素年代測定（ＡＭＳ）では、1080 ± 40 ＢＰという値が出ており、そのまま信用すれば平安時代後期になる。

SK22069　図版 32　写真図版 68

調査区南東部壁ぎわに位置する円形の土壙である。長径 80 cm、短径 70 cmで、深さは 6 cmと浅い。底部はほぼ平坦である。

SK22070　図版 32　写真図版 68

調査区南東部北寄りに位置し、SB2204 の柱列と重複して存在するが、時期的関係は不明である。

平面は不整楕円形を呈し、長径 1.1 m、短径 88 cmを測る。底は比較的平坦で、検出面からの深さは 9 cmと浅い。

SK22072　図版 32　写真図版 68

調査区中央南東部に位置する不整円形の土壙である。長径 86 cm、短径 78 cm、検出面からの深さは

21 cmを測る。底は丸く、埋土は２層に分かれていた。

SK22079　図版 33　写真図版 68

調査区中央部南東端に位置する、平面菱形に近い形状の土壙である。長軸 2.2 m、短軸 1.26 mを測り、検出面からの深さは 22 cmである。底は平らに近く、埋土は３層に分かれる。

SK22081　図版 33　写真図版 68

調査区南部中央東寄りに位置し、SH2202 の南側約 1.5 mの距離にある。確認調査により南西側の一部が削平を受けているが、全体の形状は確認できた。南西－北東方向に長軸をもつ長楕円形の土壙で、長軸 2.06 m、短軸は１mを測る。検出面からの深さは 28 cmで、底はほぼ平らである。

SK22082　図版 33　写真図版 68

調査区南部中央南寄りに位置し、SH2202 の南西側で約 1.5 mの距離がある。小規模な不整円形で、径 60 cmである。断面は「U」字形に近く、検出面からの深さは 33 cmを測る。埋土は２層に分けられる。

SK22090　図版 33　写真図版 68

調査区中央部南西寄りに位置し、段差部分に存在することから、西部は削平により消失している。平面長方形を呈し、長軸は南西－北東方向である。長軸の規模は２m以上、短軸は 1.3 m程度である。横断面は「V」字形に近く、検出面からの深さは 80 cmを測る。埋土は３層に分けられたが、遺物は出土しなかった。

SK22093　図版 34　写真図版 69

調査区中央部南東寄りに位置し、SK22094 および SK22095 が列状に存在する。ほぼ東西方向主軸の長楕円形で、長軸２m、短軸 50 cm程度の規模である。横断面は「U」字形に近く、検出面からの深さは 15 cm程度である。

SK22094　図版 34　写真図版 69

調査区中央部南東寄りに位置し、SK22093 および SK22095 が列状に存在する。平面楕円形で、中央に柱穴状の円形堀込みがある土壙である。長径は約 90 cm、短径は約 50 cmを測る。検出面からの深さは約 10 cmである。

SK22095　図版 34　写真図版 69

調査区中央部南東寄りに位置し、SK22093 および SK22094 が列状に存在する。溝状に細長く、長さ 84 cm、幅 20 cm程度で、軸方向はほぼ東西である。断面「U」字形を呈し、深さは９cmを測る。

SK22107　図版 34　写真図版 69

調査区中央部東寄りの調査区壁下に位置し、北部は調査区外に広がる。SK22108 と近接して存在する長さ 2.2 m、幅 65 cmと溝状に長く、横断面は「U」字形を呈する。深さは 20 cmである。

SK22108　図版 34　写真図版 69

調査区中央部東寄りに SK22107 と近接して存在する長楕円形の土壙で、長さ 96 cm、幅 35 cm程度である。横断面は箱型を呈し、検出面からの深さは 16 cmを測る。

SK22111　図版 34　写真図版 69

調査区中央部南寄りに位置し、水田段差上に SK22113 と近接して存在する。平面は円形に近く、長径 60 cm、短径 53 cmを測る。底は平らに近く、検出面からの深さは 14 cmである。埋土は 2 層に分けられた。

SK22113　図版 34　写真図版 69

調査区中央部南寄りに位置し、水田段差上に SK22111 と近接して存在する。SP22114 と重複している。長軸は 1.13 m、短軸は 60 cm以上で、南西側は水田構築時の段差により削平されている。底はほぼ平らで、検出面からの深さは 10 cmである。埋土は 3 層に分けられた。

SK22120　図版 34　写真図版 70

調査区中央部東寄りに位置し、SB2201 の西側に存在する。小規模な円形の土壙で、長径 67 cm、短径 56 cmを測る。断面は「U」字形に近く、埋土は 3 層に分けられる。検出面からの深さは 26 cmである。

SK22122　図版 34　写真図版 70

調査区中央部のほぼ中央に位置し、SK22154 の東側に存在する。小規模な長楕円形の土壙で、長軸は 83 cm、短軸は 30 cmを測る。断面は「U」字形に近く、検出面からの深さは 6 cm程度である。

SK22126　図版 34　写真図版 70

調査区中央部のほぼ中央に位置し、近接して SK22154 が存在する。平面楕円形に近い形状で、長径 1.4 m、短径 1.03 mである。断面は皿形に近く、検出面からの深さ約 10 cmである。

SK22154　写真図版 70

調査区中央部のほぼ中央に位置するほぼ円形の土壙で、近接して SK22126 が存在する。長径 1.8 m、短径 1.55 mを測り、検出面からの深さは 93 cmである。

SK22184　図版 34　写真図版 70

調査区中央西部最下段に位置する楕円形の土壙である。長径 1.3 m、短径 70 cmで、検出面からの深さは 35 cmを測る。埋土は 2 層に分けられ、横断面は箱形に近い形状である。

SK22192　図版 35　写真図版 70

調査区中央北西部に位置するが、確認調査グリッドと重複し、多くの部分が消失している。不整楕円の平面形と思われ、長径 1.4 m、短径 72 cm、検出面からの深さは 10 cmを測る。底部はほぼ平坦である。

SK22195　図版35　写真図版70

調査区中央東部に位置し、SH2203の南隅外側に位置する楕円形の土壙である。長径65㎝、短径33㎝と小規模で、検出面からの深さも6㎝と浅い。断面は皿形を呈し、埋土は単一層である。

SK22223　図版35　写真図版71

調査区中央北東部に位置する楕円形の土壙で、SB2206の北東側に存在する。長径1.05ｍ、短径80㎝を測り、断面「U」字形で、検出面からの深さは35㎝を測る。埋土は3層に分けられた。

SK22228　写真図版71

SK22229とともに調査区中央部の水田段差上に位置する土壙で、溝SD22032と重複するが、溝より上層で検出し、新しい。

SK22229　写真図版71

SK22228とともに調査区中央部の水田段差上に位置する土壙で、溝SD22032と重複するが、溝より上層で検出し、新しい。元の形状は不明であるが、北西－南東軸での規模は1.8ｍを測る。底はほぼ平坦であるが、10㎝程度の深さしか残っていなかった。

SK22230　図版35　写真図版71

調査区中央西部で、SK22231とともに水田段差上に位置する。平面楕円形を呈し、長径90㎝、短径60㎝弱の規模である。断面は皿形に近く、検出面からの深さは15㎝程度である。埋土は2層に分けられ、上層には土器小片を含んでいた。

SK22231　図版35　写真図版71

調査区中央西部で、SK22230とともに水田段差上に位置する、楕円形の土壙である。長径74㎝、短径59㎝を測り、断面は皿形に近い。検出面からの深さは13㎝で、埋土は2層に分割され、上層に土器片を含んでいた。

SK22232　図版36　写真図版71

調査区中央西端に位置する土壙で、西側は調査区外にひろがる。残存部分は平面長方形を呈し、北西－南東方向の規模は約3ｍ、南西－北東方向では1.4ｍ以上の規模である。断面形は逆台形に近く、底部は平坦であり、検出面からの深さは53㎝を測る。埋土下部は数多くの層に分けられるが、滞水していたような質であることから、ため池状の遺構である可能性が考えられる。

SK22233　図版35　写真図版71

調査区中央北西部に位置する「L」字形の土壙で、横断面は「U」字形を呈する。検出面からの深さは30㎝を測る。東西方向での平面規模は1.65ｍで、幅は50㎝前後である。

SK22258　図版 37　写真図版 72

調査区北西部に位置し、SK22263 の南東に存在する。墓の可能性がある長方形の土壙で、長辺 2.4 m、短辺 1.88 mを測る。底は平坦で、検出面からの深さは 9 cm程度である。内部に柱穴状の小規模な孔が２箇所認められるが、本遺構に伴うものではないようである。主軸は北西－南東方向である。

SK22263　図版 36

調査区北西部に位置する土壙で、SD22278 の西隣に存在する。平面長楕円形を呈し、北西－南東方向にのびている。長さ 1.65 m、幅 60 cm程度で、横断面は「U」字形を呈し、検出面からの深さは 14 cmである。

SK22306　図版 37　写真図版 72

調査区北西隅に位置する土壙状遺構で、検出できたのは東部に限られ、西側は調査区外にひろがる。一部溝あるいは土壙と重複している。東西の規模は 1.3 m以上、南北最大幅は 98 cmである。検出面からの深さは 45 cmを測り、底は平坦である。断面は逆台形に近い。埋土は５層に分かれていた。

SK22314　写真図版 73

調査区中央東部に位置する平面楕円形の土壙で、長さ 88 cm、幅 40 cmを測る。検出面からの深さは 13 cmで、底はやや平坦である。

SK22316　写真図版 73

調査区北東部に位置し、溝 SD22311 と重複する楕円形土壙で、溝よりも新しい。長径 60 cm、短径 38 cmの楕円形を呈し、主軸は北西－南東方向である。検出面からの深さは 10 cmである。

SD22020　図版 37　写真図版 74

調査区南東部に位置する「L」形の溝状遺構で、試掘トレンチにより北部が消失している。残存長は 2.4 mである。幅は 35 cm程度で、横断面は「U」字形を呈する。埋土は単一層で、深さ 12 cmである。

SD22035　図版 37　写真図版 74

調査区南西部の壁際に位置する溝状遺構で、調査区外に続く。残存長は 3.6 mで、南西－北東方向にのびる。幅は 90 cm程度で、横断面は逆台形を呈する。検出面からの深さは約 20 cmである。

SD22059　図版 37　写真図版 75

調査区南西部に位置し、井戸 SE22039 と SE22040 との間に存在する。本溝より南東側は遺構面が高く、段差ぎわの排水溝と思われる。SD22059 とは平行関係にあり、間隔は僅かに 40 cmである。

検出できた長さは 3.8 m、幅 30 cm程度で、断面形は逆台形に近く、深さは 14 cmを測る。

SD22060　図版 39　写真図版 75

調査区南西部に位置し、井戸 SE22039 と SE22040 との間に存在する。本溝より南東側は遺構面が高く、

段差ぎわの排水溝と思われる。SD22059とは平行関係にある。

検出できた長さは7.4 m、幅30 cm程度である。底は傾斜を持つが、深さは5 cm程度である。

SD22119　図版39　写真図版75

調査区中央東寄りに位置する北西－南東方向の溝で、浅く幅広い。中央で一度途切れている。SD22171およびSD22064も本溝と平行関係にある。なお、直交方向の溝SD22130と重複し、本溝が新しい。

途切れ部も含めた総延長は17.85 mで、幅は1.12 m前後である。底は平らに近いが、深さ10 cm弱である。

SD22169（SD22153）　図版40　写真図版75

調査区中央東部に位置する北西－南東方向の溝で、南東側に存在するSD22153とは一連のものと考えられる。直交方向の溝SD22130と重複し、検出時では本溝のほうが古いと思われた。検出できた総延長は11.2 m、幅は30 cm～1 mである。横断面は皿形に近く、検出面からの深さは7 cmと浅い。

SD22183　図版40　写真図版76

調査区西部中央の調査区壁際に位置する、ほぼ直角に折れ曲がる溝状遺構で、検出できた部分の総延長は3.9 m、幅は75 cm前後である。深さでは、西側が浅く9 cm、東側では40 cmと深くなっている。

SD22247　図版41　写真図版76

調査区北部東寄りで、SB2202の東側に位置するが、建物跡とは主軸方向が異なる。溝痕跡も含めた総延長は4.55 mで、溝幅は25 cm程度である。検出面からの深さは5 cm程度と浅い。

SD22248　図版40　写真図版76

調査区北部東寄りに位置し、東西方向に近く短い溝状遺構である。長さは1.9 m、幅35 cm前後で、横断面は「U」字形に近い。検出面からの深さは7 cmと浅い。

SD22262　図版41　写真図版77

調査区北西部に位置する細長い溝で、SD22033のすぐ西隣で平行関係にある。北西側は傾斜地形のため南西側溝肩が消失しているが、総延長は4.3 m程度である。溝幅は15 cm前後で、横断面は「U」字形に近い。検出面からの深さは5 cm程度である。

SD22277　図版39　写真図版77

調査区北西部に位置する細長い溝で、南西隣に50～60 cmの間隔をおいて存在する柱列と平行方向であるため、この柱列の雨落ち溝の可能性がある。やや弓なりの形状を示す、長さ11.8 m、幅30 cmの細長い溝である。横断面は「U」字形に近く、検出面からの深さは8 cmである。

SD22278　図版40　写真図版77

調査区北西部に位置する南北方向に近い溝で、SK22263の東隣に存在する。長さは約2.1 m、幅約30

cmを測る。検出面からの深さは12cmで、横断面は「U」字形に近い。

SD22290　図版41　写真図版77

調査区北西部に位置する南西－北東方向の溝であるが、調査区が幅4.5mの狭い部分であるため、長さ3.7mを確認したにすぎない。溝SD22197と直交に近い形で交差し、重複するが、本溝のほうが新しい。溝幅は1.7mであるが、南西端では地形が低くなる関係で幅が狭くなっている。検出面からの深さは54cmで、埋土は6層に分割できた。図示できる遺物は出土していない。

SE22039　写真図版78

調査区南西部に位置する近世以降の円形井戸である。掘り形は径2.2mのほぼ円形で、井戸枠部分は径1.1mの円形である。検出面からの深さは1.46mを測る。埋土から鉄釘が出土している。

第6節　包含層出土の遺物

包含層は大きく3層に分けることができ、それぞれ出土土器の時期別傾向がうかがえたが、ここでは遺物を種類、器種別に分けて記述する。

土　器

332～336は甕口縁部である。332は口径18.3cmを測り、体部はタタキ成形である。内面は板ナデ調整。口縁部は中央部でやや厚みを増す。333は体部から「く」の字状に曲折して外上方にのびる口縁部で、端部は面をもつ。体部はタタキ成形で、体部内面はヘラケズリのようである。334は壺の可能性も残すが、口径21.4cmの口縁部である。端部に面をもつ口縁部は外反する。335も壺の可能性を残すが、口径13.7cmの外反する口縁部である。端部には面をもち、内面はハケ調整のようである。336は体部から曲折して「く」字状を呈する口縁部である。端部は下方に丸く肥厚する。口径は13.5cmを測る。

337は甕または壺、あるいは鉢の口縁部で、複合口縁状を呈する。端部は丸い。内外面ともヘラミガキ調整であるため、壺または鉢の可能性が高い。口径は18.2cmを測る。

338～341は壺口縁部である。338は筒状の短い頸部から大きく外反する口縁部で、端部に面をもつ。口径は17.0cmである。339の広口壺は端部を主として下方に拡張し、端面に1条の凹線文を施した後、円形浮文を加飾する。口径16.0cmである。340の広口壺は端部を上方に拡張し、端面に櫛描波状文を施す。内面はヘラミガキ調整である。口径20.6cmである。341は口径17.4cmで、端部を下方に拡張し、端面に6条の凹線をめぐらす。

342・343は鉢である。342は突出する平底から、内湾しながら外上方にのびる体部をもつ。底径は4.0cm、口径11.5cm、器高7.3cmである。外面には粘土紐接合痕が目立ち、体部内面は板ナデ調整である。343は口径9.6cm、器高5.5cmの小型鉢で、突出気味の平底は径3.8cmを測る。内面は板ナデをケズリ状に施し、外面は縦ハケ調整である。

344はミニチュアの鉢で、口径4.6cm、器高2.9cm、底径は3.5cmである。

345は蓋と思われる小片である。

346～356は底部である。346～351は平底の底部で、底径は346から順に5.1cm、4.0cm、4.7cm、2.8cm、3.9cm、6.2cmである。349は壺の可能性が高く、その他は甕底部であろう。352・353はドーナツ状上げ

底の底部で、352 は底径 3.7 cm、353 の底径は 4.7 cmを測る。ともに体部はタタキ成形であるが、353 のタタキ痕は縦方向に近い。354 は突出する平底の壺底部で、底径は 4.0 cmを測り、体部はタタキ成形である。355 は有孔の平底底部で、底径 4.8 cm、体部はタタキ成形である。356 は脚台で、脚端径 3.8 cmを測る。

357 ～ 362 は高杯の破片である。357 は杯部の破片で、有段高杯に近い。端部は丸く、口径は 19.8 cmである。358 ～ 360 は脚部である。脚端径は 358 が 17.5 cm、359 は 19.9 cm、360 は 15.8 cmである。361・362 は脚柱部で、中実となっている。

363 は不明粘土板である。長さ 5.3 cm、幅 2.7 cmが残存しており、最大厚は 1.2 cmである。表面には数多くの繊維状圧痕が付着している。端部には丸みがある。SX22002 出土の粘土板と同類である。

364 は須恵器杯蓋小片である。口径 11.9 cmで、口縁部は下外方にのび、端部は面をもち、天井部と口縁部の境の稜は鋭い。また、回転ヘラ削りの範囲も狭い。陶邑古窯跡群・大野池 ON-46 型式併行期の可能性がある。

365・366 は須恵器壺または甕の頸部片である。365 は直立気味の頸部で、外面に櫛描波状文を施し、断面はセピア色を呈する。TK-208 型式期頃の可能性もある。366 も外面に櫛描波状文を施文する。

367 は須恵器甕口縁部で、口径 38.4 cmの大型品である。端部はほとんど拡張せず、突帯も突出することから、TK-208 型式期の可能性もある。外面上部に櫛描波状文を施す。

368 ～ 380 は飯蛸壺である。368 はほぼ完形品で、口径 6.2 cm、器高 9.7 cmを測る。底部は平底に近く、底径 3.3 cm。比較的薄手のつくりである。369 は尖底に近い形態の完形品である。口径 5.4 cm、器高 9.5 cmを測る。厚手である。370 は半分弱の破片で、口径 5.7 cm、器高 9.4 cmの薄手のつくりである。底部は平底で、底径 3.5 cm、体部最大径は 6.6 cmを測る。紐通し孔は 1 箇所確認できる。371 は 3 分の 1 程度の破片で、薄手である。口径 4.6 cm、器高 8.8 cm、体部最大径 6.0 cmである。平底の底径は 3.0 cmである。372 は 5 分の 1 程度の破片で、口径 6.0 cm、体部最大径 7.1 cmである。底部は平底と思われる。373 は厚手で、ややいびつになっている。口径は 3.5 cm程度と思われ、器高は推定 9.0 cmであろう。374 の底部は突出する平底で、底径 3.3 cmを測る。体部径は 6.5 cmである。375 は口縁部の破片で、口径 5.0 cmである。376 は下半部の破片で、平底の径は 5.0 cm、体部径は 7.3 cmを測る。377 も平底で、径 4.5 cm、体部径 7.1 cmである。378 は径 2.8 cmの小さな平底である。379 と 380 はともに底径 3.4 cmである。

381 ～ 393 は須恵器こね鉢口縁部である。381 は口径 32.0 cm、口縁端部は体部と直交方向の面をなし、ほとんど肥厚しない。382 の端部もほとんど肥厚しないが、端面が垂直となる。口径 25.6 cm。383 の口縁端部は上方に少し引き伸ばされ、端面は垂直に近い。口径は 34.0 cmと大きい。384・385 の口縁端部はさらに上方に引き伸ばされ、端面は垂直である。口径は 384 が 36.8 cmと最も大きく、385 は 29.8 cmである。386 ～ 389 の口縁端部は上方に大きく拡張すると同時に、端部が少し肥厚する。口径は 386 が 31.7 cm、387 が 28.6 cm、388 は 29.1 cm、389 は小さめで 23.9 cmを測る。390 ～ 393 は口縁端部が上下に大きく拡張されたもので、内面がやや屈曲するものが多い。口径は 390 が 26.3 cm、391 は 28.0 cm、392 が 23.7 cm、393 は 22.9 cmといずれも比較的小さめである。これらの鉢は森田稔氏編年の神出Ⅰ期第 2 段階から神出Ⅲ期第 2 段階まで幅広く認められ、池田征弘氏編年でもⅠ～Ⅲ期を通じたものが存在している。おおむね 12 世紀から 14 世紀までの年代が与えられている。

394 は備前焼と思われる底部で、底径 25.8 cmと大きいことから、甕と思われる。

395・396 は須恵器椀口縁部、397 は椀底部である。395 は口径 15.4 cm、396 の口径は 18.9 cmを測る。

396の端部はやや外反して浅い器形となり、色調も白色に近いことから、13世紀前半頃の可能性が高い。397の回転糸切り高台は低く、12世紀後葉頃と思われる。

398～400は東播系須恵器の甕体部である。398・400の外面には綾杉文のタタキを施し、内面はハケ状のナデで当て具痕を消している。瓦質に近い。399は平行タタキが外面に残り、内面はナデである。

401・402は羽釜口縁部の小片である。401の口径は29.8㎝で、口縁端部および鍔端部は面をもつ。鍔は下外方に約1.3㎝突出する。402は口径20.2㎝とやや小さく、口縁端部は若干肥厚し、水平な面をなす。鍔は横外方に約1.5㎝突出し、端部は丸みのある面をもつ。403は鍔部分の破片で、口縁端部は欠失している。鍔は体部から横外方に上反しながら約2.3㎝突出し、端部は丸い。鍔下面には煤が付着している。

404は脚のある羽釜またはいわゆる三足の足鍋である。鍔部の外径は24.8㎝で、体部から外上方に約1㎝突出する。足は鍔下端に接した位置から貼り付けられ、基部での直径は約3㎝である。

405～407は鍔釜の口縁部である。405の口径は20.0㎝で、口縁部はやや厚く、短い。406は口径20.9㎝を測り、端部は肥厚せず、面をもつ。407は口径21.5㎝で、鍔部が比較的小さなもので、形態的には405に似るが、端部は405ほどは丸くならない。これらの鍔釜は14世紀頃の年代が与えられるものと思われる。

408～410は土鍋口縁部である。408は口縁端部上面が凹面をなし、玉縁部分も角張る。口縁部のヨコナデもロクロ目が顕著である。口径14.4㎝を測る。409は須恵質で、口縁部外面の凹凸が大きい。口縁端部はあまり肥厚・拡張しない。口径は22.4㎝である。410は口縁端部を外方に大きく引き伸ばすもので、口径27.9㎝を測る。これらの土鍋は14～15世紀を中心とした時期と考えられる。

411は西播磨で特徴的に認められる「播磨型鍋」の体下部である。格子目タタキを有し、16世紀代の所産と思われる。

412は鉄鍋形の土師器鍋である。口縁部は受け口状を呈し、口径17.2㎝を測る。体部外面は縦ハケ調整、内面は横ハケの可能性が高い。通常より比較的厚手に製作されている。

413～418は青磁碗の破片である。413は鎬蓮弁文碗の底部で、底部外面の畳付から内側は露胎となっている。内面見込み部には花文が認められる。高台径は4.8㎝を測り、横田・森田分類の龍泉窯系青磁碗Ⅰ類である。414も龍泉窯系青磁碗Ⅰ類の蓮弁文碗口縁部であるが、鎬はあまりはっきりしない。小片のため口径不明。415は内面にヘラで片彫りの草花文を有する碗で、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類である。416も内面にヘラで片彫りの文様を描く碗の破片である。417は5Y7/3の浅黄色を呈するが、内面に片彫りの劃花文を描き、外面下半にも施釉していることから、龍泉窯系青磁碗と思われ、横田・森田分類のⅠ類である。418の碗底部は外面高台部のみ露胎のようであり、内面は5Y6/3のオリーブ黄色を呈するが、龍泉窯系青磁碗と思われる。

419～422は白磁である。419は外面下部が露胎で、内面には沈線が認められる。高台は細く高く直立し、横田・森田分類の白磁碗Ⅴ類で、端反りの口縁部になるものと思われる。420はその形態から白磁Ⅲと思われる。高台は低く幅が広いもので、外面は露胎である。横田・森田分類の白磁ⅢⅡ類と思われる。421は口縁端部が口禿になったもので、口径9.8㎝を測る。形態からⅢと思われ、横田・森田分類のⅨ類にあたり、華南産白磁と思われる。13世紀後半～14世紀前半のようである。なお、体部が輪花状になる可能性がある。422は白磁Ⅲ底部で、施釉された平らな底部から曲折して体部となる。421と同様に横田・森田分類のⅨ類にあたり、華南産白磁と思われる。

423は瀬戸美濃系灰釉陶器皿口縁部である。細片のため口径は不明である。

424は肥前系白磁皿で、口径12.0cmを測る。内面見込み部は蛇の目状に釉を剥いでいる。18世紀前半。

425は唐津焼染付の小碗で、高台畳付は露胎で砂が付着している。内面には自然釉も付着している。

426は陶器の平底底部で、底径14.0cmである。残存部分では、内面にのみN4/0の灰色の釉が認められる。17世紀後半以降の丹波焼かもしれない。

427は伊万里の染付磁器皿で、口縁端部が輪花になるように窪ませている。内外面は呉須で文様を描く。口径12.7cm、器高4.1cm、高台径7.5cmを測る。

428は瓦器椀の底部である。高台断面は長方形に近く、径4.5cmである。暗文は確認できない。

429は土師質の棒状土錘で、両端に直径4mm程度の紐通し孔を有する。全長7.6cm、長径1.7cm、短径1.5cmを測る。一部欠損するが、重量は23.4gである。

430は楕円形の有溝土錘で、全長5.6cm、厚さ2.5cm、最大幅3.5cmを測る。一部欠損するが、重量36.8gを測る。

431は瓦質に近い土師質の不明土器片である。6mm以上の厚さがあるが、片面が欠失している。残存している表面には赤色顔料が塗布されており、10R4/4の赤褐色を呈することから、水銀朱ではない。赤色顔料塗布前の調整はヘラミガキのようである。

包含層出土金属器

M4～M6は鉄製角釘である。M4は頭を欠失するが、残存長22.7cm、幅1.2cm、厚さ0.7cmと大型のもので、いわゆる「いぬくぎ」である。SE22039の埋土上層から出土した。M5は残存長2.7cmの頭部の破片である。頭部は打ち伸ばして折り曲げる方法ではなく、板状にしたものを巻きつける方法によっている。頭部の直径は1.9cm、厚さ6.5mmである。釘身部の幅は7.0mm、厚さ9.0mmである。M6は残存長4.6cmで、先端を欠失する。頭部は平たく伸ばした頭部を折り曲げる通有の方法による。幅6.0mm、厚さ6.5mmである。

M7も角釘が錆化したものの可能性がある。残存長4.4cm、最大幅1.3cm、厚さ1.0cmである。

M8は短刀や小柄の可能性が高い。残存長12.9cm、刃部は外湾し、背は直線である。最大幅2.1cm、最大厚0.5cmである。

M9は不明鉄製品である。幅1.05cm、厚さ2.0mm、残存長4.6cmの薄い板状の鉄製品である。

M10も不明鉄製品であるが、鋤先片の可能性がある。錆化が激しく、丸みを帯びている。

第7節　旧石器～弥生時代の石器

石器・石製品

大中遺跡の調査では、後期旧石器時代～弥生時代にわたる石器・石製品が出土している。ここではそのうち、二次加工および使用痕等が明瞭で、器種分類が可能な22点について記載をおこなう。なお、それぞれの出土地区、石材および計測値については、第1表に一括する。

（1）石鏃（図版64）

S9は凹基無形式石鏃である。先端部を欠損する。右図中央に素材剥片の剥離面を残すが、全体に丁寧な二次加工が施されている。両側縁はほぼ直線状をなし弱い鋸歯縁となっている。脚端部は丸く整形されている。基部の抉りは深く器長の1/3程度に達しており、頂部の丸い三角形状を呈する。

S10は凹基無茎式石鏃である。表裏両面ともに丁寧な二次加工が施され、整った二等辺三角形を呈する。両側縁はゆるやかな弧状を呈する。基部の抉りはやや深い弧状を呈し、器長の約1/4程度に達する。脚端部は鋭く尖る。風化が進行しているが、剥離痕の稜線は鋭利である。

S11は先端部を折損した凹基無茎式石鏃である。図右面中央部に素材剥片の剥離面をとどめ、二次加工は全体にやや粗大な印象を受ける。両側縁はゆるやかな弧状を呈し、脚端部は尖り気味に仕上げられている。基部の抉りはやや深い弧状を呈する。稜線が不明瞭となるほど、風化が著しく進行している。SH2204より出土。

S12は凹基無茎式石鏃である。一方の脚を欠くが、全体に整った二等辺三角形を呈し、基部の抉りは浅い弧状を呈する。図右面中央には素材剥片の剥離面をとどめるが、全体に丁寧な二次加工が施されている。両側縁はほぼ直線的で、わずかに残る脚端部は尖り気味に仕上げられている。

S13は凹基無形式石鏃である。先端部と、一側縁から脚にかけての部分を、図左面側からの2回にわたる剥離で失っている。側縁はほぼ直線状をなし、脚端部は丸みをおびる。基部の抉りは浅く弧状を呈する。

S14は凹基無茎式石鏃である。二次加工は全体に丁寧に施されている。左図左側縁はわずかに弧状を呈するが、同右側縁は直線的に作られ、基端から器長の3/4ほどの位置で屈折して先端に至っている。これを、縄文時代晩期に盛行する五角形石鏃とするか、再加工による変形とみなすかについては判断に苦しむ。基部の抉りは、浅い弧状を呈する。風化が進行している。

S15は平基無茎式石鏃である。表裏両面に素材剥片の剥離面を大きく残し、二次加工は周縁部のみにとどまっている。側縁の形態が左右非対称で、左図の左側縁はゆるやかな弧状を呈するが、右側縁はほぼ直線的に仕上げられている。

S16は先端部を折損した尖基式石鏃である。鏃身下部がやや膨らんだ柳葉形を呈し、基端部は鋭く尖る。表裏両面とも、中央部に素材剥片の剥離面を残し、二次加工は周縁部にとどまっている。SK22184埋土中より出土。

S17は中央部付近で折損した尖基式石鏃である。S16よりも細身の柳葉形を呈すると思われる。図左面は、二次加工の剥離痕に覆われているが、右面中央には素材剥片の剥離面を残す。剥離痕の稜線には、全体に弱い摩耗が認められる。

（2）掻器（図版64）

S18は、赤色を呈するメノウ質の石材を用いた掻器である。長幅比が1：1に近い剥片を素材とし、その末端部に、腹面側から急斜度で細かな二次加工を施している。素材剥片は、自然面を打面とし、背面側は腹面と同一方向からの剥離痕3枚で構成されている。後期旧石器時代の所産である可能性が考慮される。

（3）楔形石器（図版64）

S19はほぼ正方形を呈し、厚みをもった楔形石器である。左図右および下縁は、截断面となっている。図上縁は顕著な潰れを示し、縁辺から表裏両面に細かな剥離痕がのびる。特に左図上部では著しい階段状剥離痕を見せる。

S20は暗赤褐色で良質なチャートを用いた楔形石器である。図上縁には顕著な潰れが認められ、表裏両面に図上下、および左右の縁辺から対向する剥離痕がのびる。

（4）二次加工のある剥片（図版64）

S21は、剥片の末端および一側縁に二次加工が施された石器であるが、二次加工の意図を判断できな

かったため、二次加工のある剥片に分類した。素材となった剥片は、自然面を打面とした、縦長状あるいは長幅比が１：１に近い剥片と考えられ、背面側には腹面と同一打面からのびる２枚の剥離痕が認められる。剥片末端部の二次加工は表裏両面から施され、縁辺は粗大な鋸歯状、その側面観はジグザグ状を呈する。腹面右側縁の二次加工は背面側から施されており、４～５枚の小剥離痕が連続している。剥片末端と二次加工が施された側縁は、尖った端部を形成する。

S22 は縦長剥片を素材とする。剥片の鋭利な一側縁の背面側に、刃こぼれ状の細かな剥離痕が連続している。これらの剥離痕が二次加工によるものか、使用の結果形成されたものか判断に苦しむところであるが、連続性が比較的よい点で二次加工と判断して本器種に含めている。

S23 は横長剥片の末端部に、腹面側からノッチ状の二次加工を施した石器である。素材となった剥片は打面部を折損する。左図（背面側）上部の剥離面は、ポジティブな大剥離面であり、本剥片が剥離された石核が剥片素材石核であったことを示している。背面側には腹面と同一方向、対向方向、および直交方向からのびる、各一枚の剥離痕が認められる。風化が進行している。

（５）ナイフ形石器（図版 65）

S25 は厚みのある横長剥片の、打面部側側縁に、腹面側から二次加工を施したナイフ形石器である。背面側には、１枚の剥片剥離痕と石核底面をとどめている。底面の剥離方向は典型的瀬戸内技法の例とは逆方向となっており、ネガティブであるかポジティブであるかの判断も難しい。腹面側下半には、３枚の剥離痕からなる打面をとどめており、ナイフ形石器の素材となった横長剥片が、打面調整を施された石核から剥離されたことがわかる。形態上は国府型ナイフ形石器と判断してもよい資料である。

S24 は、小型の横長剥片を素材としたナイフ形石器である。剥片の打面部に背面側から急斜度の二次加工を施している。また、右図右下には、同じく背面側から施された１枚の剥離痕が認められるが、人為的加工によるものかどうか判断に苦しむ。

（６）剥片（図版 65）

S26 は横長剥片である。打面部は複数の剥離痕と平坦な剥離面（石核素材面か）から構成され、その稜線上を打撃することで、本剥片を得ている。背面側は、腹面側とは大きく打点のずれた剥離痕と、打面縁に沿った小剥離痕から構成される。瀬戸内地域の、後期旧石器時代の剥片剥離技術の系譜をひくものと判断できる資料である。

S27 は末端部を折損した剥片であるが、本来は剥離軸が傾いた縦長状を呈していた可能性が高い。背面側は腹面側と同一打面、および直交する方向からのびる３枚の剥離痕で構成されている。細長い河川礫から、対向あるいは求心状の剥離をおこなったものと考えられる。

S28 は、自然面を打面として剥離された厚手の剥片である。背面側は求心状の剥離痕５枚から構成されているが、いずれも横長あるいは長幅比が１：１に近い小型剥片の剥離痕である。

S29 は縦長剥片である。河川礫の礫表面（自然面）の、比較的平坦な部分を打面として剥離されており、背面側にも広く礫表皮を残している。背面側中央の剥離痕は、腹面と同一方向からの縦長剥片剥離痕であるが、同面左側の剥離痕は打点が不鮮明である。また、背面右上部の剥離痕は、中央の剥片剥離の際に礫表皮が同時に剥落したものと思われる。

（６）磨石（図版 65）

S30 は磨石と思われる。扁平な、楕円形を呈する河川礫を用いており、表面にわずかな磨痕が認められる。

（7）小結

今回の調査で出土した石器は、後期旧石器時代～弥生時代にわたる時期の所産と考えられるが、原位置を保っていたと考えられる資料はほとんどなく、詳細な所属時期については、推定の域を出ない。

ナイフ形石器２点は、横長剥片 S26 とともに、後期旧石器時代後半期に属するものであろう。S25 および S26 が、瀬戸内技法、あるいはその技術的延長上にあることはほぼ疑いないだろう。ただし、本遺跡では、過去の調査を含めても確実な瀬戸内技法の存在を示す資料が出土していないことから、瀬戸内技法そのものの存在については懐疑的とならざるを得ない。また掻器 S18 についても、形態および二次加工の状況などから、後期旧石器時代に属する可能性が高い。

石鏃のうち、凹基無茎式の一群は、その多くが弥生時代以前に属する可能性がある。特に S9～S11・S14 は、形態・風化の進行状況などからも相対的に古く位置づけることが許容されるだろう。S14 については、縄文時代晩期の五角形石鏃の可能性も考慮される。平基式、尖基式の一群は、弥生時代の所産であろう。

第１表　出土石器一覧表

番号	地　区	遺構	層位	器種	石　材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
S 9	No0～0＋7 北部		包含層 ③下部	石鏃	サヌカイト	19.0	16.0	2.5	0.6	
S10		SH2202 北東区		石鏃	サヌカイト	16.8	14.0	3.5	0.7	
S11		SH2204		石鏃	サヌカイト	16.2	13.2	3.0	0.7	
S12			包含層	石鏃	サヌカイト	17.0	12.3	3.0	0.6	旧石器調査区 Tr1出土
S13		SK22089		石鏃	サヌカイト	17.8	15.0	3.4	0.9	
S14	調査区南西部		包含層	石鏃	サヌカイト	17.0	12.8	3.6	0.7	側溝掘削時
S15			包含層	石鏃	サヌカイト	42.5	22.8	4.5	4.8	旧石器調査C区出土
S16		SK22184		石鏃	サヌカイト	40.0	17.0	5.5	4.0	
S17	No0～1＋8 中部		包含層	石鏃	サヌカイト	29.5	14.0	5.0	2.8	
S18	No7＋0.4～8＋0.4		包含層 下部	楔形石器	チャート	26.5	25.2	9.5	7.3	
S19		SH2204		楔形石器	サヌカイト	21.2	22.5	10.5	6.5	
S20	No3＋8～5＋6.2中部		包含層②	楔形石器	チャート	20.2	20.5	9.5	3.0	
S21	No8＋0.4～8＋8.4中段		包含層	削器？	サヌカイト	34.3	36.6	7.6	10.8	
S22	No8＋0.4～8＋8.4	SD22001・22002 合流部	包含層③	削器	チャート	42.5	22.2	7.7	6.0	
S23			包含層	二次加工のある剥片	サヌカイト	51.5	30.0	7.6	10.0	
S24	No12＋8.2～13＋8.2西	SD22197		ナイフ形石器	サヌカイト	26.5	21.0	5.0	2.1	
S25		SK22009		ナイフ形石器	サヌカイト	47.8	19.0	7.5	5.6	
S26			包含層	ナイフ形石器（翼状剥片）	サヌカイト	35.5	25.2	5.0	4.5	SH2202南東部周囲
S27		SH2202 北西床面		剥片	チャート	23.2	27.3	9.2	4.6	
S28	No8＋8.4～9＋8.4		包含層	剥片	サヌカイト	43.0	51.5	23.8	27.2	
S29		SD22289	2～4層間	石核	チャート	56.5	41.5	16.2	35.0	
S30				磨石		99.5	59.5	26.0	250.0	

第４章　自然化学分析結果

第１節　竪穴住居 SH2202 から採取した炭の反射率測定に基づいた被熱温度の推定

大阪市立大学　井　上　　淳

１．はじめに

植物が燃焼などにより高温被熱すると、炭化し炭が生成される。被熱により植物が炭化する際には、その被熱温度の上昇にともない、炭の反射率が増加することが知られている [Jones et al.,1991]. 被熱温度と炭の反射率との間には一定の相関性があることから（例えば [Jones et al.,1991]; [Jones and Lim, 2000]）、炭の反射率からその炭の大まかな被熱温度を推定することが可能である。本報告では、火災によって焼失した弥生時代後期後半の竪穴住居 SH2202 から採取した炭の反射率測定を行い、その被熱温度について考察した。

２．分析試料

分析に用いた試料は、焼けた残った炭化した柱や梁桁、垂木などいわゆる材（樹幹部）である。今回の分析では、10 点の炭について測定を行った。炭の大きさ、産状などはそれぞれ大きく異なっていたが、しばしば炭化材と共に灰が認められた。炭の多くは土に埋没していたため、炭試料の採取にあたっては、炭を含む周囲数cm～ 10 cm程度土とともに採取した。炭試料採取地点を第６図に示す。

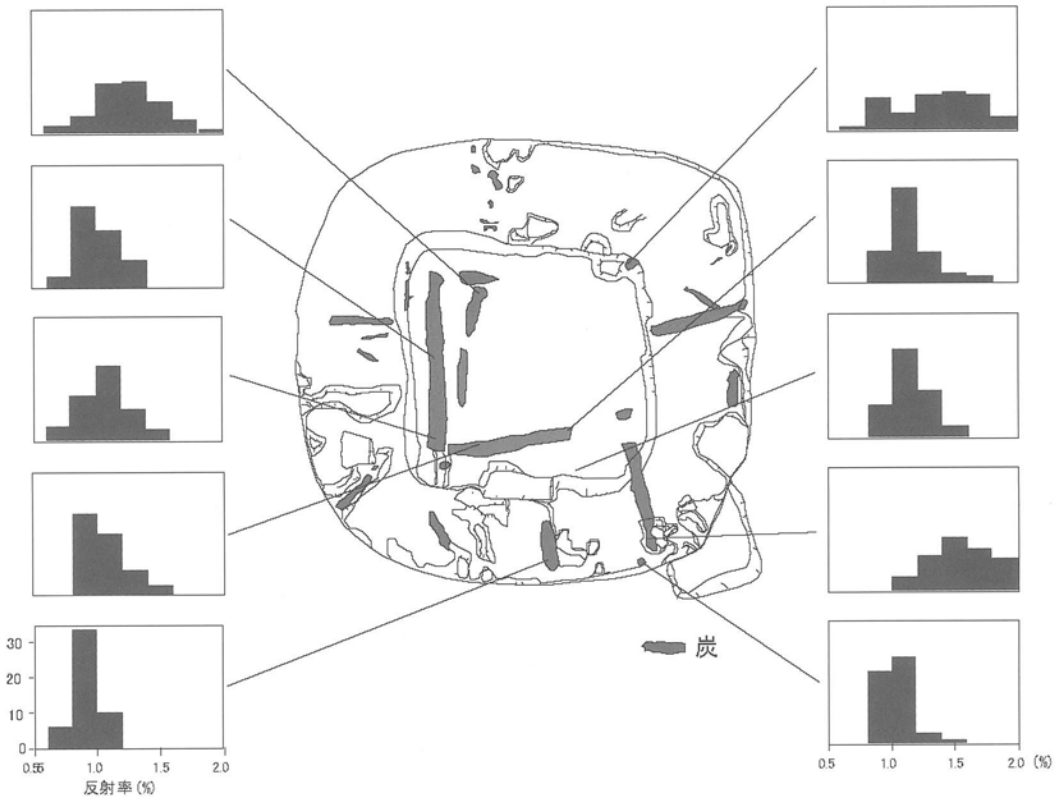
第５図　SH2202 炭検出状況

３．分析方法

採取した試料は土をともなうため、土の除去を目的として以下の処理を行った。まず、採取した試料をいくつかに粉砕し、水酸化カリウム（10%）を用いて土壌分を泥化させ、250 μm の篩に通し、篩上に残った炭試料を回収した。そして回収した炭試料について数mm以下程度に粉砕した。粉砕した炭試料をポリエステル系の樹脂に埋め込み、ブリケットを作成した。樹脂が固化した後、自動研磨機を用いてブリケットを十分に研磨した。作成したブリケットの表面上の炭粒子について、山口大学教育学部所蔵の Leica 社製の反射顕微鏡を用いて油浸レンズ下で検鏡を行い、反射率測定用ソフトウェア MPVGEOR（Windows 用）を用いてそれぞれの炭粒子の反射率測定を行った。反射率測定は、各炭試料について 50 点（炭粒子 50 粒）測定した。

4．分析結果

採取した炭の反射率のヒストグラムを第６図に示す。測定した炭試料の反射率は、0.6 ～ 2.0 の範囲にあった。



第６図　SH2202 における炭の分布と炭試料採取地点およびその反射率ヒストグラム

5．考　察

一般に被熱温度が高い状態で長時間被熱すると高い反射率を示す炭が生成されることが知られている。採取した炭の反射率の分布は採取地点によって異なるものの、多くは 1.0 ～ 2.0% の間に分布している。

[Jones and Lim, 2000] の被熱温度と反射率の関係式：被熱温度（℃）＝ 184+118 ×反射率（%）を参考に、これらの炭の被熱温度を見積もると 300 ～ 400℃程度であると推測される。多くの炭の周辺に灰が認められることから、酸素供給量が十分で被熱温度が高かった部位は灰化し、被熱温度の低かった材の中央部などの部分のみが焼け残り炭となったと考えられる。このため住居燃焼時の温度は、少なくとも 400℃以上であったと考えられる。採取地点によって炭の反射率は若干異なっているが、特定の範囲で反射率が高いなどの明瞭な傾向は認められない。このため炭の反射率の違いは、それぞれの材が家屋のどの部位に用いられていたかに由来している可能性が考えられる。

引用・参考文献

Jones, T. P., Scott,, A. C. &Cope, M., 1 99 1 Reflectance measurements at the temperature of formation of modern charcoals and implications for studies of fusain. Bulletin of the Geological Society of France. 162, 193-200pp.

Jones, T. P. & Lim, B., 2000. Extraterrestrial impacts and wildfires. Palaeogeography Palaeoclimatology Palaeoecology. 164, 57-66pp.

第２節　大中遺跡出土炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社
高　橋　　敦

はじめに

大中遺跡は、加古川左岸（東岸）の印南野台地南縁部に位置し、南東側には喜瀬川が流れる。発掘調査により兵庫県最大級の弥生時代後期の集落跡を中心に、旧石器時代から鎌倉時代までの遺構・遺物が検出されている。今回の報告では、弥生時代後期および弥生時代後期末～古墳時代初頭の竪穴住居跡から出土した建築部材等と判断される炭化材について樹種同定を実施し、当時の木材利用状況に関する情報を得る。

１．試　料

試料は、SH2202を中心とした竪穴住居跡から出土した炭化材70点（試料番号1-70）である。

２．分析方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東（1982）およびWheeler他（1998）を参考にする。また、各樹種の木材組織の配列の特徴については、林（1991）、伊東（1995,1996,1997,1998,1999）や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

３．結　果

樹種同定結果を第２表に示す。試料番号60は、炭粉が塊状に固まったものであり、同定可能な組織片は認められなかった。また、試料番号34は道管が認められることから広葉樹材であることは明らかであるが、保存状態が悪く樹種の同定には至らなかった。なお、試料番号61は、散孔材の道管配列を有する広葉樹材であるが、該当種が見つからず、樹種の同定には至らなかった。本報告では、組織の特徴を記載した上で、不明広葉樹として報告する。その他の炭化材61点は、広葉樹４種類（コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・ケヤキ・ツバキ属）に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*）　ブナ科

環孔材で、孔圏部は１～２列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*）　ブナ科

環孔材で、孔圏部は１～３列、孔圏外で急激～やや急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・ケヤキ（*Zelkova serrata*（Thunb.）Makino）　ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圏部は１列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に紋様状または帯状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、１～６細胞幅、１～50細胞高。放射組織

の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

・ツバキ属（*Camellia*）　ツバキ科ツバキ属

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形～角張った楕円形、単独および２～３個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、１～２細胞幅、１～20細胞高。放射組織には結晶細胞が認められる。

・散孔材

道管は単独または２～４個が放射方向に複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板および壁孔の形態は、保存が悪く観察できない。放射組織は異性、１～３細胞幅、１～30細胞高で、単列部が上下に連結することがある。

４．考　察

樹種同定を実施した炭化材は、65点中51点がSH2202から出土した建築部材等で、この他にSH2203～SH2206から出土した炭化材が13点ある。各遺構別の種類構成を第３表に示す。炭化材には合計５種類が認められたが、65点中40点をクヌギ節が占め、次いでコナラ節が22点となる。その他の種類は全て１点のみであった。この結果から、住居構築材にはクヌギ節やコナラ節を中心とした木材利用が推定される。本遺跡では、これまでにもSH2103等から出土した炭化材35点について樹種同定を実施しているが、今回と同様にクヌギ節・コナラ節を主とする結果が得られている。

時期別に見ると、弥生時代後期のSH2202から出土した炭化材は、主柱４点、垂木８点、梁桁３点、板１点、棟木１点、低床部壁板２点、杭１点の部材が確認されているものの、32点は部位などの詳細が不明である。これらの炭化材は、板にケヤキ、その他にツバキ属が各１点認められた他は、全て落葉広葉樹のクヌギ節あるいはコナラ節であり、特にクヌギ節の占める割合が高い。クヌギ節とコナラ節は、重硬で強度が高い材質を有している。ツバキ属とケヤキも比較的強度が高い材質を有することから、住居構築材には強度の高い木材を選択していたことが推定される。４本の主柱がクヌギ節とコナラ節が各２点であったこと等をみると、樹種による使い分けやクヌギ節の選択的な利用というような状況は考えにくく、周辺で入手が容易な木材としてクヌギ節が多く利用されている可能性がある。

弥生時代後期末～古墳時代初頭のSH2203～SH2206は、各住居から出土した炭化材の点数が少ないが、クヌギ節とコナラ節が確認されている。SH2202で多かったクヌギ節は、SH2205で２点、SH2206で１点認められる。一方、コナラ節はSH2205を除く全ての住居跡で確認され、SH2206ではクヌギ節よりもコナラ節の方が多い。そのため、クヌギ節・コナラ節を利用している点は弥生時代後期のSH2202と同様であるが、弥生時代後期末～古墳時代初頭ではクヌギ節よりもコナラ節の方の利用量が多かった可能性がある。

本地域における弥生時代の木材利用をみると、合計37種類の樹種が確認されており、農具などを中心にアカガシ亜属が最も多く利用されている（中村,2001）。アカガシ亜属もクヌギ節・コナラ節と同様に重硬で強度の高い材質を有しており、住居構築材としても有用と考えられる。しかし、既往の分析結果を含む本遺跡の住居跡出土炭化材100点の中にはアカガシ亜属は１点も認められない。アカガシ亜属は農具などに有用であり、住居構築材への利用を避けていたのかもしれない。

木材利用を考える上で重要な当時の古植生については、播磨地域の古植生に関する情報が少なく不明である。しかしながら、六甲山南麓地域の既往の分析結果（辻ほか,2003など）を踏まえると、本地域にも弥生時代に暖温帯常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）を中心とする植生の存在が想定される。今回

第２表　樹種同定結果

番号	炭 No.	遺構	地区	遺構2	土　層	取上番号	名称(取上)	地区	位　置	名称(推定)	樹　　種	備　　考
1	炭112	SH2202	南西	高床部		炭70		南西南	高床部		ツバキ属	
2	炭132	SH2202	南西			炭83	南西主柱	南	低床部	南主柱	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
3	炭49	SH2202	南西			材1		南西南	高床部		コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
4	炭62	SH2202	南西			炭40		南西南	低床部		コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
5	炭71	SH2202	南西	低床部		炭46		南西南	低床部		コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
6	炭72	SH2202	南西	低床部		炭52		南西南	低床部		コナラ属コナラ亜属コナラ節	
7	炭91	SH2202	南西	高床部		材11	垂木	南西南	高床部	垂木	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
8	炭92	SH2202	南西	高床部		材12	垂木	南西南	高床部	垂木	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
9	炭93	SH2202	南西	高床部		材13	垂木	南西南	高床部	垂木	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
10	炭98	SH2202	南西	高床部		材14	垂木	南西南	高床部	垂木	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
11	炭61	SH2202	南西	高床部		炭39		南西南	高床部		コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
12	炭100	SH2202	南東	高床部		材18	垂木	東東北	高床部	垂木	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
13	炭104	SH2202	南東	高床部壁		炭38	高床部腰板	東東北	高床部	杭	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
14	炭13	SH2202	南東	高床部		炭10		東南東	高床部	南東梁桁	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
15	炭131	SH2202	南東			炭82	南東主任	東	低床部	東主柱	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
16	炭36	SH2202	南東	高床部		炭32		東東北	高床部		コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
17	炭75	SH2202	南東	低床部		材3	東梁桁？	東北	低床部	棟木	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
18	炭79	SH2202	南東	低床部		材10	南梁桁	東南東	低床部		コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
19	炭89	SH2202	南東	低床部		材4		北東	低床部	東北梁桁	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	No.46･No.47と同一
20	炭111	SH2202	北西	低床部		炭69		西西南	低床部		コナラ属コナラ亜属コナラ節	
21	炭130	SH2202	北西	高床部		材2		西北西	高床部		コナラ属コナラ亜属コナラ節	No.26･No.27と同一
22	炭21	SH2202	北西	高床部		炭24		西北西	高床部		コナラ属コナラ亜属コナラ節	
23	炭22	SH2202	北西	高床部		炭25		西西南	高床部		コナラ属コナラ亜属コナラ節	
24	炭23	SH2202	北西	高床部		炭26		西西南	高床部		コナラ属コナラ亜属クヌギ節	No.25と同一
25	炭38	SH2202	北西	高床部		炭26		西西南	高床部		コナラ属コナラ亜属クヌギ節	No.24と同一
26	炭60	SH2202	北西			材2		西北西	高床部		コナラ属コナラ亜属コナラ節	No.21･No.27と同一
27	炭74	SH2202	北西	高床部		材2	杭？	西北西	高床部		コナラ属コナラ亜属コナラ節	No.21･No.26と同一
28	炭77	SH2202	北西	低床部		材5		北西	低床部	北西梁桁	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	No.48と同一
29	炭78	SH2202	北西	高床部		材7		西北西	低床部～高床部		コナラ属コナラ亜属コナラ節	
30	炭80	SH2202	北西	周壁		炭54		西西南	高床部		コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
31	炭81	SH2202	北西	周壁		炭55		西西南	高床部		コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
32	炭85	SH2202	北西	高床部		炭58 (材7の下)		西北西	高床部		コナラ属コナラ亜属コナラ節	
33	炭90	SH2202	北西	高床部		材8	板	西西南	高床部	板	ケヤキ	
34	炭96	SH2202	北西	高床部		材6	垂木	西北西	高床部	垂木	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
35	炭102	SH2202	北東	高床部		炭57		北北西	高床部		コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
36	炭103	SH2202	北東	下段		土器36の中		北北西	低床部		コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
37	炭106	SH2202	北東	下段		炭64		北東北	低床部		コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
38	炭107	SH2202	北東	下段		炭65		北東北	低床部		コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
39	炭109	SH2202	北東	下段		炭67		北東北	低床部		コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
40	炭110	SH2202	北東	下段		炭68		北東北	低床部		コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
41	炭120	SH2202	北東	下段		材21		北東北	低床部		コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
42	炭121	SH2202	北東	高床部壁		材22	高床部腰板	北東北	低床部	低床部壁板	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
43	炭33	SH2202	北東	高床部		炭29		北北西	高床部		コナラ属コナラ亜属コナラ節	
44	炭47	SH2202	北東			炭37	北東主柱	北	低床部	北主柱	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
45	炭69	SH2202	北東	高床部		炭44 (土器34内)		北北西	高床部		コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
46	炭76	SH2202	北東	下段		材4	東梁桁	北東	低床部	北東梁桁	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	No.19･No.47と同一
47	炭82	SH2202	北東	下段		材4	東梁桁	北東	低床部	北東梁桁	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	No.19･No.46と同一
48	炭83	SH2202	北東	下段		材5	北梁桁	北西	低床部	北西梁桁	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	No.28と同
49	炭84	SH2202	北東	高床部		炭56		北北西	高床部		コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
50	炭86	SH2202	北東	高床部		炭59 (蛸壺98の側)		北東北	高床部		コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
51	炭99	SH2202	北東	高床部		炭57　材15		北北西	高床部		コナラ属コナラ亜属コナラ節	
52	炭45	SH2205	南東		3層暗灰砂	炭					コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
53	炭46	SH2205	南東		地山流入 土上部	炭					コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
54	炭51	SH2206		高床部		ベッド炭2					コナラ属コナラ亜属コナラ節	
55	炭52	SH2206		高床部		ベッド炭3					コナラ属コナラ亜属コナラ節	
56	炭53	SH2206		高床部		ベッド炭4					コナラ属コナラ亜属コナラ節	
57	炭54	SH2206				床炭1					コナラ属コナラ亜属コナラ節	
58	炭55	SH2206				床炭2					コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
59	炭56	SH2206				床炭3					コナラ属コナラ亜属コナラ節	
60	炭57	SH2206				床炭4					コナラ属コナラ亜属コナラ節	
61	炭58	SH2206				床炭5					コナラ属コナラ亜属コナラ節 広葉樹（散孔材）	
62	炭66	SH2206				炭化柱	柱			柱	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
63	炭31	SH2204		SK22131		炭1					コナラ属コナラ亜属コナラ節	
64	炭43	SH2203		SK22191		炭1					コナラ属コナラ亜属コナラ節	
65	炭97	SH2202	北西			材9		西北西			コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
66	炭118	SH2202	南東			材17		東東北	低床部	低床部壁板	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
67	炭101	SH2202	南東			材19		東東北	高床部	垂木	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
68	炭119	SH2202	南東			材20		東東北	高床部	垂木	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
69	炭8	SH2202	南東			炭6		東南東	高床部		コナラ属コナラ亜属コナラ節	
70	炭126	SH2202		SK22317		炭79			高床部土坑		コナラ属コナラ亜属クヌギ節	

SH2202：弥生時代後期，SH2203～SH2206：弥生時代後期末～古墳時代初頭

第３表　遺構別種類構成

樹　種	上段：時代、中段：遺構名、下段：部位													合計
	弥生時代後期								弥生時代後期末～古墳時代初頭					
	SH2202								SH2203	SH2204	SH2205	SH2206		
	主柱	垂木	梁桁	板	棟木	低床部壁板	杭	その他	その他	その他	その他	柱	その他	
クヌギ節	2	8	3			2	1	21			2		1	40
コナラ節	2				1			9	1	1		1	7	22
ケヤキ				1										1
ツバキ属								1						1
広葉樹(散孔材)													1	1
合　計	4	8	3	1	1	2	1	31	1	1	2	1	9	65

1）主柱？および梁桁？は、それぞれ主柱と梁桁に含めて集計した。
2）集計に際しては、同一個体とされた複数の試料を１点として計算した。
3）部位については、第２表の名称（推定）を使用した。

の結果では常緑広葉樹の種類はツバキ属が確認されただけであり、その他は全て落葉広葉樹であった。

落葉広葉樹のうち、多用されていたクヌギ節やコナラ節には、コナラやアベマキなど萌芽再生力が高く、温暖な地域で二次林を構成する種が含まれている。このことから、当時の遺跡周辺の植生が自然撹乱ないし人為的撹乱の影響を受けた二次林であった可能性がある。大中遺跡における木材利用のあり方を検討する上で、当時の植生を復元することは重要な課題であり、大中遺跡周辺低地での古植生情報の蓄積が待たれる。

引用文献

林　昭三,1991,日本産木材　顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
伊東　隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
伊東　隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所.66-176.
伊東　隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
伊東　隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
伊東　隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
中村　弘,2001,兵庫県における樹種同定資料について.兵庫県埋蔵文化財研究紀要,創刊号,兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所,103-121.
Richter　H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編),2006,針葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東　隆夫・藤井　智之・佐野　雄三・安部　久・内海　泰弘（日本語版監修),海青社,70p.［Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（2004）*IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*］.
島地　謙・伊東　隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.
辻　康男・矢作　健二・辻本　裕也・田中　義文,2003,芦屋市に所在する考古遺跡の自然科学分析.「平成12・13年度国庫補助事業　寺田遺跡（第128地点）発掘調査報告書　－集落東端部の様相と知見－」,芦屋市教育委員会,p.135-163.
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編),1998,広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東　隆夫・藤井　智之・佐伯　浩（日本語版監修),海青社,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（1989）*IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*］.

第３節　大中遺跡出土土器の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社
矢作健二・石岡智武

はじめに

播磨町に所在する大中遺跡は、加古川下流域左岸に広がる「いなみの」台地のほぼ南端に位置する。いなみの台地は多数の海成または湖成の段丘群からなり、大中遺跡の位置する段丘はそれらの中で最も低位の段丘面群であり、約10万年前前後に形成された野口段丘面群に属する段丘に区分されている（太田ほか編,2004）。遺跡は、弥生時代中期から古墳時代中期におよぶ集落跡として古くから知られており、土器をはじめとする多種、多量の遺物が出土している。

本報告では、弥生時代後期後半および古墳時代初頭とされる遺構から出土した土器の材質（胎土）の特性を明らかにすることにより、各土器間、各器種間および各時期間での胎土の類似性あるいは特異性を見出し、大中遺跡から出土した土器の製作に関わる資料を作成する。

１．試　料

試料は、大中遺跡から出土した弥生時代後期後半とされる弥生土器片11点（No.1～11）と古墳時代初頭とされる土師器片5点（No.12～16）、および住居跡床面より検出された粘土塊から採取された粘土試料5点（No.17～21）の合計21点である。弥生土器の器種には、壺、無頸壺、甕、イイダコ壺があり、土師器の器種には高坏、鉢、手焙がある。なお、粘土試料のうち、No.17の出土した住居跡は弥生時代後期後半、他の4点の出土した住居跡は古墳時代初頭とされている。また、発掘調査所見では、これらの粘土塊は土器の材料であったと考えられている。

各試料の出土遺構、器種、部位などは一覧表にして第4表に示す。

２．分析方法

当社では、これまでに兵庫県内各地の遺跡より出土した土器の胎土分析には、松田ほか（1999）の方法を用いてきた。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、各粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いも見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。したがって、単に岩片や鉱物片の種類のみを捉えただけでは試料間の胎土の区別ができないことが予想される、同一の地質分布範囲内で作られ土器の胎土分析には、松田ほか（1999）の方法は適当である。以下に試料の処理過程を述べる。

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に0.03㎜の厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5㎜間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の３次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

第４表　胎土分析試料一覧および胎土分類

No.	報告No.	実測No.	出土遺構	位置	場所	土器番号	器　種	部　位	時　期	胎土分類 A 1 c	m	f	vf	csi	2 c	m	f	vf	csi
1	50	96	SH2202	北西	下段	土器043	壺	最大～底	弥生時代後期後半		●								
2	51	89	SH2202	南東	高床部	土器005	壺	最大～底	弥生時代後期後半		■								
3	53	85	SH2202	北西	高床部	土器044	壺	体部	弥生時代後期後半		●								
4	55	90	SH2202	北東	下段	土器036	壺	最大～底	弥生時代後期後半								■		
5	57	91	SH2202	北東	高床部	土器034	壺	底部	弥生時代後期後半				■						
6	62	77	SH2202	北東	下段	土器107	無頸壺	完形	弥生時代後期後半										■
7	64	99	SH2202	南西	高床部	土器002	壺		弥生時代後期後半							●			
8	65	98	SH2202	南西	高床部	土器003	壺	底～最大	弥生時代後期後半		■								
9	70	76	SH2202	北西		土器053	甕	肩から底	弥生時代後期後半		■								
10	82	81	SH2202	北東	高床部	土器098	イイダコ壺	完形	弥生時代後期後半		■								
11	63	93	SH2202	南東	下段	土器026	壺	肩	弥生時代後期後半			●							
12	127	16	SH2203		SK22191	土器70	高坏		古墳時代初頭			■							
13	149	5	SH2204		SK22131	土器12	鉢		古墳時代初頭		■								
14	152	2	SH2204		SK22131	土器13	鉢		古墳時代初頭							■			
15	154	47	SH2204		SK22131	土器3	高坏		古墳時代初頭		▲								
16	23	226	SX22002		SX22002		手焙		古墳時代初頭								●		
17	粘土	－	SH2202	北西	高床部	粘土5	粘土	－	弥生時代後期後半		■								
18	粘土1	－	SH2203		SK22191	粘土1	粘土	－	古墳時代初頭		▲								
19	粘土2	－	SH2203		SK22191	粘土2	粘土	－	古墳時代初頭		▲								
20	粘土3	－	SH2203		SK22191	粘土3	粘土	－	古墳時代初頭		▲								
21	粘土4	－	SH2203		SK22191	粘土4	粘土	－	古墳時代初頭		▲								

胎土分類の説明
　Ａ１：岩石片の種類構成が主にチャート・凝灰岩・流紋岩・花崗岩類からなる
　Ａ２：岩石片の種類構成はＡ１と同様であるが、火山ガラスを比較的多く含む
　砂全体の粒径組成においてピークを構成する粒径：ｃ；粗粒砂　ｍ；中粒砂　ｆ；細粒砂　vf；極細粒砂　csi；粗粒シルト
　砂全体の粒径組成においてピークを構成する粒径の割合：20≦●＜30%、30≦■＜40%、40%≦▲

３．結　果

観察結果を第５表、第７～９図に示す。鉱物片および岩石片の種類構成をみると、いずれの試料も石英の鉱物片が最も多く、これに次いで斜長石の鉱物片とカリ長石の鉱物片を比較的多く含む。これら以外の鉱物片は、角閃石、緑廉石、黒雲母などが、試料によっては微量認められる程度である。一方、岩石片では、いずれの試料にも、チャート、頁岩などの堆積岩類、凝灰岩と流紋岩・デイサイトとされる火山岩類、さらに花崗岩類（多結晶石英を含む）や火山ガラスなど多種の岩石片が混在する。

このような鉱物片および岩石片の種類構成は、これまでに当社が胎土分析を行った伊丹市所在の岩屋遺跡および小坂田遺跡、さらに播磨町に隣接する加古川市に所在する溝之口遺跡の各遺跡における弥生土器胎土の分類であるＡ類に分類される。また、Ａ類の中でも火山ガラスを比較的多く含む組成をA2

第5表　胎土分析結果(1)

No.	砂粒区分		砂粒の種類構成																					合計
			鉱物片								岩石片											その他		
			石英	カリ長石	斜長石	角閃石	酸化角閃石	緑廉石	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英	花崗岩類	花崗斑岩	破砕状花崗岩	結晶片岩	珪化岩	火山ガラス	植物珪酸体	
1	砂	細礫																						0
		極粗粒砂	6													4			1					11
		粗粒砂	12	5	1							1				3	1							23
		中粒砂	15	1	3						2				1	7								29
		細粒砂	15	3	1						1					1						2		23
		極細粒砂	16	2	2											1						3		24
		粗粒シルト	13		2																		1	16
		中粒シルト	15																				1	16
	基質																							283
	孔隙																							17
2	砂	細礫																						0
		極粗粒砂										1												1
		粗粒砂	8	2							1	2				1	1							15
		中粒砂	20	1	1						3	3		3	1	6						1		39
		細粒砂	8	2	2							1		1		5						2		21
		極細粒砂	4	2	4							1		1		1								13
		粗粒シルト	3	1	1																			5
		中粒シルト	5							1														6
	基質																							201
	孔隙																							14
3	砂	細礫																						0
		極粗粒砂												2	1									3
		粗粒砂	3	1	1						3			5	3	2	1	1	4		2			26
		中粒砂	5	2	3						3	2		5	3	4	2	1	1					31
		細粒砂	8		2							1		5		4								20
		極細粒砂	13	4	7	1				1						2								28
		粗粒シルト	13	1	4																		1	19
		中粒シルト	5	1	1																		1	8
	基質																							327
	孔隙																							13
4	砂	細礫																						0
		極粗粒砂																						0
		粗粒砂	6	2							1				2	1								12
		中粒砂	32	1	4						5			6		8	1					3		60
		細粒砂	29		4	1					4			1		11	1					11		62
		極細粒砂	19	1	4						1			1		5						2		33
		粗粒シルト	13		3	1				1													1	19
		中粒シルト	9	1	4																			14
	基質																							388
	孔隙																							13
5	砂	細礫																						0
		極粗粒砂												1	1									2
		粗粒砂										1		1	2									4
		中粒砂	1		1										1	1	1	2						7
		細粒砂	9	1	3				1		2	2	1	1	1	1	2							24
		極細粒砂	17	1	13			1			2	3			1	6								44
		粗粒シルト	21	1	18			1				1												42
		中粒シルト	7		9																			16
	基質																							474
	孔隙																							9
6	砂	細礫																						0
		極粗粒砂													1									1
		粗粒砂																1						1
		中粒砂													1									1
		細粒砂	2		1																	3		6
		極細粒砂	2								1											6		9
		粗粒シルト	3		1																	9		13
		中粒シルト	2																			2		4
	基質																							89
	孔隙																							6

第５表　胎土分析結果(2)

No.	砂粒区分		砂粒の種類構成																					合計
			鉱物片								岩石片											その他		
			石英	カリ長石	斜長石	角閃石	酸化角閃石	緑廉石	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英	花崗岩類	花崗斑岩	破砕状花崗岩	結晶片岩	珪化岩	火山ガラス	植物珪酸体	
7	砂	細礫																						0
		極粗粒砂									2	1			2									5
		粗粒砂	7								6			1	3	1	1					2		21
		中粒砂	10	2							5	2			3	10						5		37
		細粒砂	7	1							6				2	1	1					4		22
		極細粒砂	15	1	3	2		1			3					6						2		33
		粗粒シルト	20		6																			26
		中粒シルト	13		1					1														15
	基質																							478
	孔隙																							16
8	砂	細礫									1													1
		極粗粒砂	1																					1
		粗粒砂	2											1	1	2	2	1			1			10
		中粒砂	13	5	1						2	1		4	3	7	4	1						41
		細粒砂	13	1	7						6	1		1		1								30
		極細粒砂	10		4						4					3								21
		粗粒シルト	14		3																			17
		中粒シルト	5		2																			7
	基質																							295
	孔隙																							6
9	砂	細礫									1													1
		極粗粒砂									1													1
		粗粒砂	5								1	1				3	1							11
		中粒砂	15	2							7	1				9	3							37
		細粒砂	7	1	1						4					2								15
		極細粒砂	11		5						1					5						1		23
		粗粒シルト	11	1	3											1						1		17
		中粒シルト	6		1																			7
	基質																							238
	孔隙																							15
10	砂	細礫																						0
		極粗粒砂																						0
		粗粒砂	3									1		2		4								10
		中粒砂	27		2						3	1			2	11					1			47
		細粒砂	25	1	1						4					4								35
		極細粒砂	28		1						4					2						1		36
		粗粒シルト	9		1																			10
		中粒シルト	8																					8
	基質																							237
	孔隙																							25
11	砂	細礫																						0
		極粗粒砂									1							1			1			3
		粗粒砂	3	1							1	1		1	2	4	1							14
		中粒砂	14	1	3						6	1		1		12	4	1			1			44
		細粒砂	27	3	5						4	2		4		9	1	1						56
		極細粒砂	24	3	10	1		1			3			1		2								45
		粗粒シルト	20	2	4						2													28
		中粒シルト	8		2																			10
	基質																							385
	孔隙																							29
12	砂	細礫																						0
		極粗粒砂	1													1								2
		粗粒砂	11								1					3								15
		中粒砂	19	1							2					4	2					1		29
		細粒砂	25	2	1						5			2		4						2		41
		極細粒砂	15	1	1						4			1		2								24
		粗粒シルト	8	1	1						1												1	12
		中粒シルト	8		4																			12
	基質																							254
	孔隙																							18

第5表　胎土分析結果(3)

No.	砂粒区分		砂粒の種類構成																					合計
			鉱物片								岩石片											その他		
			石英	カリ長石	斜長石	角閃石	酸化角閃石	緑廉石	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英	花崗岩類	花崗斑岩	破砕状花崗岩	結晶片岩	珪化岩	火山ガラス	植物珪酸体	
13		細礫																						0
	砂	極粗粒砂	1																		1			2
		粗粒砂	12								3	1		1	2	6	1			1	1			28
		中粒砂	34	3	5						6	4			2	11					1	2		68
		細粒砂	28	1	5						4	3		1	1	12						1		56
		極細粒砂	20	1	4									1								1		27
		粗粒シルト	12		2																		1	15
		中粒シルト	4																					4
	基質																							350
	孔隙																							23
14		細礫																						0
	砂	極粗粒砂													1									1
		粗粒砂	4																					4
		中粒砂	6				1					1			2	2	1					2		15
		細粒砂	3												2	1						1		7
		極細粒砂	3	1	1											1						1		7
		粗粒シルト	4		1					1												3		9
		中粒シルト	1																					1
	基質																							50
	孔隙																							3
15		細礫																						0
	砂	極粗粒砂	1												1									2
		粗粒砂	18								4	1		2	2	4	1				1			33
		中粒砂	41	6	3	1					7	2		4	12	12	4			1	1	1		95
		細粒砂	14		3						5	1		2	4	10						3		42
		極細粒砂	7		2											3						1		13
		粗粒シルト	6		1																		1	8
		中粒シルト	5		1					1														7
	基質																							258
	孔隙																							25
16		細礫																			1			1
	砂	極粗粒砂									1			3										4
		粗粒砂	9								3	1		1	7		1				1			23
		中粒砂	4	2							3			1	3	8		1				1		23
		細粒砂	12	4	4					1	2	1		2	2	2	1					9		40
		極細粒砂	11	1	6							1			1	2						7		29
		粗粒シルト	11		5											1						2	1	20
		中粒シルト	8																					8
	基質																							262
	孔隙																							11
17		細礫																						0
	砂	極粗粒砂														1								1
		粗粒砂	14								6	1		1	4	5	1				1			33
		中粒砂	46								3	3		2	2	16					1			73
		細粒砂	16	3	2	1					2	1		1		13								39
		極細粒砂	26		3					1	1					4						1		36
		粗粒シルト	13		2																		1	16
		中粒シルト	2																					2
	基質																							307
	孔隙																							13
18		細礫																			1			1
	砂	極粗粒砂		1								1												2
		粗粒砂	15								3	2		1	3	5					3			32
		中粒砂	45	4	3						8	14		6	4	11	2	1			1			99
		細粒砂	25		1					1	2	3		1	1	2	1					1		38
		極細粒砂	9	1	1						1	1		1		1						2		17
		粗粒シルト	3	1	1																		4	9
		中粒シルト	2																					2
	基質																							387
	孔隙																							34

第５表　胎土分析結果(4)

No.	砂粒区分		砂粒の種類構成																					合計
			鉱物片								岩石片											その他		
			石英	カリ長石	斜長石	角閃石	酸化角閃石	緑廉石	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英	花崗岩類	花崗斑岩	破砕状花崗岩	結晶片岩	珪化岩	火山ガラス	植物珪酸体	
19	砂	細礫																						0
		極粗粒砂													1									1
		粗粒砂	19	3							4	6		2	5	14	4				1			58
		中粒砂	45	2	6						3	12			4	13	4				2			91
		細粒砂	11	1	2	2					3	3			1	5								28
		極細粒砂	10		2	1																1		14
		粗粒シルト	4		1	1																	1	7
		中粒シルト	1																					1
	基質																							268
	孔隙																							28
20	砂	細礫																						0
		極粗粒砂	3								1													4
		粗粒砂	13	1							1	11		2	6	9					1			44
		中粒砂	47	3	3						3	14		7	3	24					7	1		112
		細粒砂	5	3	5							2				3						1		19
		極細粒砂	3	1	5																	1		10
		粗粒シルト	3		1	1																	2	7
		中粒シルト	3		1																			4
	基質																							326
	孔隙																							64
21	砂	細礫													1									1
		極粗粒砂	1																		2			3
		粗粒砂	18		1						1	2		1	4	8	1	1			4			41
		中粒砂	43	2	2							14		2	2	21	2				5	1		94
		細粒砂	10	2	5							2				6	3					2		30
		極細粒砂	12	1	2	2																1		18
		粗粒シルト	3		2	1																	1	7
		中粒シルト	5		1																			6
	基質																							325
	孔隙																							50

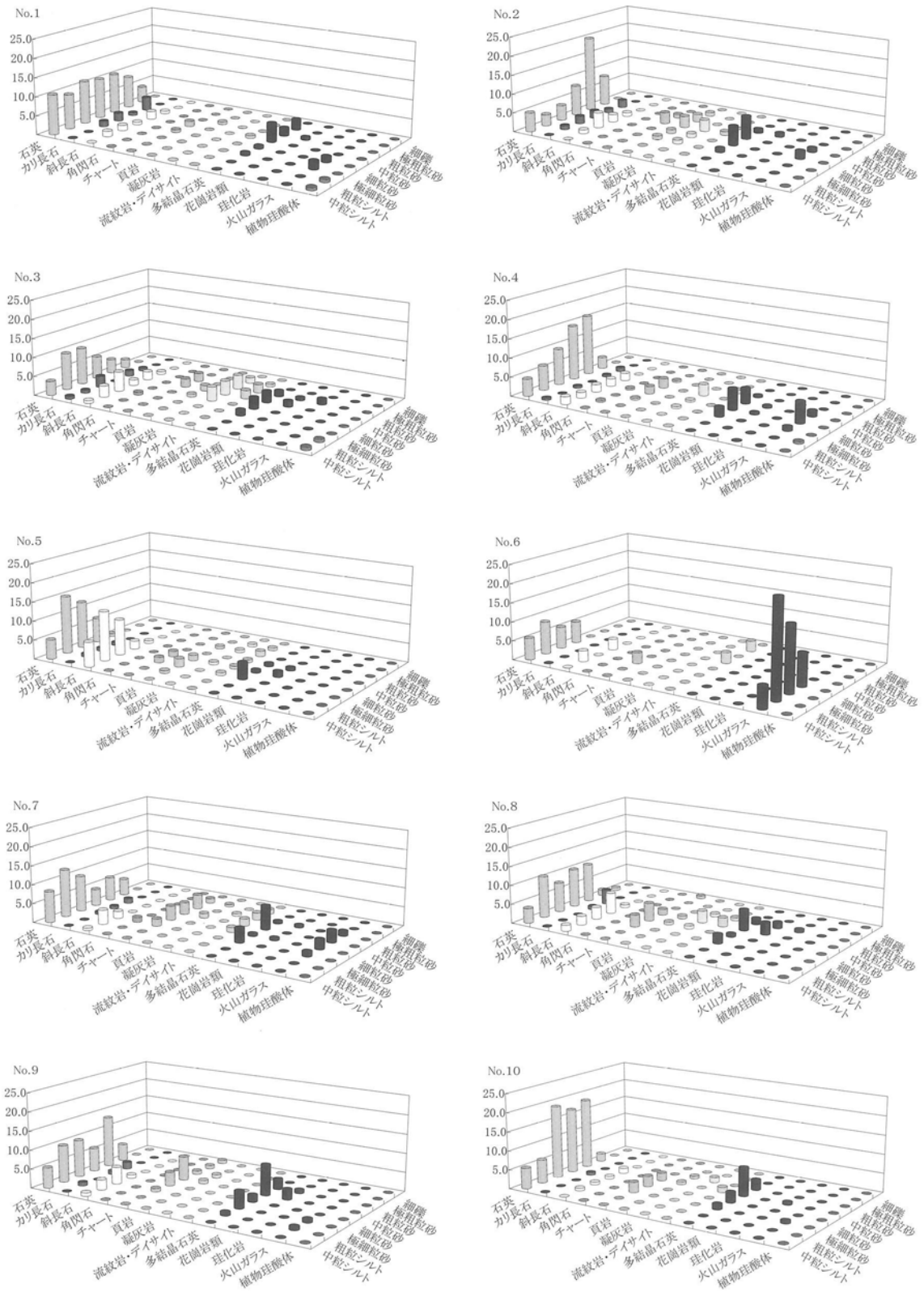
類とし、そうでないものをA1類とした。今回の試料では、砂粒中における火山ガラスの量比が５％を超える、No. 4、6、7、14、16の５点がA2類に分類され、他の試料は粘土試料も含めてA1類に分類される。

各試料の粒径組成（第７図）をみると、鉱物片・岩石片の種類構成ほど一様ではない。ヒストグラム全体の形状は、基本的には山形であるが、試料による違いの主なものとして、山のピークとなる粒径、ピークの高さ、および山の裾野の広がりかたをあげることができる。ここでは、粒径組成の状況を、ピークとなる粒径とその高さ（％値）で表記する。なお、高さについては、20%以上30%未満、30%以上40%未満、40%以上の３種類に分けることにした。この場合、20%以上30%未満の試料のヒストグラムはピークのなだらかな山形を示し、40%以上の試料のヒストグラムはピークの鋭い山形、30%以上40%未満はその中間的な形状となっており、同時に山形の裾野の広がりかたも表されている。

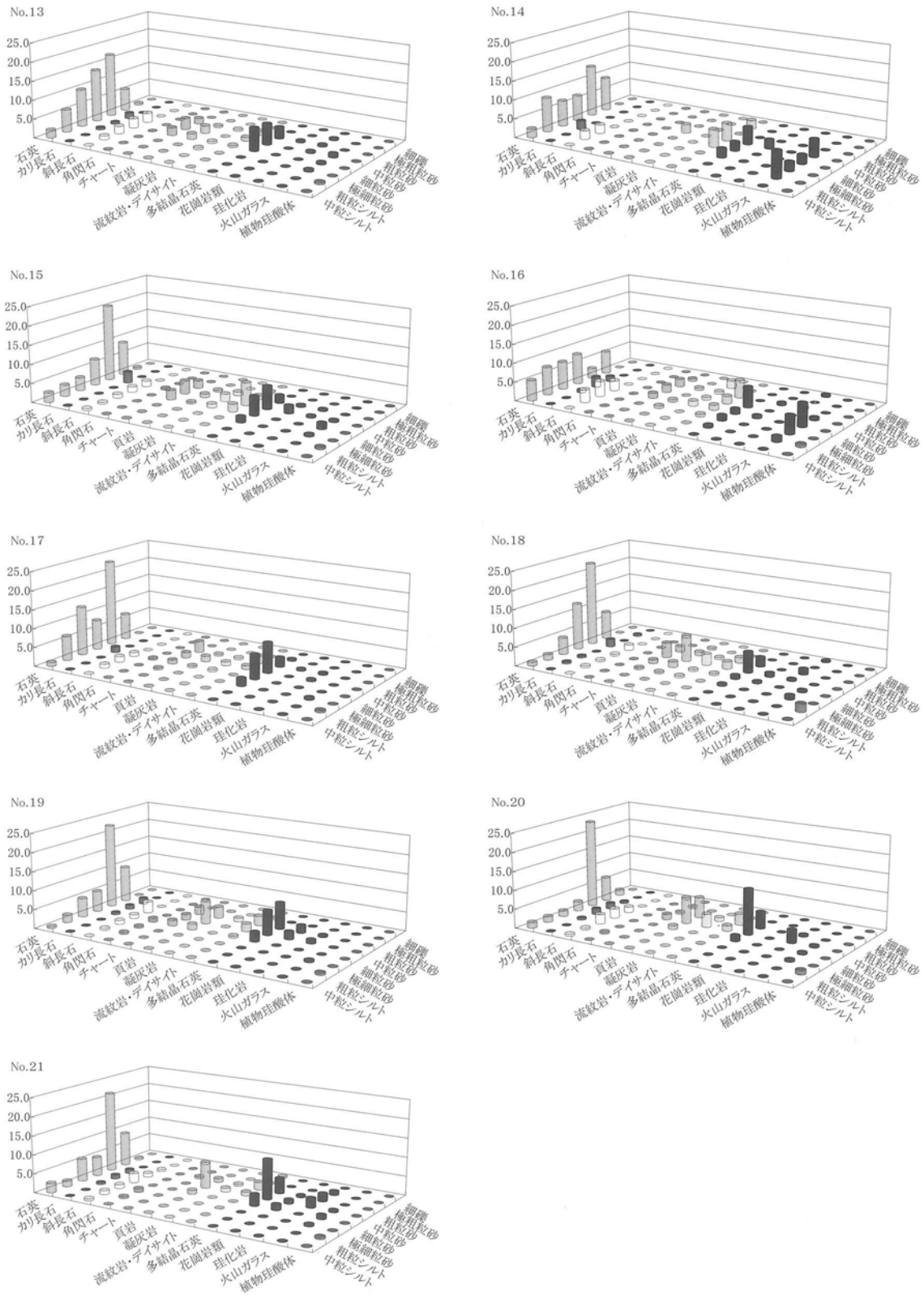
前述した鉱物片および岩石片の種類構成による分類と上述の粒径組成の状況を表記した結果を表１に併記する。この結果を土器の器種別でみると以下のようになる。

1）壺

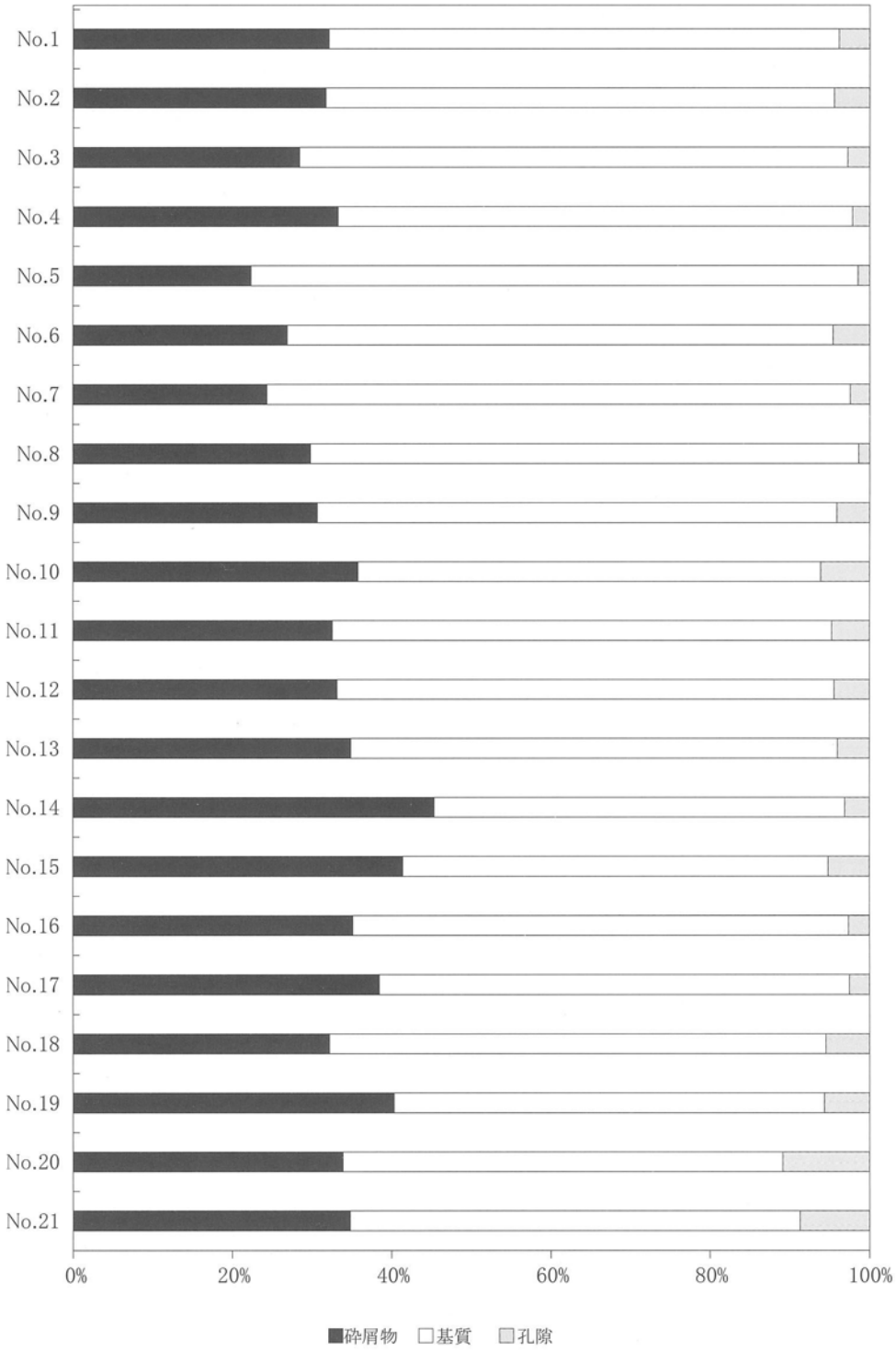
８点の試料のうち、No. 4と7の２点はA2類、他の６点はA1類である。粒径組成では、中粒砂にピークのある試料が多く、No. 1～3、7、8の５点である。さらにこれらのうち、No. 1、3、7



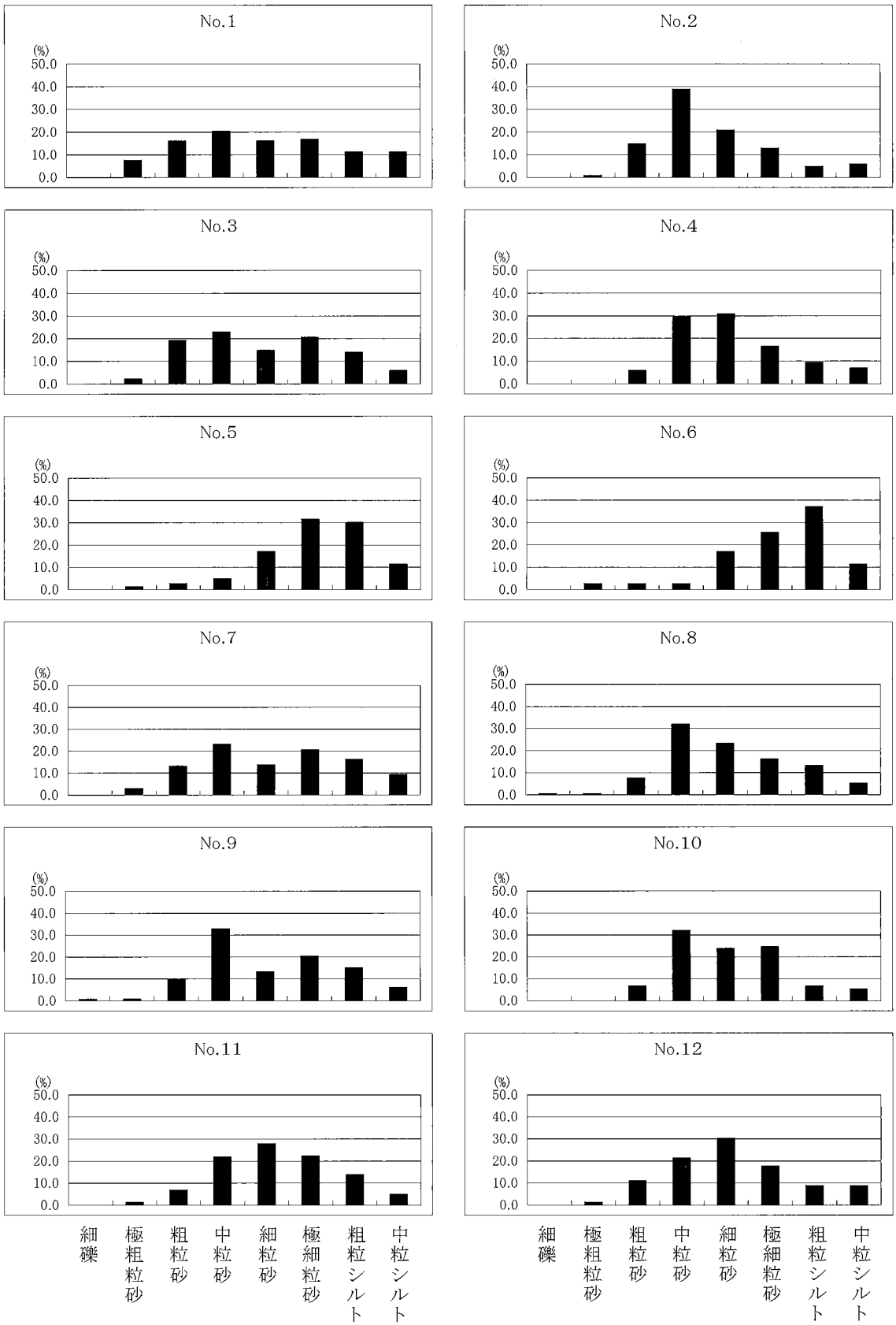
第７図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(1)



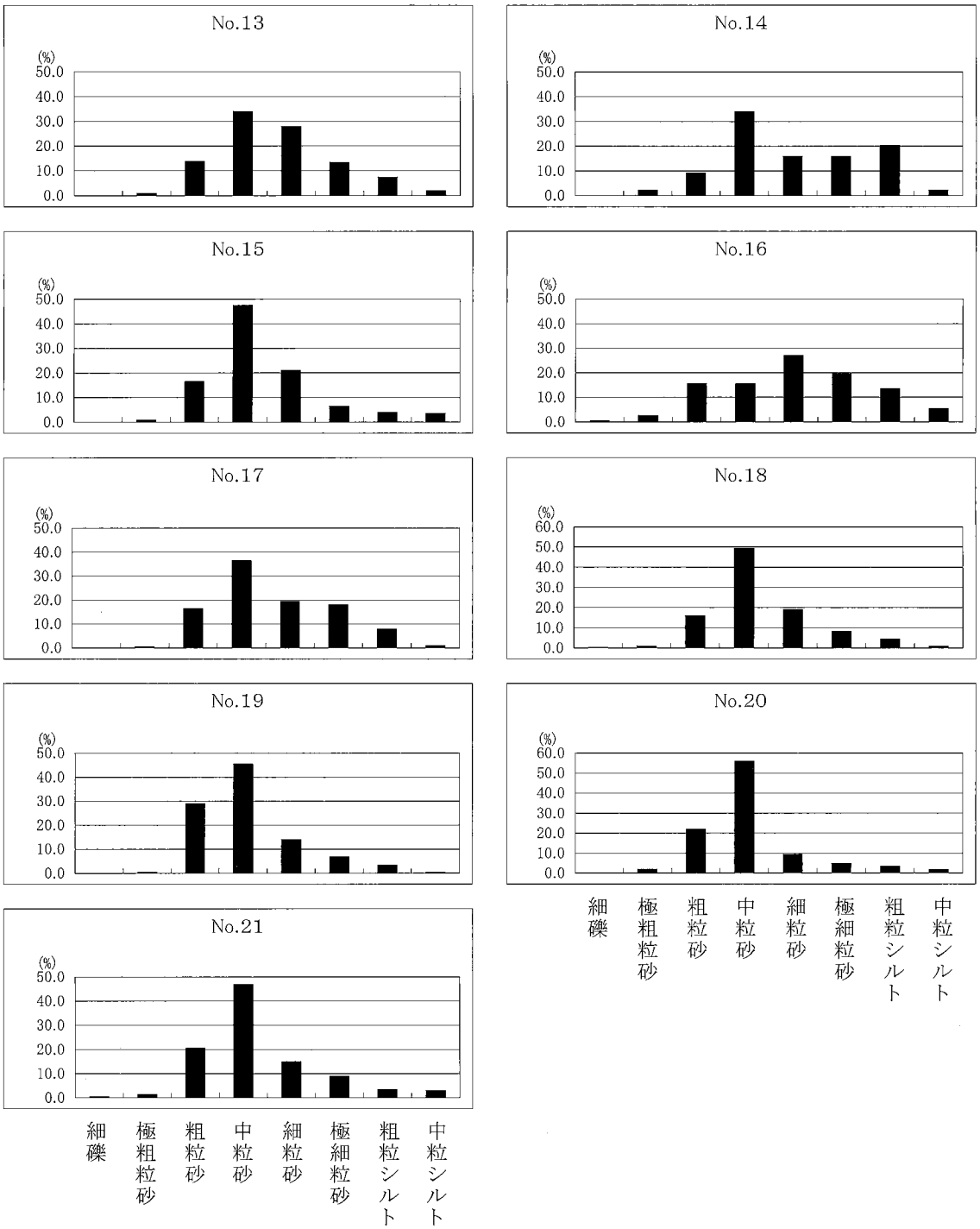
第７図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(2)



第８図　孔隙・砂粒・基質の割合



第９図　胎土中の砂の粒径組成(1)



第９図　胎土中の砂の粒径組成(2)

の３点は、ピークの高さが20%以上30%未満であり、No. 2、８は30%以上40%未満に分かれる。No. 4と11はともに細粒砂にピークがあるが、ピークの高さは、前者が30%以上40%未満、後者が20%以上30%未満である。No. 5は、今回の試料の中では唯一、極細粒砂にピークのある試料である。

２）無頸壺

No. 6の１点のみであるが、A2類に分類され、粒径組成においては、今回の試料で唯一、粗粒シルトにピークがある。

３）イイダコ壺

No.10の１点のみであるが、上述した多くの壺と同様にA1類に分類され、粒径組成においては、中粒砂にピークがあり、ピークの高さは30%以上40%未満である。

４）甕

No. 9の１点のみであるが、上述した多くの壺と同様にA1類に分類され、粒径組成においては、中粒砂にピークがあり、ピークの高さは30%以上40%未満である。

５）高坏

SH2203出土のNo.12とSH2204出土のNo.15の２点あるが、ともにA1類に分類される。粒径組成では、No.12は、今回の試料では少数である、細粒砂にピークのある組成を示す。また、No.15は、ピークの粒径は、今回の試料で最も多く認められた中粒砂であるが、その高さは、土器試料の中では唯一、40%以上を示す。

６）鉢

No.13と14の２点であり、前者はA1類、後者はA2類である。粒径組成は、ともに中粒砂にピークがあり、その高さも30%以上40%未満である。

７）手焙

No.16の１点のみであり、A2類に分類される。粒径組成は、今回の試料では少数である、細粒砂にピークを持つ組成を示し、その高さは20%以上30%未満である。

８）粘土

No.17～21までの５点あるが、いずれもA1類に分類される。粒径組成は、ともに中粒砂にピークのある組成であるが、その高さは、No.17のみ30%以上40%未満であり、他の４点は40%以上である。

４．考　察

（１）地質学的背景と胎土

大中遺跡の所在するいなみの台地は、前述したように主に第四紀更新世に形成された海成段丘からなる。おそらく、これらの台地を構成する砕屑物は、加古川水系により供給されていると考えられる。猪木（1981）や日本の地質「近畿地方」編集委員会編（1987）および尾崎ほか（1995）などによれば、加古川下流域から中流域においては、いなみの台地の対岸の右岸側に相生層群と呼ばれる流紋岩質やデイサイト質の溶岩および火砕岩（凝灰岩）からなる地質の山地が広がり、また、相生層群が広がる山地には白亜紀～古第三紀に貫入した播磨花崗岩類の岩体が点在する。さらに加古川の上流域の山地には、チャート、砂岩、頁岩などの堆積岩からなる丹波帯と呼ばれる地質が分布する。また、加古川中流域の主要な支流である美嚢川の上流域（志染川流域）には、流紋岩質やデイサイト質の溶岩および火砕岩（凝灰岩）からなる有馬層群や六甲花崗岩が分布し、さらに丹波帯の堆積岩類もブロック状に点在している

(藤田・笠間,1983)。

したがって、加古川下流域の堆積物中には、これらの地質に由来する岩石片や鉱物片が混在していると考えられる。その状況は、今回の分析における胎土A類の鉱物片・岩石片種類構成とほぼ一致することから、大中遺跡出土土器における胎土A類は、加古川下流域の堆積物を材料としている可能性がある。また、大中遺跡住居跡出土の粘土塊は、加古川下流域の堆積物から採取されたものと考えられる。なお、A類の特徴の一つである火山ガラスは、いなみの台地の段丘堆積物あるいは丘陵を構成する大阪層群中に挟まれる未固結のテフラ層に由来すると考えることができる。A1類とA2類の違いは、加古川下流域内における採取地あるいは採取層位の違いに起因するものであろう。

(2) 東播磨平野における土器の製作事情

結果では、器種別に胎土の状況を述べた。前述したように1)壺～4)甕までは弥生時代後期後半の土器であり、5)高坏～7)手焙は古墳時代初頭の土器である。前者のグループと後者のグループの胎土を比較した場合、両者ともにA1類が多く、少数のA2類が混在するという状況は変わらない。また、粒径組成を見ても、両者ともに中粒砂をピークとする試料が多い傾向が窺える。これらの状況から、大中遺跡では、弥生時代後期後半と古墳時代初頭との間で土器の胎土に大きな変化はなかった可能性がある。ただし、弥生時代後期後半の土器には極細砂や粗粒シルトをピークとする胎土があることや古墳時代初頭の土器にはピークを構成する中粒砂の割合が40%以上のものがあることなどは、両時期間の相違点になる可能性がある。

各器種と胎土との間には明瞭な対応関係は認められないが、無頸壺や高坏および手焙の胎土が、いずれもA2類または特異な粒径組成を示すことなどは、器種の違いに起因する製作事情の違いが窺える。その一方で、イイダコ壺の胎土は他の壺のそれと大きく異なるものではなかった。弥生土器のイイダコ壺については、至近の加古川市に所在する溝之口遺跡出土品の胎土分析も行っており、その試料では、A1類ながらも粒径組成にその特異性が指摘され、イイダコ壺には他の弥生土器とは異なる製作事情があったと考えた。しかし、今回の結果は、その推定を支持するものではなく、他の弥生土器と同様の製作事情が推定される。遺跡によってイイダコ壺の製作事情が異なっていた可能性もあり、周辺地域における弥生土器のイイダコ壺の分析例を得た上で検討する必要がある。

住居跡床面から出土した粘土塊と土器との関係については、いずれの粘土塊も、今回の土器試料の中で最も多かったA1類かつ中粒砂をピークとする粒径組成という胎土と同様の特性を示すことから、土器の原材料であった可能性は高いと言える。さらに、古墳時代初頭とされる粘土1～粘土4の中粒砂の割合が40%以上という特性が、古墳時代初頭の土器(No.15)に認められ、弥生時代の土器には認められないということも、土器原材料であった可能性を支持する結果と見ることができる。

なお、今回と同様に古墳時代初頭の住居跡床面から出土した粘土塊と土器の分析による比較を京都市に所在する遺跡で行った例がある(矢作,2006)が、そこでは、鉱物片・岩石片の種類構成は一致したものの、粒径組成のピークとなる粒径に違いが認められた。今回の結果は、この例よりもさらに原材料であった可能性が高いと言うことができる。

ところで、溝之口遺跡では、弥生時代後期の土器について5点の胎土分析を行っている。5点ともにA1類に分類されたが、粒径組成では、3点が細粒砂にピークを持ち、2点が極細粒砂にピークを示した。5点だけの例ではあるが、大中遺跡出土弥生土器の胎土と異なる点として、中粒砂をピークとする試料が認められないことがあげられる。すなわち、溝之口遺跡と大中遺跡との弥生土器胎土の違いは、粒径

組成に表れている可能性がある。この結果からは、直線距離にして５㎞程度離れた遺跡間では、土器の製作事情が異なっていた可能性のあることが示唆される。

今後も今回と同様の分析方法により、兵庫県内各地における土器の胎土分析事例を蓄積し、解析することができれば、地域ごとの製作事情に関わる資料が得られることと期待される。

引用文献

藤田和夫・笠間太郎,1983,神戸地域の地質.地域地質研究報告（５万分の１図幅),地質調査所,115p.
猪木幸男,1981,20万分の１地質図幅「姫路」.地質調査所.
松田順一郎・三輪若葉・別所秀高,1999,瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的による－.日本文化財科学会第16回大会発表要旨集,120-121.
日本の地質「近畿地方」編集委員会,1987,日本の地質６　近畿地方.共立出版,297p.
太田陽子・成瀬敏郎・田中真吾・岡田篤正編,2004,日本の地形６　近畿・中国・四国.　東京大学出版会,383p.
尾崎正紀・栗本史雄・原山　智,1995,北条地域の地質.地域地質研究報告（５万分の１図幅),地質調査所,100p.
矢作健二,2006,岩倉忠在地遺跡出土土器の胎土分析.岩倉忠在地遺跡　同志社小学校建設に伴う発掘調査.同志社大学歴史資料館,86-106.

第5章　総　括

第1節　竪穴住居跡 SH2202 の構造復原と空間復原

大中遺跡第22次調査の竪穴住居 SH2202 は焼失住居として炭化材や土器などが比較的良好に残っていた。このため炭化材を元に火災の状況を明らかにした上で、竪穴住居の構造を復原するとともに遺物の出土状況から竪穴住居内の空間を復原してみることにする。

大中遺跡の今までの調査においても焼失住居が調査されているが、第1～3次調査の7－B号住居などと同様に炭化材の残存状況が非常に良好な竪穴住居といえる。

火災の状況と季節

竪穴住居の火災の原因は、従来から不意の失火によるものと故意によるものとが考えられている。ここで報告する竪穴住居 SH2202 は、土器などの遺物が良好に残っているため、不意の（失火による）火災であると考えられる。

焼け方を比較すると主柱4本、梁桁3本、棟木、垂木などが残っているが、焼けの状況によって痕跡をとどめていないものも多い。

北主柱と東主柱は焼け細りで中心部まで炭化し残っている。西主柱と南主柱は中心部分が僅かに炭化し、周りは灰となっており焼損が著しいことがわかる。

梁桁は、北東側の炭化材4は全体が残っており、北西側の炭化材5と南東側の炭化材10が南西側は残りが悪く、南西梁桁は残っておらず、焼損が著しく焼けが強いため灰化した可能性が高い。

北側と東側の梁桁は結縛していた紐などが火災初期あるいは中期などの早い段階に焼き切れ、落ちてしまったため、炭化して残ったと考えられる。

低床部と高床部との境は北東面の板材のみ炭化して残存している。他は残存していないため焼損が著しいことがわかる。

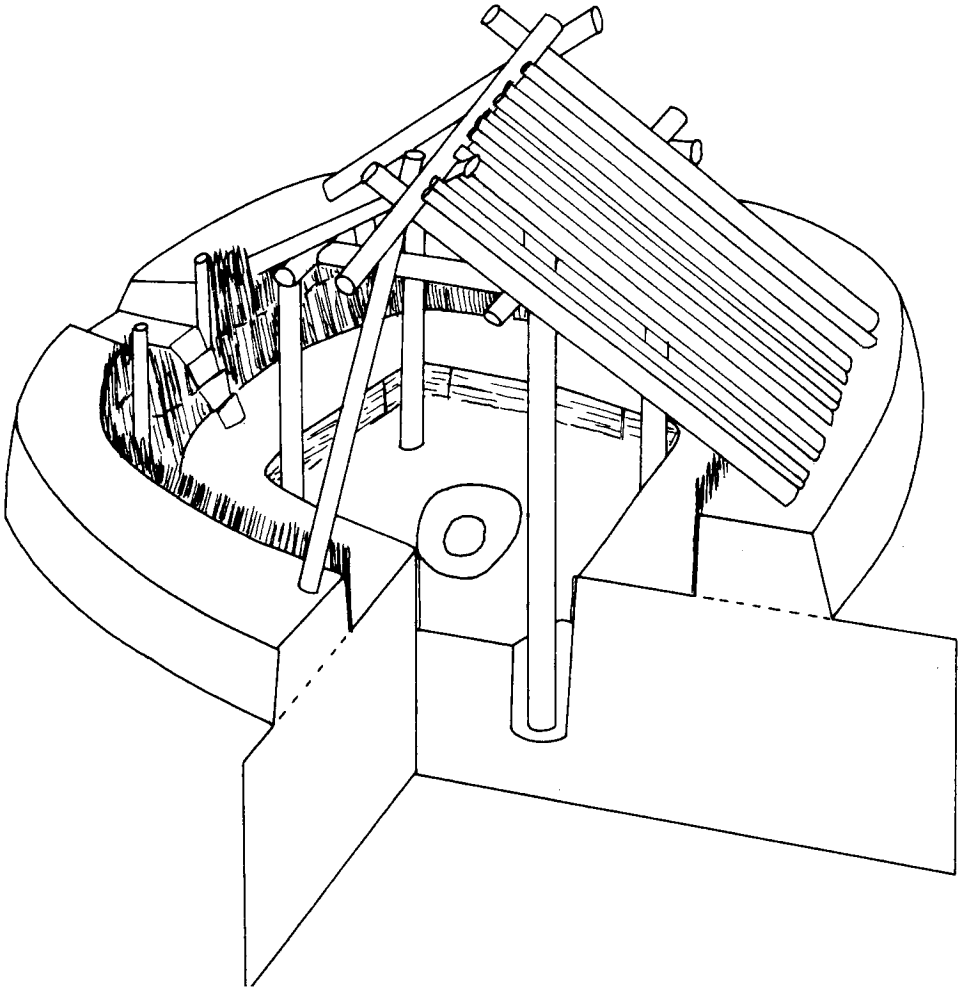
以上、建築材の焼損状況から見ると南西側が著しく焼けていることがわかる。ただし、焼損状況と火元との関係は一概にはいえないようである。

火災の時期を推定することは非常に困難であるが、後で述べるイイダコ壺の出土状況から、イイダコ壺が小屋裏に保管されたと考えられ、イイダコ漁をしていない季節と推定できる。したがって現在の漁期は、12月から4月の農閑期であり、この期間にイイダコ壺を使用していたと考えれば、保管していた時期は5月から11月の夏から秋にかけてであると想定できる。

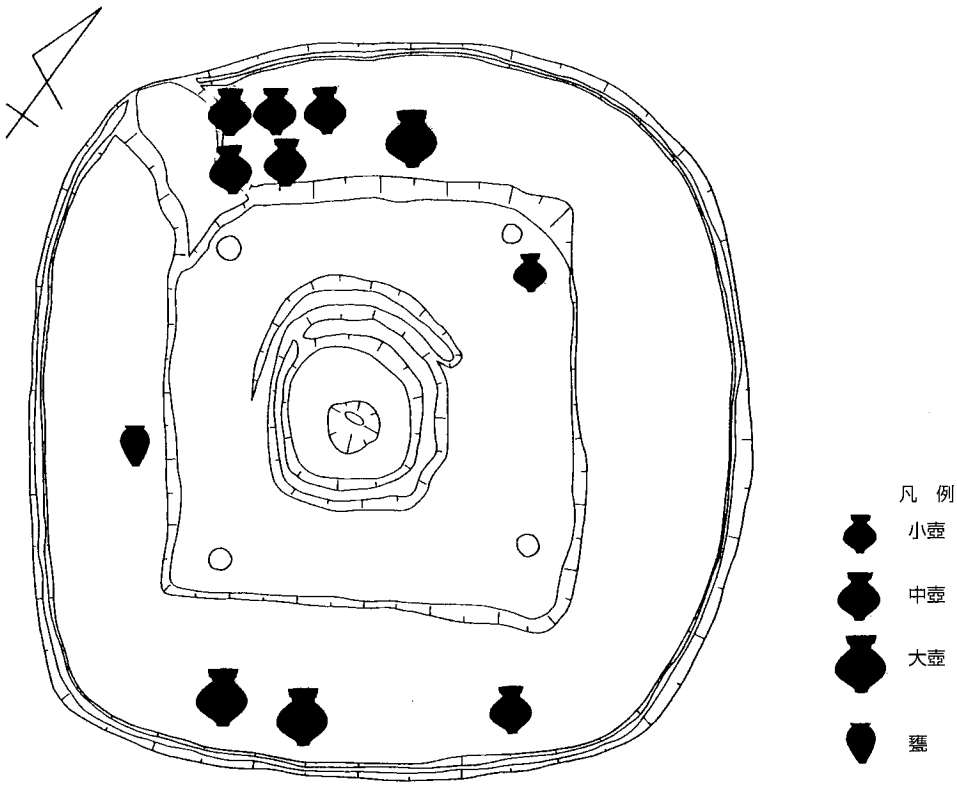
竪穴住居の構造復原（第10-1図）

炭化材の出土状況から構造を復原する。

竪穴住居を構築している建築材は樹種同定の結果、コナラ属コナラ亜属コナラ節とクヌギ節を使用していることが判明した。柱や桁梁などの太い部材と垂木などの比較的細い部材両方にそれぞれの樹種を使用していることから、伐採した材木を太さに合わせて効率的に利用していることが考えられる。竪穴住居の構築材の樹種同定の調査は少ないが、加古川市溝之口遺跡の竪穴住居の垂木にコナラ属コナラ亜属クヌギ節が用いられており、加東市下三草諏訪ノ下遺跡で竪穴住居内からコナラ属コナラ亜属クヌギ節が出土し、神戸市西区吉田南遺跡でコナラ属コナラ亜属が出土しているなど、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての播磨地域では竪穴住居の構築材として多く用いられている。コナラ属は二次林の広葉



第 10-1 図　竪穴住居跡 SH2202 復原模式図



第 10-2 図　竪穴住居 SH2202 土器復原位置図

樹高木材で花粉分析を実施していないため当時の周辺の植生は明らかでないが、近距離材と考えられる。

主柱は４本存在しており、柱痕跡も地中部分は火を受けなかったため腐朽しているが、地上部は焼け細りで炭化し直立している。

主柱と主柱を結ぶ間に存在する壁と並行の太い炭化材４・５・10は太さと位置関係から桁梁材と考える。いずれも直下に落下しているため、柱と桁梁との取り合いは又部の枝が細かったか紐による結縛のみの可能性が高い。炭化材４に並行している炭化材３は中心からずれてはいるが棟木と考える。

高床部を中心に壁から中心部に向かって放射状に存在する炭化材は太いものと細いものが存在する。太い炭化材７・６・15・20などは棟木まで達するような垂木が考えられる。細い炭化材19・18などは垂木と考える。細い垂木の残存状況はあまり良好ではないが、炭化材19や炭化材20の出土状況から、本来は20㎝間隔で渡していたものと考えられる。なお、竪穴住居内周囲の焼土などの堆積状況は屋根土が落ち込んだのか草壁を含む周提が流入したのかは明らかではない。したがって土屋根であったかどうかは判断がつかない。

低床部と高床部の境は北東部で検出した様に板材を横に使って細い杭を打ち土留め兼壁としていた。高床部の壁は周壁溝内に材２など杭の痕跡が残り、北部を中心とした周壁溝内には炭化した草本科類が存在していたことから考え会わせると杭と草壁を組み合わせた壁構造が考えられる。

竪穴住居の空間復原（第10-2・11図）

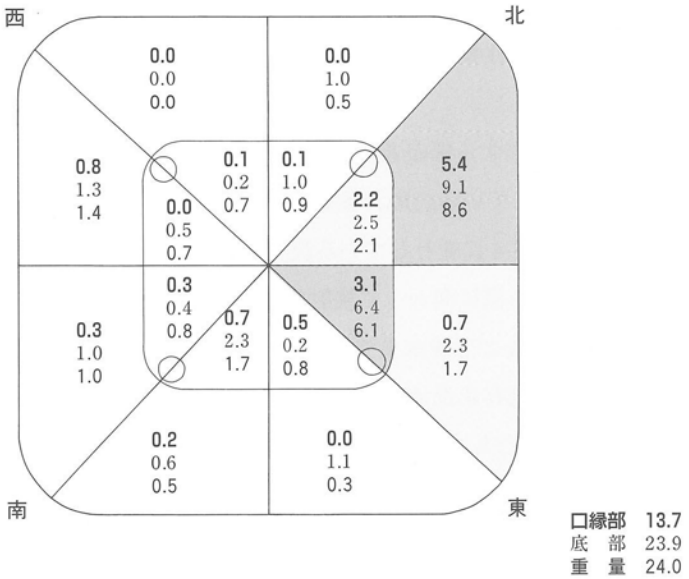
遺物の出土状況から空間を復原する。

竪穴住居の低床部の南主柱と中央土坑との間には台石が置かれており、周辺は作業空間として復原できる。西南西高床部の壁際には粘土塊が置かれており、この傍らには床面にケヤキの板材が置かれている。南西南高床部には炭化したツバキが出土しており形状は明らかではないが工具の柄などが想定できる。この周辺の高床部には甕が、中央土坑の傍らにも甕が置かれていることとも会わせて、南西高床部と低床部を含めて作業空間が推定できる。

南南東高床部の壁際には大形壺（64・65）が底部を接して出土したため、中身は不明ながら大形壺の置き場所として復原できる。東南東高床部には中形壺（51）と甕（71）が底部を接して出土したため、復原できる。南東高床部は大形壺などの保管空間として推定できる。

北西部分の低床部から高床部にかけては６個体ほどの中形の壺が中心に出土しているが、接合状況や出土状況から本来は高床部に置かれていたか、小屋裏に吊るされていたか、棚などに置かれていたものが転げ落ちた状態と考えられる。このことから北西高床部は中形壺を中心とした保管空間が推定できる。

イイダコ壺は住居内の平面的出土位置を示したものが第11図である。これはイイダコ壺の全破片を口縁部の残存率、底部の残存率、重量により個体数を復原した。他に紐孔の数も数えた。なお、詳細な出土位置が不明なものは該当する地区で出土している復原個体数の比例配分を行い、該当する地区に加えた。重量はSH2202から出土した完形のイイダコ壺３個の１個あたりの重量の平均値192gを基準として、各地区の出土重量を除して個体数を復原した。この分析の結果、全体の復原個体数は、口縁部による復原個体数は13.7個、底部による復原個体数は23.9個、重量による復原個体数は24個になった。ちなみに紐孔は破片も含めて31個存在した。総対数が非常に少ないため僅かな違いで大きく変動するが、量の夥多は比較的まとまっており、底部が厚いことが原因だと考えられるが、底部と重量による分析結果が比較的近かった。これによると北東北高床部と東東北低床部が際だって多く、次に北東北低床部と東東北高床部が続いており、周辺は少なくなっている。



第 11 図　竪穴住居 SH2202 イイダコ壺地区別数量

また、破片の点数を数えており、復原出土個体数が多い北東北高床部と北東北低床部の完形率は非常に高く、その周辺も比較的高い。北東北から離れるにしたがって、完形率は低くなっている。

以上のように、地区別復原個体数の量から北東部の高床部と低床部付近に保管されていたと考えられ、地区別の完形率から火災時に高所から落下して飛び散った状況が考えられる。したがってイイダコ壺は北東部の高床部と低床部との境あたりの小屋裏に保管されていたことが想定できる。

比較的大形の砥石 S2 は、東東北高床部から大きな破片が出土し、東東北高床部から北東北高床部の壁際にかけての 1.3m × 0.8m の範囲に小破片 226 点が飛び散っていた。破損する前の砥面は黒色化しており、破損後の割れ面は新鮮であり、急激な温度変化よるものと考えられる。砥石は高い位置にあったものが早い段階に割れ、飛び散った可能性がある。

東北部の小屋裏はイイダコ壺など季節的に使用するものを引っ掛けて保管していたことが想定できる。

竪穴住居の上部の復原については非常に難しいが、吊り棚などが推定できる。時期は異なるが神戸市西区玉津田中遺跡からは木を組み合わせた吊り棚状木製品が出土している。同様の木製品は島根県布田遺跡や鳥取県青谷上寺地遺跡からも出土しており、竪穴住居内の施設としての可能性が想定できる。

なお、一定以上の大きさを持つ出土土器の器種構成は、壺・甕・イイダコ壺であり、比率は 10：3：16 である。イイダコ壺は海浜部の遺跡の特性を表しているが、壺の比率が非常に高いことや鉢や高坏などの供膳具が全く出土していないという特徴がある。これは竪穴住居の使われ方の特徴なのかもしれない。

註

・播磨町教育委員会『播磨大中遺跡の研究』　1990年
・焼失状況や火災の専門的なことについては三木市消防本部の大村喬氏にご教示頂いた。
・兵庫県教育委員会『溝之口遺跡』兵庫県文化財調査報告第309冊　2006年
・加東郡教育委員会『下三草・諏訪ノ下遺跡』加東郡埋蔵文化財報告12　1991年
・神戸市教育委員会『吉田南遺跡　第17・18次調査　発掘調査報告書』　2006年
・兵庫県教育委員会『玉津田中遺跡－第５分冊－』兵庫県文化財調査報告第135-5冊　1996年
・島根県教育委員会「布田遺跡」『国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』1983年

第2節　壁際土坑の敷き石（第12図）

竪穴住居における敷き石を持つ壁際土坑は、昭和40年度の大中遺跡第7次調査の第34号竪穴住居址で初めて検出された。その後、約40年間多くの竪穴住居の調査が行われたにもかかわらず、類例は出てこなかった。今回報告する第22次調査において新たに2棟の壁際土坑に敷き石を持つ類例が加わった。また、平成16年には神戸市西区の吉田南遺跡においても1棟見つかっている。

大中遺跡

大中遺跡では第7次調査第34号住居と今回報告する竪穴住居SH2201とSH2203の3棟の調査が行なわれている。いずれも南端に位置する喜瀬川に近い場所にまとまって存在している。

第7次調査第34号住居（第13図）

平面形は6.78m × 6.45mの方形で床面積は43.7㎡であり、屋内施設は高床部・周壁溝・主柱穴・中央土坑・壁際土坑がある。

壁際土坑部分を除いて周囲には高床部が存在している。周壁溝は壁際土坑側の2/3に廻っており、壁際土坑に接続している。土坑は92㎝× 178㎝で方形、下部は44㎝× 58㎝の円形で深さは58㎝ある。上部の92㎝× 178㎝には礫を敷き詰めている。

SH2201

平面形は5.85 m × 5.90 mの方形で、床面積は34.5㎡であり屋内施設は高床部・周壁溝・主柱穴・中央土坑・壁際土坑がある。ただ高床部や周壁溝はほとんど残っていない。

壁際土坑は東壁中央に接して存在している。土坑は105㎝× 120㎝程度で、深さは最大で47㎝を測る。礫が存在しない部分もあるが、75㎝× 90㎝の方形に近い範囲に敷き詰めている。

SH2203

平面形は6.5m × 6.2mの方形で、床面積は40.3㎡であり、屋内施設は高床部・周壁溝・主柱穴・中央土坑・壁際土坑がある。

壁際土坑は南東壁中央に接して存在し、周壁溝が接続している。土坑は床面から続く周囲の部分と中央の深くなる部分とがある。周囲は160㎝× 100㎝の範囲に小亜円礫を敷き詰めており、残りのよい西南側は土坑中央部に向って約18°傾斜している。土坑中央部は東北－西南55㎝、南東－北西35㎝の隅丸長方形で、深さ85㎝を測り直線的に掘り込んでいる。

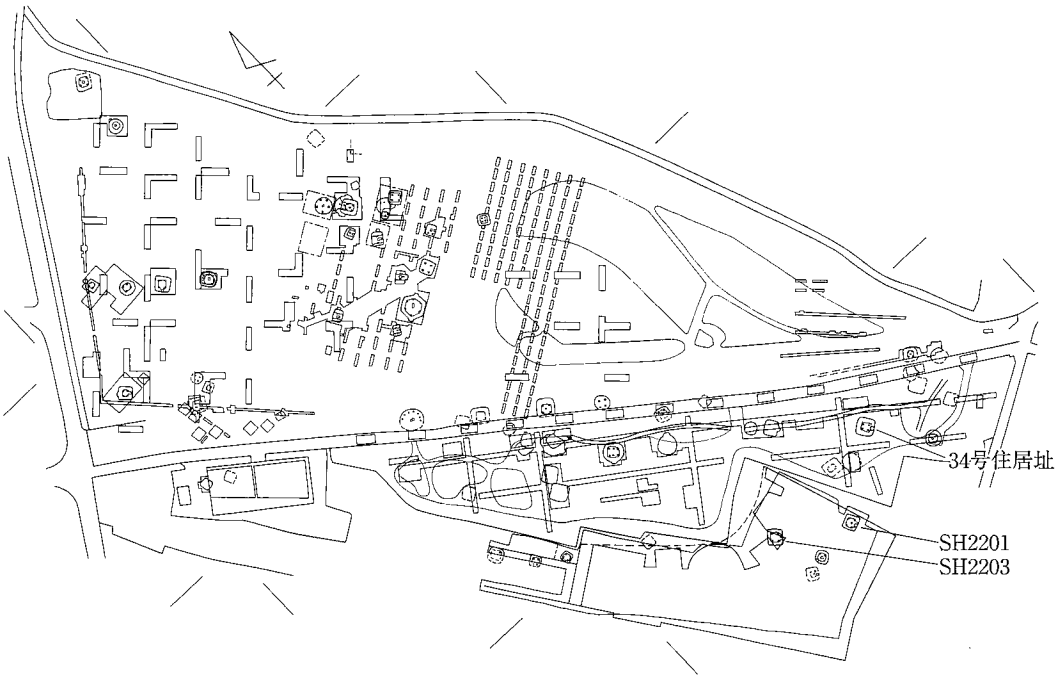
以上、大中遺跡での敷き石を持つ壁際土坑を有する竪穴住居の概要である。また敷石を持つ壁際土坑を有する竪穴住居の分布は喜瀬川沿いの南端部に位置しており、いずれも高床部を持つ方形竪穴住居であり、壁際土坑は地形的に低い南側に存在している共通性がある。

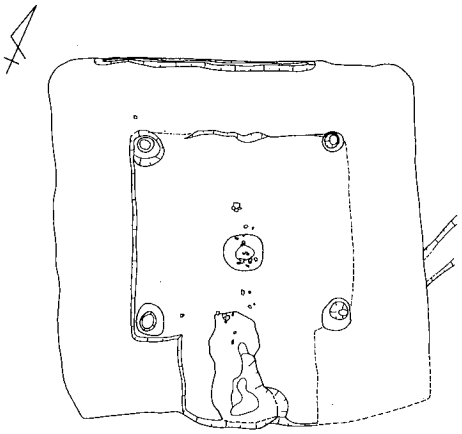
壁際土坑の構造は上部と下部に分かれ、上部は中心に向かって緩やかな傾斜をしており、いったん掘削した後、石を敷き詰めている。

下部は急な傾斜で50㎝前後～85㎝と深い形態をしている。埋土が徐々に埋まった堆積状況や土器の出土状況から、使用されていた当時は水がたまっていたなどの空間が存在していたと考えられる。

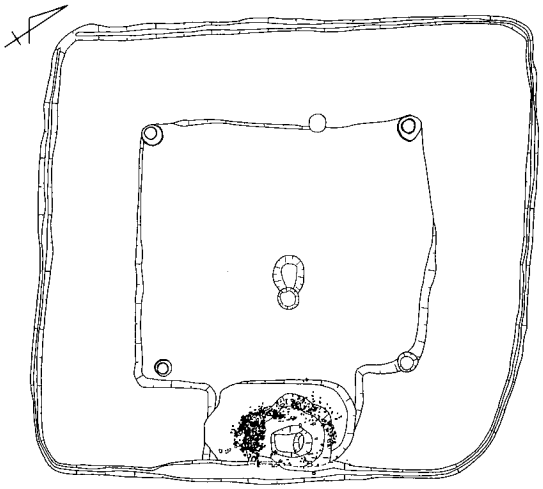
それぞれの竪穴住居の時期は、出土土器から庄内併行期に位置づけられ、岸本の分析により、若干時期差が認められ、SH2201 → SH2203 →第7次調査第34号住居と変遷している。

壁際土坑に貼り付けている石は大中遺跡周辺の表層には小礫を含む土層は存在していないため、すぐ東側を流れる喜瀬川の石を採集し、敷き詰めた可能性が高い。

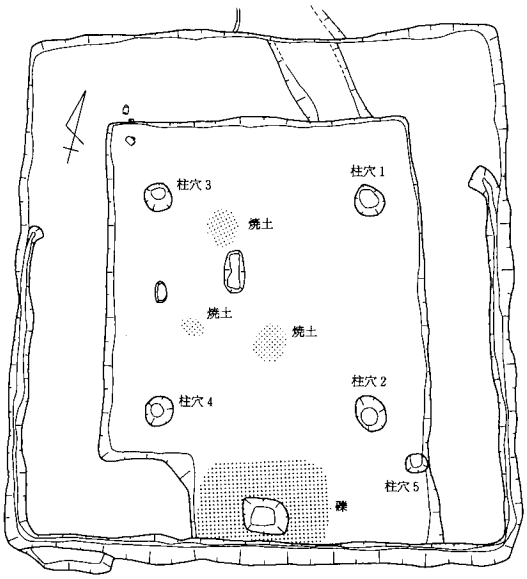




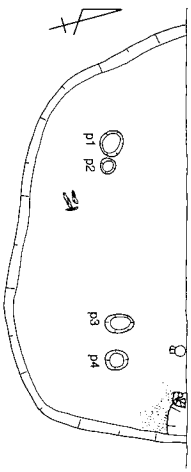
大中遺跡 SH2201



大中遺跡 SH2203



大中遺跡34号住居址



吉田南遺跡 SB208

0 3m

第 12 図　大中遺跡の敷き石のある竪穴住居位置と関連住居図

吉田南遺跡

吉田南遺跡は神戸市西区の明石川下流域に存在している。壁際土坑に敷き石が存在する竪穴住居はSB213である。調査範囲が限定されていたため、竪穴住居の南側半分ほどが調査されただけであるが、一辺5.6 mの隅丸方形で、立て替えを想定する柱穴4本と東壁中央に壁際土坑が存在している。周壁溝は存在おらず、壁際土坑は南側半分の調査である。壁際土坑は東西60 cm、深さ15 cmで、南側に幅55 cmと西側に幅約20 cmの範囲に直径5 cm以下の小礫を貼り付けている。土坑内からは完形の鉢が出土している。

隣に位置する竪穴住居SB208には排水溝が設置されており、東側に傾斜していることが窺える。したがって敷き石が存在する土坑は地形的に低い場所に存在している。

敷き石の機能と壁際土坑

この敷き石については報告書で上田哲也氏が「この装置は溝を通じて流れてきた水が方形ピット内に流入してきた場合に床面の湿化を防ぐ目的で考案したものと推察され」「周壁を廻る溝と連なり、降雨時の屋内の出水を溜めるための機能を備えたものなどがある。上部の方形部分は上記の機能を果たすためのものと考えられ、深さが3～5 cmと浅いところを見ると、円形ピットを保護するために板材等を敷き並べて覆うものと思う。中央部の円形ピットは直径30～40 cm、深さ30～65 cmと深く垂直に掘っており、その深さを保つために、ピット内の自然埋没を防ぎ保護するためであろう。」「第34号住居址の上部方形下部円形ピットの周囲に礫を方形に敷きつめているのはピット内に水が溜まり、床面が軟弱になるために用いた防水対策である。」としており、敷き石を伴う壁際土坑は竪穴住居の壁溝を通じて出水を溜めるための施設だとしており、さらに下部の円形ピットを保護するために周囲に礫を方形に敷きつめたとした。また板材で覆っていたことも想定している。ただし土坑機能の多様性や季節性も十分考慮する必要があるとしている。

平成14年度～16年度にかけて調査が行われた大阪府八尾南遺跡では水成堆積物により遺構面全体が覆われていたため、ほぼ当時の状況で残されていた。特に竪穴建物9は上屋を構築する部材は基本的に持ち去られていたが、壁溝や排水溝は有機質の構造物も含めて良好であった。周壁溝は幅10 cm～15 cm、深さ15 cmを測り、上面には長さ10 cm～15 cmの細い横木を渡し、その上に直交する繊維質の蓋を被せる構造をとり、この竪穴は周壁溝が暗渠として機能していたことになる。拝水溝につながる中央土坑は被熱の痕跡は認められず、木の板で構造物を作っていた。中央土坑は水にかかわる遺構であると考えられる。

以上、八尾南遺跡の良好な調査例で、大中遺跡第7次調査の第34号竪穴住居の調査が行われてから約37年経た今、敷き石を持つ壁際土坑の機能が上田哲也氏によって推定されたことが、実証された。

第13図　大中遺跡第34号住居址壁際土坑

註

・上田哲也「竪穴住居址の遺構と機能」『播磨大中遺跡の研究』播磨町教育委員会　1990年
・播磨町教育委員会『播磨大中遺跡の研究』　1990年
・神戸市教育委員会『吉田南遺跡　第17・18次調査　発掘調査報告書』　2006年
・岡本茂史「集落から見えるもの－八尾南遺跡を中心として－」『2005年度（財）大阪府文化財センター・弥生文化博物館共同研究発表会　弥生後期集落の景観的研究』（財）大阪府文化財センター　2006年
・岡本茂史「八尾南遺跡の発掘調査－弥生時代後期前半の遺構を中心に－」『大阪府埋蔵文化財研究会（第51回）資料』（財）大阪府文化財センター　2005年

第３節　大中遺跡の住居跡と土器

１．大中遺跡竪穴住居の変遷（第 14 図）

今回の調査により、大中遺跡では新たに８棟の竪穴住居跡を加えることとなった。しかし、そのうちの４棟が消滅したことは残念である。

大中遺跡では既往の調査により多くの竪穴住居跡が調査・検出されているが、六角形・長方形といった特徴的な形態から円形・方形にいたるまで各種形態が混在している。それらは 1990 年および 2004 年の報告において整理されているが、今回、17 年の歳月を経て新資料により土器編年を検討したこともあり、その編年にもとづき、竪穴住居跡の型式的変遷を再確認してみることにする。

まず、竪穴住居跡の平面形態を多角形、円形、隅丸方形、方形、長方形の５種に分類する。次に、長方形以外で、屋内高床部が確認できないものをＡ、高床部が存在するものをＢ型とそれぞれ設定し、方形のうち壁際土壙を有するとともにその部分の高床部が途切れるものをＣ型とする。長方形としたものは「室岡型住居」とされる、主柱穴が２本で、短辺側にのみ高床部があり壁際土壙を有するものである。また、多角形・隅丸方形・方形の各住居跡には張出部を有するもの、方形の壁際土壙周囲に礫を敷くものがあるが、本遺跡内での例がまだ少ないため、ここでは変形型式としておく。

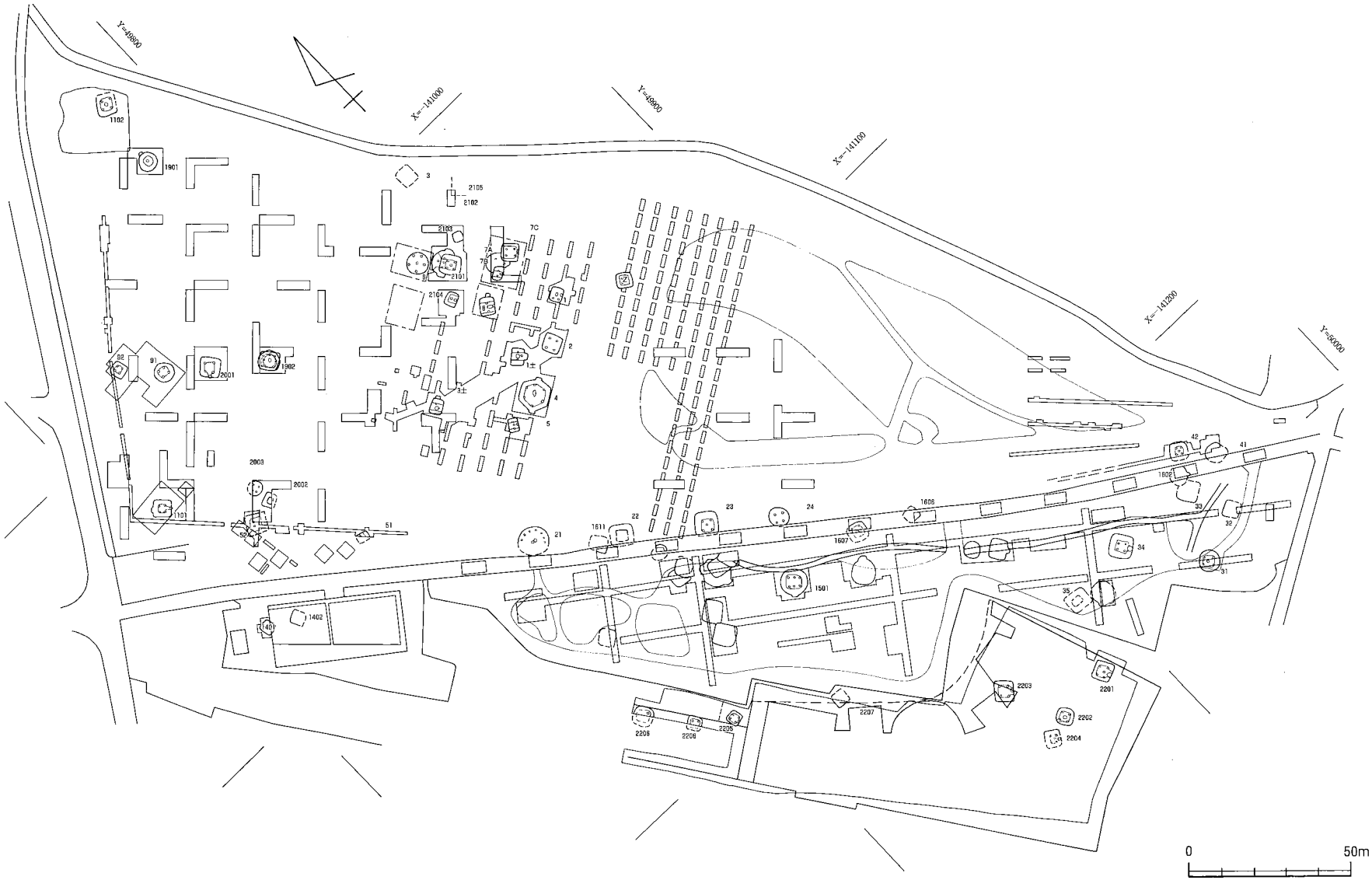
多角形住居　六角形（第４号･SH2103 ？）、五角形（SH1902）などがあり、張出部を持つものもある。また、第 21 号、第 91 号および第 15 次調査１号住居跡（1501）も多角形の可能性がある。なお、第６号住居址は保留としておく。第４号・第 21 号が後述の大中２期頃で、第 91 号が大中３期、SH2103 が３期から４期への過渡期と判断されることから、屋内高床部の有無等に関係なく大中２期～４期に構築されている。これら多角形住居が存在するのは居住地中央部の西側に偏って分布している。

長方形住居　これまでの調査によりその位置が居住地のほぼ中央部に限られまとまって存在しているが、１期の第３土器群下部住居址、１から２期への過渡期と思われる第１土器群下部住居址、２期頃と思われる第７Ｂ号、３期から４期への過渡期と思われる第５号・第８号住居址など、同時期に多くの長方形住居が建っていたことはなかったようである。

円形住居　円形Ａ型は大中１期またはそれ以前から存在（SH2003）し、２期への過渡期（第７Ａ号・第 24 号）、第６号住居址を円形Ａ型とすれば２期頃まで存在するが、それ以降は現在確認されていない。Ｂ型の第 31 号住居址も１期であるため、Ａ型・Ｂ型で時期差はなさそうである。なお、弥生中期後半の第 41 号住居址も円形と思われる。円形住居は居住地内広範囲に存在している。

隅丸方形住居　この形式の住居にＡ型は現在まで見つかっていない。Ｂ型は１期にすでに存在（SH2202）し、第 16 次調査７トレンチの竪穴住居址（1607 住居址と略称し、以下、第 16 次調査分は同様とする）もＢ型の可能性が高い。２期では張出部をもつＢ変型の 1602 住居址があり、２期の 1610 住居址はＢ型の可能性がある。３期ではＢ変型の SH1901 があるほか、SH2206 はＢ型の可能性があり、３期より前である。隅丸方形住居は主として居住地南部に位置している。隅丸方形の住居跡はＢ型に限られ、１期から３期までの間認められるが、２～３期には張出部を有するものも存在する。

方形住居　Ａ型・Ｂ型・Ｃ型およびＣ型には変型も認められ、もっともバラエティーに富む住居形式である。Ａ型では SH2102 が２期の可能性があるが、第２号住居址は５期、第１号住居址は６期に属する。方形Ａ型は居住地中央部に集中している。高床部が全周するＢ型は１期～２期の過渡期と思われる第 1102 号住居址、２期から３期の過渡期である SH2101、３期の SH2208 はＢ型の可能性が高い。４期



第 14 図　大中遺跡住居跡位置図

では第Z号住居址があり、第92号住居址も4期の可能性がある。ほかに時期不明のSH1902 A・Bがある。方形B型は主として居住地北西部に位置しているが、時期的には2期～4期まで連続して営まれている。方形C型のうち、1期～2期のSH2002がC型の可能性が高く、2期では壁際土壙に礫敷をもつSH2201、2期～3期ではSH2104新があり、同時期のSH2204もC型の可能性がある。3期には第7C号や土壙周囲に礫敷がある第34号住居址とSH2203、3期～4期の過渡期にはSH2205、4期には壁際土壙部分が突出する第1101号住居址、同じく突出部を有するSH2001Cは4期から5期の過渡期に属する。方形C型は変型も含め、最も広範囲に位置しており、時期的には2期から4期または5期までの長い期間にわたって認められるが、4期には壁際土壙が外側に張り出すようになる。なお、土壙周囲に礫を敷く住居は居住地南端で、2期～3期に存在している。

以上の住居形式の変遷をまとめると次のようになる。大中1期では円形住居が広範囲に存在する中で、居住地中央部に長方形、南部に隅丸方形が存在する。大中2期を過ぎる頃には円形住居が姿を消すが、2期には方形住居が現われる。方形住居の多くは屋内高床部を有する型式のものである。高床部が全周する方形住居は居住地北西部に主に分布し、高床部が途切れるC型は広範囲に数多く存在し、最も数が多い型式である。また、ほぼ同じ頃には多角形住居が居住地中央部に現われ、その後3期まで多角形・隅丸方形・方形・長方形の4種のうち、方形C型以外はほぼ限定された位置に存続する。4期以降は方形の高床部を有するB・C型に限られるが、5期には高床部のない方形A型のみとなる。

これまでの調査結果による大中遺跡の住居形式の変遷をみてきたが、基本的には、隅丸方形という新たな形式を加えたものの、長方形住居が主として前半に存在し、基本的には円形から方形へと変化したという『播磨大中遺跡の研究』付図2の結果を再確認することとなり、中頃には多角形住居が存在したことが新たな認識となった。

2．大中遺跡出土土器の変遷（第15図）

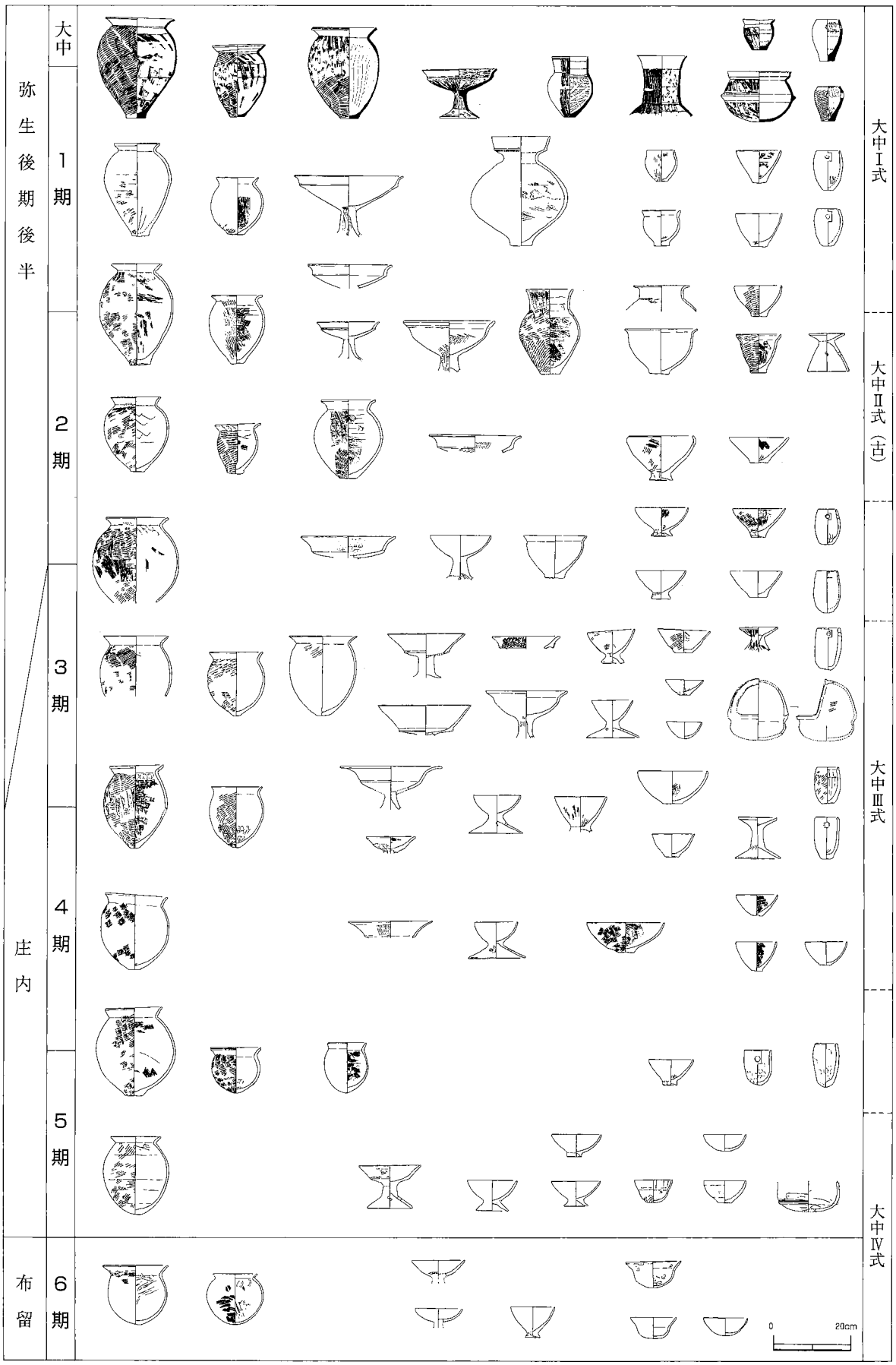
『播磨大中遺跡の研究』において第11次調査までの出土土器編年案が示された平成2年からすでに17年以上の年月が経過し、その後の調査も次数を重ねたことにより資料の蓄積もされてきた。そこで今回、前回の編年案以降の資料を中心として編年を考えてみることとする。

今回の編年案は甕形土器の変遷を主軸に検討したものであり、前回のものとは別の視点である。したがって、前回の編年案を全く考慮せずに作成したものであるが、資料的な制約もあり、古い資料も使用せざるを得ない部分もあった。ところが、結果的には新旧の変遷はほぼ似たものとなった。ただし、基本的な違いは、結果的に前回の大中Ⅰ式・Ⅲ式・Ⅳ式を細分したかたちとなった点と、大中Ⅱ式（新）を明確に抽出することができなかったことである。

第15図に設定した土器変遷案には資料的に限りがあり、各機種の厳密な型式設定を伴っていないため、時期設定とした。したがって、大中1期・・・大中6期と呼称する。また、時期設定にかかる土器の諸特徴の指標は、『本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ』で示したものと基本的に同じで、時期設定もほぼ共通する。また、『荒田神社裏遺跡』での北播磨土器変遷とも変化の指標は同じであるが、時期設定番号との対応関係には若干のずれがある。

今回の編年案の詳細は紙幅が限られているため、時期設定の指標となった資料を提示するにとどめざるを得ず、詳細を述べることができないが、別の機会があればそれに譲ることにする。

まず、大中1期の古段階あるいは1期より前の資料としては、第14次調査の土壙1出土土器がある。



第15図　大中遺跡出土弥生土器の変遷

1期の指標となる資料はSH2202および第31号住居址出土土器、1期から2期への過渡期資料としてはSX22188および第3土器群出土土器である。2期はSH2201および第2土器群出土土器を、2期から3期への過渡期ではSH2104新住居とSH2101およびSH2204出土土器を指標としている。なお、SH2014古住居出土土器は2期と考えている。3期の指標となった資料は、SH2203・SH2208・SH2206出土土器および第91号住居址出土土器である。なお、SH2206出土土器は住居跡の時期を示してはいない。3期から4期への過渡期資料はSH2103・SH2205および1606竪穴住居址出土土器である。4期では第1101住居址、4期から5期への過渡期ではSH2001出土土器が指標となる。5期の指標資料はSX22002および第2号住居址出土土器、6期は第1号住居址出土土器を指標としている。

なお、大中3期を弥生後期後半から庄内式への過渡期とし、4期は布留式の段階と理解している。

付　載

大中遺跡第21次調査出土土器の補遺

大中遺跡第21次調査時に出土していた土器のうち、事情により『大中遺跡Ⅱ・山之上遺跡』に掲載できなかった分を補遺として報告する（図版66）。

SH2101出土土器

a・bはともに飯蛸壺である。aは口径5.0㎝、器高10.4㎝を測り、体部最大径は下部にあり、6.4㎝である。底部は丸く、口縁部の一部を欠損する。bの口径は4.8㎝、器高は11.1㎝である。丸底に近い。

SH2103出土土器

c～fも飯蛸壺である。cは口径5.8㎝、器高12.2㎝で、底径5.0㎝の平底で完形品である。cはdとともに最大径が上部にあり、やや古い形態を示す。dは口径5.5㎝、器高11.5㎝、底径は3.8㎝の平底である。eはやや薄手で、口径5.1㎝、器高11.5㎝で、底径4.0㎝の平底を呈する。fはやや小型で、器高8.8㎝、底径2.7㎝の小さな平底である。口縁端部は少し磨滅しているが、口径4.9㎝程度である。

gは最大径17.2㎝の細頸あるいは長頸の壺体部である。体部は扁平な平底で、ヘラミガキ調整。

SH2104出土土器

hは飯蛸壺で、口径6.2㎝、器高9.9㎝を測り、最大径は上位にあり径8.4㎝である。平底で径3.8㎝。

iは口径14.3㎝、器高24.5㎝の甕である。体部最大径はやや上位にあり、18.8㎝を測る。あまり突出しない径4.8㎝と大きめの平底である。口縁端部は少し上方へ引き伸ばし、凹面を形成する。体部はタタキ成形で外面には縦ハケを加える。内面は横ハケ調整で、上部を板ナデにより消している。

jは器高16.8㎝のやや小型の甕で、体部最大径はやや上位にあり、径13.4㎝を測り、口径は10.6㎝である。口縁端部は少し外反し、面をもつ。底部はやや上げ底となっている。体部はタタキ成形で、内面下半はナデ、上半は横ハケである。

kは高杯脚柱部で、裾部には円形透孔があり、4箇所と思われる。外面はヘラミガキ調整である。

以上述べたSH2104出土土器はその特徴から、古住居に伴う土器と考えられる。

主要参考文献
『播磨大中遺跡発掘調査報告書－播磨町郷土資料館建設用地の発掘調査－』播磨町教育委員会 1985 年
『播磨大中遺跡発掘調査の概要－緑道であいの道整備工事に伴う確認調査－』播磨町教育委員会 1988 年
『播磨大中遺跡の研究』播磨町教育委員会・播磨町郷土資料館 1990 年
『播磨大中遺跡－はりま文化ゾーン総合整備構想に伴う第 18 次調査報告書－』播磨町教委・奈良大学 1998 年
『大中遺跡－史跡大中遺跡内容確認調査（第 19 次・20 次）報告書Ⅰ－』兵庫県教育委員会 2004 年
『大中遺跡Ⅱ・山之上遺跡』兵庫県教育委員会 2007 年
『本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ－禿山遺跡他－』兵庫県教育委員会 1998 年
『荒田神社裏遺跡－主要地方道加美山崎線緊急道路整備事業に伴う発掘調査報告－』兵庫県教育委員会 2001 年

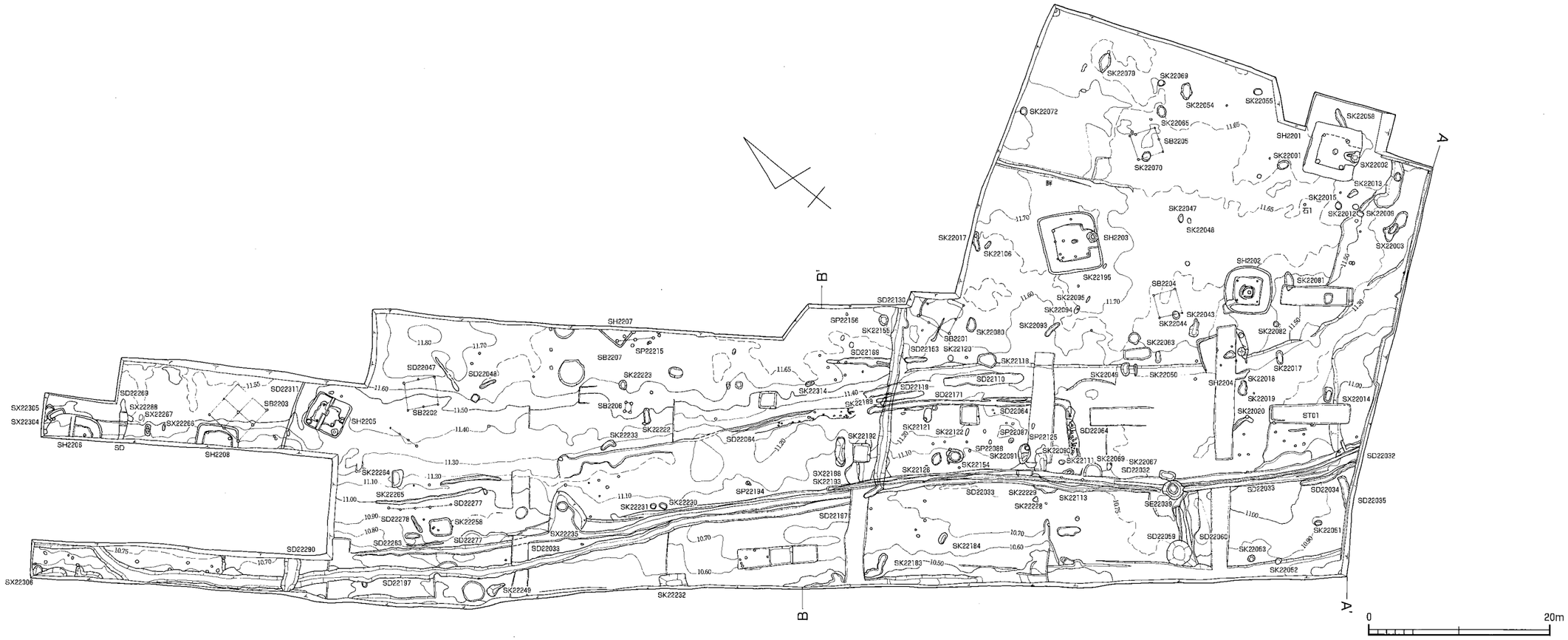
報 告 書 抄 録

ふ り が な	おおなか いせき
書　　名	大中遺跡
副 書 名	兵庫県立考古博物館建設に伴う大中遺跡（第22次）発掘調査報告書
巻　　次	Ⅲ
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第319冊
編 著 者 名	岸本一宏・篠宮　正・久保弘幸・井上　淳・高橋　敦・矢作健二・石岡智武
編 集 機 関	兵庫県立考古博物館
所　在　地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中500番地　TEL　079-437-5589
発 行 機 関	兵庫県教育委員会
所　在　地	〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10番１号　TEL　078-341-7711
発行年月日	2007（平成19）年10月13日

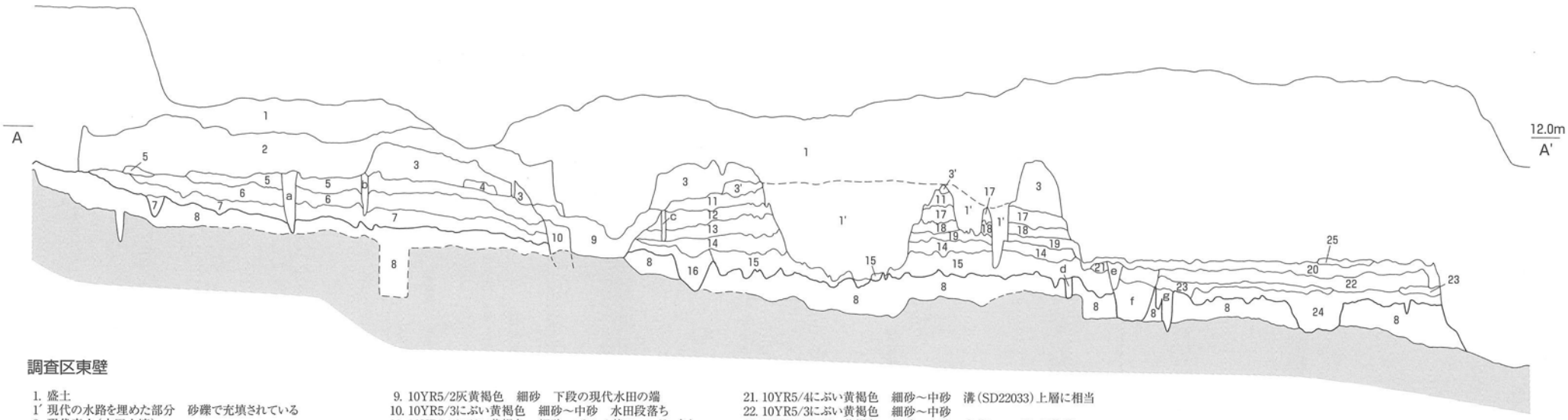
所収遺跡名	所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
大中（おおなか）	兵庫県加古郡播磨町大中（ひょうごけんかこぐんはりまちょうおおなか）447・448・450～453・498・500番地	28382	340006	34度43分20秒	134度52分40秒	20041122～20050324	全面調査 4,857㎡ 確認調査（旧石器）897㎡	兵庫県立考古博物館建設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大　中	集落跡	旧石器～縄紋時代		ナイフ形石器・石鏃ほか	
		弥生後期後半～古墳時代初頭	竪穴住居跡・木棺墓・土壙墓・溝・土壙	弥生土器・土師器・鉄器・飯蛸壺・台石・砥石	焼失住居 土壙周囲に敷石
		古墳時代後期	溝・土壙	須恵器・土師器	
		中　世	掘立柱建物跡・土壙・溝	須恵器・土師器・陶磁器・鉄器・砥石・鉄滓	
		近　世	井戸	陶磁器・鉄器	

図　　版



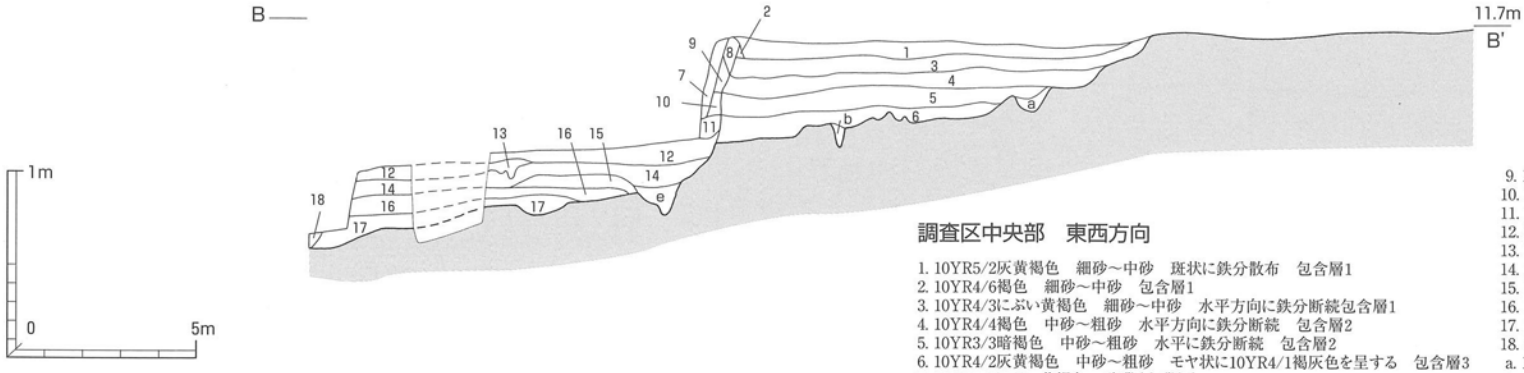
調査区内遺構配置図



調査区東壁

1. 盛土
1′ 現代の水路を埋めた部分　砂礫で充填されている
2. 現代表土（水田土壌）
3. 2.5Y5/3黄褐色　極細砂　2に伴う盛土
3′ 2.5Y5/2暗灰黄色　極細砂
4. 10YR4/3にぶい黄褐色　極細砂～細砂
5. 10YR5/3にぶい黄褐色　極細砂～細砂でブロック状のマンガン斑を含む　包含層1（中世後半期か）
6. 10YR5/4にぶい黄褐色　極細砂～細砂　マンガン斑含む　包含層2（須恵器含む）
7. 10YR4/3にぶい黄褐色　細砂　弥生時代の古土壌か　包含層3（弥生時代か）
7′ 10YR4/4褐色　細砂～中砂　弥生時代の落ち込み埋土
8. 10YR6/4にぶい黄橙色～10YR5/3にぶい黄褐色　細砂～中砂　弥生時代の遺構検出面
9. 10YR5/2灰黄褐色　細砂　下段の現代水田の端
10. 10YR5/3にぶい黄褐色　細砂～中砂　水田段落ち
11. 10YR5/4にぶい黄褐色　細砂　ブロック状のマンガン含む
12. 10YR5/3にぶい黄褐色　極細砂～細砂　上面にマンガン集積
13. 10YR4/3にぶい黄褐色　細砂　全体にマンガン集積著しい　弥生包含層
14. 10YR4/4褐色　細砂～中砂　全体にマンガン集積著しい　弥生包含層
15. 10YR4/4褐色　細砂～中砂　弥生包含層
16. 10YR4/6褐色　極細砂～細砂　弥生包含層
17. 10YR4/3にぶい黄褐色　極細砂　上面にマンガン集積
18. 10YR4/4褐色　細砂～中砂　上面と中位に鉄分・マンガン集積
19. 10YR4/4褐色　細砂　上下面に鉄分集積
20. 2.5Y5/3黄褐色　細砂　鉄分集積
21. 10YR5/4にぶい黄褐色　細砂～中砂　溝（SD22033）上層に相当
22. 10YR5/3にぶい黄褐色　細砂～中砂
23. 10YR5/3にぶい黄褐色　細砂～中砂　全体にマンガンが集積
24. 2.5Y5/3黄褐色　細砂～粗砂　全体に少量の鉄分・マンガン集積
25. 2.5Y5/2暗灰黄色　シルト混じり極細砂～細砂　全体に鉄分集積

a～c. 撹乱
d. 10YR5/4にぶい黄褐色　細砂　Pitか
e. 2.5Y5/2灰黄褐色　シルト質極細砂　下半にマンガン斑溝（SD22032）埋土
f. 10YR5/3にぶい黄褐色　シルト混じり極細砂～細砂溝（SD22033）埋土
g. 10YR5/2灰黄褐色　細砂～中砂　溝（SD22034）埋土



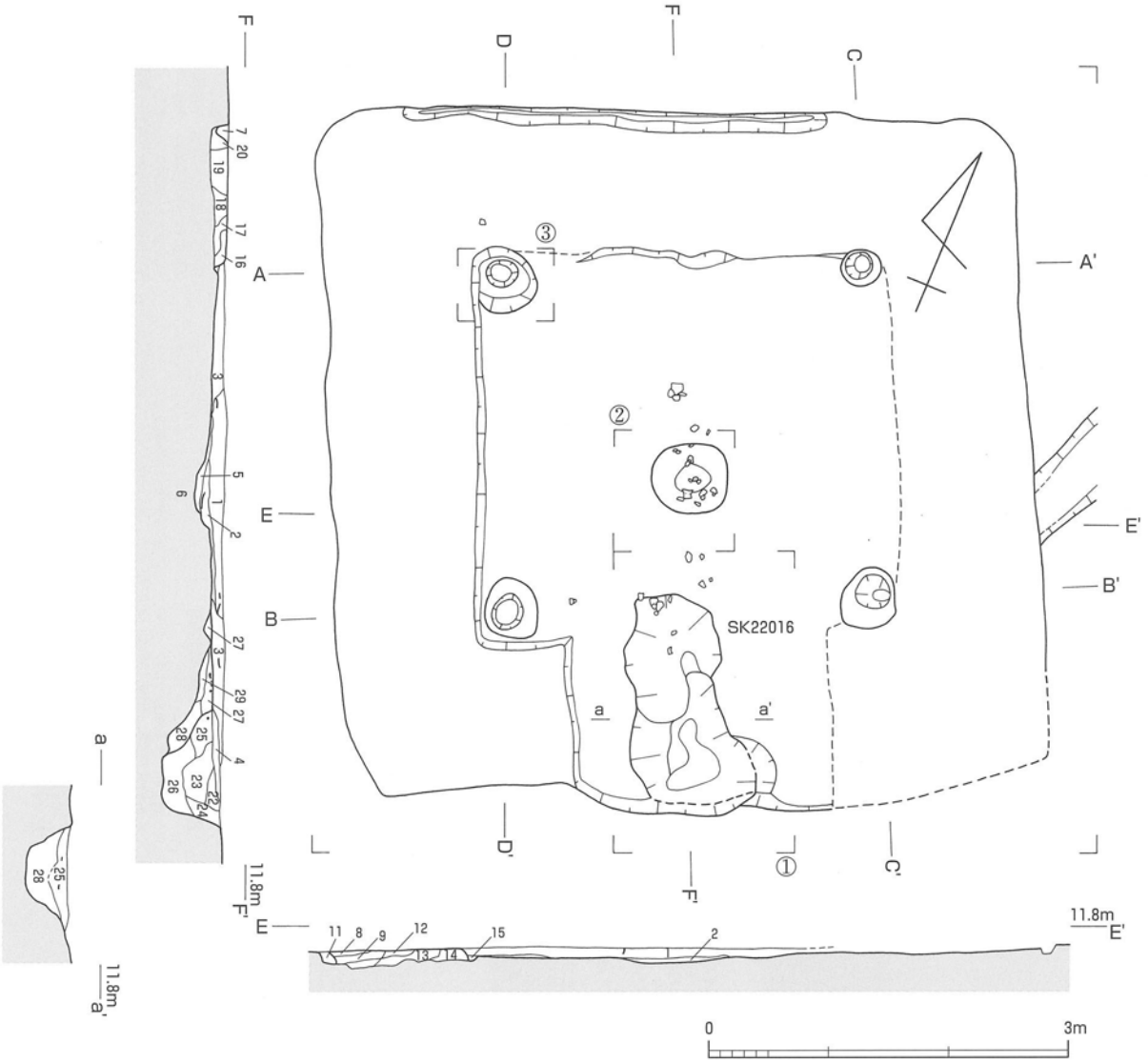
調査区中央部　東西方向

1. 10YR5/2灰黄褐色　細砂～中砂　斑状に鉄分散布　包含層1
2. 10YR4/6褐色　細砂～中砂　包含層1
3. 10YR4/3にぶい黄褐色　細砂～中砂　水平方向に鉄分断続包含層1
4. 10YR4/4褐色　中砂～粗砂　水平方向に鉄分断続　包含層2
5. 10YR3/3暗褐色　中砂～粗砂　水平に鉄分断続　包含層2
6. 10YR4/2灰黄褐色　中砂～粗砂　モヤ状に10YR4/1褐灰色を呈する　包含層3
7. 10YR5/4にぶい黄褐色　砂礫（中礫級）
8. 10YR5/4にぶい黄橙色　細砂～中砂
9. 10YR5/2灰黄褐色　細砂～中砂
10. 10YR5/3にぶい黄褐色　細砂～中砂
11. 10YR5/2灰黄褐色　細砂
12. 2.5Y6/3にぶい黄色　極細砂～細砂　現代水田耕土直下層
13. 10YR5/2灰黄褐色　細砂～中砂　包含層
14. 10YR5/2灰黄褐色　細砂～粗砂　包含層
15. 10YR5/3にぶい黄褐色　極細砂～細砂　包含層
16. 10YR4/4褐色　細砂～中砂　包含層
17. 10YR4/3にぶい黄褐色　細砂～粗砂　包含層
18. 現代水田耕土
a. 10YR4/3にぶい黄褐色　細砂～粗砂　溝（SD22064）埋土
b. 10YR5/3にぶい黄褐色　中砂～粗砂　Pitか
c. 10YR4/4褐色　シルト質細砂　上面に鉄分集積

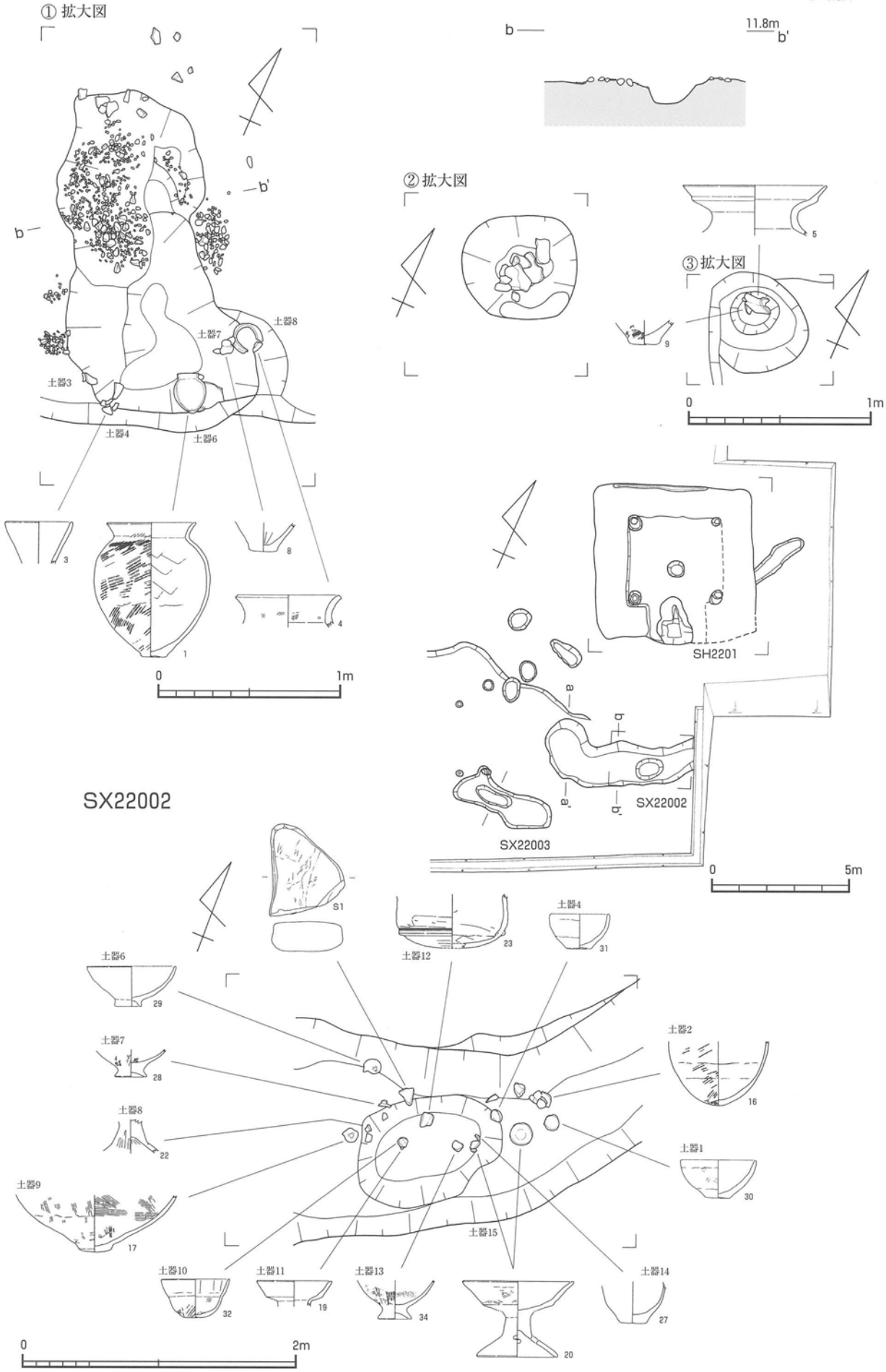
調査区壁土層断面図

図版2

図版３

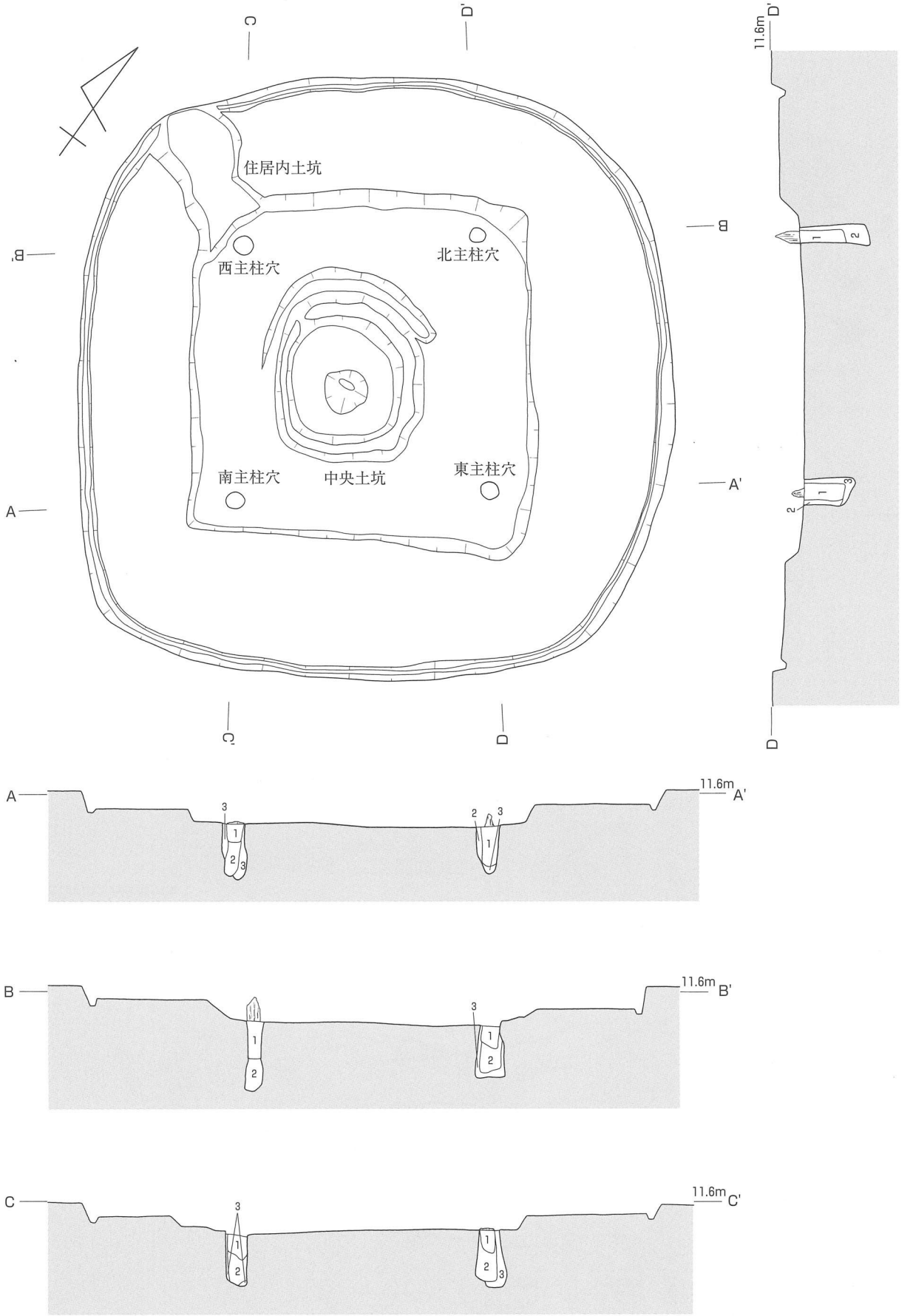


1. 10YR4.4/3褐（灰褐）色　細粒砂～極粗粒砂　やや粘質で細礫～φ3㎝の中（円・亜円）礫を微量含む
2. 10YR4/6褐（明褐）色　極細粒砂で粗粒砂～極粗粒砂含む（床面土壌化層）
3. 10YR4.4/2灰黄褐（黄灰褐）色　極細粒砂まじり細粒砂～細礫　やや粘質でφ1㎝の中（円・亜円）礫を少量含む
4. 10YR4.8/2灰黄褐（褐灰）色　中粒砂～極粗粒砂　砂質で極細粒砂が少量混じる
5. 10YR4.3/6褐（濁橙褐）色　極細粒砂混じり中粒砂～細礫　粘質
6. 5YR3/4明赤褐（明赤褐）色　極細粒砂混じり細粒砂～極粗粒砂　細礫少量含みやや粘質　焼土
7. 10YR4.5/2灰黄褐（黄褐灰）色　細粒砂～粗粒砂で極細粒砂・極粗粒砂～細礫含む　やや粘質　周壁溝埋土
8. 10YR5/8黄褐（暗黄褐）色　極細粒砂～細粒砂　中粒砂～極粗粒砂含む
9. 10YR4/4褐（灰褐）色　極細粒砂混じり細粒砂　中粒砂～極粗粒砂少量と細礫含む
10. 10YR4.5/2灰黄褐（褐灰）色　極細粒砂混じり細粒砂　中粒砂～極粗粒砂少量含む
11. 10YR4.5/3にぶい黄褐（灰褐）色　極細粒砂混じり細粒砂　中粒砂～極粗粒砂少量含む
12. 10YR5.4/8黄褐（黄褐）色　極細粒砂混じり細粒砂　中粒砂～極粗粒砂少量含む
13. 10YR4/6褐（暗黄褐）色　極細粒砂～細粒砂　中粒砂～細礫微量含む
14. 10YR4.5/2灰黄褐（褐灰）色　極細粒砂混じり細粒砂　中粒砂～極粗粒砂含む
15. 10YR4.4/5褐（灰褐）色　極細粒砂～細粒砂　中粒砂～極粗粒砂少量含む
16. 7.5YR4.7/5.2明褐（暗赤褐）色　細粒砂混じり極細粒砂　中粒砂～細礫少量含む
17. 10YR4/5褐（褐）色　極細粒砂　中粒砂～極粗粒砂含む
18. 7.5YR5/6明褐（暗赤褐）色　細粒砂混じり極細粒砂　中粒砂～極粗粒砂含む
19. 7.5YR5/8明褐（暗濁赤褐）色　極細粒砂～細粒砂　粗粒砂～細礫含む
20. 10YR4/6褐（褐）色　細粒砂混じり極細粒砂　中粒砂～極粗粒砂混じる
21. 10YR4/1.6灰黄褐（灰褐）色　極細粒砂混じり細粒砂　中粒砂～極粗粒砂混じる　細礫少量含む
22. 7.5YR6/7橙（橙褐）色　極細粒砂混じり細粒砂～粗粒砂　やや粘質で細礫微量含む
23. 10YR5/4にぶい黄褐（黄褐灰）色　細粒砂～極粗粒砂　極細粒砂混じりでやや粘質　やや軟らかい
24. 10YR4/5褐（灰褐）色　細粒砂～極粗粒砂　極細粒砂混じりでやや硬い
25. 10YR4/3.3にぶい黄褐（褐灰）色　細粒砂～極粗粒砂　極細粒砂混じりでやや軟らかい
26. 10YR4/2灰黄褐（明褐灰）色　極細粒砂～粗粒砂　極粗粒砂～細礫含みやや粘質　軟らかい
27. 10YR4/3にぶい黄褐（黄灰褐）色　極細粒砂混じり細粒砂～極粗粒砂　やや粘質でやや硬い　土器片・中礫含む
28. 7.5YR4.5/5.2褐（橙褐）色　極細粒砂　細粒砂～極粗粒砂多く含み粘質
29. 7.5YR5/8明褐（赤褐）色　極細粒砂　細粒砂～細礫含み粘質でやや硬い
30. 7.5YR5/8明褐（黄褐）色　極細粒砂混じり細粒砂～細礫　φ1～4㎝大の中（角～円）礫少量含む



SH2201 および周辺遺構詳細図

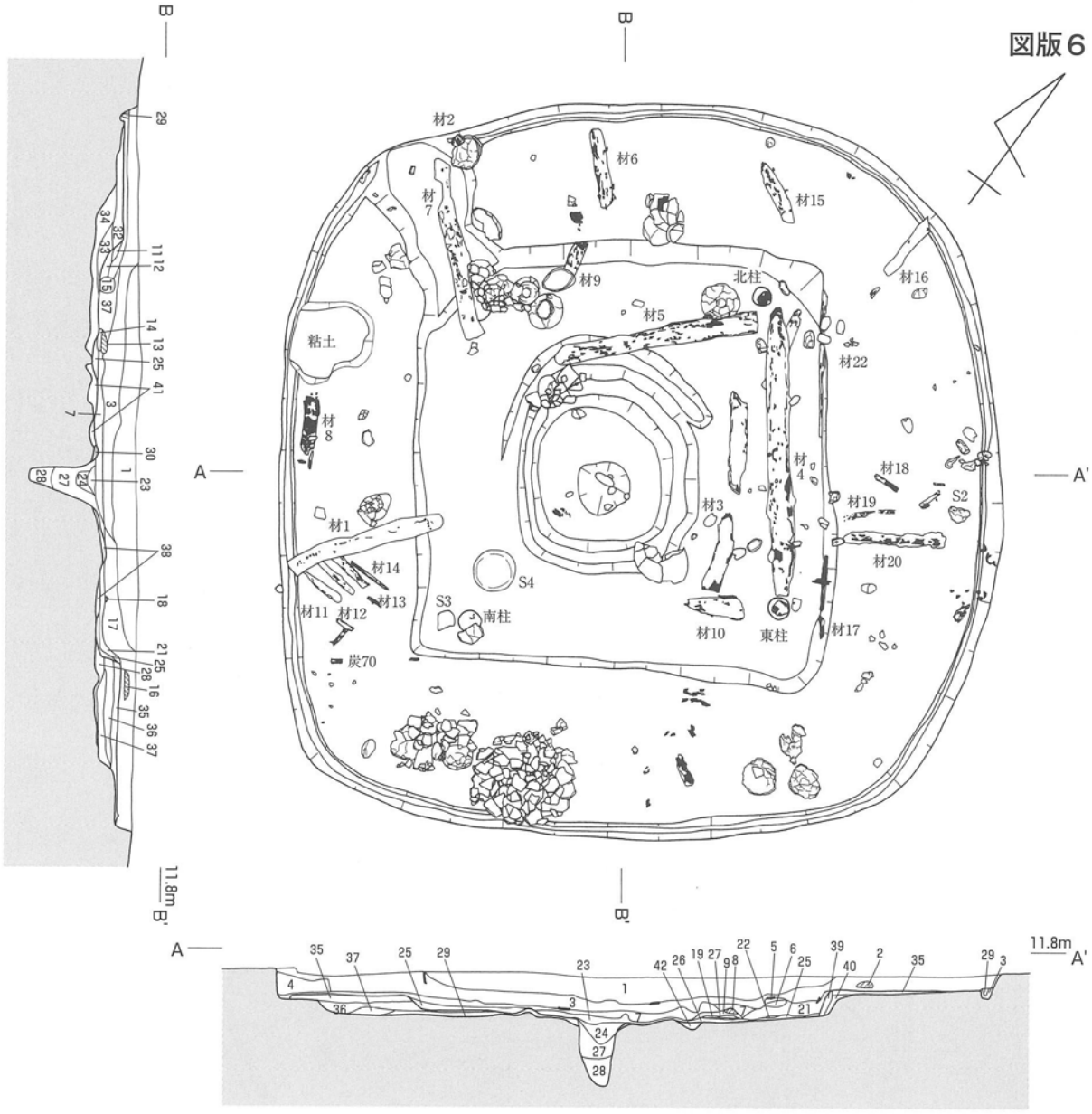
図版5



1. にぶい黄褐色　極細砂《柱痕跡》
2. 褐色　シルト質極細砂（にぶい黄褐色極細砂混じる）《掘形》
3. にぶい黄褐色　極細砂（基盤層大粒混じる）《掘形》

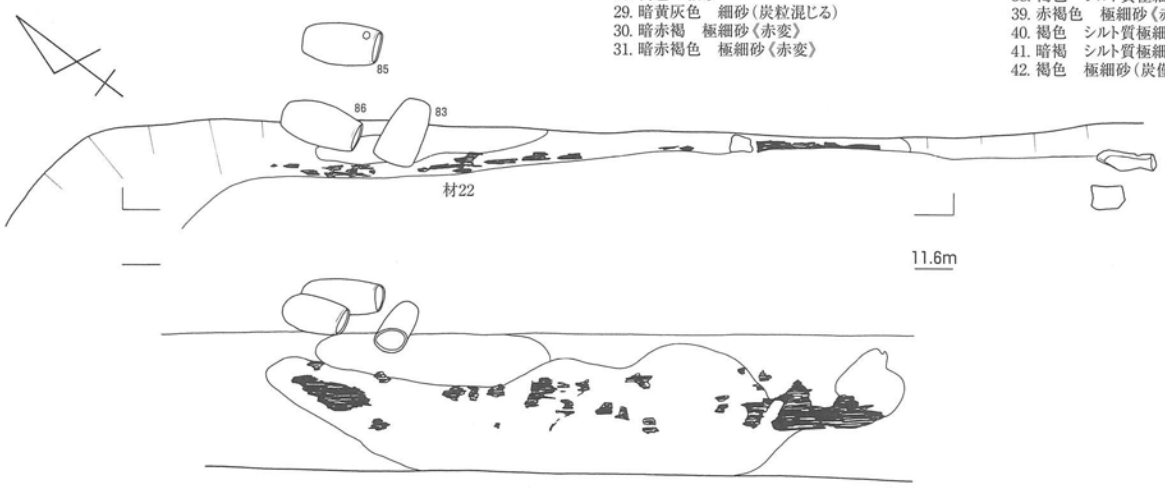
0　2m

SH2202



1. にぶい黄褐色　細砂（炭粒僅かに含む、土器小片含む）
2. 炭化材〔材8〕
3. 褐色　極細砂（褐色粒含む、炭・焼土粒僅かに含む）
4. にぶい赤褐色　極細砂（赤褐色焼土粒含む焼土）
5. 灰〔材4〕
6. 炭化材〔材4〕
7. 褐色　細砂混じりシルト質極細砂（焼土粒多量に含む）
8. 炭化材〔材3〕
9. にぶい褐色　細砂～極細砂（焼土粒・炭多量に含む）
10. 褐色　シルト質極細砂（焼土粒多量に含む）
11. にぶい黄褐色　シルト質極細砂（灰・焼土多量に含む）
12. 灰黄褐色　細砂（灰・炭多量に含む）
13. 炭化材〔材5〕
14. 明褐色　極細砂～細砂（焼土僅かに含む）
15. 灰
16. 炭化材
17. 褐色　極細砂（炭僅かに含む）
18. 炭化材〔材10〕
19. 褐色　細砂～極細砂
20. 明褐色　シルト質極細砂
21. 褐色　極細砂混じり細砂から中砂（炭・焼土粒含む）
22. 褐色　細砂混じりシルト質極細砂（焼土粒多量に含む）
23. にぶい黄褐色　細砂～極細砂
24. 灰黄褐色　細砂～極細砂（焼土粒・炭粒混じる）
25. 明褐色　極細砂（炭僅かに含む）
26. 暗褐　シルト質極細砂（炭僅かに含む）
27. 灰褐色　極細砂（焼土・炭片混じる）
28. 褐色　細砂
29. 暗黄灰色　細砂（炭粒混じる）
30. 暗赤褐　極細砂《赤変》
31. 暗赤褐色　極細砂《赤変》
32. にぶい褐色　細砂（焼土・炭粒混じる）《高床部盛土》
33. にぶい褐色　極細砂《高床部盛土》
34. 褐色　シルト質極細砂《高床部盛土》
35. にぶい褐色　極細砂（炭僅かに含む）
36. にぶい褐色　極細砂
37. にぶい褐色　極細砂（明褐色粒含む）
38. 褐色　シルト質極細砂
39. 赤褐色　極細砂《赤変》
40. 褐色　シルト質極細砂
41. 暗褐　シルト質極細砂
42. 褐色　極細砂（炭僅かに含む）

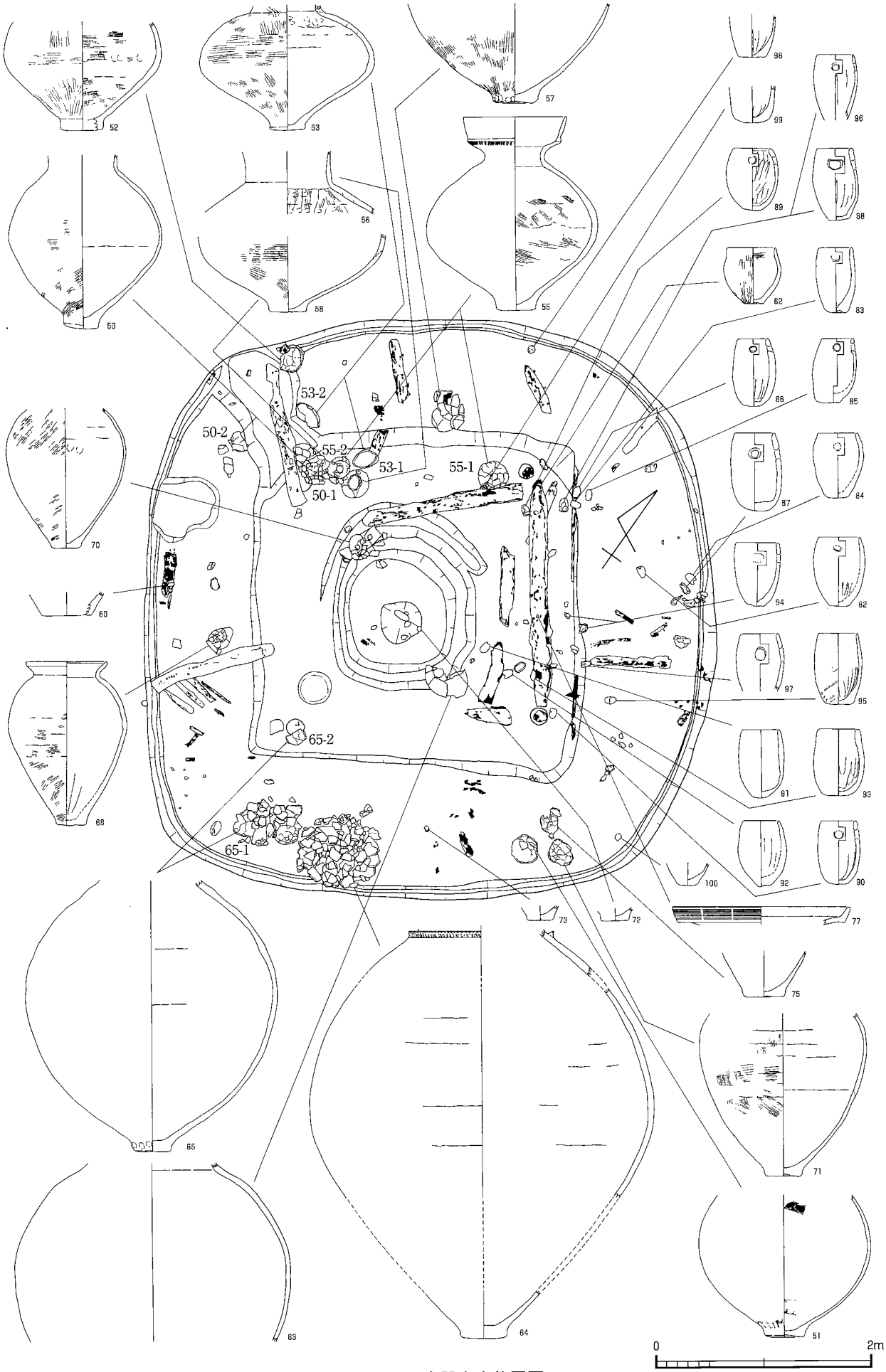
0　2m



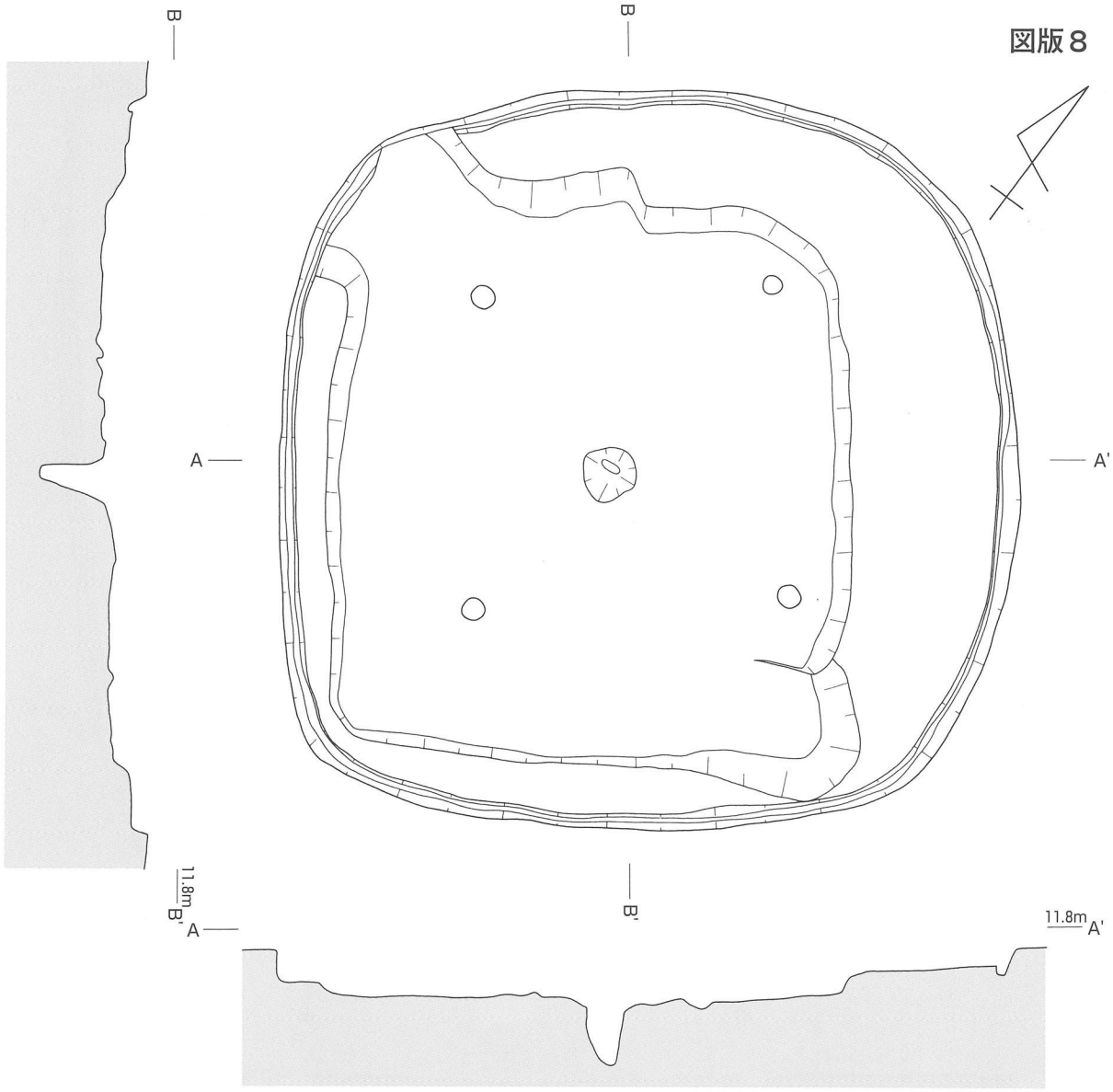
0　1m

SH2202 炭化材検出状況

図版７

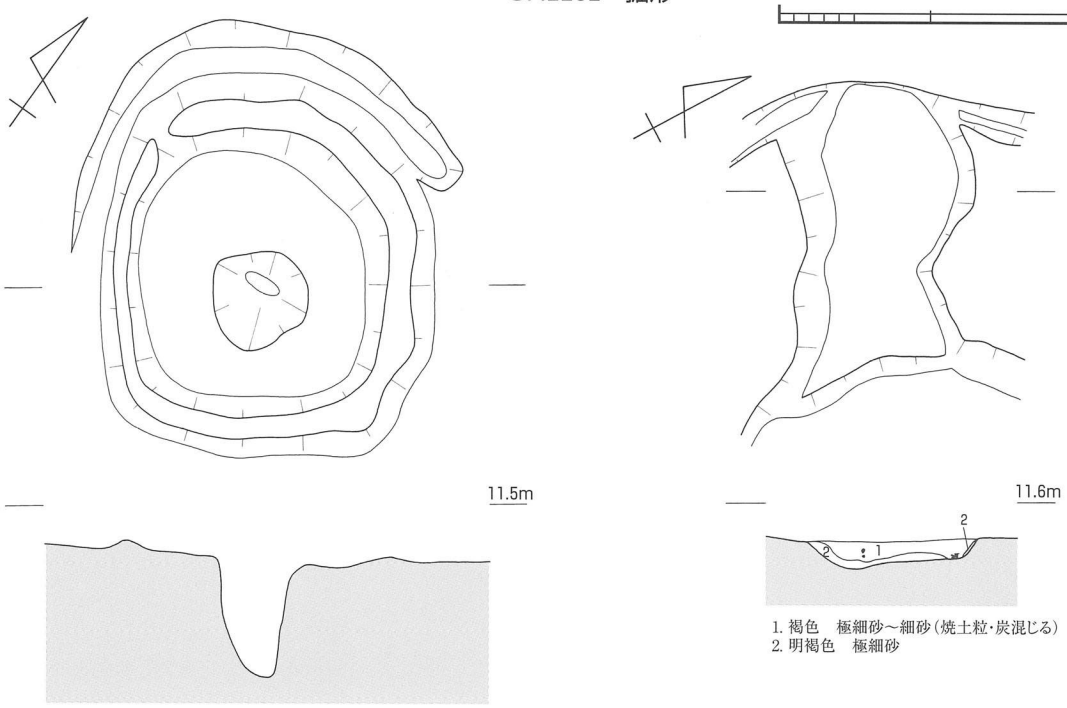


SH2202 土器出土位置図



SH2202　掘形

0　2m



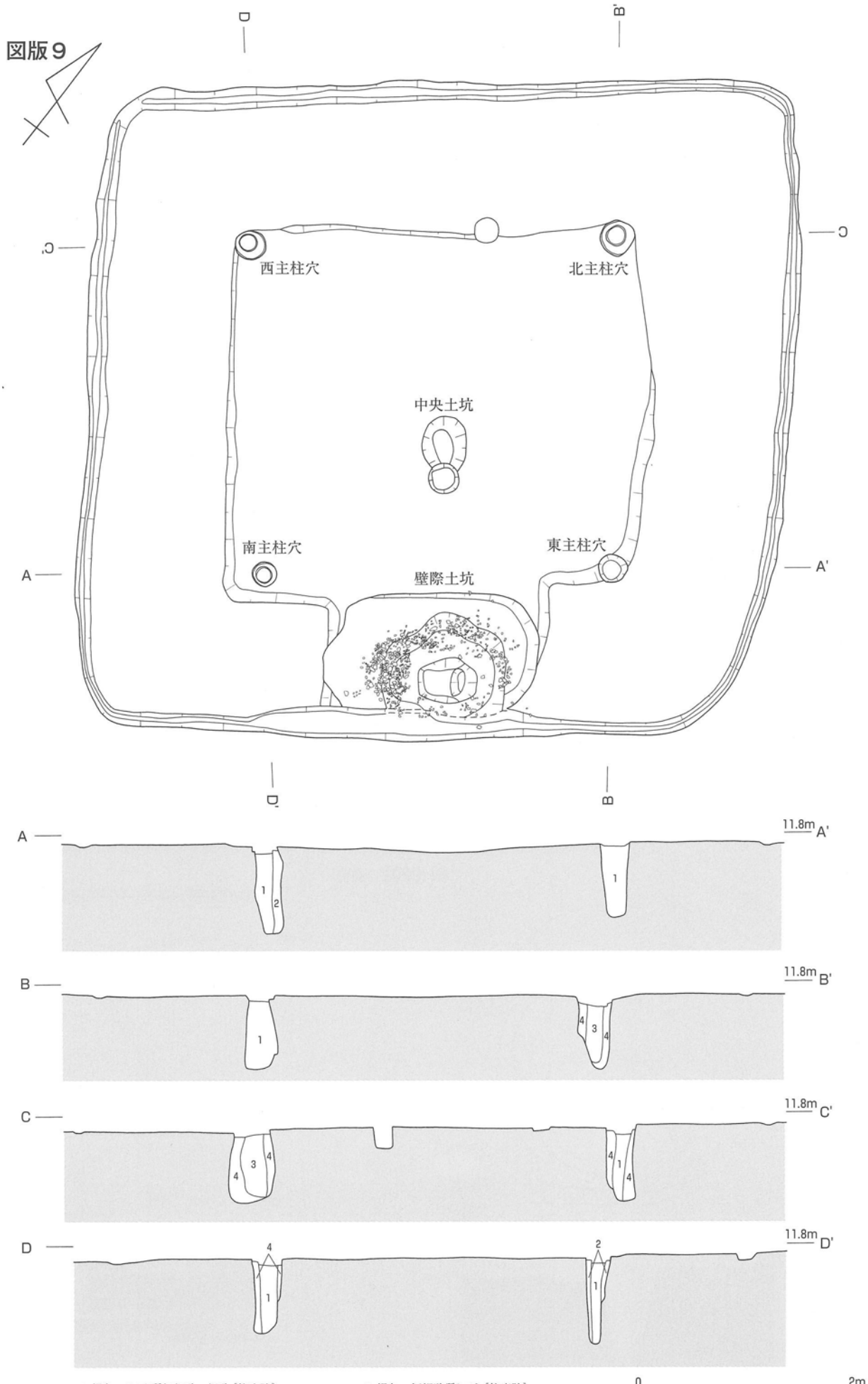
1. 褐色　極細砂～細砂（焼土粒・炭混じる）
2. 明褐色　極細砂

中央土坑

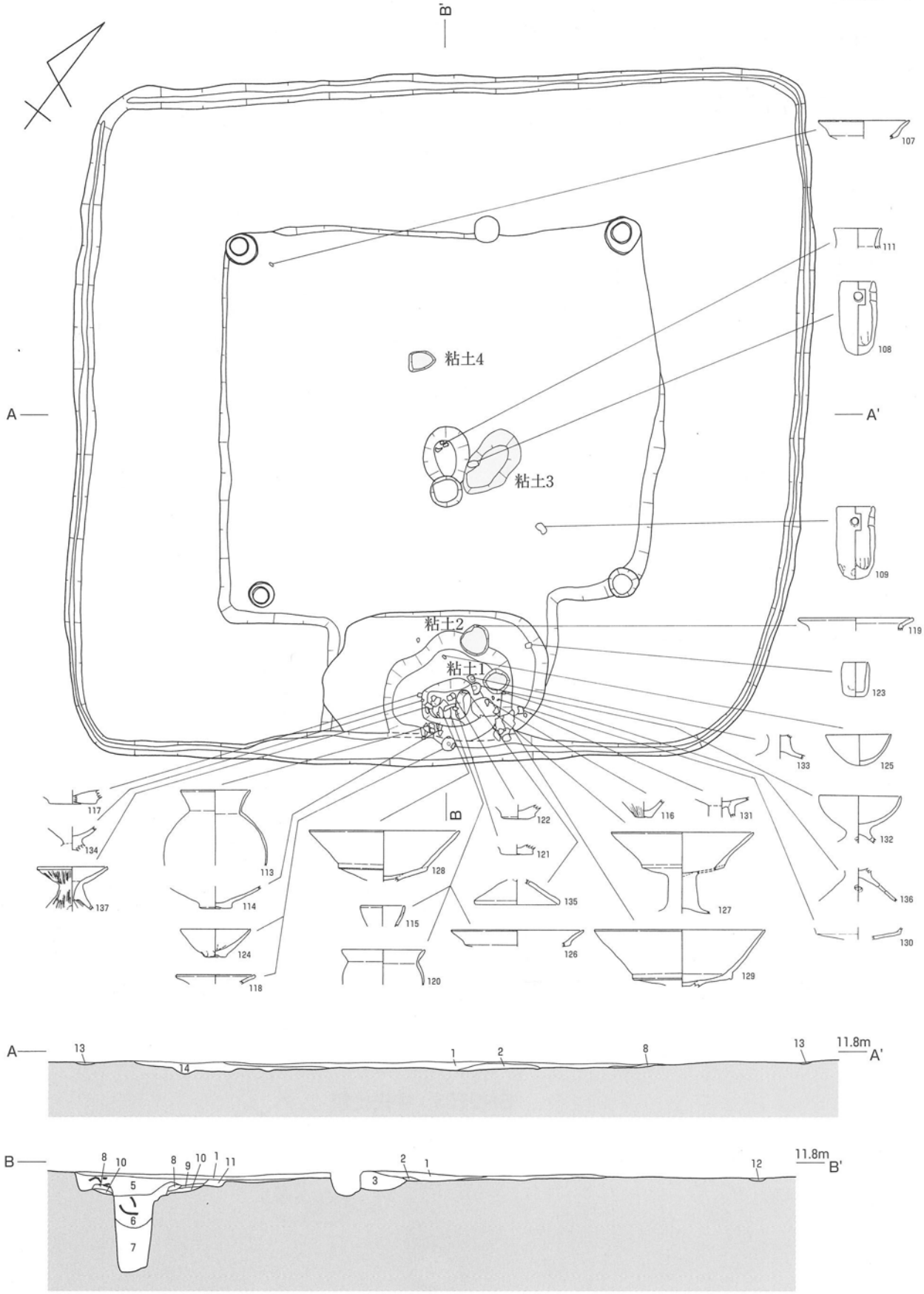
0　2m

SH2202 詳細図

図版9


西主柱穴
北主柱穴
中央土坑
南主柱穴
東主柱穴
壁際土坑
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
11.8m
1. 褐色　シルト質極細砂～細砂《柱痕跡》
2. 明褐色　極細砂～細砂（基盤層ブロック含む）《掘形》
3. 褐色　極細砂質シルト《柱痕跡》
4. 褐色　極細砂質シルト（基盤層ブロック含む）《掘形》
0
2m

SH2203

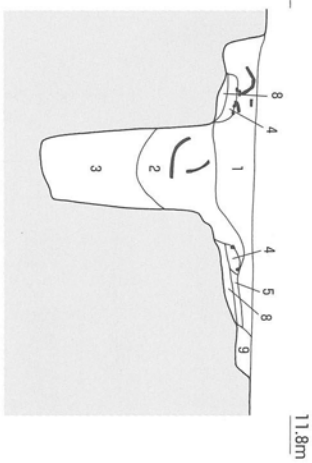


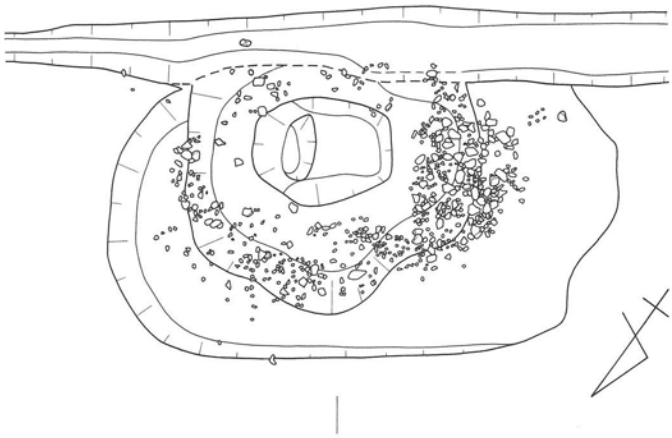
1. にぶい黄褐色　シルト質極細砂～中砂
2. 褐色　細砂～中砂（炭化物片含む）
3. 褐色　極細砂質シルト（焼土粒含む）
4. 黄褐色　シルト質極細砂
5. 褐色　極細砂（焼土粒・炭混じる）
6. にぶい黄褐色　細砂～極細砂（土器含む）
7. にぶい黄褐色　極細砂～中砂
8. にぶい黄褐色　小礫～細砂
9. 褐色　極細砂～中砂
10. 明褐色　極細砂～細砂
11. 黄褐色　シルト質極細砂
12. 褐色　シルト質極細砂（土器含む）
13. 褐色　極細砂
14. まだら褐色　極細砂～細砂（マンガン含む）《高床部盛土》

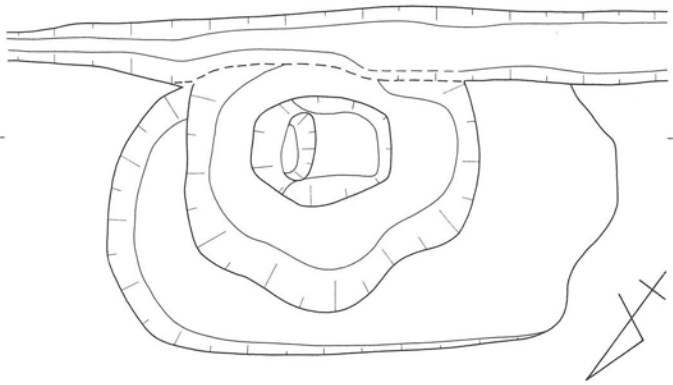
0　2m

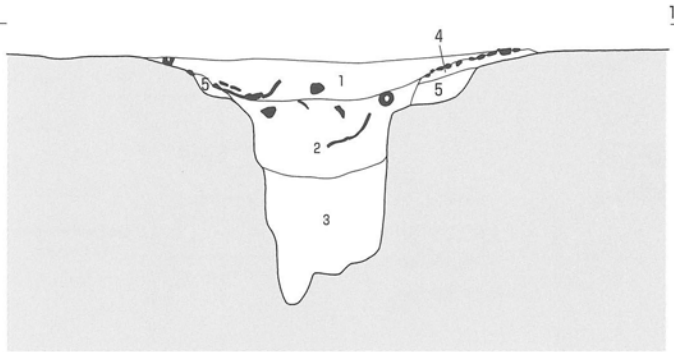
SH2203 土器出土位置図

SH2203　壁際土坑



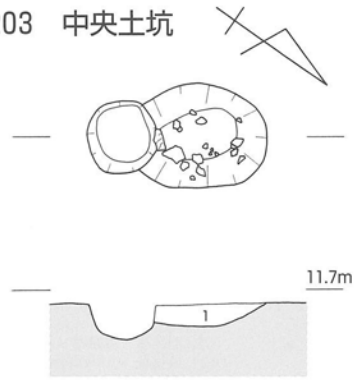






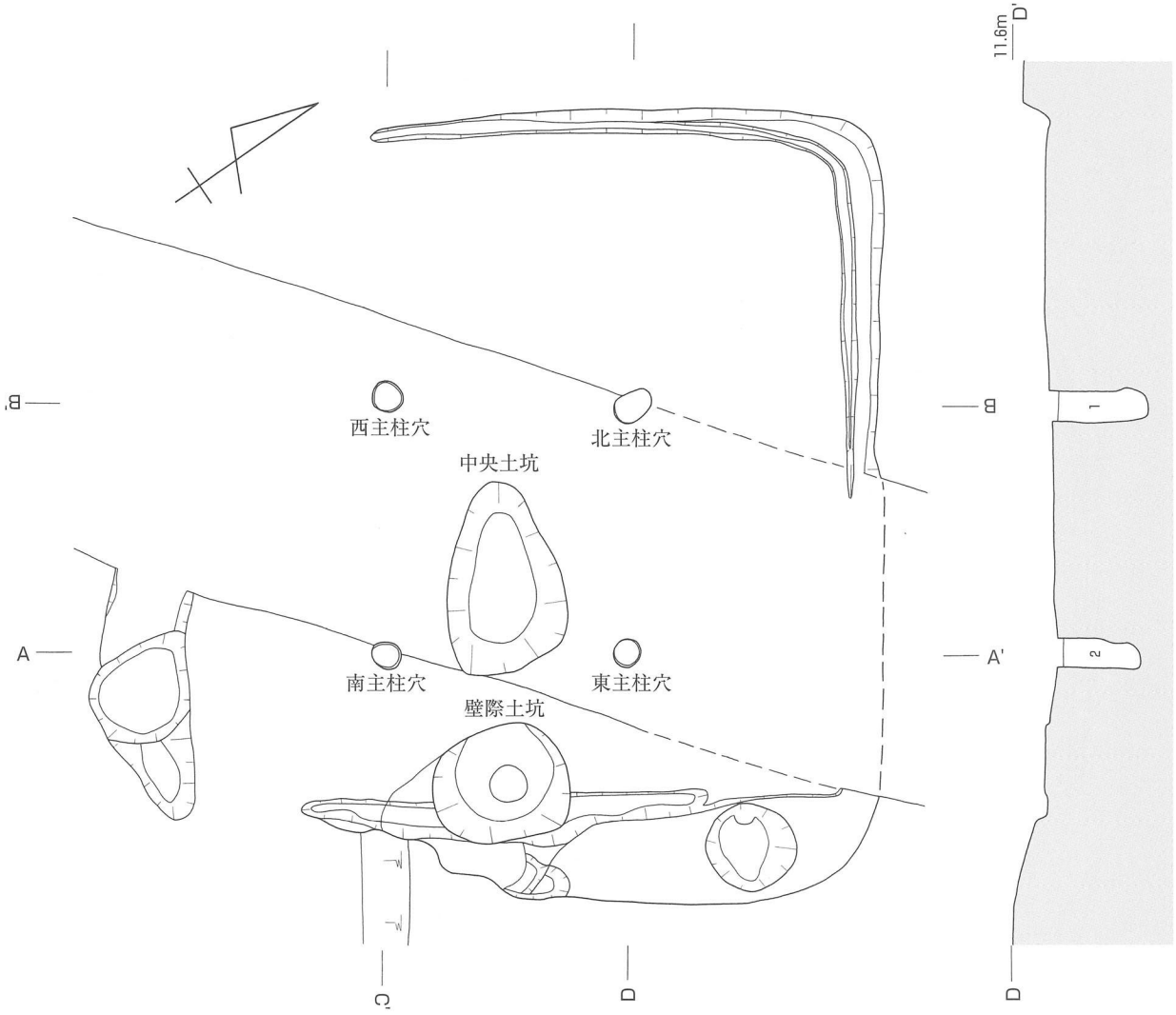
1. 褐色　極細砂（焼土粒・炭混じる）
2. にぶい黄褐色　細砂～極細砂（土器含む）
3. にぶい黄褐色　極細砂～中砂
4. にぶい黄褐色　小礫～細砂
5. 明褐色　細砂～中砂
6. 褐色　細砂～極細砂
7. 褐色　極細砂～中砂
8. 明褐色　極細砂～細砂
9. 黄褐色　極細砂

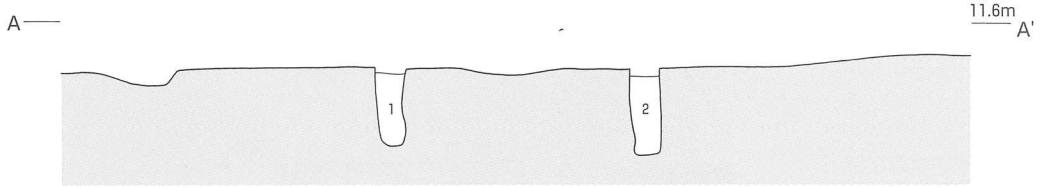
SH2203　中央土坑

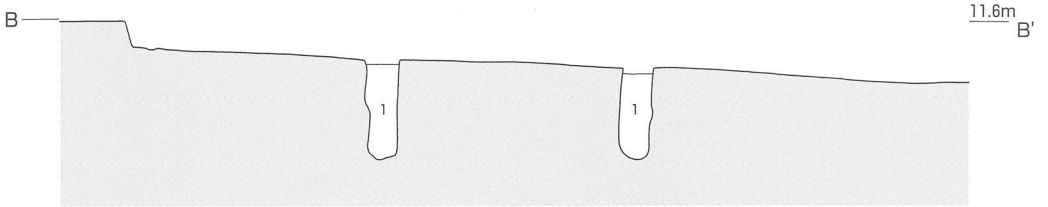


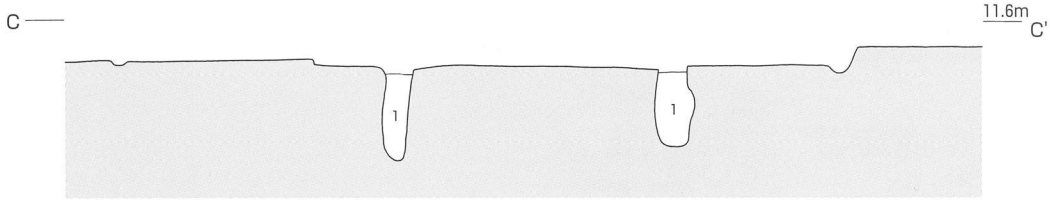
1. 褐色　極細砂質シルト（焼土粒含む）

SH2203 詳細図



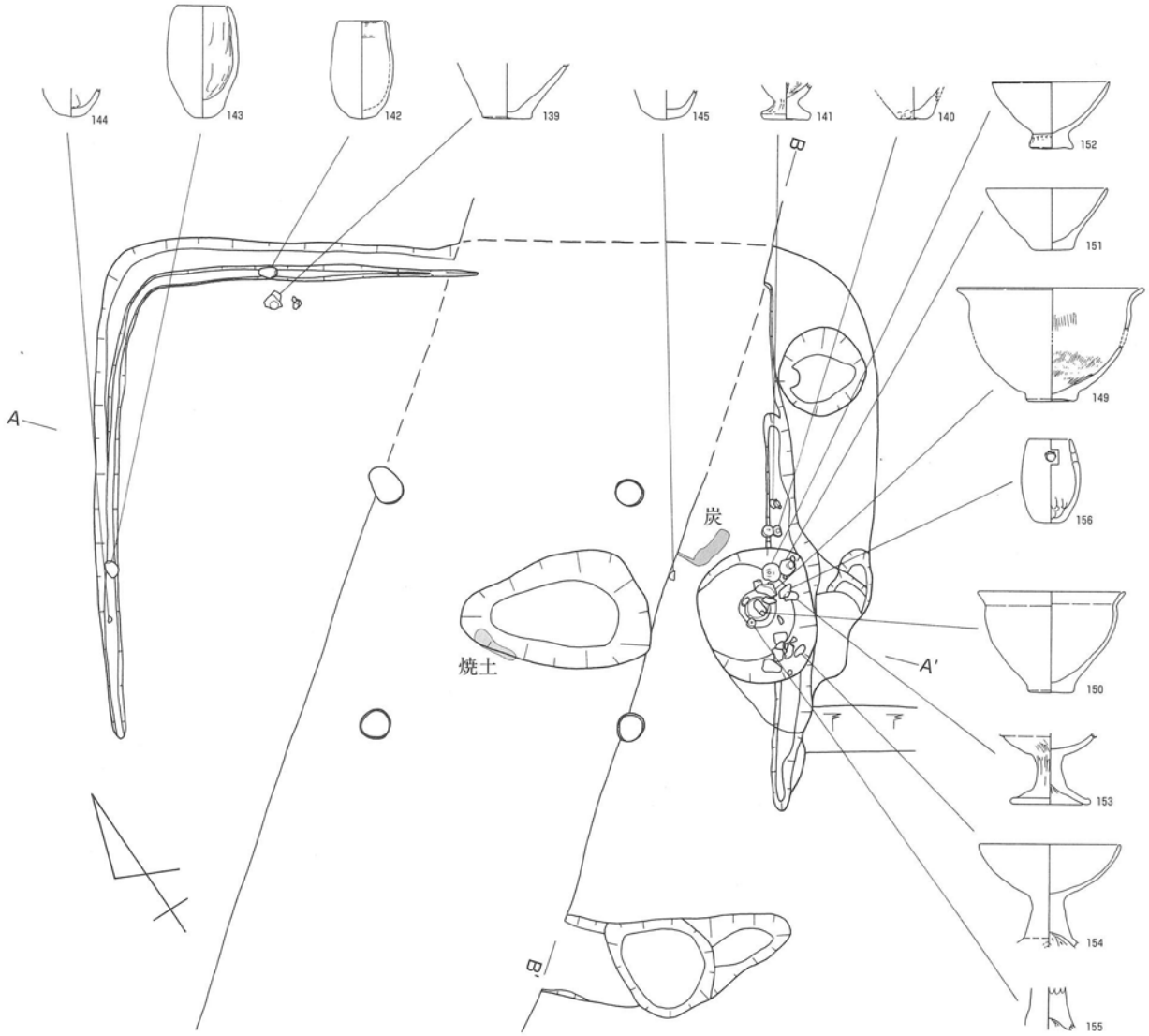


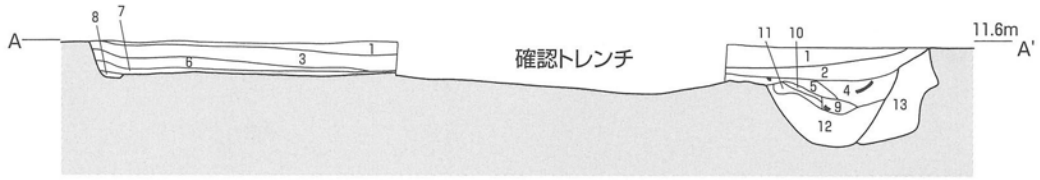


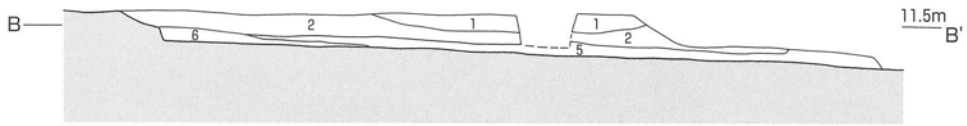


1. 褐色　シルト質極細砂～細砂（基盤層ブロック多く含む）
2. 褐色　シルト質極細砂～細砂（基盤層ブロック僅かに含む）

SH2204





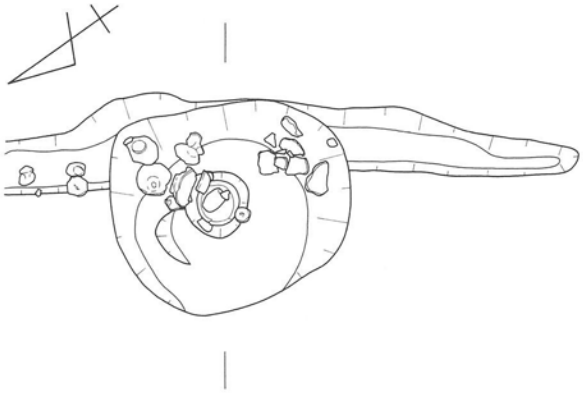


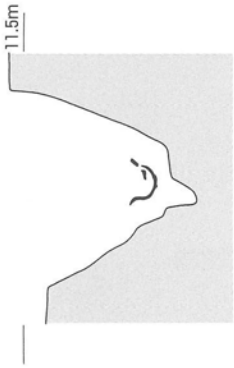
1. にぶい黄褐色　細砂
2. 黄褐色　細砂
3. 褐色　細砂（明褐ブロック混じる　　炭わずかに含む）
4. 褐色　極細砂（黄褐ブロック含む　土器多量に含む）
5. 褐色　シルト質（土器・炭を含む）
6. 黄褐色　極細砂～細砂（土器小片含む）
7. 褐色　シルト質極細砂
8. 明褐色　細砂
9. 暗褐色　極細砂（土器含む）
10. にぶい黄褐色　極細砂
11. 褐色　極細砂
12. 明褐色　極細砂～細砂
13. にぶい黄褐色　極細砂《古い穴》

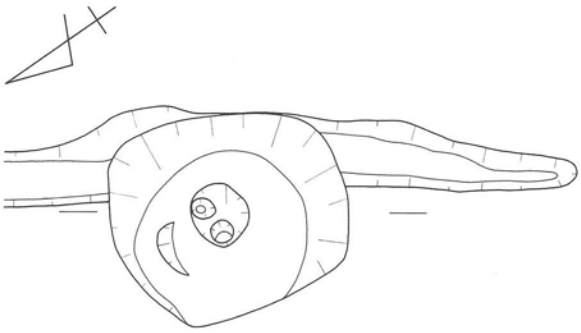
0　2m

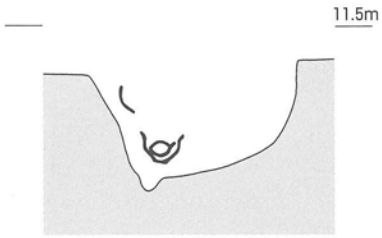
SH2204 土器出土位置図

壁際土坑

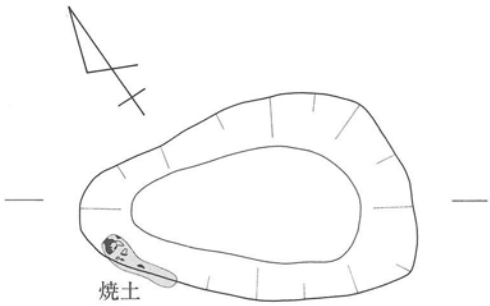








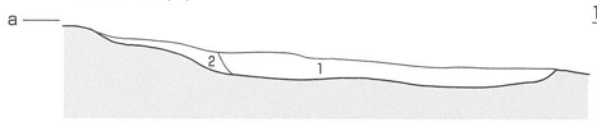
中央土坑



SH2204 詳細図

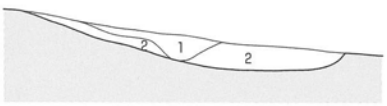
図版 15

SX2202西



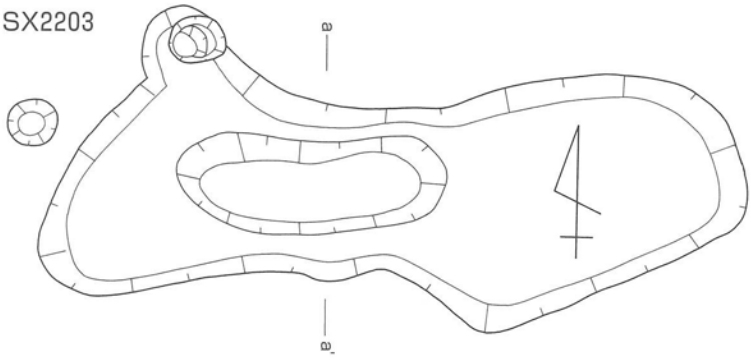
1. 10YR4/4褐色　中砂～粗砂
2. 7.5YR4/3～4/4褐色　中砂　1より赤味が強い

SX2202東

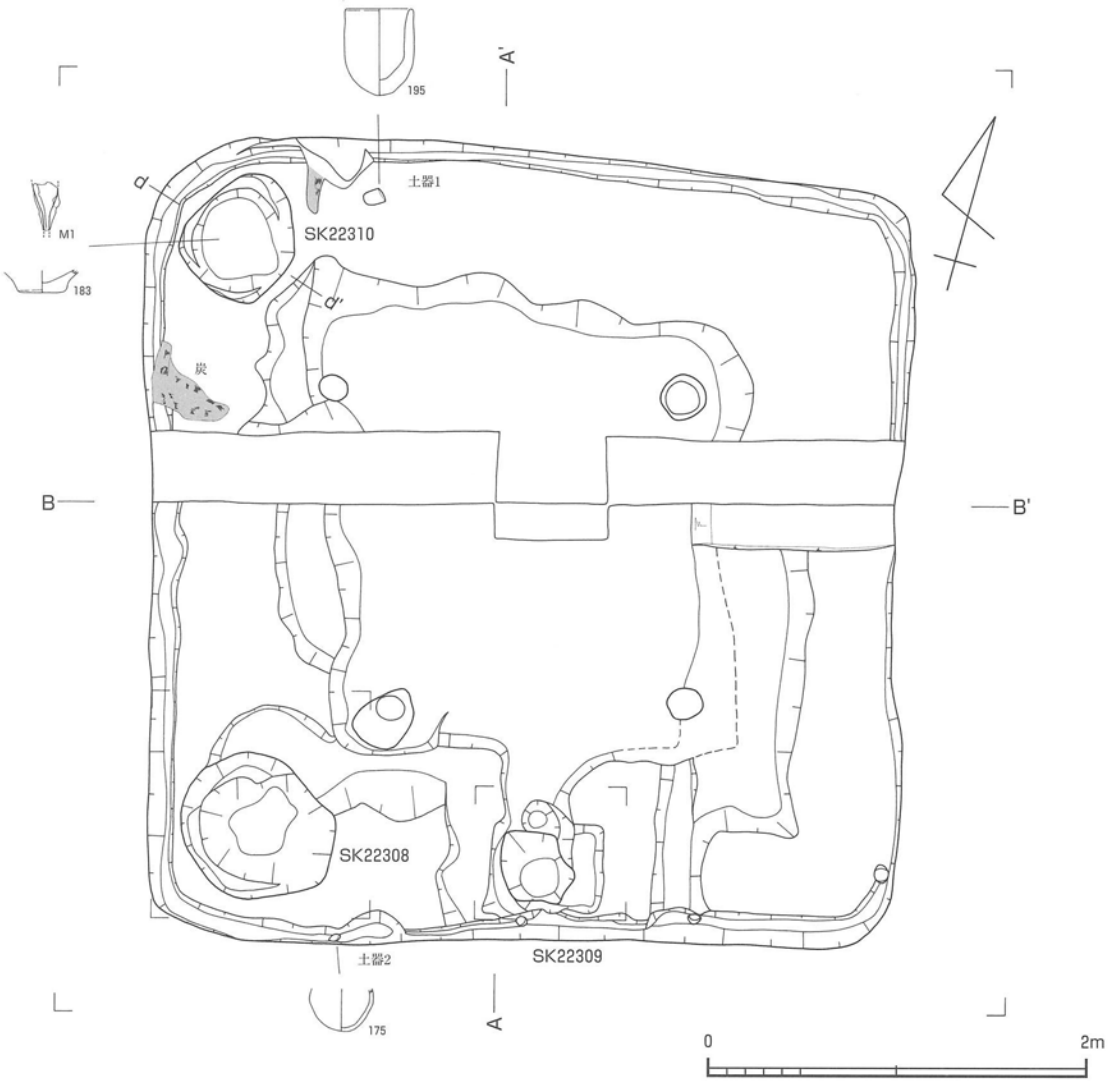


1. 10YR5/4にぶい黄褐色　細砂～中砂
2. 10YR4/4褐色　細砂

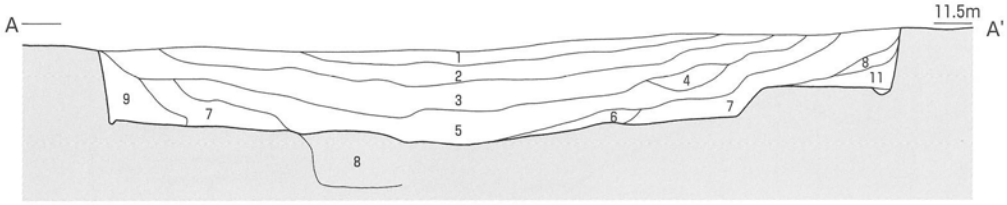
SX2203

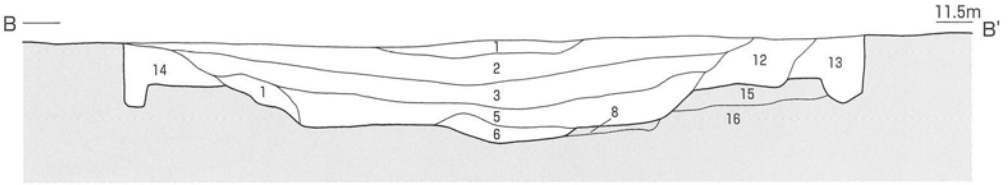


1. 10YR4/4褐色　中砂～粗砂



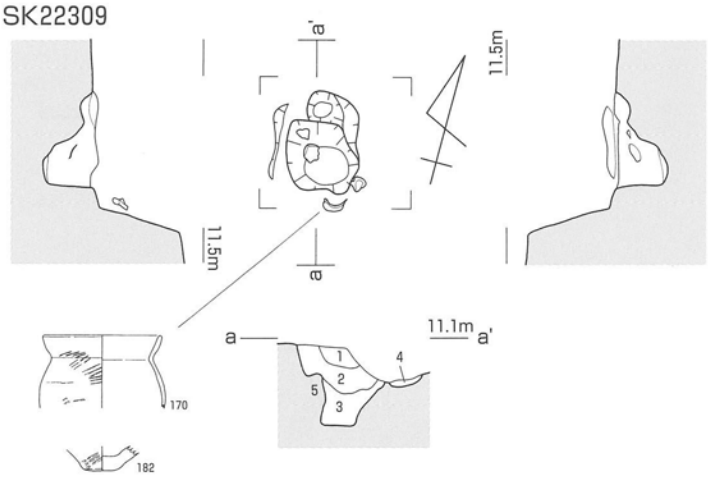
SX22002・SX22003・SH2205





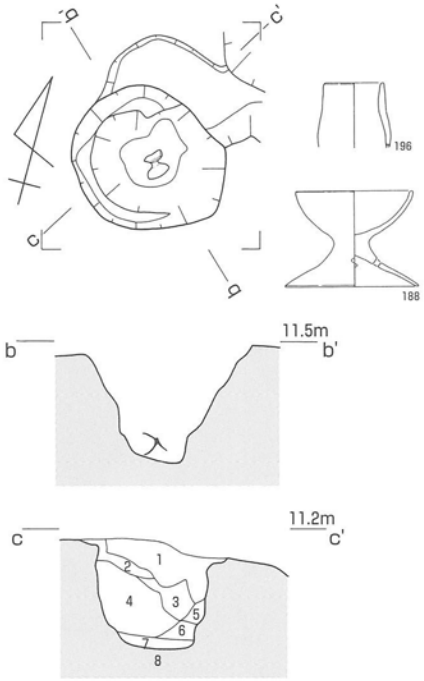
1. 10YR4/3にぶい黄褐色　細砂～粗砂　マンガン・鉄分の斑状集積　中世包含層に似る
2. 10YR3/3暗褐色　細砂～中砂　土壌化の進行した層
3. 10YR4/2灰黄褐色　細砂～中砂
4. 10YR4/3にぶい黄褐色　細砂～中砂
5. 10YR3/2黒褐色　細砂～中砂　色調は住居外側に向かうに従い漸移的に淡色化する
土壌化が進んでいる　炭化物・焼土片を含む
6. 10YR4/3にぶい黄褐色　細砂～中砂　炭化物片を含む
7. 10YR4/2灰黄褐色　細砂～中砂　6層と基本的には同じかもしれないが、より明色である
8. 10YR5/3にぶい黄褐色　中砂で粗砂含む　ベースブロック混入　床面を形成する埋土
9. 10YR5/4にぶい黄褐色　細砂～中砂で粗砂含む　土器・炭・焼土含む
10. 10YR4/3にぶい黄褐色　中砂で粗砂含む　ベース土に近似（高床部盛土か）
11. 10YR4/4褐色　細砂～中砂で粗砂含む　焼土・炭含む
12. 10YR4/4褐色　シルト質極細砂～粗砂
13. 10YR4/4褐色　シルト質極細砂～粗砂　地山ブロックを含む
14. 10YR4/4褐色　極細砂～粗砂　地山ブロックを多く含む
15. 7.5YR4/4褐色　砂質シルトで中砂～粗砂を多く含む　高床部を形成する盛土
16. 7.5YR5/6明褐色　小礫混じり細砂～粗砂　地山

SK22309

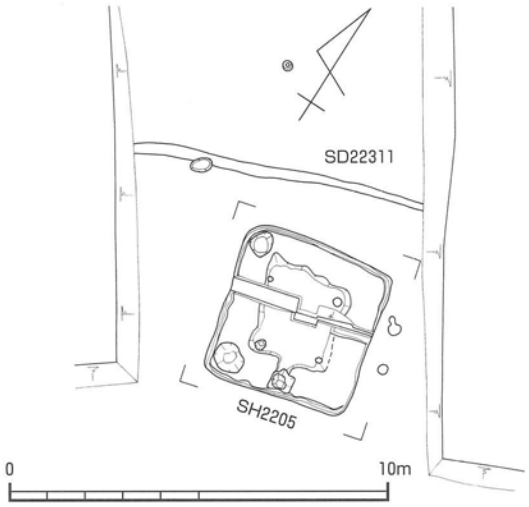


1. 9YR4/6褐（暗黄褐）色　極細粒砂～細粒砂　中粒砂～粗粒砂含み粘質　土器含む
2. 10YR3/4暗褐（暗灰褐）色　極細粒砂混じり中粒砂～粗粒砂　粘質砂で土器・炭含む
3. 10YR3.4/1黒褐（暗灰褐）色　極細粒砂混じり細粒砂～粗粒砂　粘質砂で土器含む　軟質
4. 10YR4.5/2灰黄褐（暗黄灰）色　細粒砂～中粒砂　砂層　地山だが貫入の木根痕か
5. 7.5YR5/8明褐（黄橙）色　花崗岩風化土に近い軟岩　極細粒砂～粗粒砂　地山

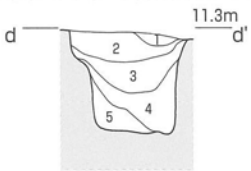
SK22308



1. 10YR3/1黒褐（暗灰褐）色　細粒砂～粗粒砂　砂質で土器片・炭含む
2. 10YR4/3にぶい黄褐（黄灰褐）色　極細粒砂混じり細粒砂～中粒砂　粗砂多く含みやや砂質
3. 10YR4/4褐（黄灰褐）色　極細粒砂～細粒砂で中粒砂多く含む　粗粒砂少量含みやや粘質
4. 10YR4/6褐（暗黄褐）色　極細粒砂混じり細粒砂～中粒砂で粗粒砂多く含む　やや粘質
5. 10YR3/2黒褐（暗黄灰褐）色　極細粒砂混じり細粒砂～粗粒砂　粘質砂
6. 10YR4/2灰黄褐（暗灰黄褐）色　細粒砂混じり中粒砂～粗粒砂の砂層と地山の混じりあった層
7. 10YR5/1.6灰黄褐（灰）色　細粒砂混じり中粒砂～粗粒砂　やや粘質の砂層
8. 7.5YR5/8明褐（黄橙）色　細粒砂～粗粒砂　花崗岩軟岩風　地山



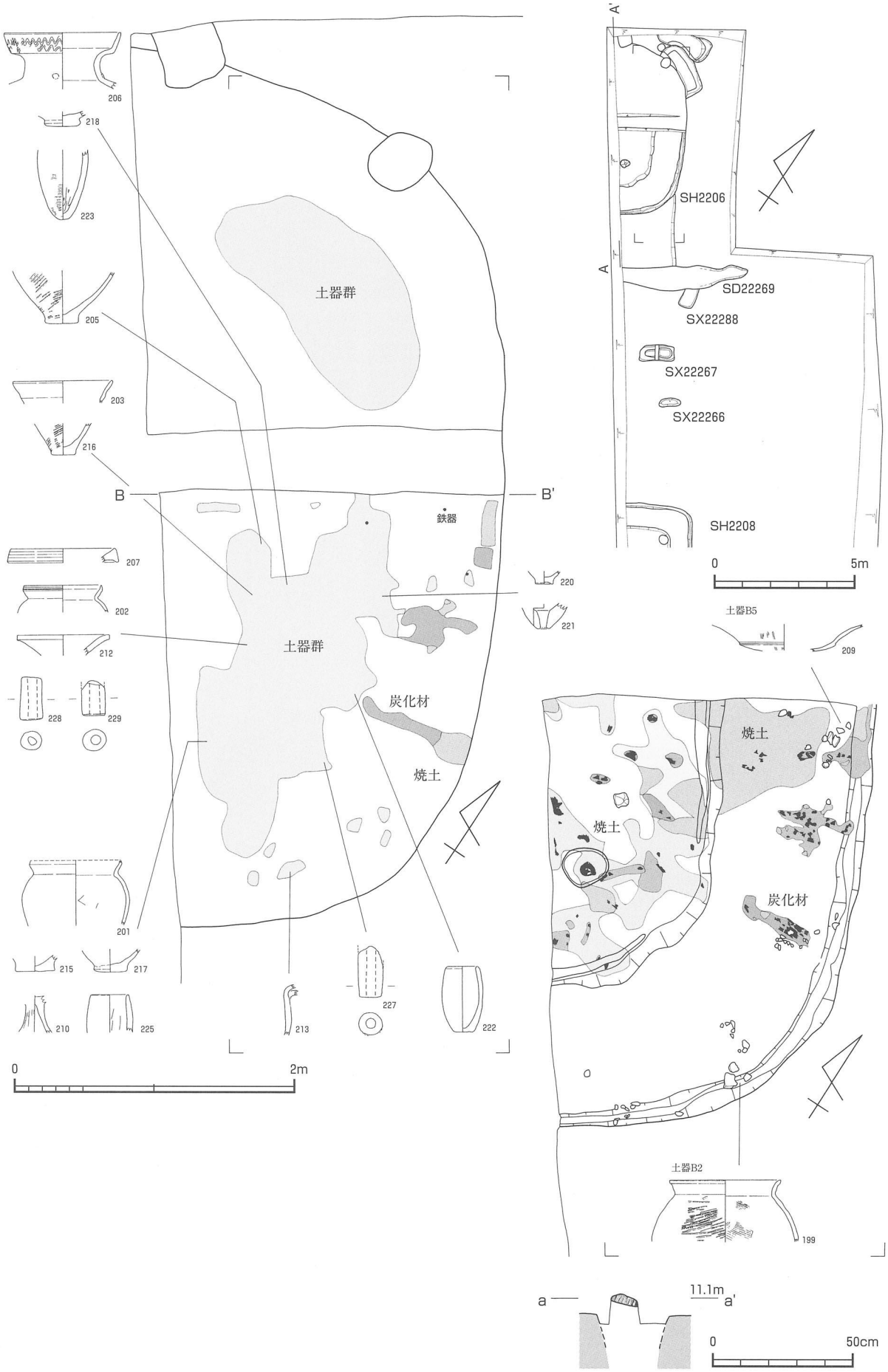
SK22310



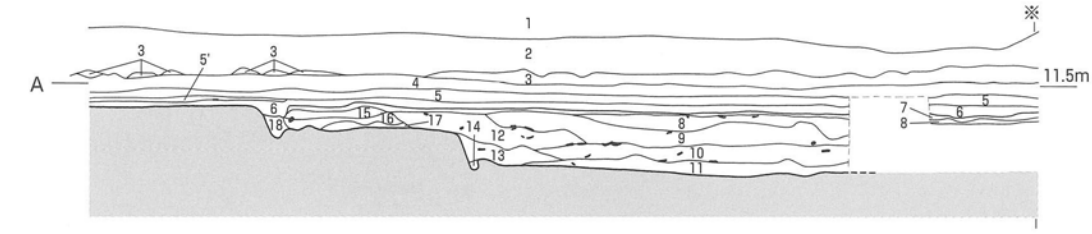
1. 10YR3/3暗褐色　極細砂～中砂　わずかに炭混じる
2. 10YR4/3にぶい黄褐色　シルト質極粒～細砂　親指大の地山ブロック多く含む
3. 10YR4/6褐色　極細砂～細砂で中砂含む　地山ブロック含む　炭混入
4. 10YR3/4暗褐色　シルト質細砂～中砂
5. 10YR5/6黄褐色　シルト質極細砂～細砂

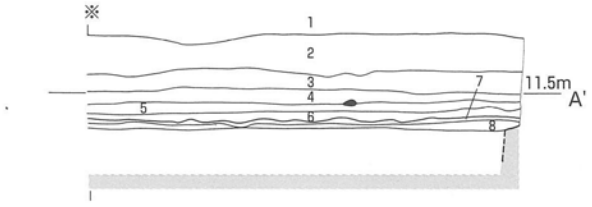
SH2205 詳細図

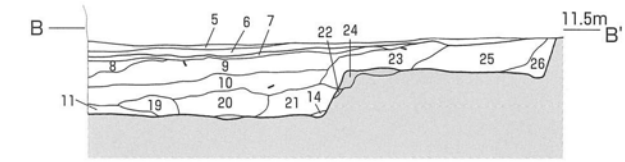
図版 17


206
218
223
205
203
216
B
B'
207
202
212
228
229
201
215
217
210
225
213
227
222
220
221
土器群
土器群
鉄器
炭化材
焼土
0
2m
A'
A
SH2206
SD22269
SX22288
SX22267
SX22266
SH2208
0
5m
土器B5
209
焼土
焼土
炭化材
土器B2
199
a
11.1m
a'
0
50cm

SH2206

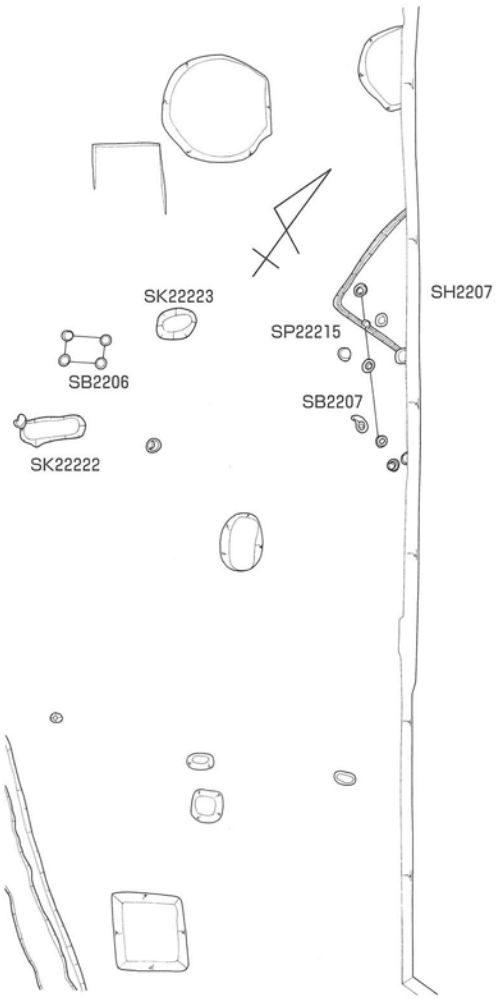




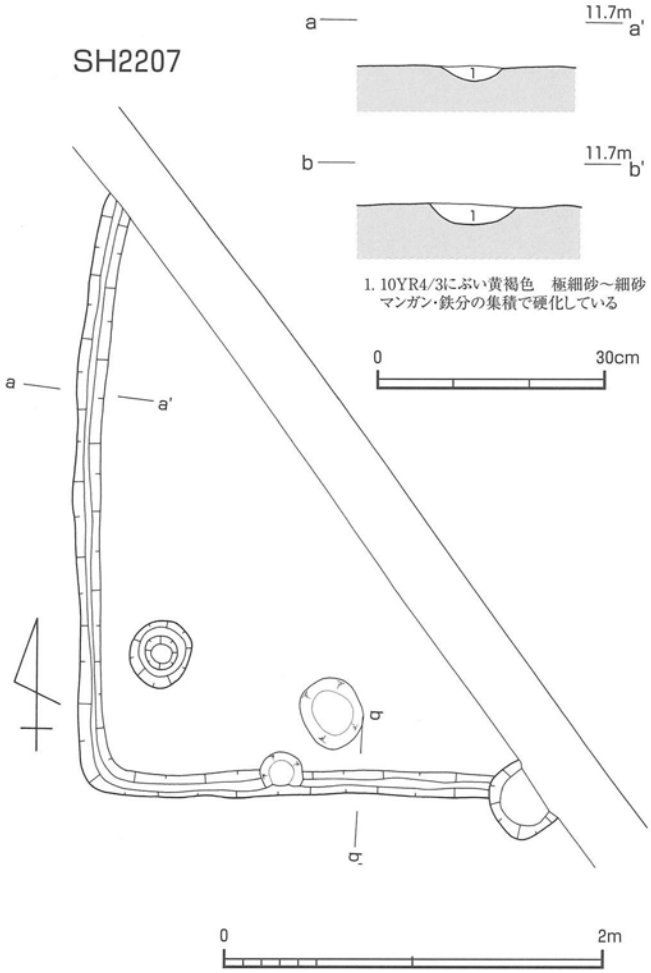


0 2m

1. 5Y6/8オリーブ色　埋立盛土層
2. 2.5Y4/1黄灰（乳灰）色　耕土
3. 2.5Y5.5/1黄灰（黄灰）色　細粒砂で中粒砂～極粗粒砂含む　床土又は旧耕土
4. 10YR6/3にぶい黄橙（乳褐灰）色　極細粒砂まじり細粒砂　中粒砂～極粗粒砂多く含む
5. 10YR5/2.6にぶい黄褐（明褐灰）色　細粒砂混じり中粒砂　粗粒砂～極粗粒砂多く含む
5′.7層に同じ
6. 10YR4/3にぶい黄褐（灰褐）色　細粒砂～中粒砂　粗粒砂～細礫含む
7. 7.5YR3/4暗褐色と7.5YR3/1黒褐色　鉄分・マンガン沈着層
8. 10YR4/2灰黄褐（暗褐灰）色　細粒砂混じり中粒砂　粗粒砂～極粗粒砂含む　砂質
9. 10YR5/1.4褐灰（褐灰）色　極細粒砂混じり細粒砂～中粒砂で粗粒砂～極粗粒砂含む　と10YR4.6/6黄褐（黄褐色）色　極細粒砂～細粒砂　が混じりあった層で下面に土器多く含む
10. 10YR3/1黒褐（暗褐灰）色　極細粒砂混じり細粒砂～中粒砂　粗粒砂～極粗粒砂含む粘質砂層炭・土器含む
11. 10YR2/2黒褐（黒灰褐）色　極細粒砂で中粒砂～粗粒砂含む　主として炭化材の集積層土器少量含む
12. 10YR4/1.6灰黄褐（灰褐）色　極細粒砂混じり細粒砂～中粒砂　粗粒砂～極粗粒砂含み土器少量含む
13. 10YR4/3にぶい黄褐（濁褐）色　粗粒砂～極粗粒砂を含む極細粒砂～細粒砂　土器・焼土・炭少量含む
14. 10YR4/4褐（濁明褐）色　極細粒砂で細粒砂～極粗粒砂混じる
15. 10YR3/3暗褐（暗褐）色　極細粒砂混じり細粒砂～粗粒砂
16. 10YR3.6/3にぶい黄褐（暗濁黄褐）色　極細粒砂混じり細粒砂～極粗粒砂
17. 10YR3.4/4.5暗褐（濁褐）色　極細粒砂混じり細粒砂～極粗粒砂　やや粘質
18. 10YR4/2灰黄褐（暗濁黄褐）色　極細粒砂～細粒砂で中粒砂～極粗粒砂含みやや粘質地山ブロック混じり
19. 5YR3/2暗赤褐（暗赤褐）色　極細粒砂～細粒砂　中粒砂～粗粒砂含む　やや粘質で焼土中心
20. 10YR3/2黒褐（暗灰褐）色　細粒砂～中粒砂で粗粒砂～極粗粒砂含む　地山ブロック少量含む
21. 10YR4/2.4灰黄褐（灰黄褐）色　細粒砂で中粒砂～極粗粒砂多く含む
22. 2.5YR4/6赤褐（赤褐）色　極細粒砂～細粒砂で中粒砂～極粗粒砂少量含む　粘質で地山の赤化層
23. 10YR4/2灰黄褐（灰黄褐）色　細粒砂で中粒砂～極粗粒砂多く含む　極細粒砂微量含む
24. 7.5YR4/2灰褐（濁灰褐）色　極細粒砂混じり中粒砂～極粗粒砂　焼土混じる　高床部の土壌化層
25. 10YR4/2灰黄褐（灰黄褐）色　細粒砂で中粒砂～極粗粒砂多く含む　極細粒砂微量含む
26. 10YR4.6/3.5にぶい黄褐（にぶい黄褐）色　極細粒砂微量含む細粒砂　中粒砂～粗粒砂・焼土・土器多く含む

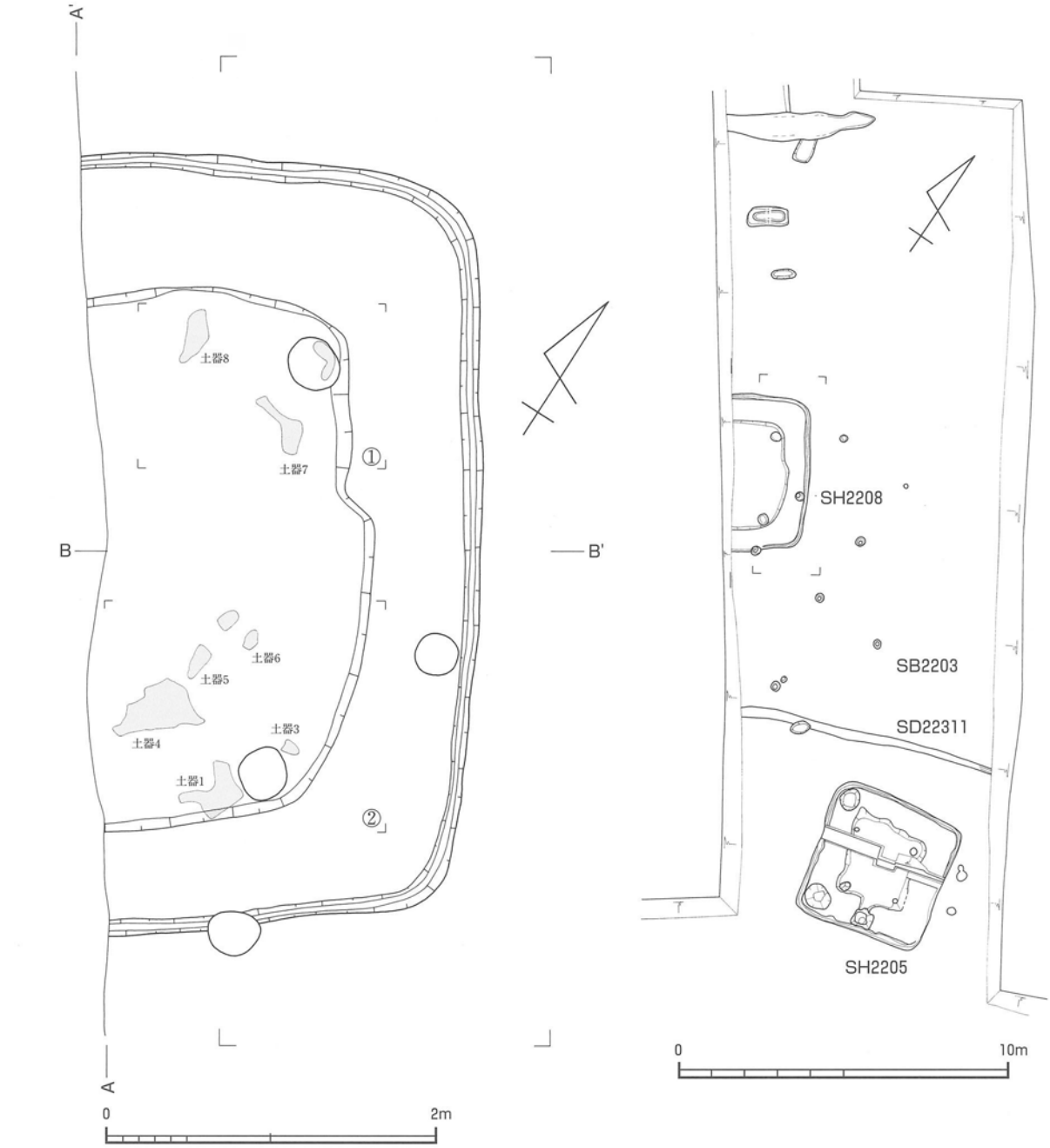


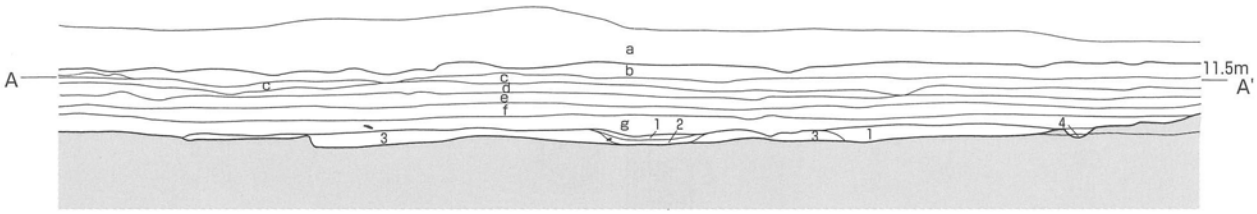
0 10m

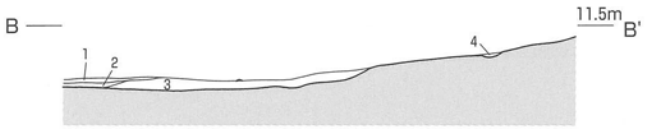


SH2206 土層断面・SH2207

図版 19





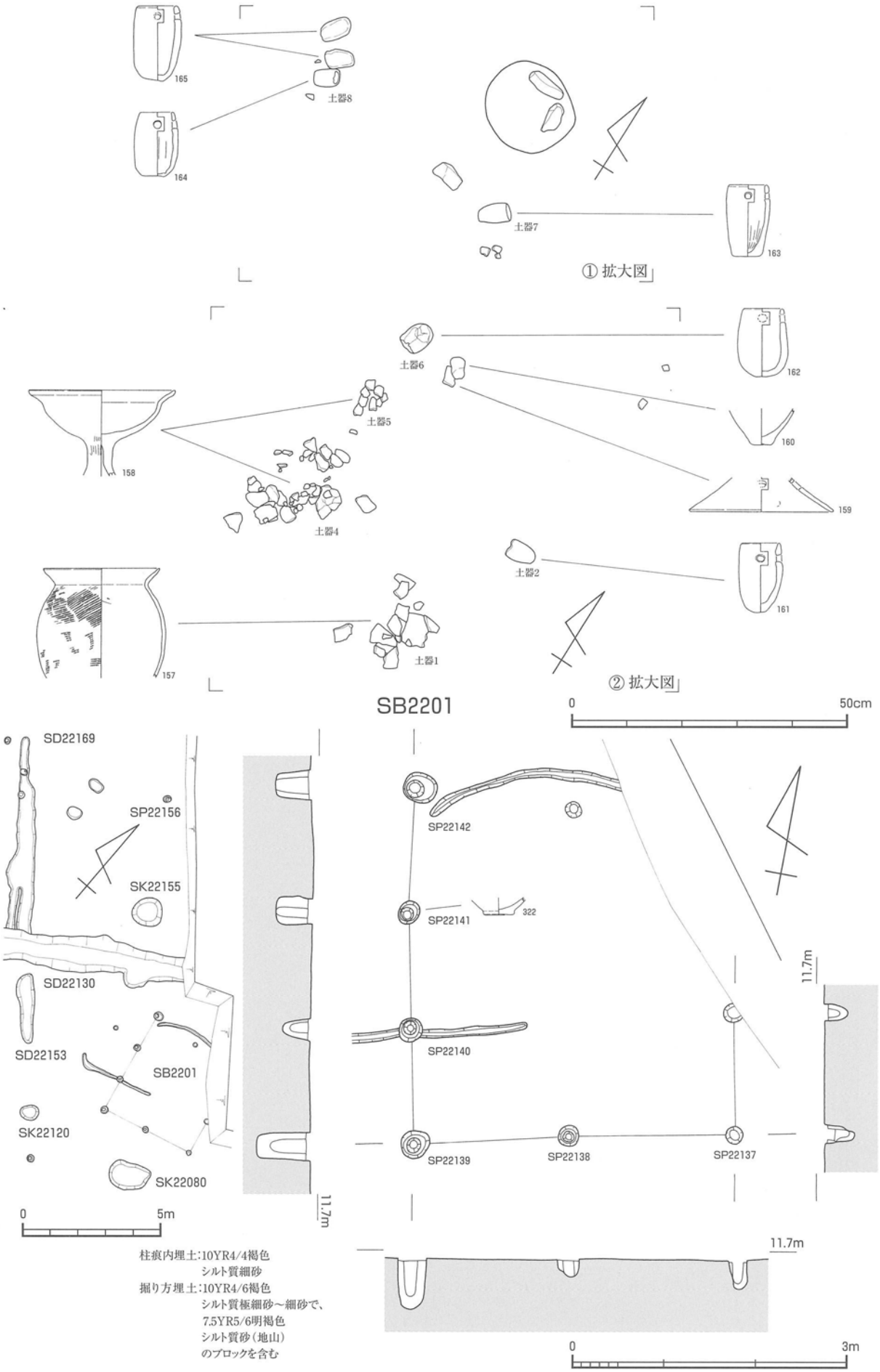


1. 7.5YR4/3褐色　極細砂～細砂
2. 10YR3/4暗褐色　シルト質細砂～極細砂　指頭大の焼土片を多く含む
3. 7.5YR4/3褐色　シルト質極細砂～細砂　指頭大の地山ブロックを含む
4. 7.5YR4/4褐色　シルト質細砂で中礫含む　周壁溝埋土

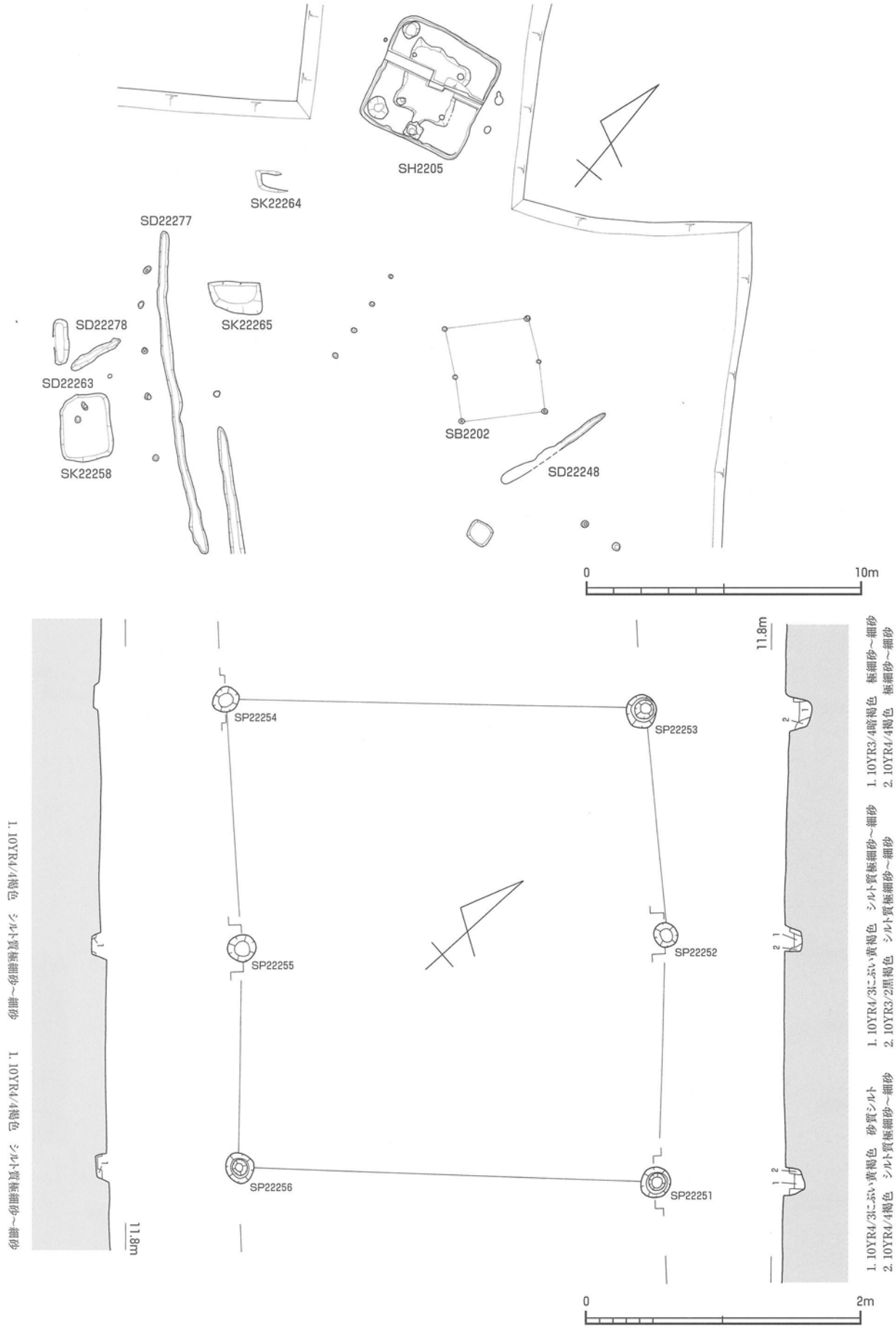
a. 現代の耕土層
b. 10YR5/3にぶい黄褐色　細砂　鉄分・マンガン集積　床土
c. 10YR4/2灰黄褐色　極細砂～細砂　上半部にマンガンの集積が著しい
d. 10YR4/3にぶい黄褐色　極細砂～細砂　上半にマンガンの集積
e. 10YR4/3にぶい黄褐色　シルト質極細砂～細砂　上半にマンガンの弱い集積
f. 7.5YR3/3暗褐色　極細砂～細砂
g. 7.5YR3/3暗褐色　シルト質極細砂～細砂

0　2m

SH2208

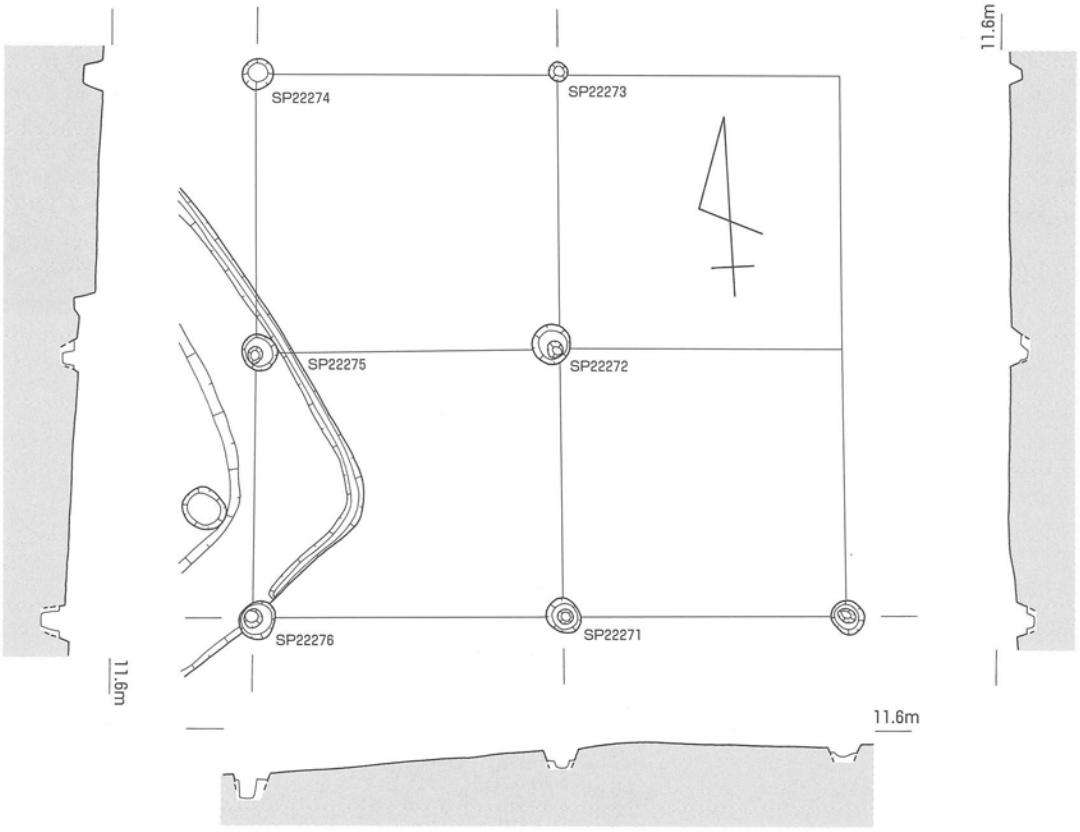


SH2208 詳細・SB2201

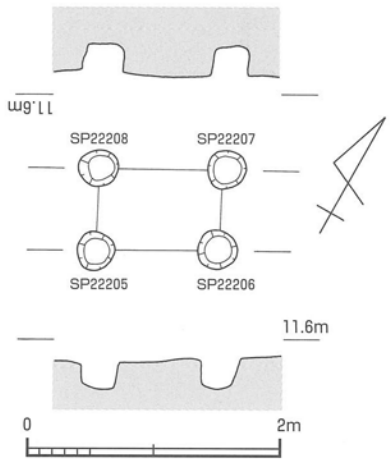

SH2205
SK22264
SD22277
SK22265
SD22278
SD22263
SK22258
SB2202
SD22248
0
10m
SP22254
SP22253
SP22255
SP22252
SP22256
SP22251
11.8m
11.8m
0
2m
1. 10YR4/4褐色　シルト質極細砂～細砂
1. 10YR4/4褐色　シルト質極細砂～細砂
1. 10YR4/3にぶい黄褐色　砂質シルト
2. 10YR4/4褐色　シルト質極細砂～細砂
1. 10YR4/3にぶい黄褐色　シルト質極細砂～細砂
2. 10YR3/2黒褐色　シルト質極細砂～細砂
1. 10YR3/4暗褐色　極細砂～細砂
2. 10YR4/4褐色　極細砂～細砂

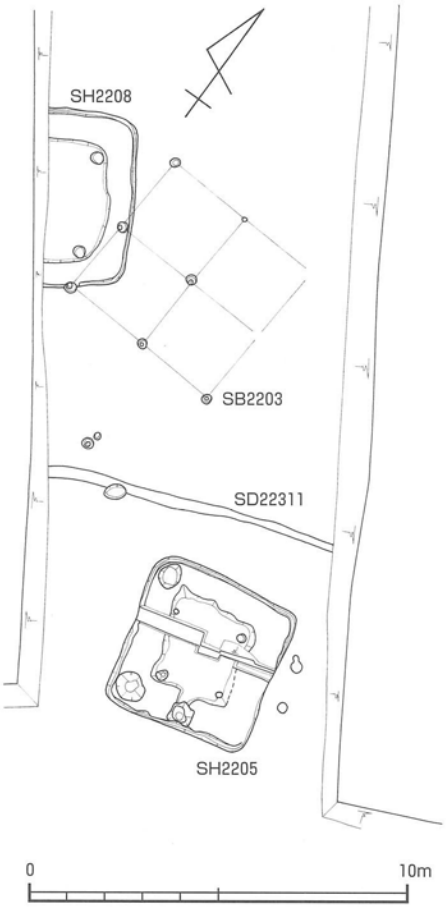
SB2202

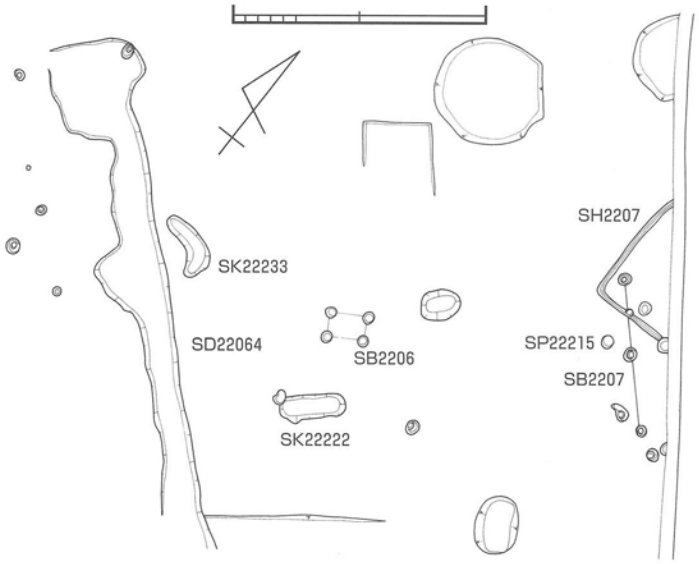
SB2203



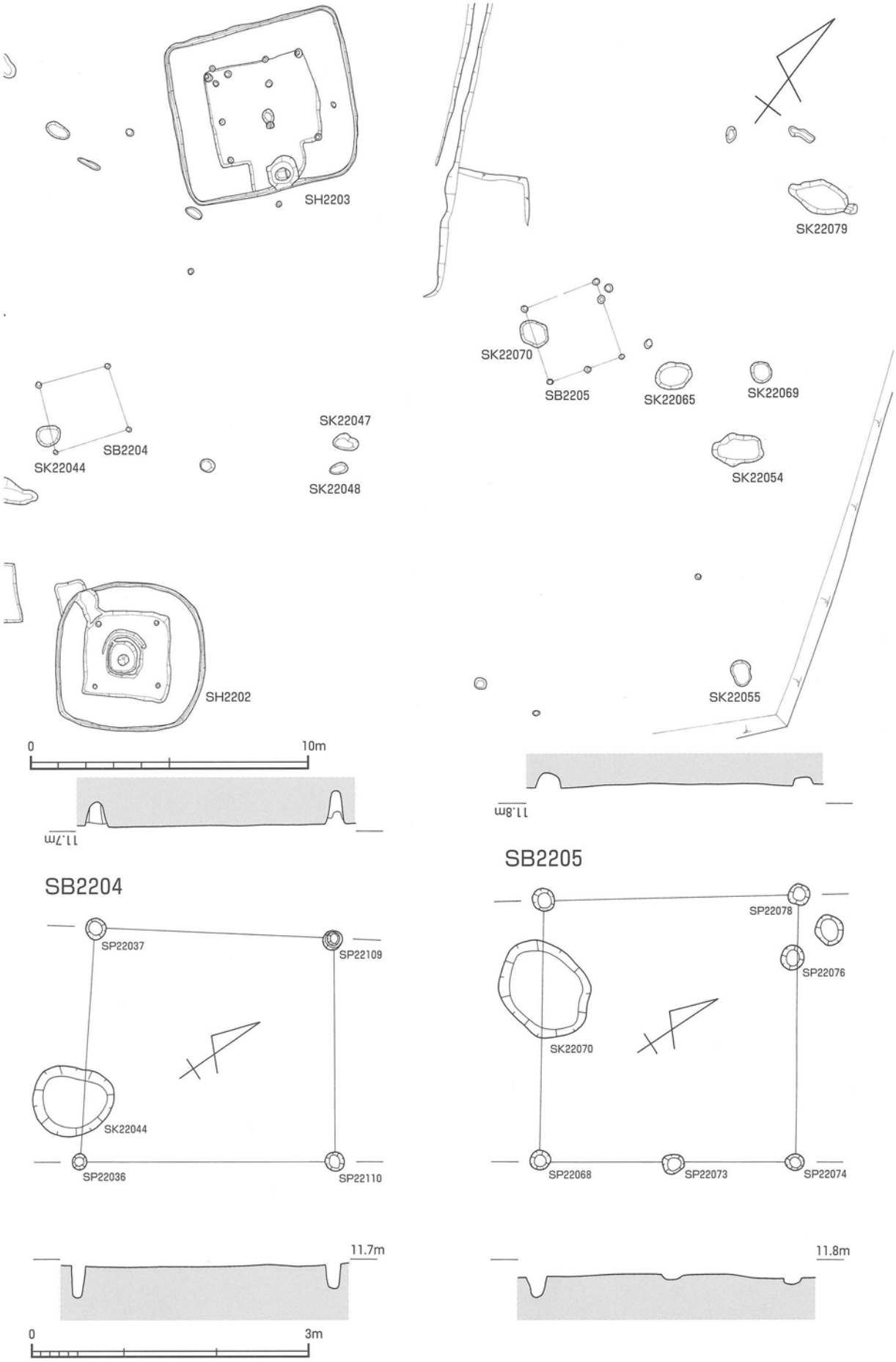
SB2206





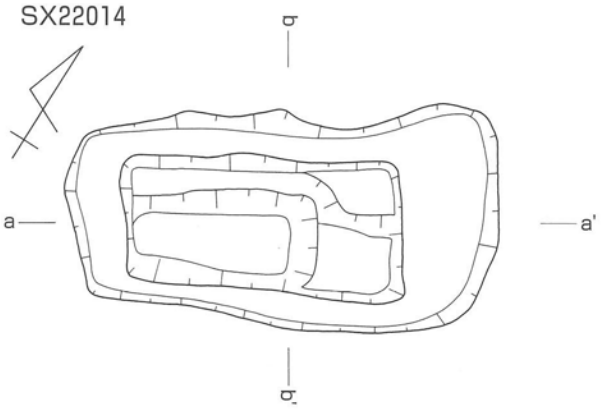


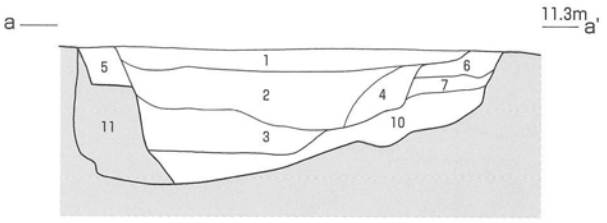
SB2203・SB2206

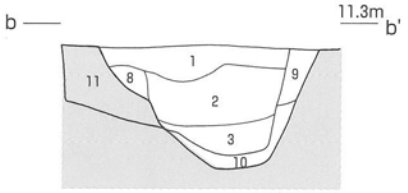


SB2204・SB2205

SX22014

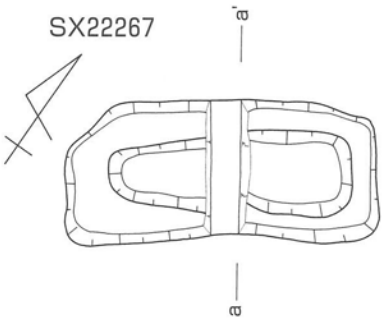


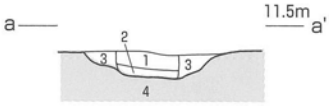




1. 10YR5/4にぶい黄褐色　細砂　やや締まる
2. 10YR5/4にぶい黄褐色　細砂～中砂
3. 10YR4/3にぶい黄褐色　シルト混じり細砂～中砂　非常に軟質
4. 10YR5/4にぶい黄褐色　細砂　2よりも黄色味強い
5. 10YR4/4褐色　細砂～中砂
6. 10YR5/4にぶい黄褐色　細砂～中砂
7. 10YR5/6黄褐色　細砂～中砂

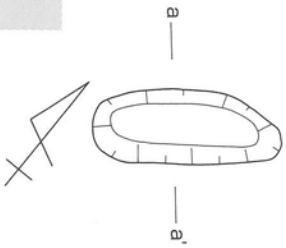
SX22267

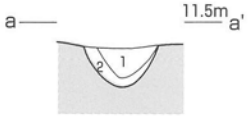




1. 7.5YR4/4褐色　細砂　中砂含む　土器含む　棺内埋土
2. 10YR4/6褐色　シルト混じり細砂　中砂～粗砂含む　棺床部?
3. 10YR5/3にぶい黄褐色　シルト質細砂　中砂・土器含む　墓壙内側埋土
4. 地山

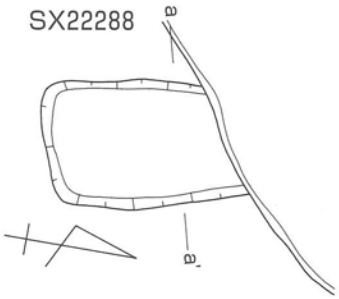
SX22266

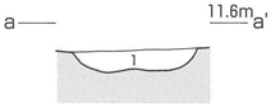




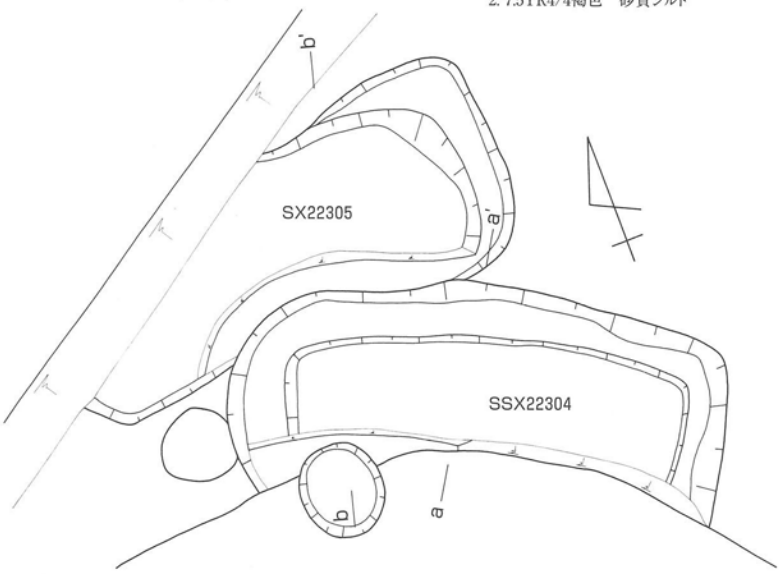
1. 7.5YR4/3褐色　シルト質極細砂～細砂
2. 7.5YR4/4褐色　砂質シルト

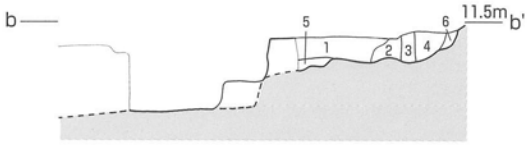
SX22288



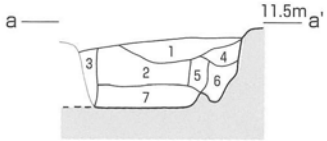


1. 10YR4/2灰黄褐(灰褐)色　極細粒砂～細粒砂
中粒砂～極粗粒砂を多量に含む　粘質砂層　土器含む





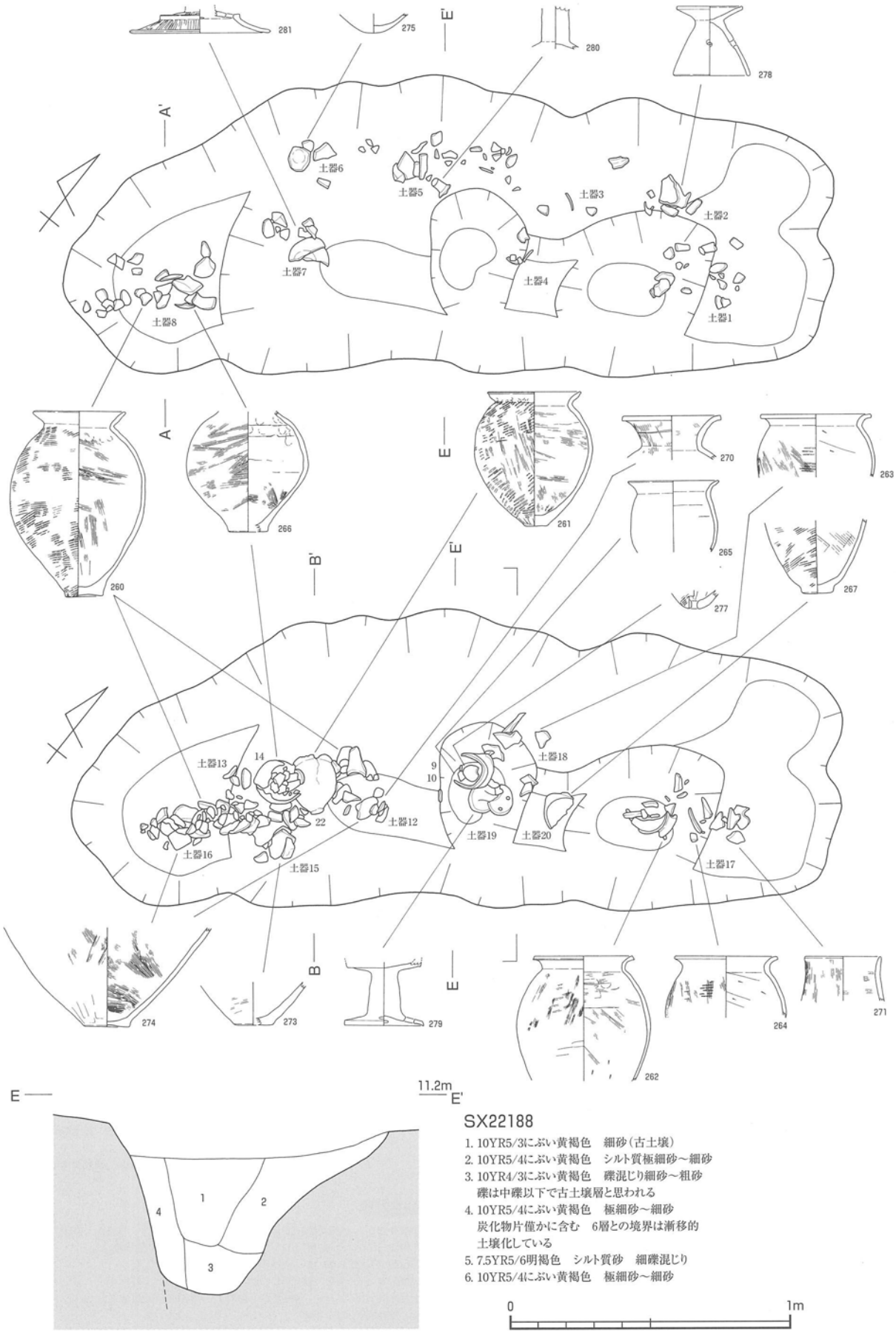
SX22304



1. 7.5YR4/4褐(濁明褐)色　極細粒砂混じり細粒砂
中粒砂～粗粒砂少量含む
2. 10YR4/4褐(黄灰褐)色　極細粒砂混じり細粒砂
中粒砂～粗粒砂微量含む
3. 9YR3/4暗褐(暗褐)色　極細粒砂で細粒砂～粗粒砂含む
細礫を少量含む
4. 10YR5/3にぶい黄褐(にぶい黄褐)色　細粒砂で中粒砂～
粗粒砂含む　極細粒砂が少量混じる
5. 7.5YR4.5/2灰褐(灰褐)色　細粒砂で中粒砂～粗粒砂含む
極細粒砂が少量混じる
6. 10YR4.5/3にぶい黄褐(にぶい黄褐)色　極細粒砂で
細粒砂～極粗粒砂含む
7. 7.5YR4/6褐(濁赤褐)色　極細粒砂～細粒砂で中粒砂～
粗粒砂を含む

SX22305

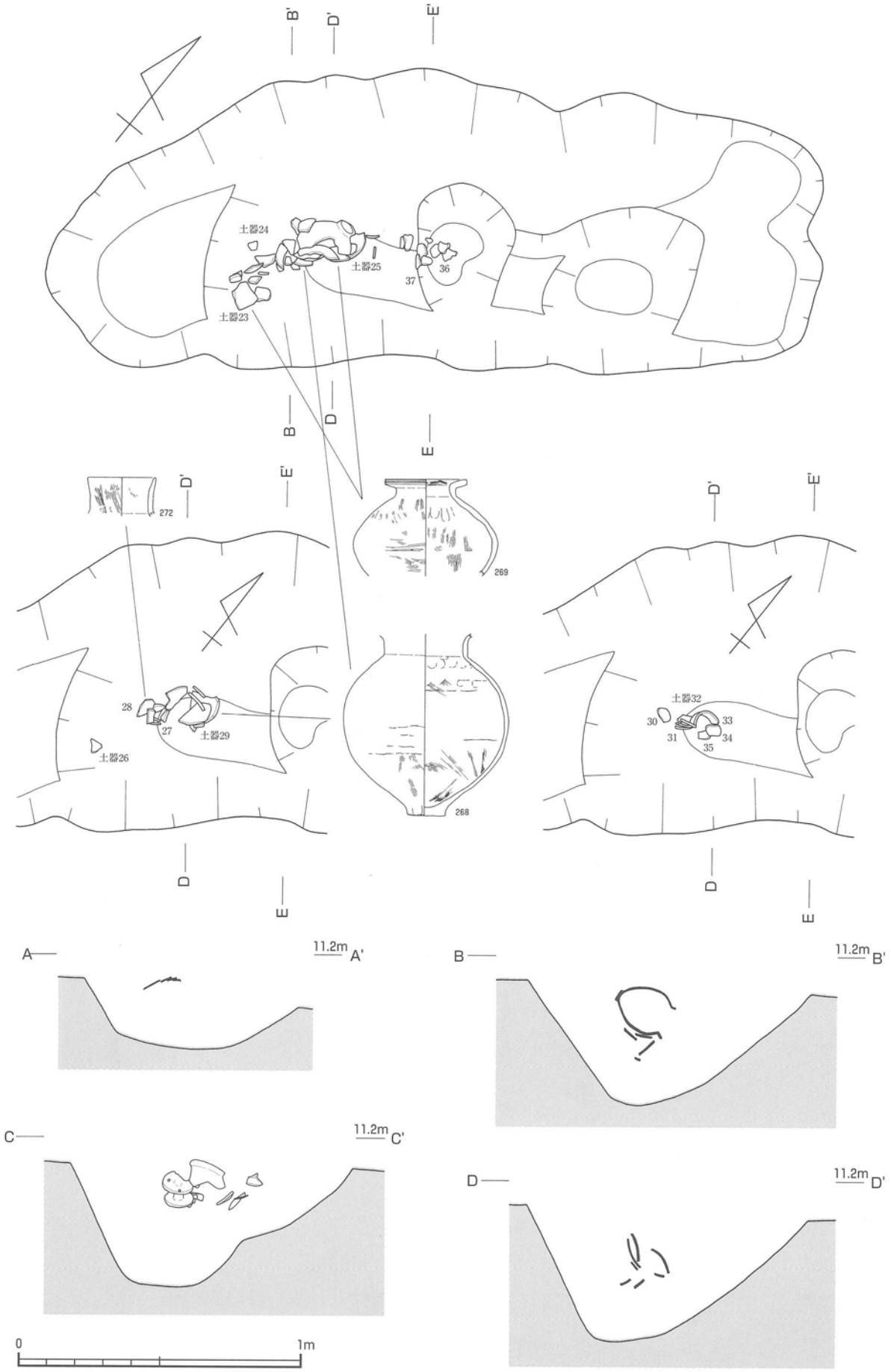
1. 10YR5/4にぶい黄褐(明褐灰)色　極細粒砂混じり細粒砂　中粒砂～粗粒砂混じる
2. 10YR5/3にぶい黄褐(黄灰褐)色　細粒砂で中粒砂～粗粒砂混じる
3. 7.5YR5/2灰褐(灰褐)色　細粒砂で中粒砂～粗粒砂混じる
4. 10YR5/4にぶい黄褐(褐灰)色　細粒砂で中粒砂～粗粒砂混じる
5. 7.5YR3/4暗褐(褐)色　極細粒砂～細粒砂で中粒砂～粗粒砂少量混じる
6. 5層と7層が混じりあった層
7. 7.5YR5/8明褐(橙褐)色　極細粒砂で細粒砂～粗粒砂を少量含む　地山



SX22188

1. 10YR5/3にぶい黄褐色　細砂（古土壌）
2. 10YR5/4にぶい黄褐色　シルト質極細砂～細砂
3. 10YR4/3にぶい黄褐色　礫混じり細砂～粗砂
礫は中礫以下で古土壌層と思われる
4. 10YR5/4にぶい黄褐色　極細砂～細砂
炭化物片僅かに含む　6層との境界は漸移的
土壌化している
5. 7.5YR5/6明褐色　シルト質砂　細礫混じり
6. 10YR5/4にぶい黄褐色　極細砂～細砂

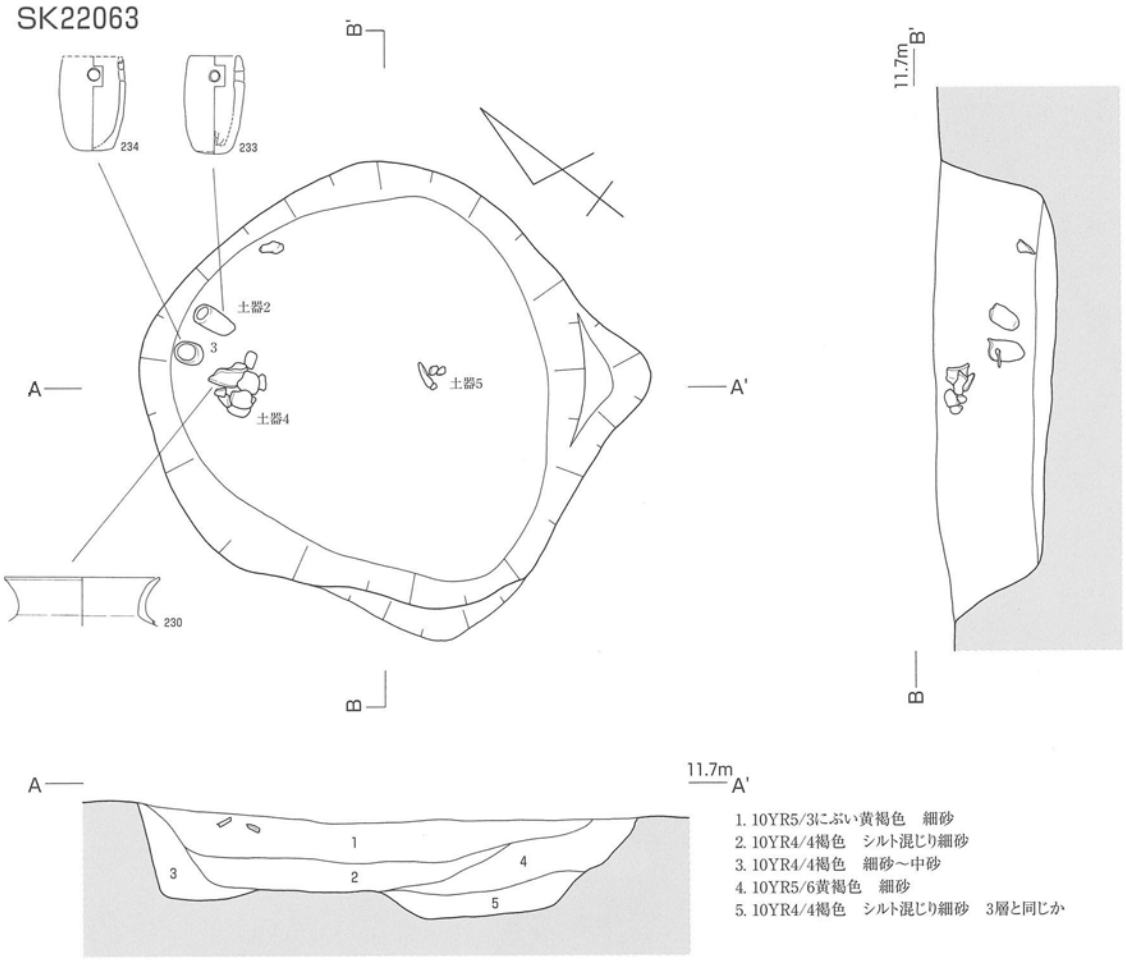
SX22188（1）


B'
D'
E'
土器24
土器25
36
37
土器23
B
D
E
D'
E'
272
269
28
27
土器29
土器26
268
D'
E'
土器32
30
31
33
34
35
D
E
D
E
A
11.2m A'
B
11.2m B'
C
11.2m C'
D
11.2m D'
0
1m

SX22188 (2)

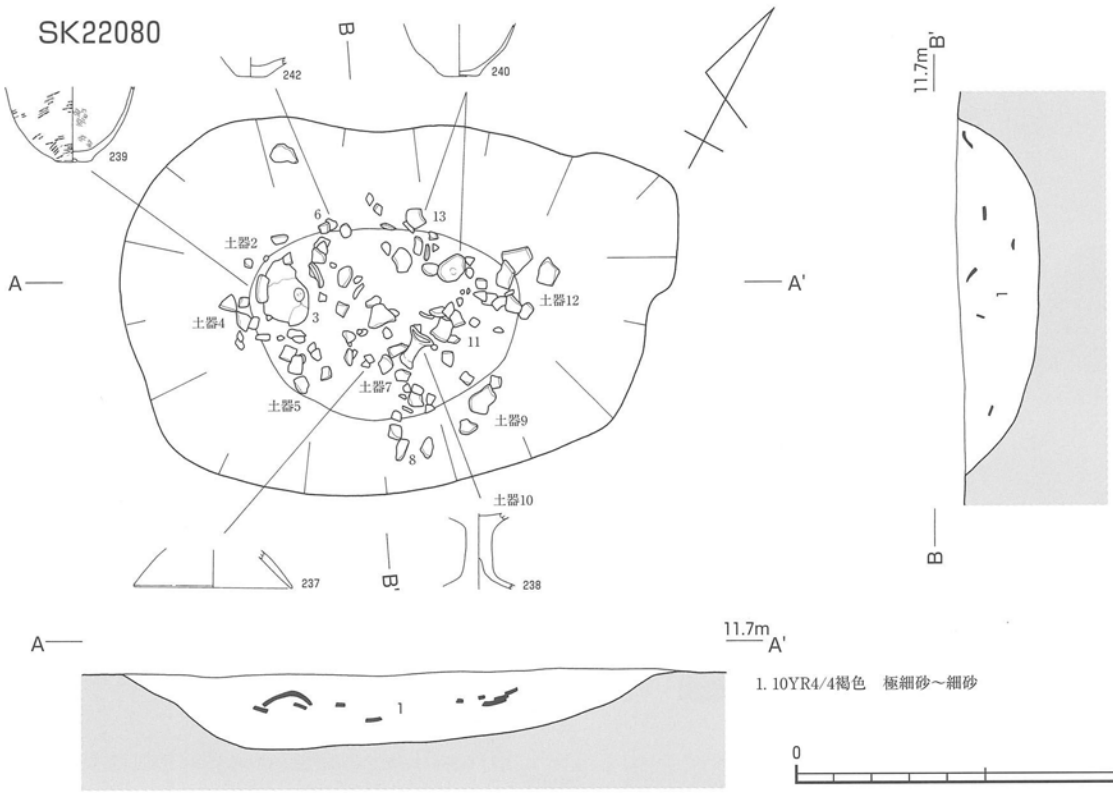
図版 27

SK22063



1. 10YR5/3にぶい黄褐色　細砂
2. 10YR4/4褐色　シルト混じり細砂
3. 10YR4/4褐色　細砂～中砂
4. 10YR5/6黄褐色　細砂
5. 10YR4/4褐色　シルト混じり細砂　3層と同じか

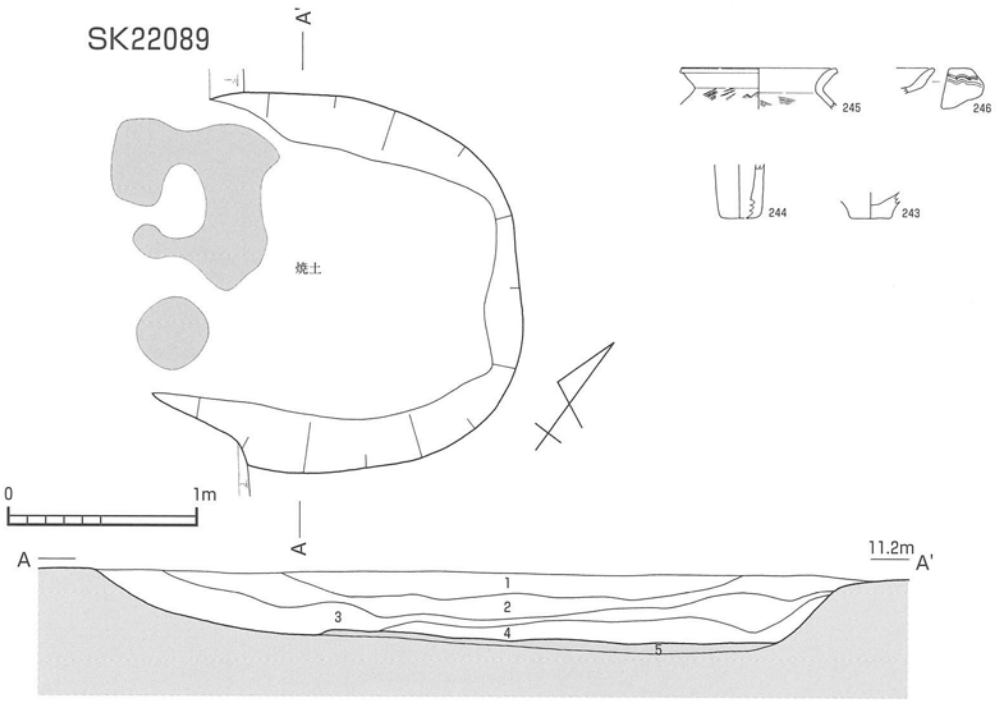
SK22080



1. 10YR4/4褐色　極細砂～細砂

SK22063・SK22080

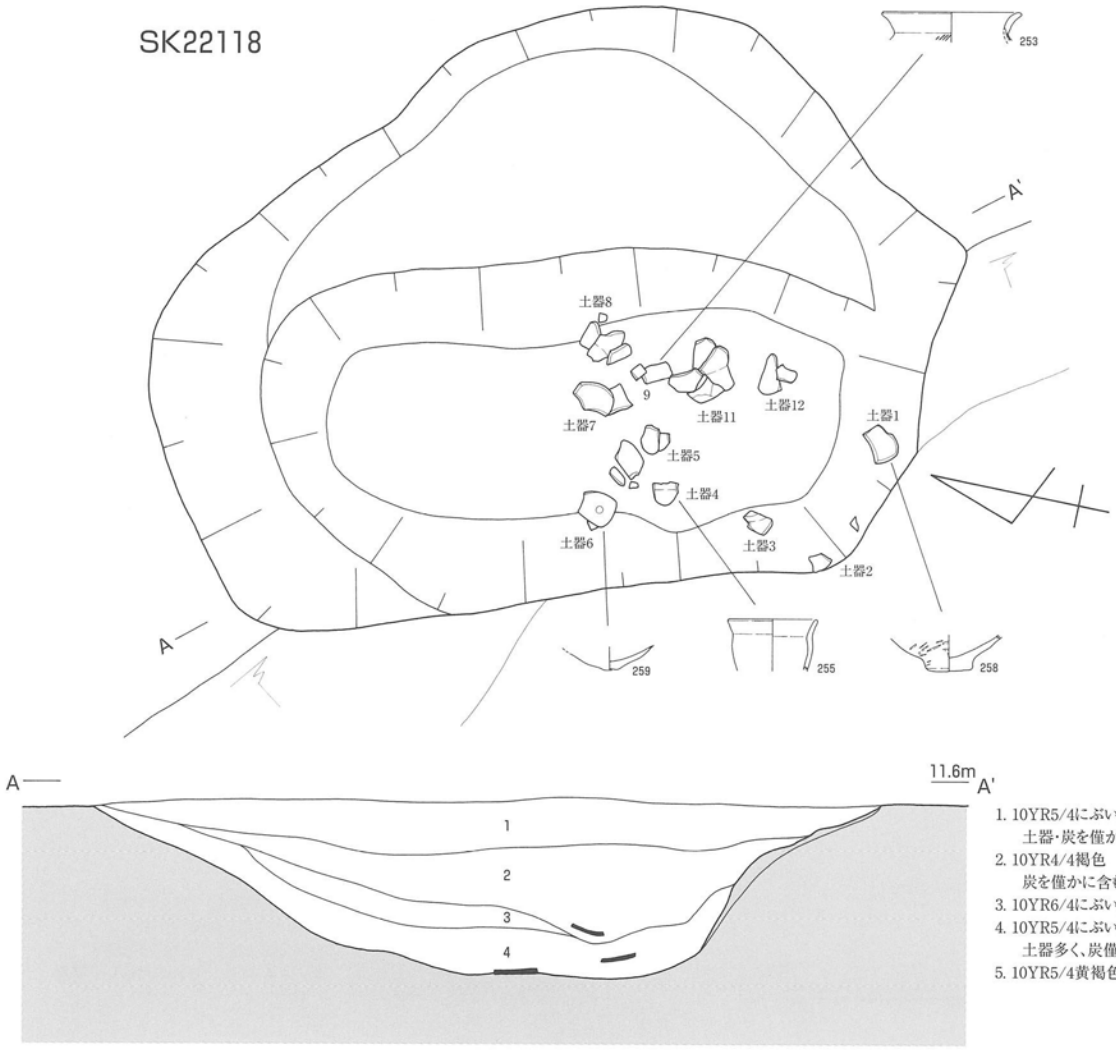
SK22089



1. 10YR5/3にぶい黄褐色　細砂　地山の指頭大ブロックを散漫に含む
2. 10YR4/3にぶい黄褐色　細砂
3. 2.5Y5/3黄褐色　細砂～中砂
4. 10YR3/2黒褐色　細砂　多量の炭（微細～φ数センチ大まで）を含む　指頭大の焼土片を含む
5. 2.5R6/4にぶい黄色　細砂　地山

0　1m

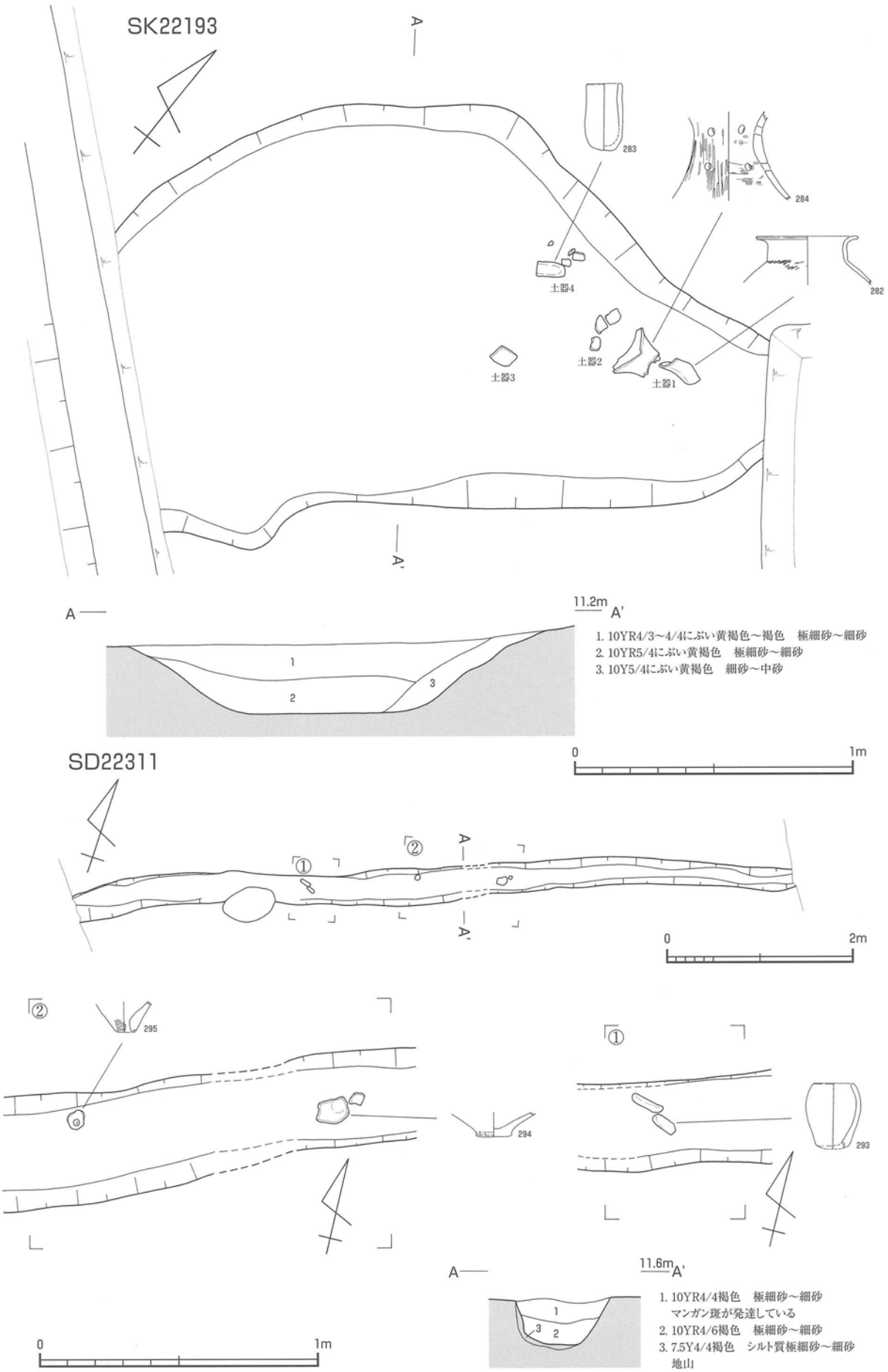
SK22118



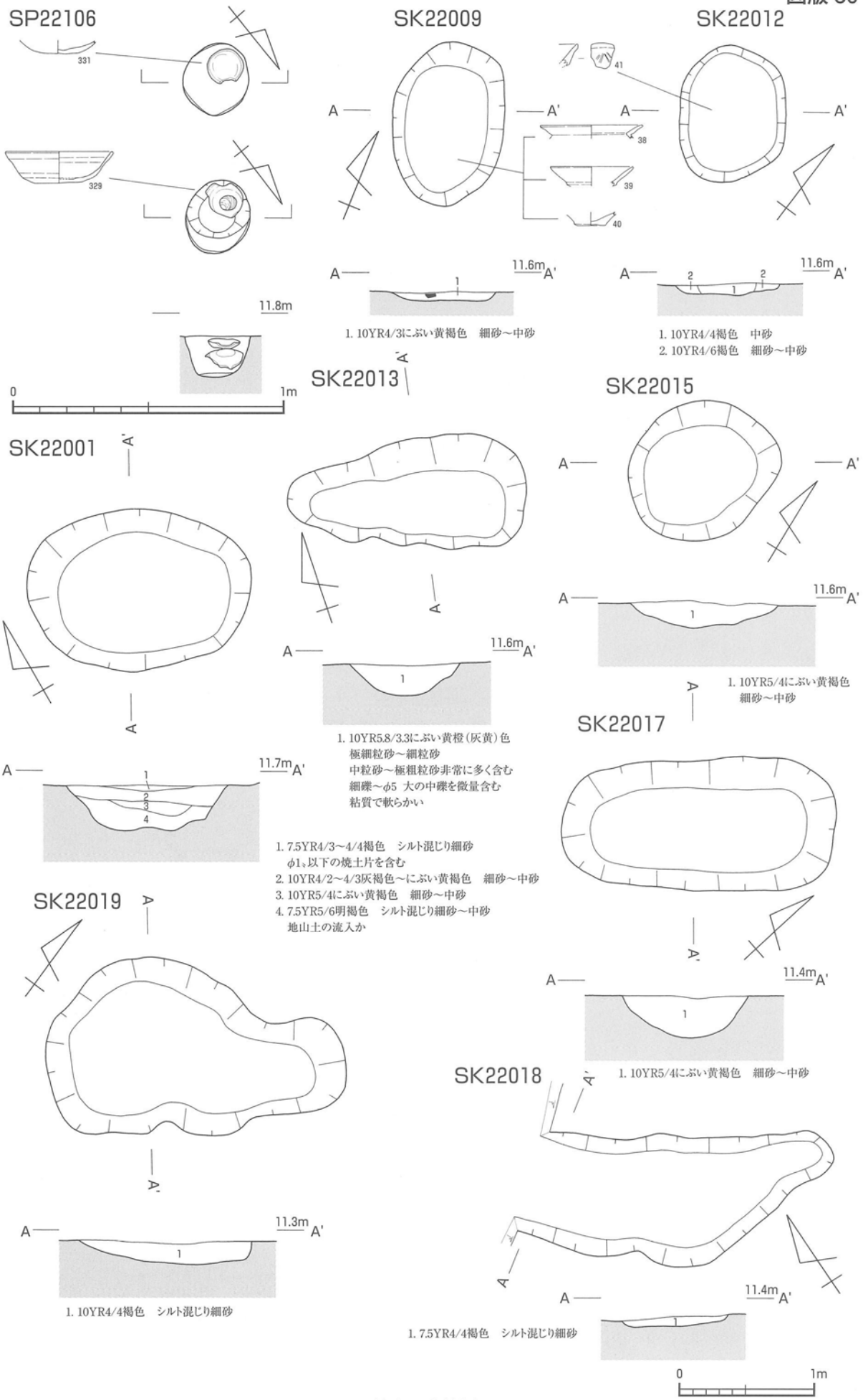
1. 10YR5/4にぶい黄褐色　細砂
土器・炭を僅かに含む
2. 10YR4/4褐色　極細砂～細砂
炭を僅かに含む
3. 10YR6/4にぶい黄橙色　細砂
4. 10YR5/4にぶい黄褐色　細砂
土器多く、炭僅かに含む
5. 10YR5/4黄褐色　極細粒砂　地山

SK22089・SK22118　0　1m

図版 29

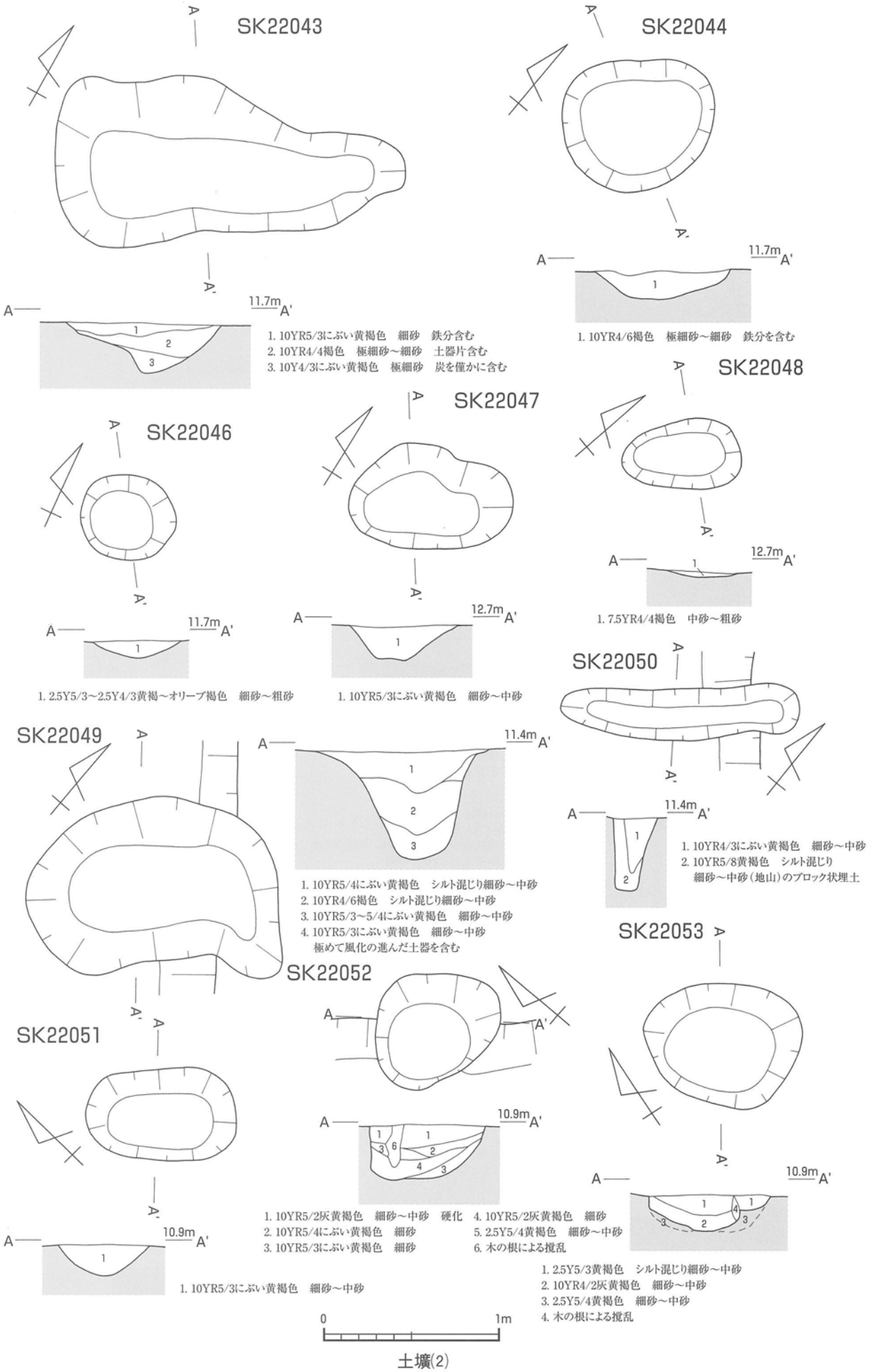


SK22193・SD22311


SP22106
331
329
11.8m
0
1m
SK22009
A
A'
38
39
40
11.6m
1
1. 10YR4/3にぶい黄褐色　細砂～中砂
SK22012
41
2
2
1
1. 10YR4/4褐色　中砂
2. 10YR4/6褐色　細砂～中砂
SK22013
1. 10YR5.8/3.3にぶい黄橙（灰黄）色
極細粒砂～細粒砂
中粒砂～極粗粒砂非常に多く含む
細礫～φ5 大の中礫を微量含む
粘質で軟らかい
SK22015
1. 10YR5/4にぶい黄褐色
細砂～中砂
SK22001
11.7m
1
2
3
4
1. 7.5YR4/3～4/4褐色　シルト混じり細砂
φ1㎝以下の焼土片を含む
2. 10YR4/2～4/3灰褐色～にぶい黄褐色　細砂～中砂
3. 10YR5/4にぶい黄褐色　細砂～中砂
4. 7.5YR5/6明褐色　シルト混じり細砂～中砂
地山土の流入か
SK22017
11.4m
1. 10YR5/4にぶい黄褐色　細砂～中砂
SK22019
11.3m
1. 10YR4/4褐色　シルト混じり細砂
SK22018
1. 7.5YR4/4褐色　シルト混じり細砂

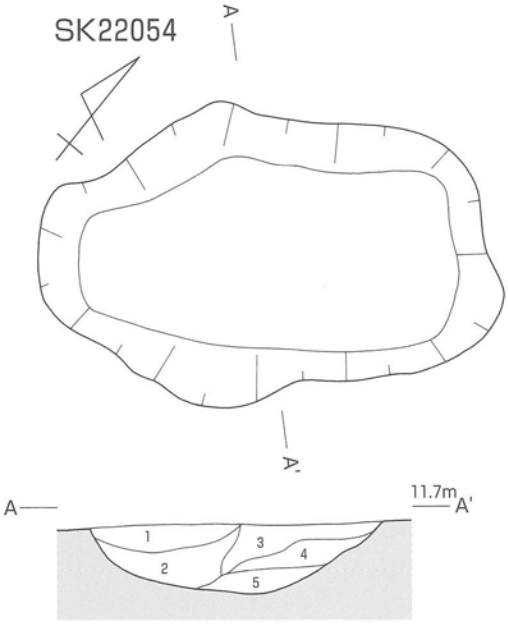
柱穴・土壙(1)

図版 31


SK22043
A
A'
11.7m
1. 10YR5/3にぶい黄褐色　細砂　鉄分含む
2. 10YR4/4褐色　極細砂～細砂　土器片含む
3. 10Y4/3にぶい黄褐色　極細砂　炭を僅かに含む
SK22044
11.7m
1. 10YR4/6褐色　極細砂～細砂　鉄分を含む
SK22046
11.7m
1. 2.5Y5/3～2.5Y4/3黄褐～オリーブ褐色　細砂～粗砂
SK22047
12.7m
1. 10YR5/3にぶい黄褐色　細砂～中砂
SK22048
12.7m
1. 7.5YR4/4褐色　中砂～粗砂
SK22049
11.4m
1. 10YR5/4にぶい黄褐色　シルト混じり細砂～中砂
2. 10YR4/6褐色　シルト混じり細砂～中砂
3. 10YR5/3～5/4にぶい黄褐色　細砂～中砂
4. 10YR5/3にぶい黄褐色　細砂～中砂
極めて風化の進んだ土器を含む
SK22050
11.4m
1. 10YR4/3にぶい黄褐色　細砂～中砂
2. 10YR5/8黄褐色　シルト混じり
細砂～中砂（地山）のブロック状埋土
SK22051
10.9m
1. 10YR5/3にぶい黄褐色　細砂～中砂
SK22052
10.9m
1. 10YR5/2灰黄褐色　細砂～中砂　硬化
2. 10YR5/4にぶい黄褐色　細砂
3. 10YR5/3にぶい黄褐色　細砂
4. 10YR5/2灰黄褐色　細砂
5. 2.5Y5/4黄褐色　細砂～中砂
6. 木の根による撹乱
SK22053
10.9m
1. 2.5Y5/3黄褐色　シルト混じり細砂～中砂
2. 10YR4/2灰黄褐色　細砂～中砂
3. 2.5Y5/4黄褐色　細砂～中砂
4. 木の根による撹乱
0
1m

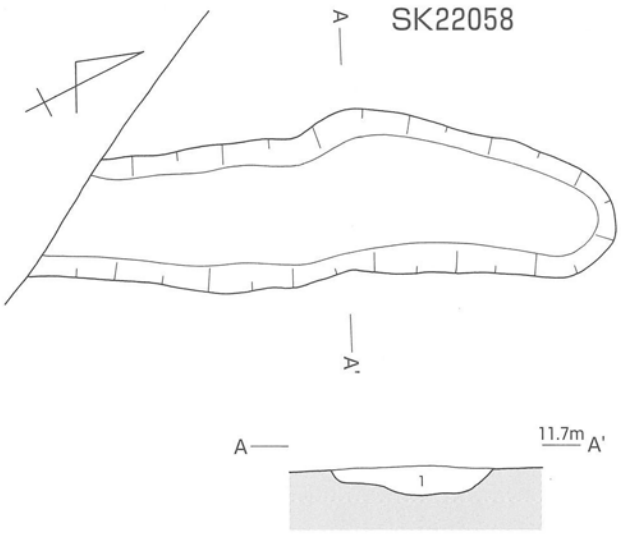
土壙(2)

SK22054



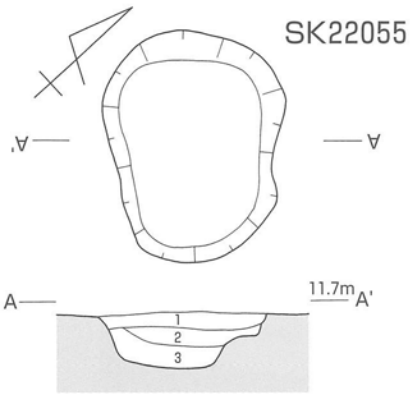
1. 10YR4/4褐色　細砂質シルト　2. 10YR4/3にぶい黄褐色　砂質シルト
3. 10YR4/3にぶい黄褐色　砂質シルト　7.5YR4/3褐色　4. 10YR4/4褐色　砂質シルト　5. 10YR4/6褐色　シルト質砂礫　φ2cm以下
指頭大の斑を多く含む（地山の二次流入か）

SK22058



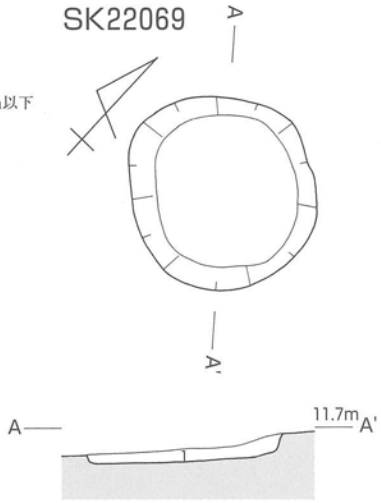
1. 2.5Y5/3黄褐色　シルト質中砂～粗砂

SK22055



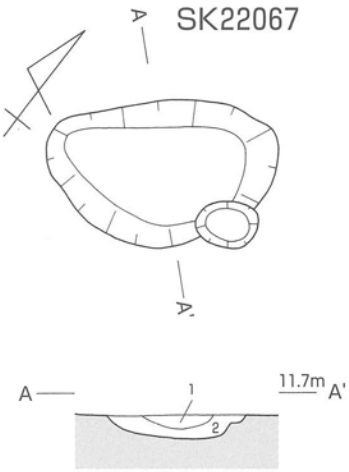
1. 10YR4/6褐色　砂質シルト　小礫混じり
2. 10YR4/4褐色　砂質シルト　極細砂～粗砂粒多い
3. 10YR4/3にぶい黄褐色　シルト質砂礫　礫はφ2cm以下細礫級多い

SK22069



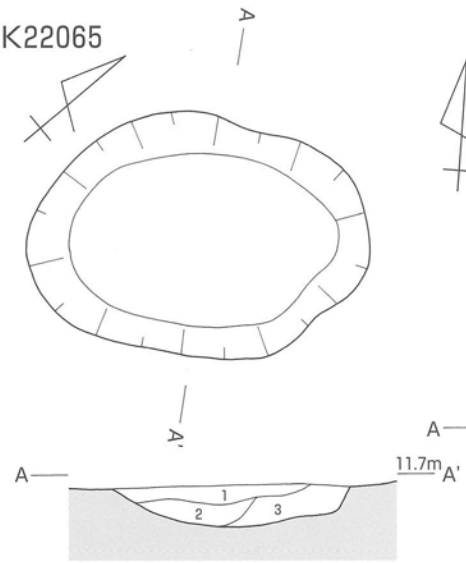
1. 10YR5/4にぶい黄褐色　砂礫　礫はφ3cm以下
マトリクスは淘汰の悪い砂

SK22067



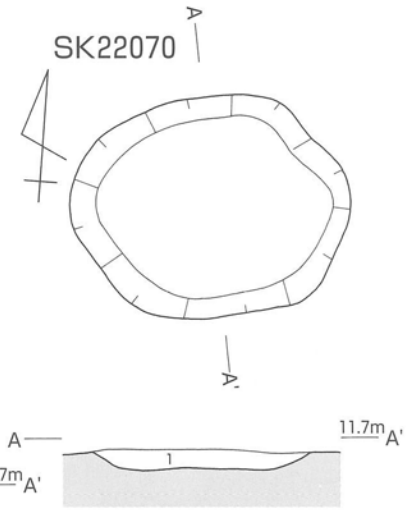
1. 10YR5/3にぶい黄褐色　シルト混じり細砂～中砂
φ1cm以下の炭化物片を多く含む
2. 10YR5/4にぶい黄褐色　シルト混じり細砂～中砂

SK22065



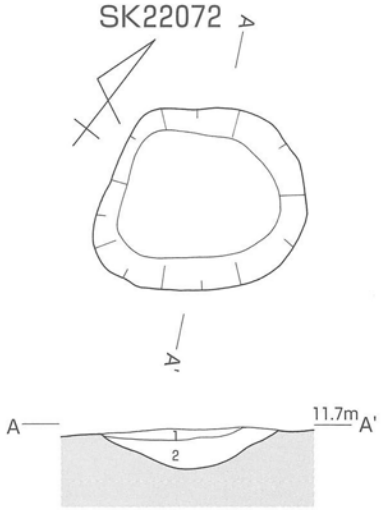
1. 7.5YR5/6明褐色　細礫混じり砂質シルト
2. 7.5YR5/6～5/7明褐色　砂質シルト
3. 5YR5/6明赤褐色　シルト混じり極細砂～細砂

SK22070



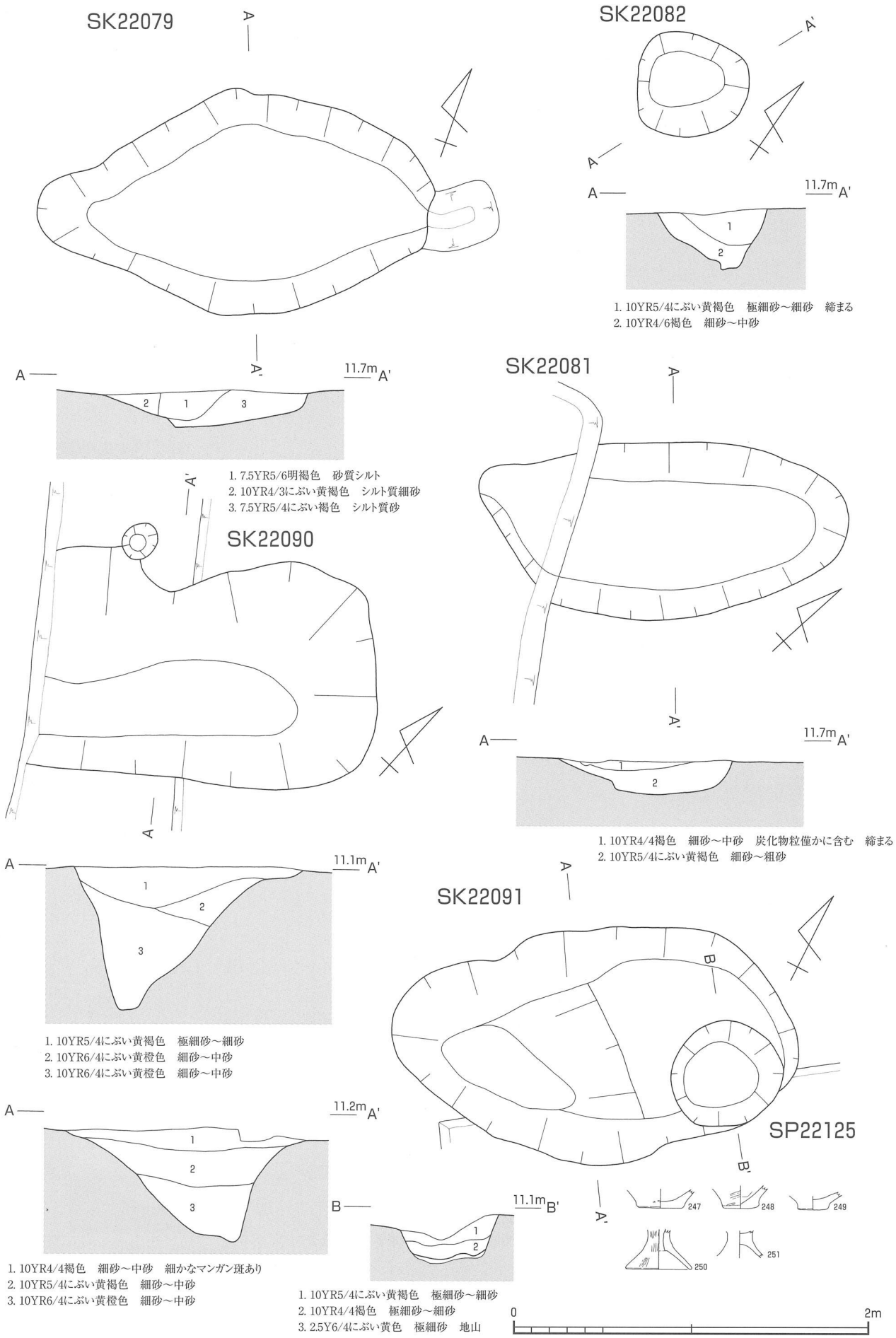
1. 10YR5/6黄褐色　シルト質砂層

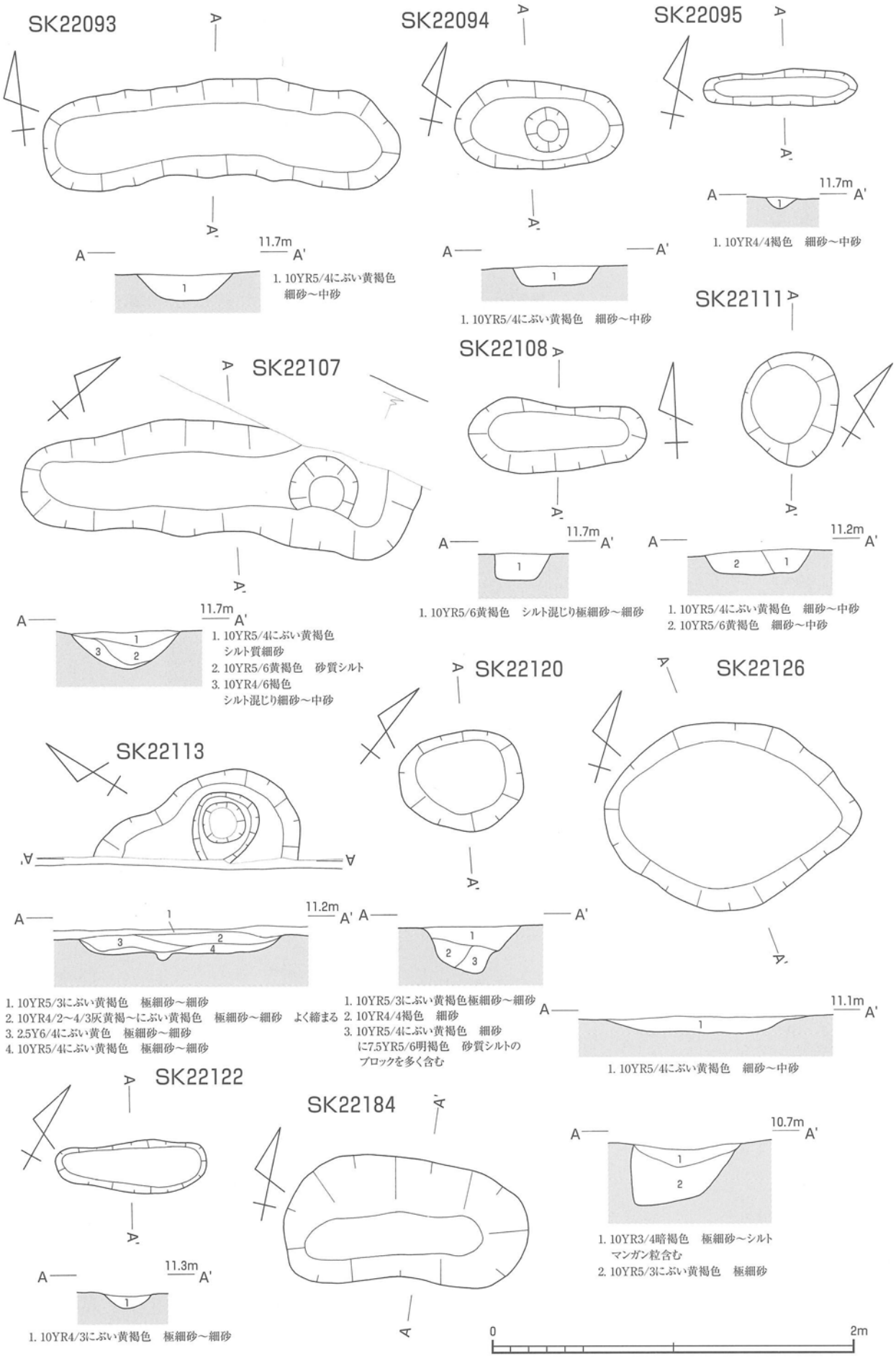
SK22072



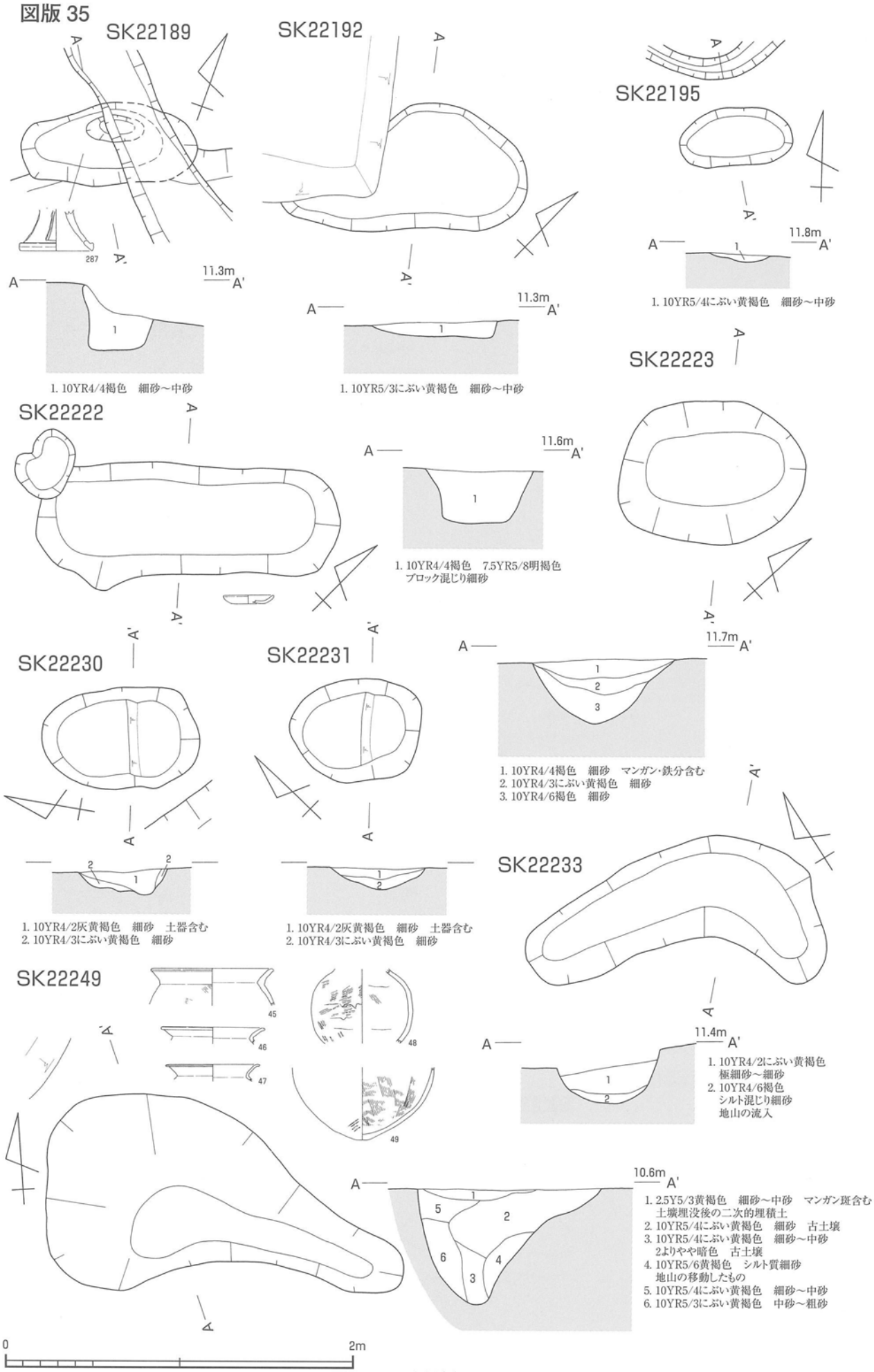
1. 7.5YR4/4褐色　砂質シルト
2. 10YR5/6黄褐色　礫混じり砂質シルト　礫はφ2cm以下

図版 33


SK22079
A
A'
11.7m
1
2
3
1. 7.5YR5/6明褐色　砂質シルト
2. 10YR4/3にぶい黄褐色　シルト質細砂
3. 7.5YR5/4にぶい褐色　シルト質砂
SK22082
11.7m
1. 10YR5/4にぶい黄褐色　極細砂～細砂　締まる
2. 10YR4/6褐色　細砂～中砂
SK22081
11.7m
1. 10YR4/4褐色　細砂～中砂　炭化物粒僅かに含む　締まる
2. 10YR5/4にぶい黄褐色　細砂～粗砂
SK22090
11.1m
1. 10YR5/4にぶい黄褐色　極細砂～細砂
2. 10YR6/4にぶい黄橙色　細砂～中砂
3. 10YR6/4にぶい黄橙色　細砂～中砂
SK22091
B
B'
SP22125
11.2m
1. 10YR4/4褐色　細砂～中砂　細かなマンガン斑あり
2. 10YR5/4にぶい黄褐色　細砂～中砂
3. 10YR6/4にぶい黄橙色　細砂～中砂
11.1m
1. 10YR5/4にぶい黄褐色　極細砂～細砂
2. 10YR4/4褐色　極細砂～細砂
3. 2.5Y6/4にぶい黄色　極細砂　地山
247
248
249
250
251
0
2m

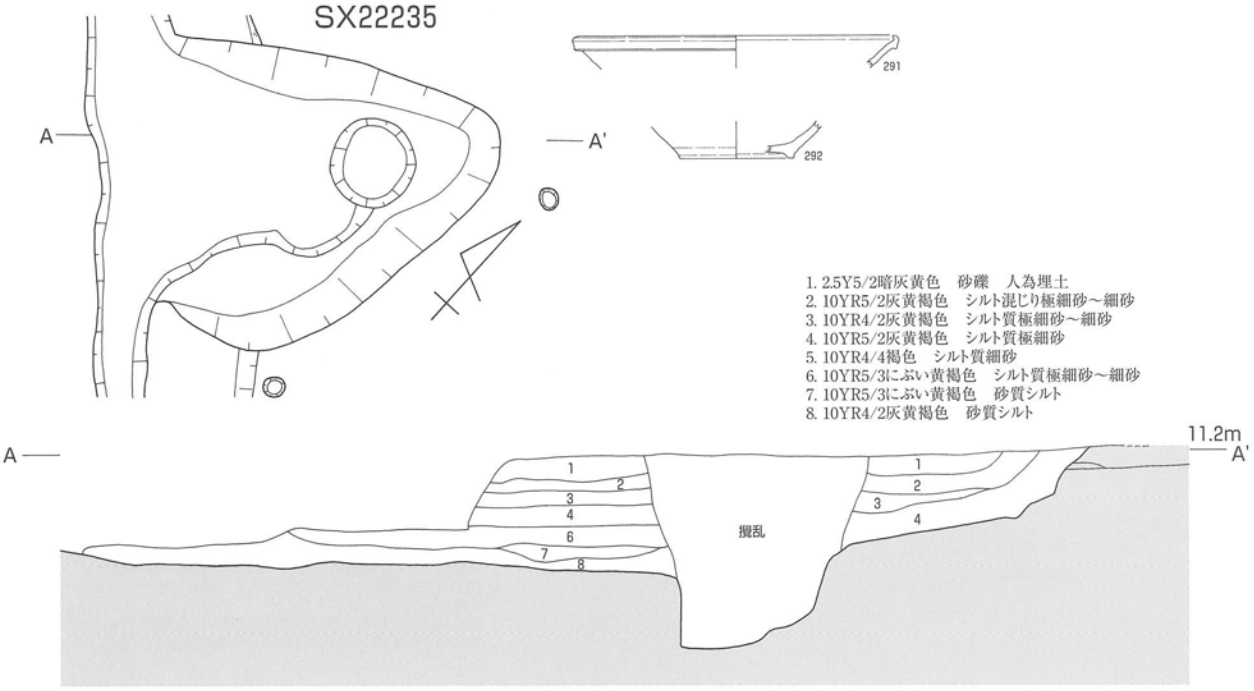

SK22093
A
A'
11.7m
1. 10YR5/4にぶい黄褐色
細砂〜中砂
SK22094
1. 10YR5/4にぶい黄褐色　細砂〜中砂
SK22095
11.7m
1. 10YR4/4褐色　細砂〜中砂
SK22107
11.7m
1. 10YR5/4にぶい黄褐色
シルト質細砂
2. 10YR5/6黄褐色　砂質シルト
3. 10YR4/6褐色
シルト混じり細砂〜中砂
SK22108
11.7m
1. 10YR5/6黄褐色　シルト混じり極細砂〜細砂
SK22111
11.2m
1. 10YR5/4にぶい黄褐色　細砂〜中砂
2. 10YR5/6黄褐色　細砂〜中砂
SK22113
11.2m
1. 10YR5/3にぶい黄褐色　極細砂〜細砂
2. 10YR4/2〜4/3灰黄褐〜にぶい黄褐色　極細砂〜細砂　よく締まる
3. 2.5Y6/4にぶい黄色　極細砂〜細砂
4. 10YR5/4にぶい黄褐色　極細砂〜細砂
SK22120
1. 10YR5/3にぶい黄褐色極細砂〜細砂
2. 10YR4/4褐色　細砂
3. 10YR5/4にぶい黄褐色　細砂
に7.5YR5/6明褐色　砂質シルトの
ブロックを多く含む
SK22126
11.1m
1. 10YR5/4にぶい黄褐色　細砂〜中砂
SK22122
11.3m
1. 10YR4/3にぶい黄褐色　極細砂〜細砂
SK22184
10.7m
1. 10YR3/4暗褐色　極細砂〜シルト
マンガン粒含む
2. 10YR5/3にぶい黄褐色　極細砂
0
2m

図版 35

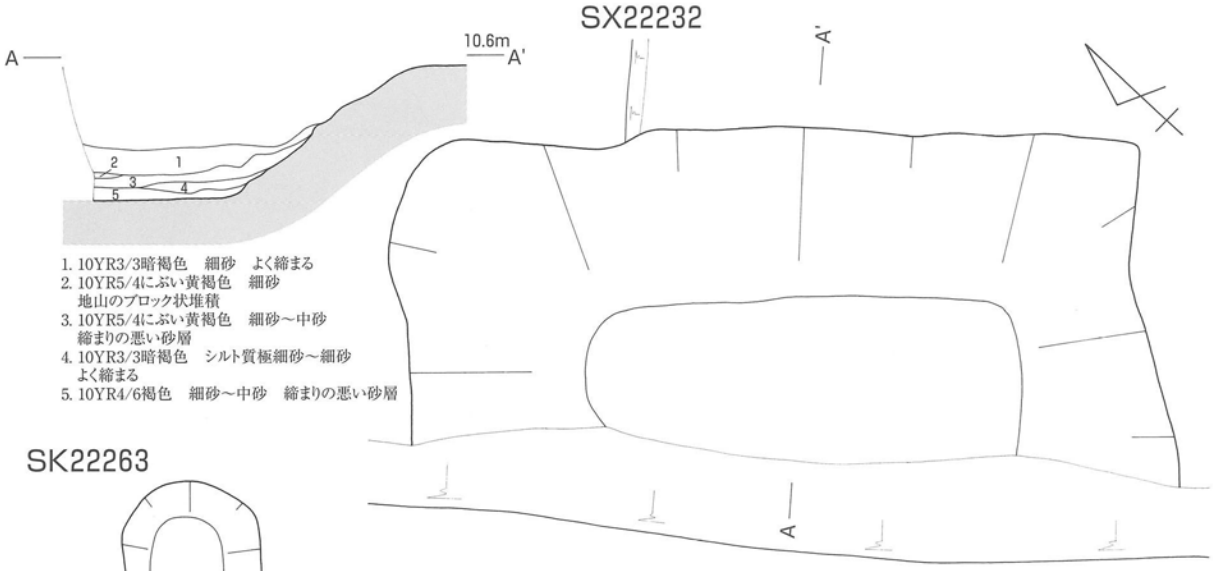

SK22189
287
11.3m
1. 10YR4/4褐色　細砂～中砂
SK22192
11.3m
1. 10YR5/3にぶい黄褐色　細砂～中砂
SK22195
11.8m
1. 10YR5/4にぶい黄褐色　細砂～中砂
SK22222
11.6m
1. 10YR4/4褐色　7.5YR5/8明褐色
ブロック混じり細砂
SK22223
11.7m
1. 10YR4/4褐色　細砂　マンガン・鉄分含む
2. 10YR4/3にぶい黄褐色　細砂
3. 10YR4/6褐色　細砂
SK22230
1. 10YR4/2灰黄褐色　細砂　土器含む
2. 10YR4/3にぶい黄褐色　細砂
SK22231
1. 10YR4/2灰黄褐色　細砂　土器含む
2. 10YR4/3にぶい黄褐色　細砂
SK22233
11.4m
1. 10YR4/2にぶい黄褐色
極細砂～細砂
2. 10YR4/6褐色
シルト混じり細砂
地山の流入
SK22249
45
46
47
48
49
10.6m
1. 2.5Y5/3黄褐色　細砂～中砂　マンガン斑含む
土壙埋没後の二次的埋積土
2. 10YR5/4にぶい黄褐色　細砂　古土壌
3. 10YR5/4にぶい黄褐色　細砂～中砂
2よりやや暗色　古土壌
4. 10YR5/6黄褐色　シルト質細砂
地山の移動したもの
5. 10YR5/4にぶい黄褐色　細砂～中砂
6. 10YR5/3にぶい黄褐色　中砂～粗砂
0
2m

土壙(6)

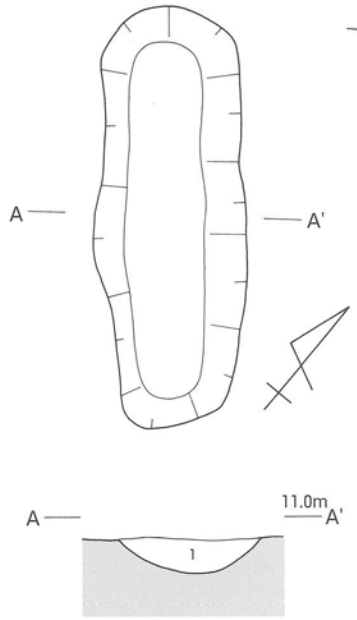
SX22235



SX22232

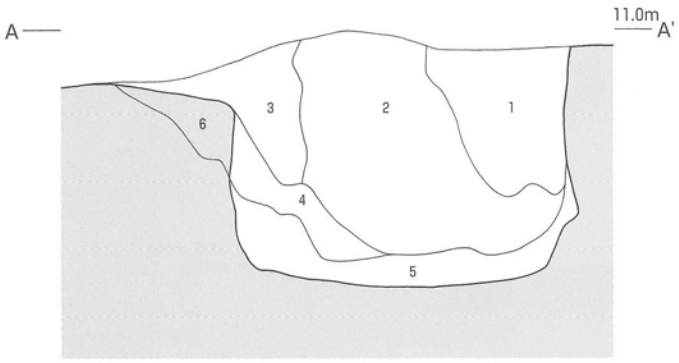


SK22263



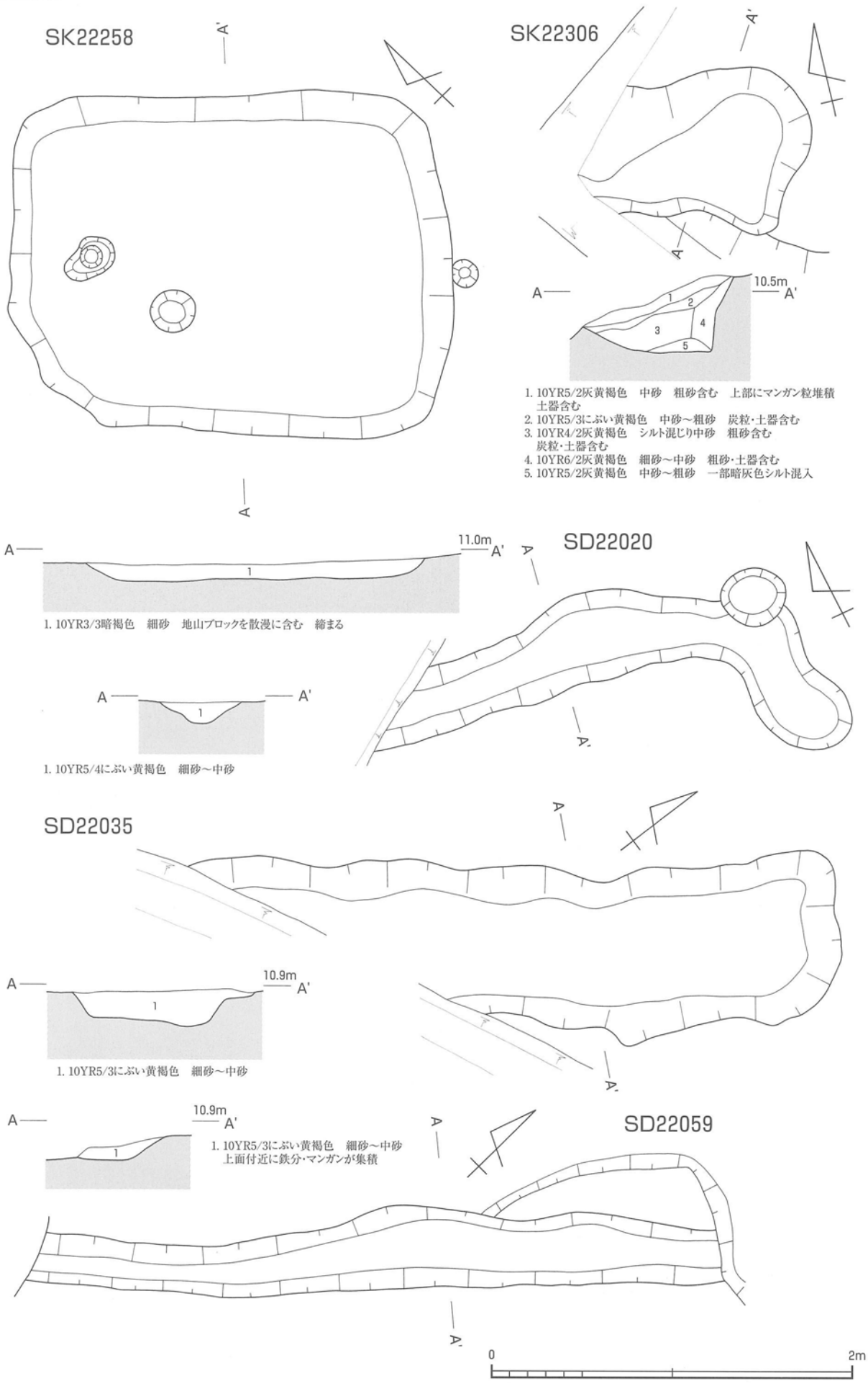
1. 10YR3/3暗褐色　細砂　非常によく締まる

SK22265

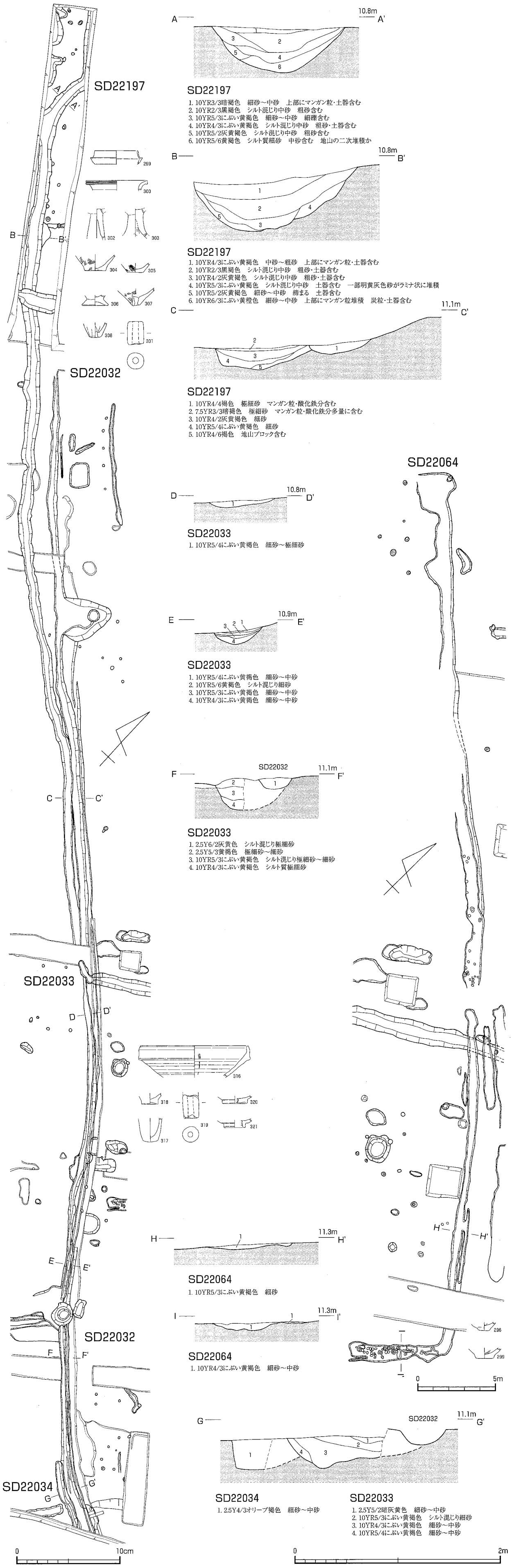


1. 10YR4/3にぶい黄褐色　シルト質中砂　粗砂・炭粒含む　地山ブロック混入　上面で土器出土
2. 10YR5/6黄褐色　シルト質細砂　中砂～粗砂含む
3. 10YR4/3にぶい黄褐色　シルト混じり中砂　粗砂含む　砂礫・地山ブロックの混入
4. 10YR4/6褐色　シルト混じり細砂　中砂～粗砂・細礫含む
5. 10YR5/3にぶい黄褐色　シルト混じり粗砂　細礫・小礫含む　炭（木の根か）含む
6. 10YR5/8黄褐色　シルト質細砂　中砂含む　地山

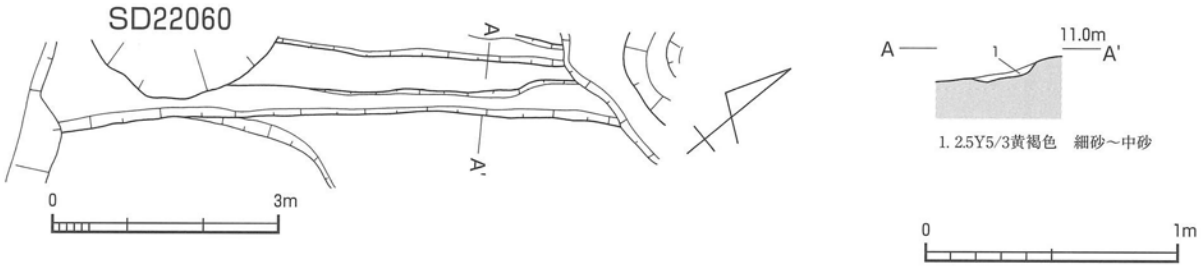
0　2m


SK22258
A
A'
SK22306
10.5m
1
2
3
4
5
1. 10YR5/2灰黄褐色　中砂　粗砂含む　上部にマンガン粒堆積
土器含む
2. 10YR5/3にぶい黄褐色　中砂～粗砂　炭粒・土器含む
3. 10YR4/2灰黄褐色　シルト混じり中砂　粗砂含む
炭粒・土器含む
4. 10YR6/2灰黄褐色　細砂～中砂　粗砂・土器含む
5. 10YR5/2灰黄褐色　中砂～粗砂　一部暗灰色シルト混入
11.0m
1. 10YR3/3暗褐色　細砂　地山ブロックを散漫に含む　締まる
SD22020
1. 10YR5/4にぶい黄褐色　細砂～中砂
SD22035
10.9m
1. 10YR5/3にぶい黄褐色　細砂～中砂
10.9m
1. 10YR5/3にぶい黄褐色　細砂～中砂
上面付近に鉄分・マンガンが集積
SD22059
0
2m

土壙(8)・溝(1)

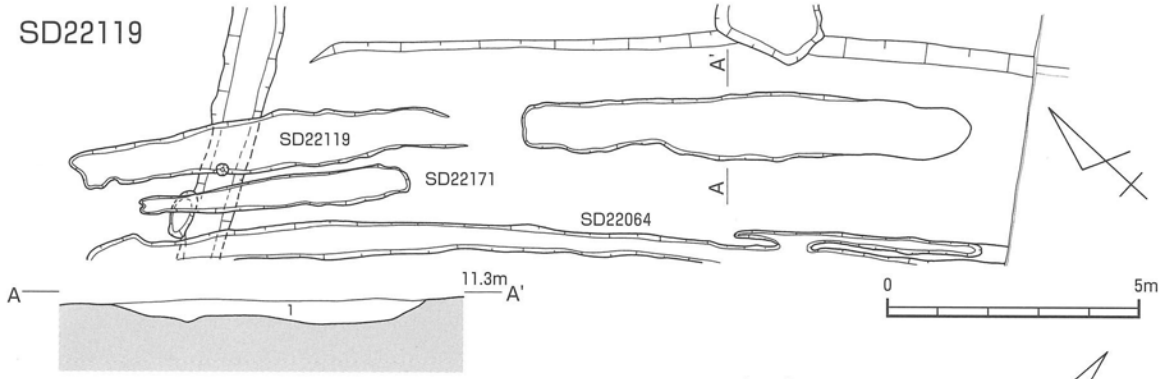

SD22197
SD22032
SD22033
SD22064
SD22034
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
G
G'
H
H'
I
I'
10.8m
10.9m
11.1m
11.3m
SD22197
1. 10YR3/3暗褐色　細砂～中砂　上部にマンガン粒・土器含む
2. 10YR2/3黒褐色　シルト混じり中砂　粗砂含む
3. 10YR5/3にぶい黄褐色　細砂～中砂　細礫含む
4. 10YR4/3にぶい黄褐色　シルト混じり中砂　粗砂・土器含む
5. 10YR5/2灰黄褐色　シルト混じり中砂　粗砂含む
6. 10YR5/6黄褐色　シルト質細砂　中砂含む　地山の二次堆積か
SD22197
1. 10YR4/3にぶい黄褐色　中砂～粗砂　上部にマンガン粒・土器含む
2. 10YR2/3黒褐色　シルト混じり中砂　粗砂・土器含む
3. 10YR4/2灰黄褐色　シルト混じり中砂　粗砂・土器含む
4. 10YR5/3にぶい黄褐色　シルト混じり中砂　土器含む　一部明黄灰色砂がラミナ状に堆積
5. 10YR5/2灰黄褐色　細砂～中砂　締まる　土器含む
6. 10YR6/3にぶい黄橙色　細砂～中砂　上部にマンガン粒堆積　炭粒・土器含む
SD22197
1. 10YR4/4褐色　極細砂　マンガン粒・酸化鉄分含む
2. 7.5YR3/3暗褐色　極細砂　マンガン粒・酸化鉄分多量に含む
3. 10YR4/2灰黄褐色　細砂
4. 10YR5/4にぶい黄褐色　細砂
5. 10YR4/6褐色　地山ブロック含む
SD22033
1. 10YR5/4にぶい黄褐色　細砂～極細砂
SD22033
1. 10YR5/4にぶい黄褐色　細砂～中砂
2. 10YR5/6黄褐色　シルト混じり細砂
3. 10YR5/3にぶい黄褐色　細砂～中砂
4. 10YR4/3にぶい黄褐色　細砂～中砂
SD22033
1. 2.5Y6/2灰黄色　シルト混じり極細砂
2. 2.5Y5/3黄褐色　極細砂～細砂
3. 10YR5/3にぶい黄褐色　シルト混じり極細砂～細砂
4. 10YR4/3にぶい黄褐色　シルト質極細砂
SD22064
1. 10YR5/3にぶい黄褐色　細砂
SD22064
1. 10YR4/3にぶい黄褐色　細砂～中砂
SD22034
1. 2.5Y4/3オリーブ褐色　細砂～中砂
SD22033
1. 2.5Y5/2暗灰黄色　細砂～中砂
2. 10YR5/3にぶい黄褐色　シルト混じり細砂
3. 10YR4/3にぶい黄褐色　細砂～中砂
4. 10YR5/4にぶい黄褐色　細砂～中砂
0　10cm
0　5m
0　2m

SD22060



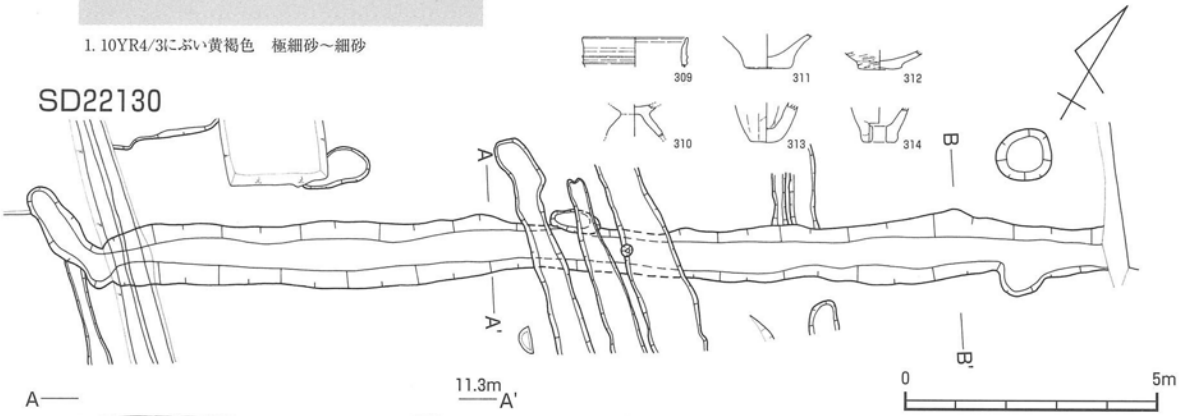
1. 2.5Y5/3黄褐色　細砂～中砂

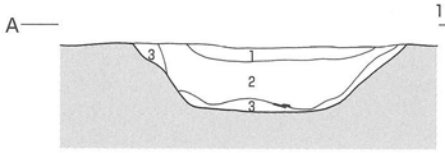
SD22119



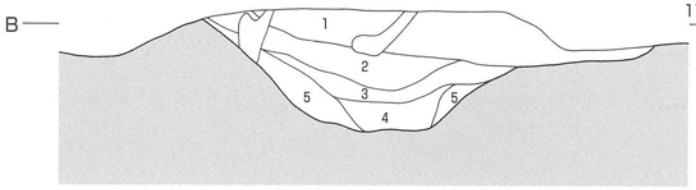
1. 10YR4/3にぶい黄褐色　極細砂～細砂

SD22130



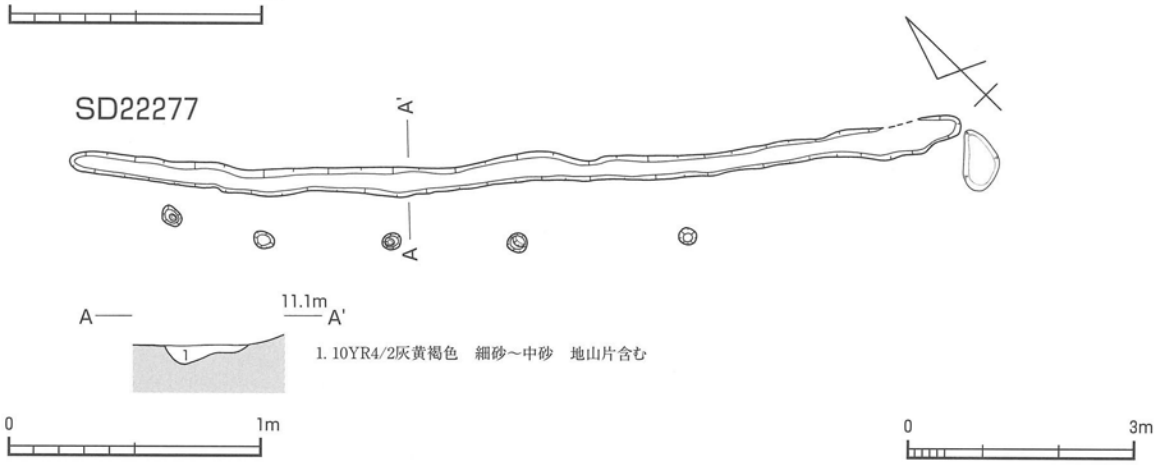


1. 10YR3/2黒褐色　細砂　マンガン大量に含む
2. 10YR4/2灰黄褐色　極細砂～中砂
3. 10YR5/6黄褐色　シルト質極細砂



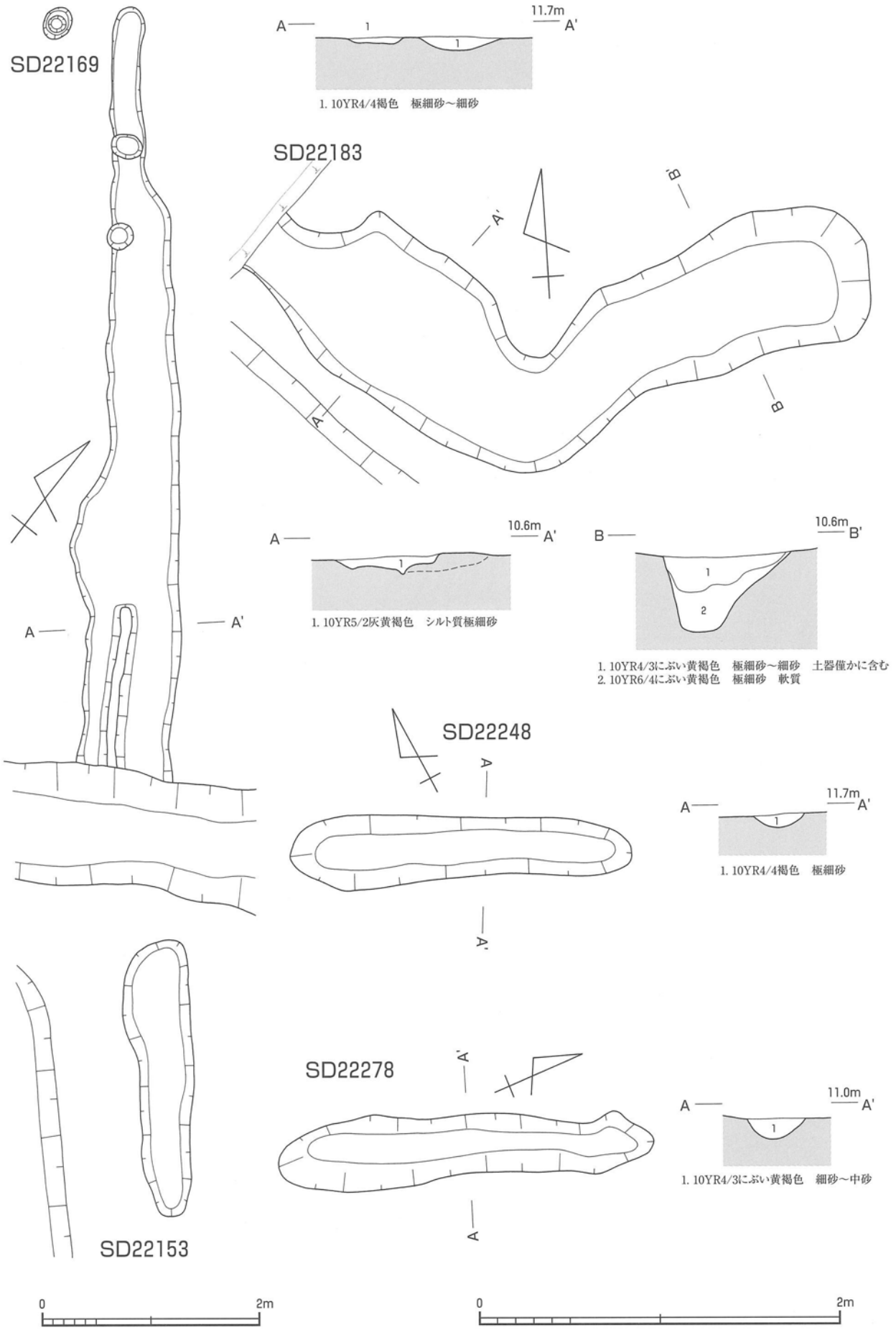
1. 10YR4/4褐色　細砂
2. 10YR2/3黒褐色　シルト質極細砂
3. 10YR5/4にぶい黄褐色　極細砂～細砂　炭微かに含む
4. 10YR5/3にぶい黄褐色　細砂
5. 7.5YR5/6明褐色　極細砂～細砂

SD22277

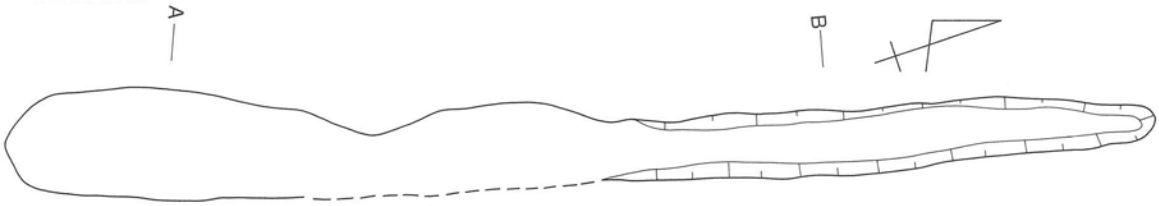


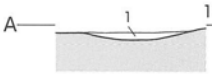
1. 10YR4/2灰黄褐色　細砂～中砂　地山片含む

図版 40

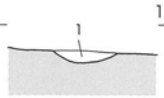

SD22169
A
A'
11.7m
1. 10YR4/4褐色　極細砂～細砂
SD22183
B
B'
10.6m
1. 10YR5/2灰黄褐色　シルト質極細砂
1. 10YR4/3にぶい黄褐色　極細砂～細砂　土器僅かに含む
2. 10YR6/4にぶい黄褐色　極細砂　軟質
SD22248
1. 10YR4/4褐色　極細砂
SD22278
11.0m
1. 10YR4/3にぶい黄褐色　細砂～中砂
SD22153
0
2m

SD22247



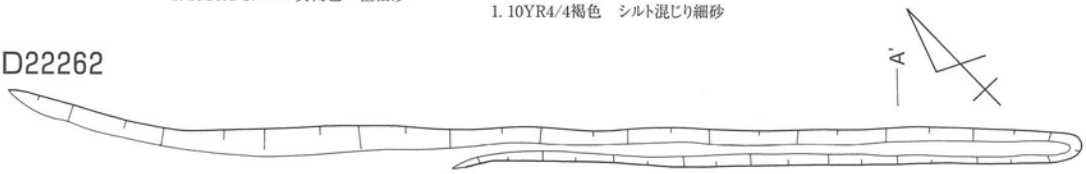


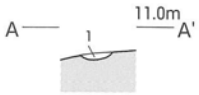
1. 10YR4/3にぶい黄褐色　極細砂



1. 10YR4/4褐色　シルト混じり細砂

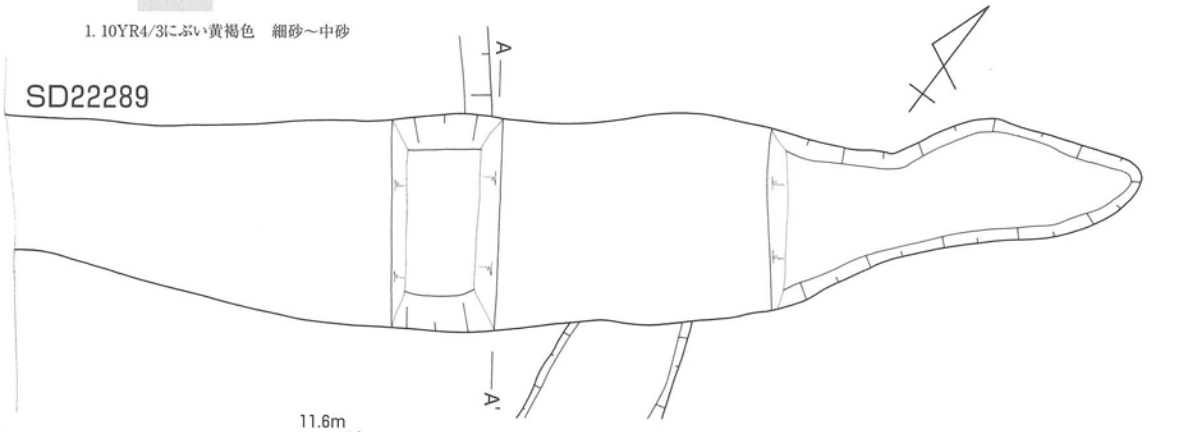
SD22262

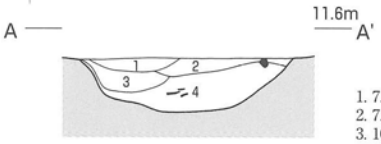




1. 10YR4/3にぶい黄褐色　細砂～中砂

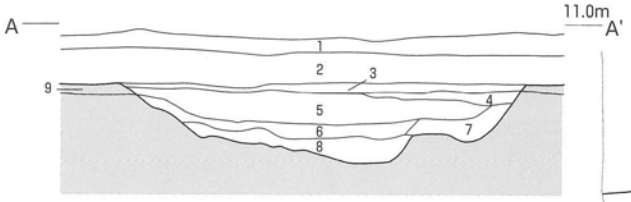
SD22289





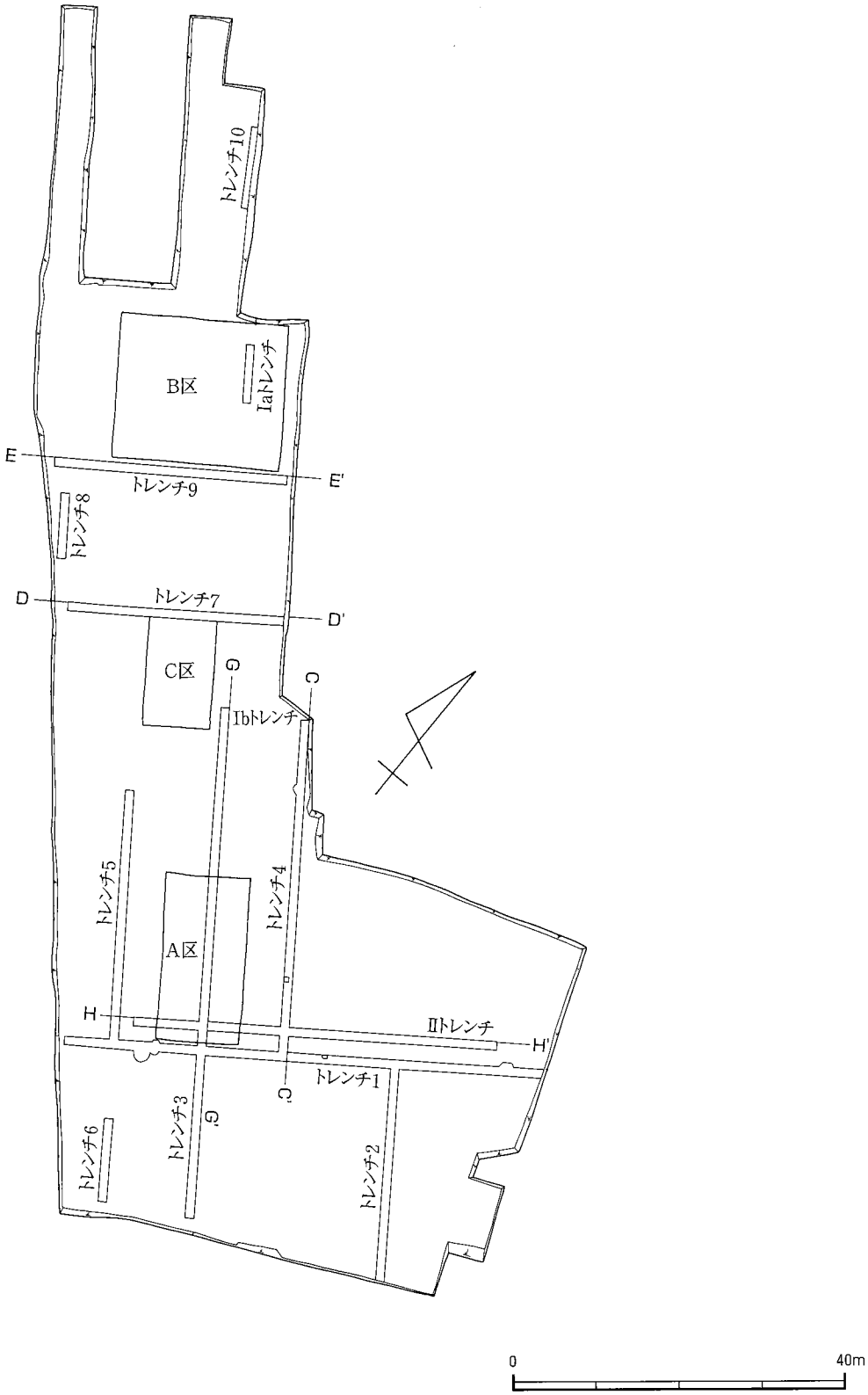
1. 7.5YR3/1.5黒褐（黒褐）色　極細粒砂～細粒砂　粗粒砂～細礫・土器含む
2. 7.5YR4/4褐（濁赤褐）色　極細粒砂　細粒砂～細礫少量含む　粘質
3. 10YR3.4/2黒褐（暗灰褐）色　極細粒砂混じり細粒砂～粗粒砂　極粗粒砂～細礫微量含む　土器含む　砂質
4. 7.5YR3/2黒褐（暗茶褐）色　極細粒砂混じり細粒砂～粗粒砂　極粗粒砂～細礫微量含む　土器含む　粘質砂
5. 5YR4.6/8明赤褐（赤褐）色　極細粒砂　細粒砂～中粒砂（軟質）を多く含む　粘質　地山

SD22290

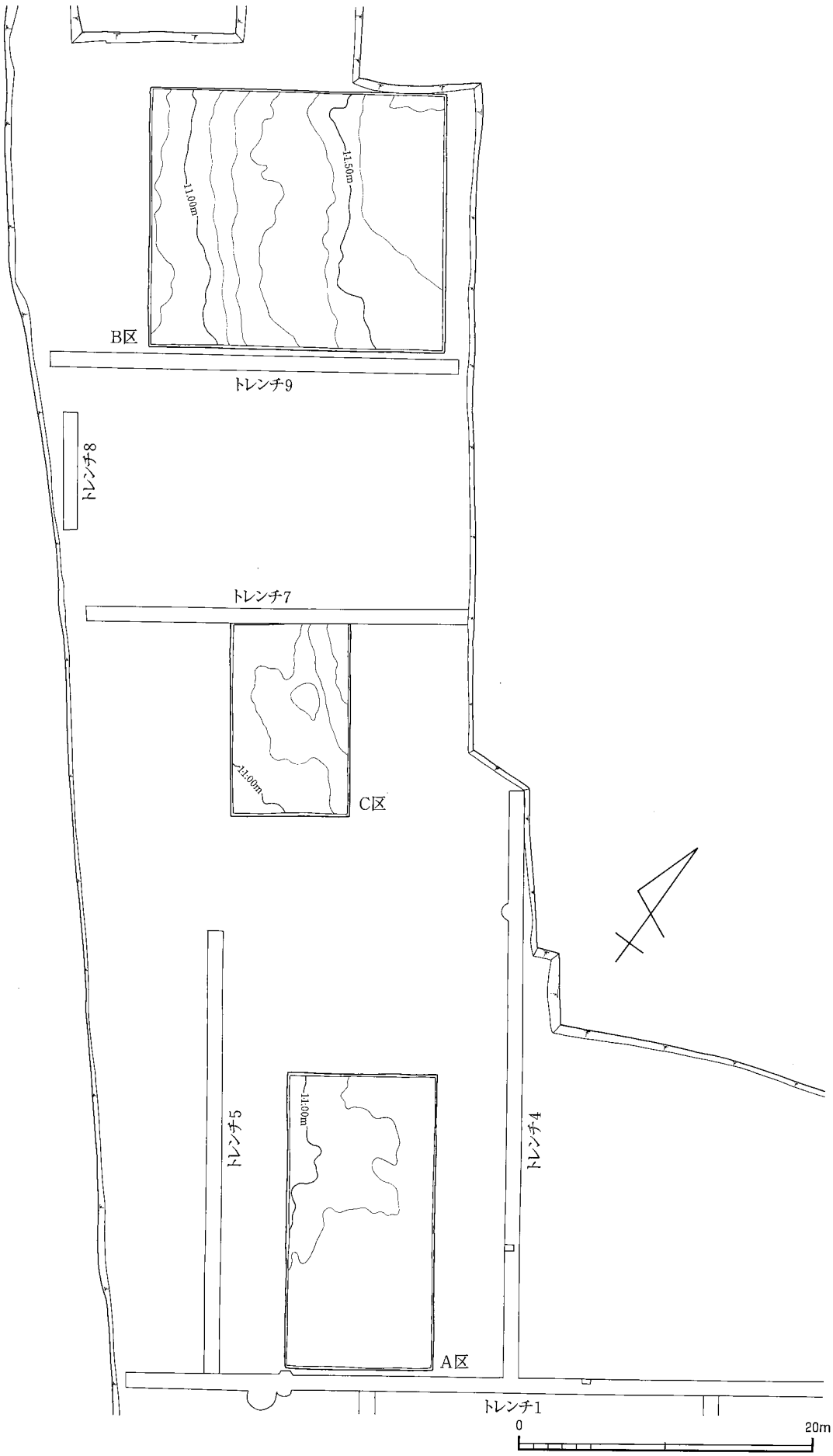


1. 2.5Y5/1黄灰（乳灰）色　極細粒砂～細粒砂　極粗粒砂～細礫少量含む　マンガン含む　包含層上部
2. 10YR5/2灰黄褐（灰褐）色　細粒砂　中粒砂～細礫少量含む　マンガン含む
3. 10YR5/6黄褐（暗黄褐）色　砂層（中粒砂～粗粒砂）締まる　鉄分沈着層
4. 2.5Y5/2暗灰黄（乳灰褐）色　細粒砂　マンガン含む
5. 10YR5/3にぶい黄褐（にぶい黄褐）色　砂層（中粒砂～粗粒砂）
6. 10YR6/2灰黄褐（灰黄褐）色　砂層（中粒砂～粗粒砂）細礫微量含む　軟質
7. 10YR5/2灰黄褐（灰黄褐）色　砂層（中粒砂～粗粒砂）細礫微量含む
8. 7.5YR4/1褐灰（褐灰）色　極細粒砂混じり細粒砂～中粒砂　粘質砂　やや締まる　土器・マンガン含む
9. 10YR5/6黄褐（黄褐）色　極細粒砂混じり細粒砂～中粒砂　地山上端の鉄分沈着層

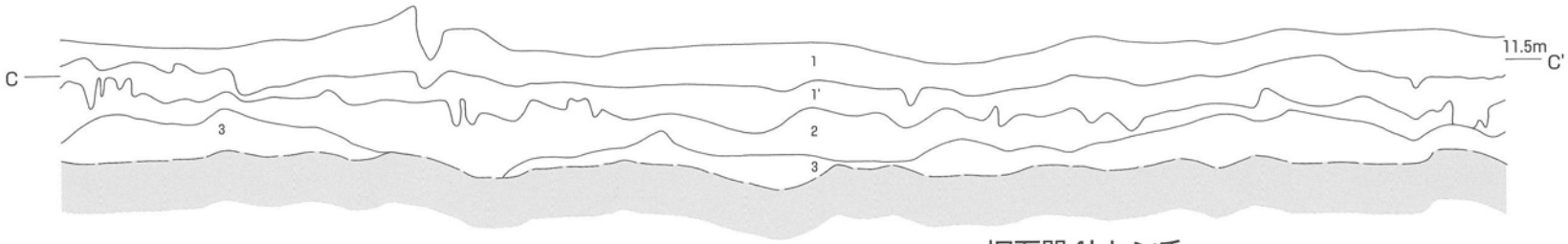
図版 42



旧石器調査区配置図

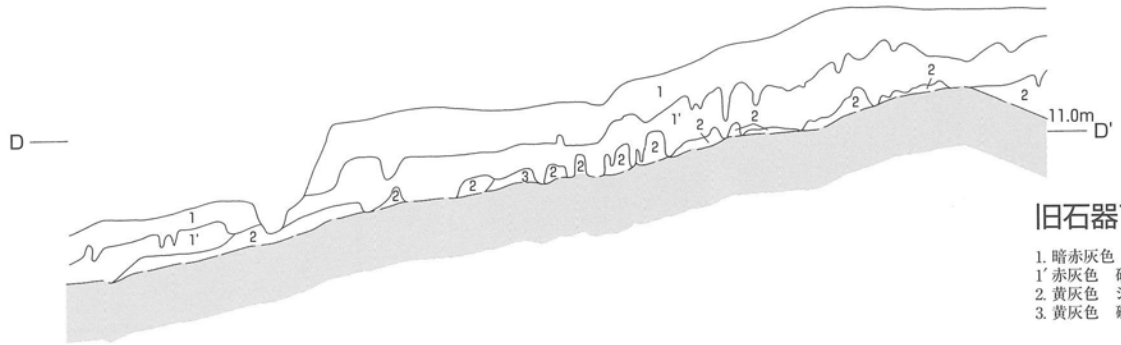


旧石器平面確認部分地形図



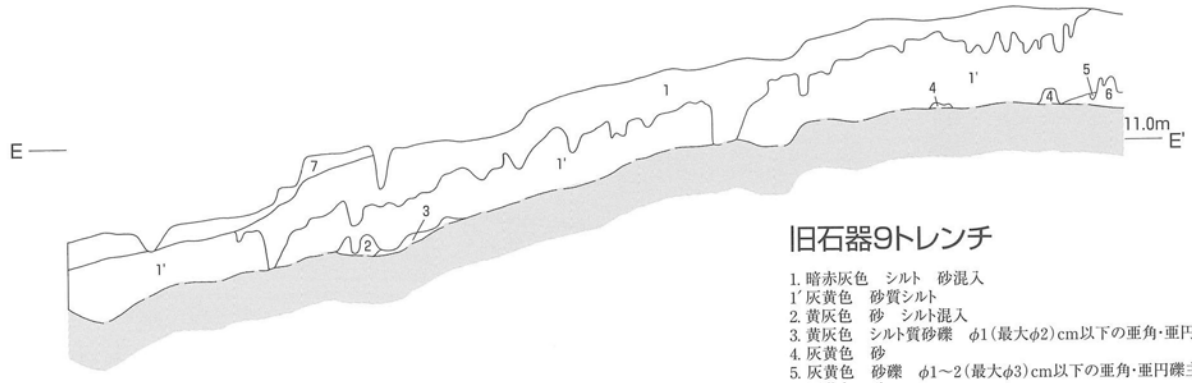
旧石器4トレンチ

1. 暗赤灰色　シルト　砂混じり　植物根による撹乱が激しい　土壌層
1′赤灰色　砂質シルト　植物根による撹乱　土壌層
2. 黄灰色　シルト質砂
3. 黄灰色　礫混じり砂　礫はφ1cm以下の亜角・亜円礫　砂礫はレンズ状に混入



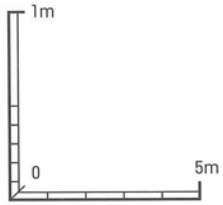
旧石器7トレンチ

1. 暗赤灰色　シルト　砂混じり　植物根による撹乱が激しい　土壌層
1′赤灰色　砂質シルト　植物根による撹乱　土壌層
2. 黄灰色　シルト質砂
3. 黄灰色　礫混じり砂　礫はφ1cm以下の亜角・亜円礫　砂礫はレンズ状に混入

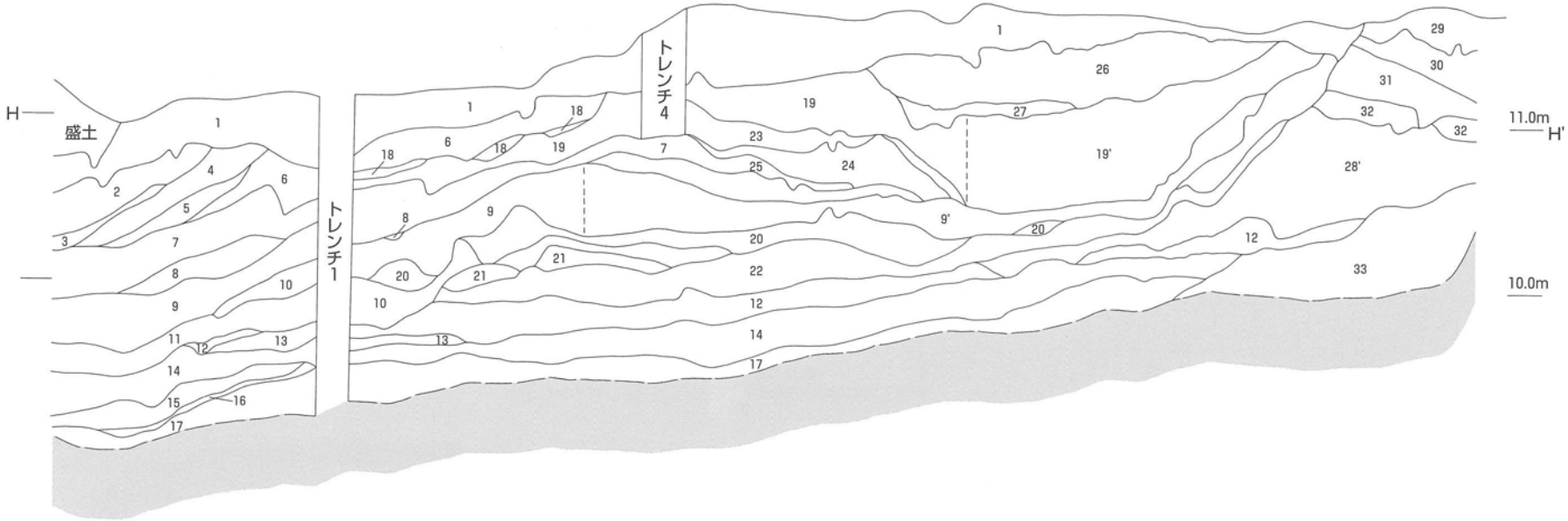


旧石器9トレンチ

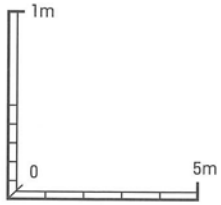
1. 暗赤灰色　シルト　砂混入
1′灰黄色　砂質シルト
2. 黄灰色　砂　シルト混入
3. 黄灰色　シルト質砂礫　φ1（最大φ2）cm以下の亜角・亜円礫主体　マトリクスはシルト質砂
4. 灰黄色　砂
5. 灰黄色　砂礫　φ1～2（最大φ3）cm以下の亜角・亜円礫主体　マトリクスは砂
6. 灰黄色　砂
7. 黄灰色　砂質シルト



旧石器確認４・７・９トレンチ土層断面図

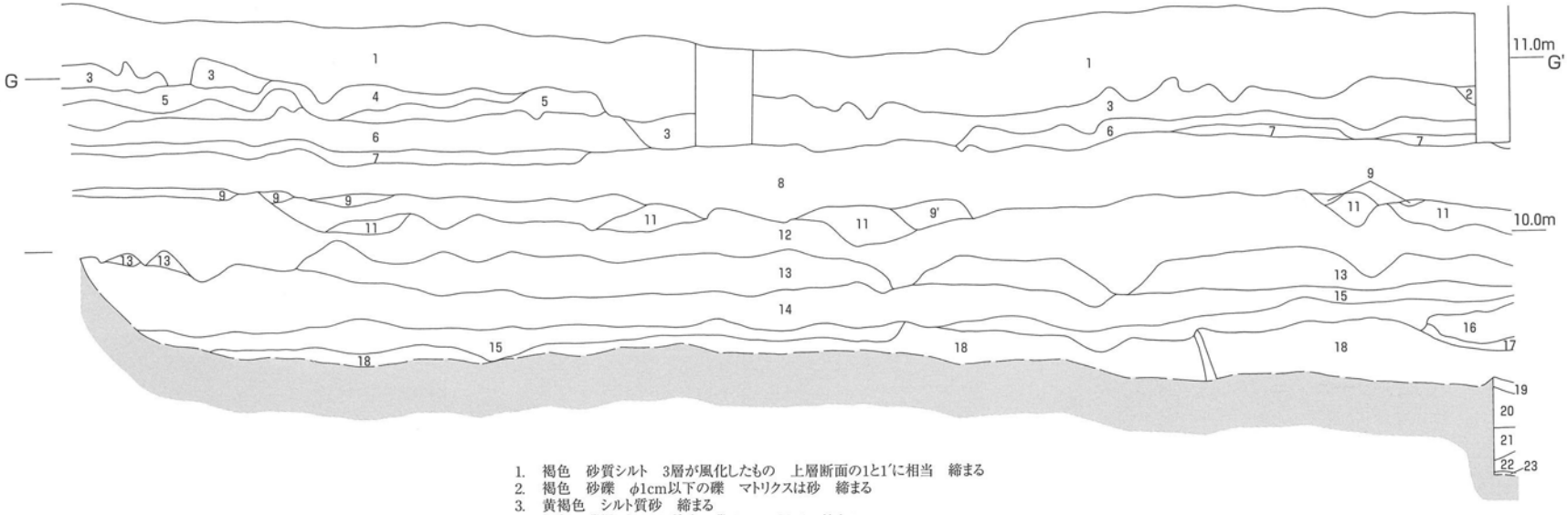


1. 橙褐色　シルト　砂混入　締まる
2. 黄褐色　シルト質砂　締まる
3. 暗橙褐色　砂礫　φ1(最大φ4)cm以下の亜角・亜円礫主体　マトリクスは砂　締まる
4. 黄褐色　シルト質砂　締まる
5. 橙褐色　砂礫　φ1～2(最大φ3)cmの亜角・亜円礫主体　マトリクスは砂　締まる
6. 橙褐色　砂
7. 橙灰色　シルト質砂礫　φ1～4(最大φ6)cmの亜角・亜円礫主体　マトリクスはシルト質砂　締まる
8. 灰白色　砂質シルト　締まる
9. 橙灰色　シルト質砂礫　φ2～4(最大φ6)cmの亜角・亜円礫主体　マトリクスはシルト質砂　締まる
9′. 橙褐色　砂礫　φ1～2(最大φ4)cmの亜角・亜円礫主体　マトリクスは砂　締まる
10. 褐色　砂礫　φ1～3(最大φ5)cmの亜角・亜円礫主体　マトリクスは砂
11. 灰褐色　砂
12. 灰褐色　礫混じり砂　礫はφ1cm以下
13. 褐灰色　シルト質細砂
14. 灰褐色　砂礫　φ1～3(最大φ6)cmの亜角・亜円礫主体　マトリクスは砂
15. 褐灰色　細砂　シルト混入
16. 橙灰色　砂礫　礫はφ1(最大φ2)cm以下　マトリクスは砂
17. 褐灰色　砂
18. 橙褐色　砂礫　礫はφ1(最大φ4)cm以下　マトリクスは砂
19. 橙褐色　シルト質砂　締まる
19′. 橙褐色　砂
20. 褐色　砂
21. 灰褐色　砂
22. 灰褐色　砂礫　φ1～3(最大φ8)cmの亜角・亜円礫主体　マトリクスは砂　締まる
23. 橙褐色　礫混じり砂　礫はφ2cm以下　締まる
24. 橙褐色　砂
25. 橙褐色　砂
26. 橙褐色　シルト質砂　締まる
27. 橙褐色　砂礫　礫はφ1cm以下　マトリクスは砂　締まる
28. 橙褐色　礫混じり砂　礫はφ0.5cm以下
28′. 赤褐色　砂礫　φ1～2(最大φ6)cmの亜角・亜円礫主体　マトリクスは砂　非常によく締まる
29. 灰褐色　砂礫　φ1～4(最大φ8)cmの亜角・亜円礫主体　マトリクスは砂　締まる
30. 黄褐色　砂　締まる
31. 褐色　礫混じり砂　礫はφ1(最大2)cm以下主体　締まる　22層と同じ
32. 赤褐色　砂　締まる
33. 灰色　シルト質砂礫　礫はφ2(最大6)cm以下主体　マトリクスはシルト質砂　非常によく締まる



旧石器確認・断ち割りⅡトレンチ土層断面図

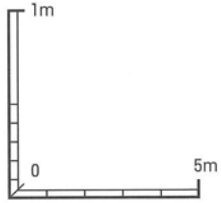
図版45



1. 褐色　砂質シルト　3層が風化したもの　上層断面の1と1′に相当　締まる
2. 褐色　砂礫　φ1cm以下の礫　マトリクスは砂　締まる
3. 黄褐色　シルト質砂　締まる
4. 褐色　礫混じりシルト質砂　礫はφ2cm以下　締まる
5. 褐色　粗砂　非常によく締まる
6. 褐色　砂礫　φ2（最大4）cm以下の亜角・亜円礫主体　マトリクスは砂　締まる
7. 褐色　砂　締まる
8. 灰褐色　シルト質砂礫　φ1～3（最大φ7）cmの亜角・亜円礫主体　マトリクスはシルト質砂　非常によく締まる
9. 灰色　細砂質シルト　分解された植物遺体が混入（サンプル採取）

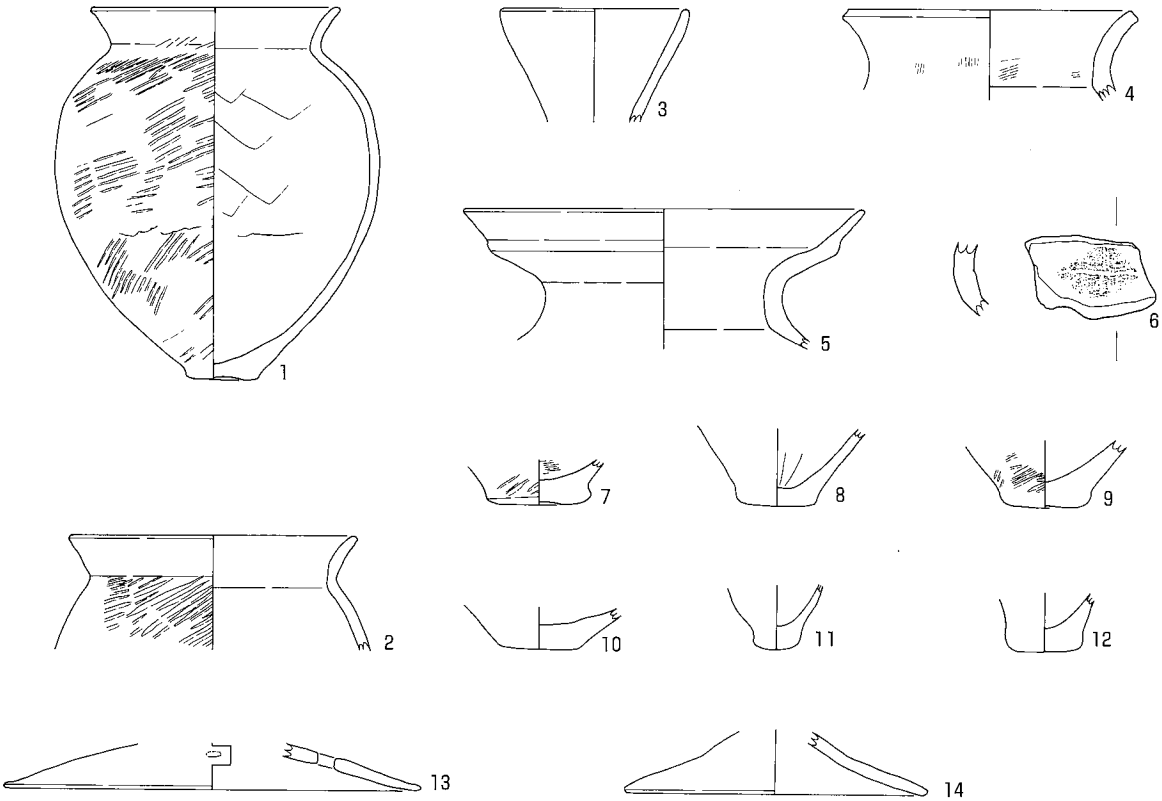
9′ 橙灰色　砂質シルト　締まる

10. 褐灰色　砂礫　φ1～2（最大φ3）cmの亜角・亜円礫主体　マトリクスは砂　締まる
11. 褐灰色　砂　締まる
12. 灰褐色　砂礫　φ1～3（最大φ5）cmの亜角・亜円礫主体　マトリクスは砂　締まる
13. 灰褐色　砂
14. 褐灰色　シルト質中細砂
15. 褐灰色　砂礫　φ1～2（最大φ6）cmの亜角・亜円礫主体　マトリクスは砂
16. 灰褐色　シルト質細砂
17. 灰色　砂礫　φ2cm以下の礫　マトリクスは砂
18. 灰褐色　砂　シルト混入
19. 橙灰色　砂礫　φ1cm以下の礫　マトリクスは砂
20. 灰色　砂
21. 橙灰色　砂礫　φ1～4（最大φ7）cmの亜角・亜円礫主体　マトリクスは砂
22. 灰色　砂
23. 灰色　砂礫　φ1～5（最大φ8）cmの亜角・亜円礫主体　マトリクスは砂　締まる　湧水

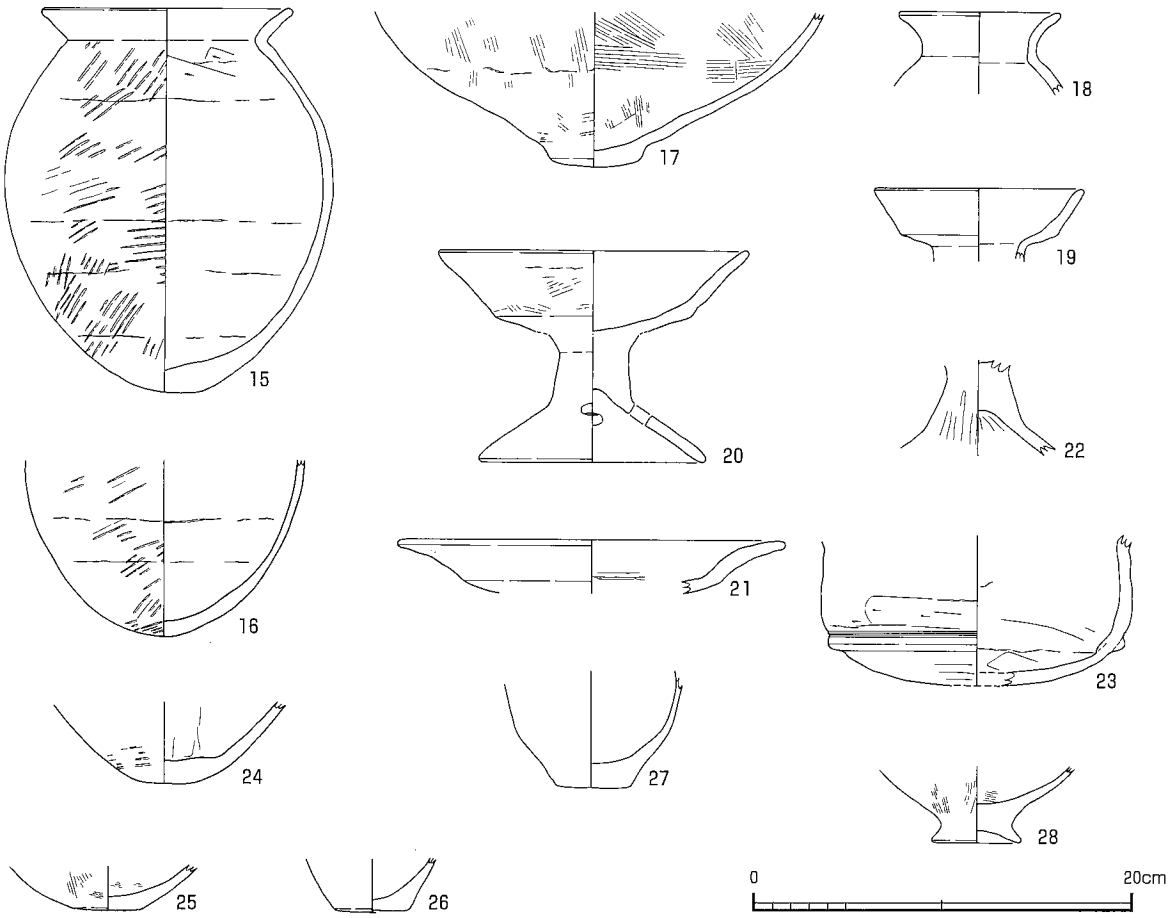


旧石器確認・断ち割りＩｂトレンチ土層断面図

SH2201



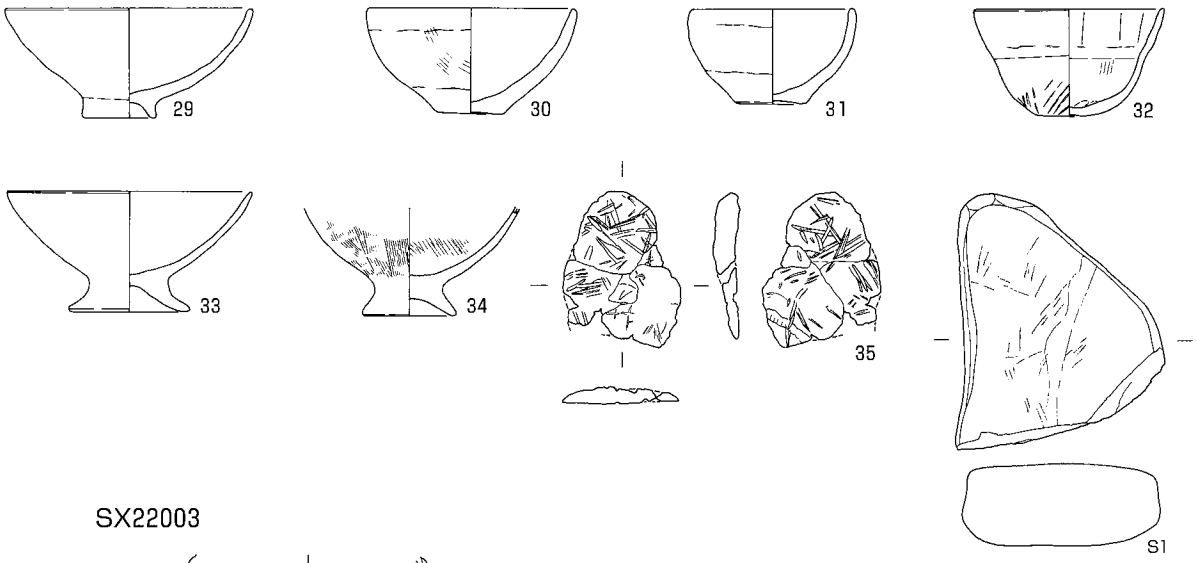
SX22002



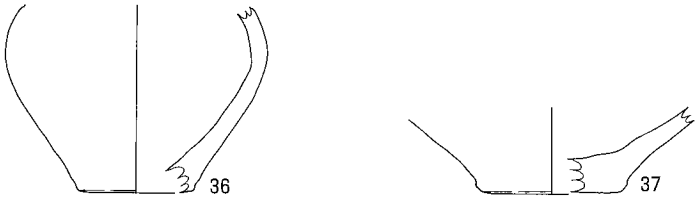
SH2201 および周辺遺構出土遺物(1)

図版 48

SX22002



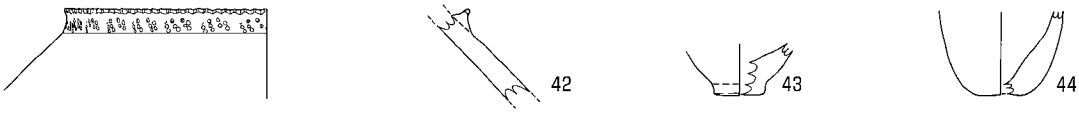
SX22003



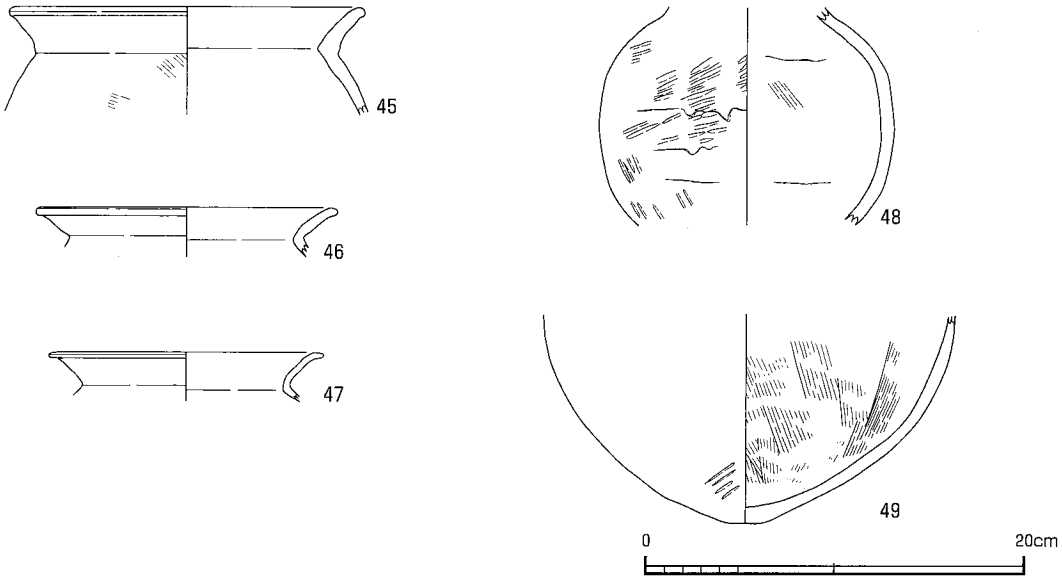
SX22009

SX22012

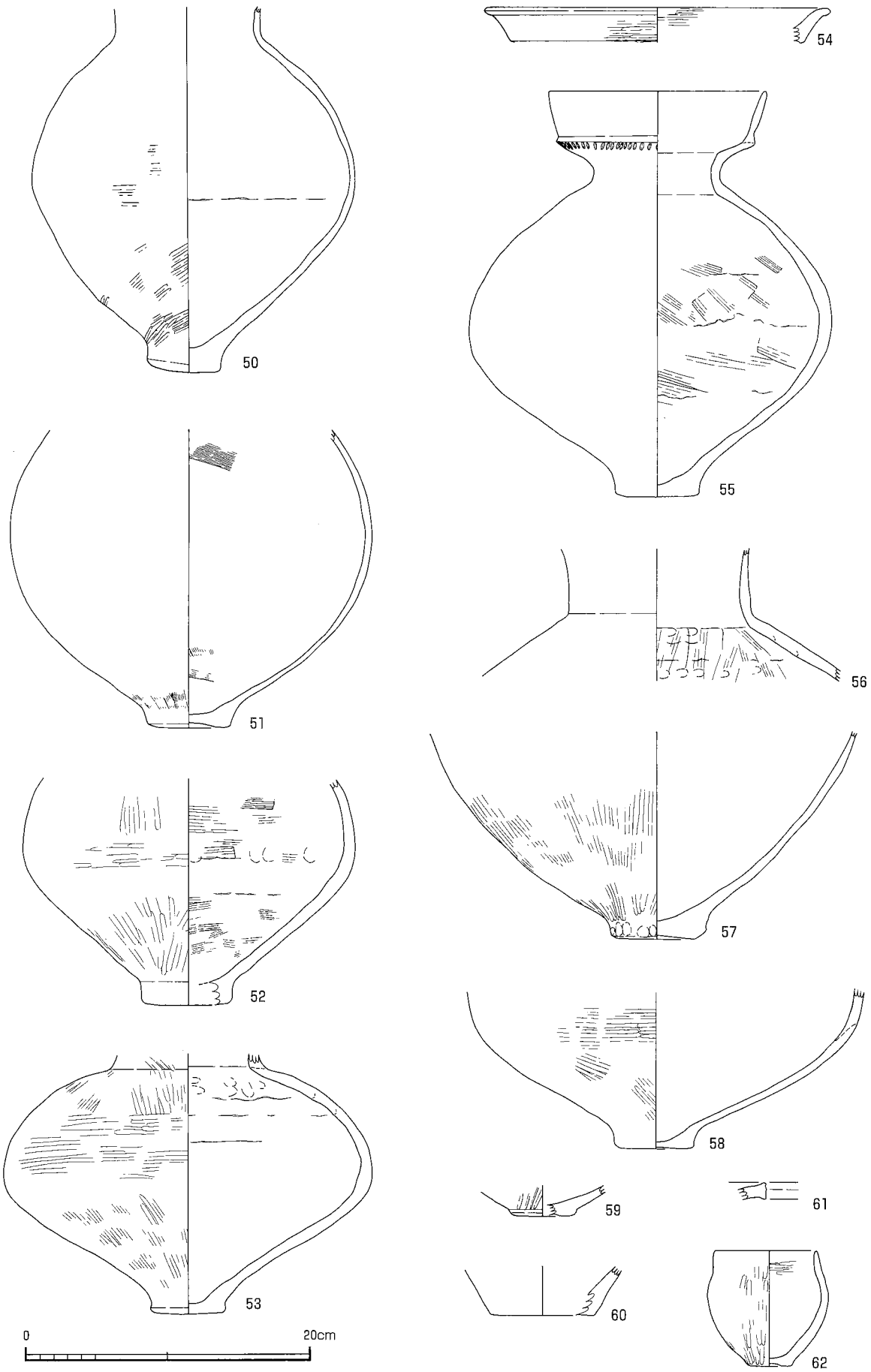
SX22014



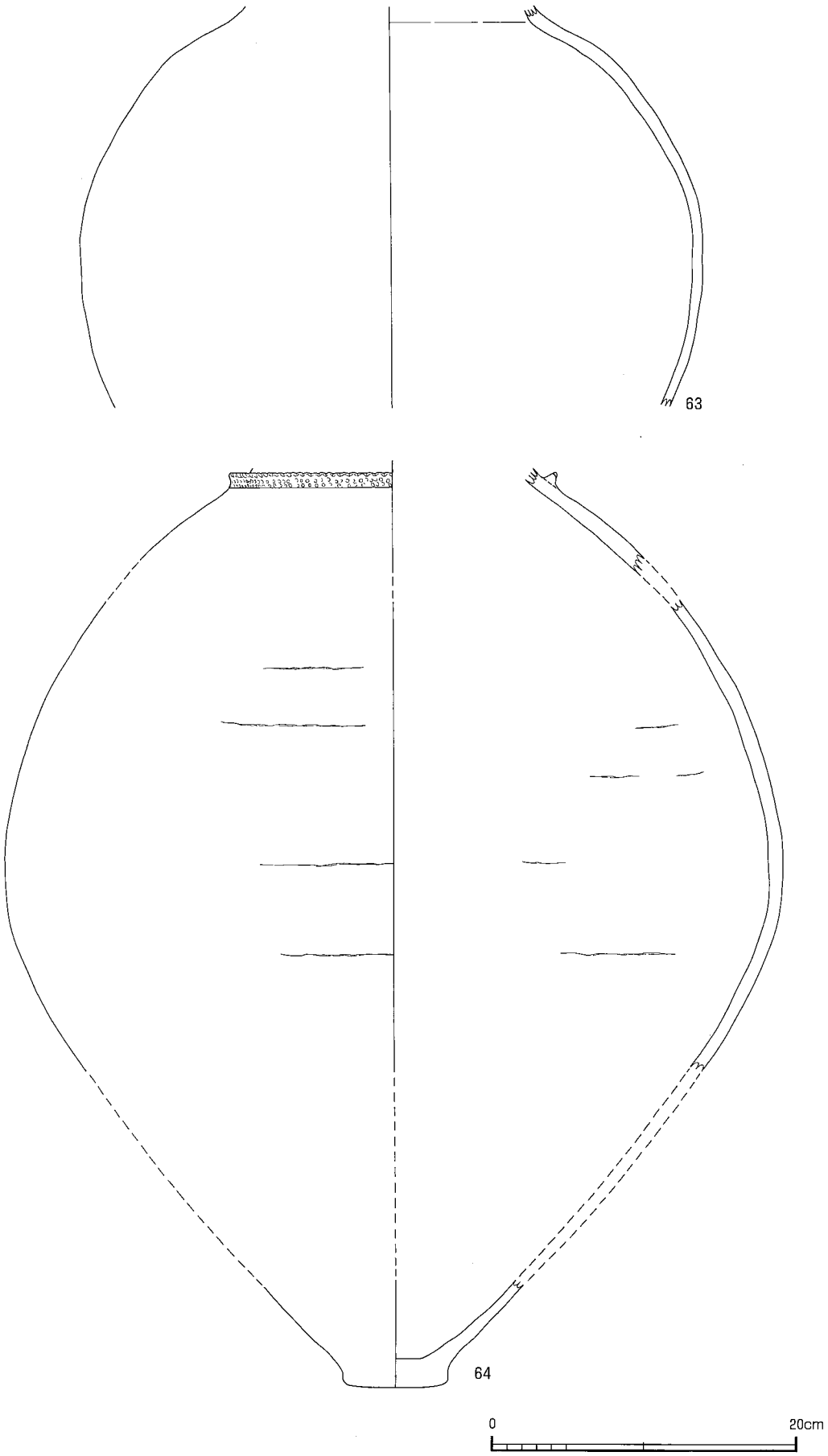
SX22249



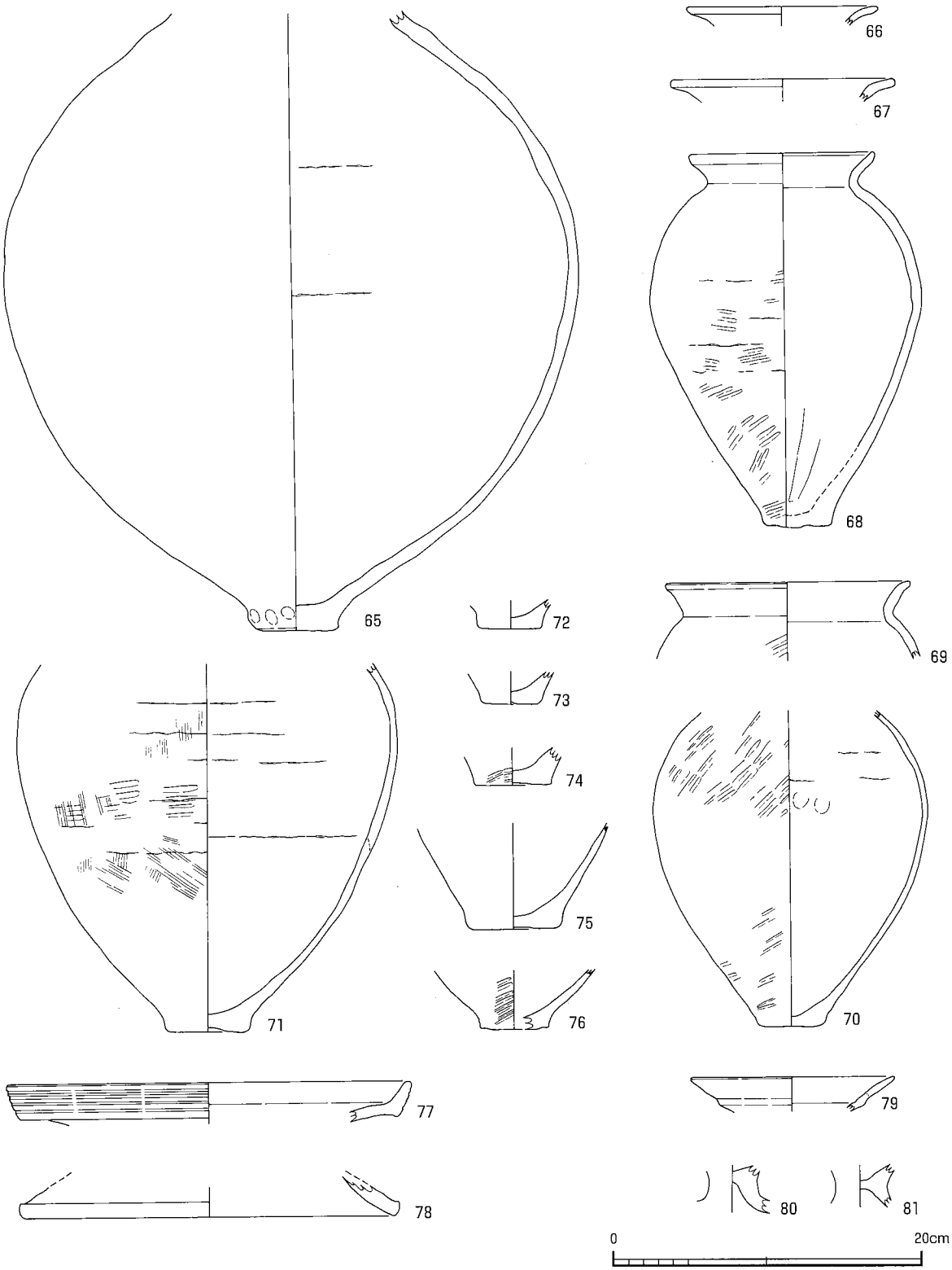
SH2201 および周辺遺構出土遺物(2)・土壙出土土器(1)



SH2202 出土遺物(1)

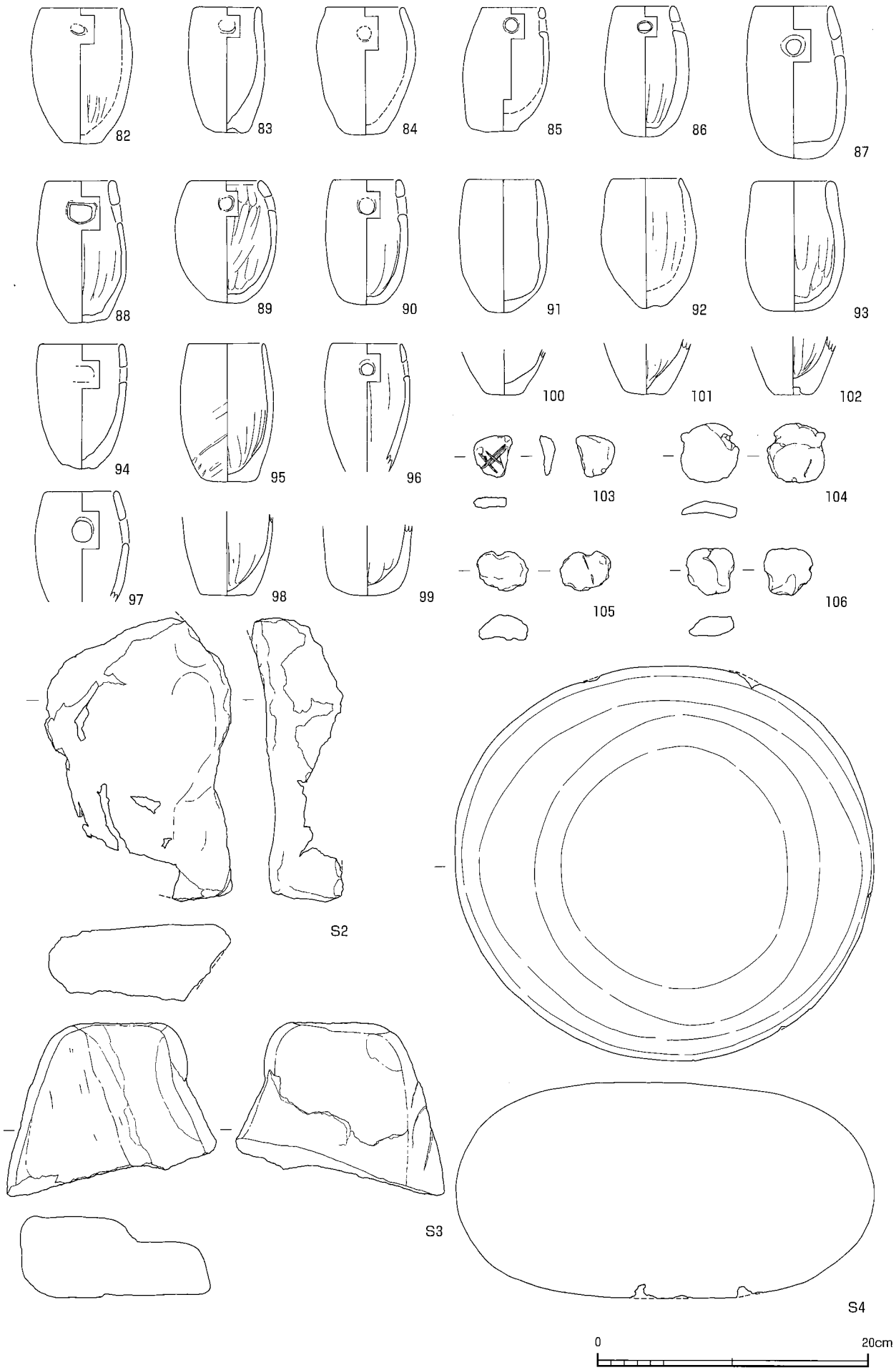


SH2202 出土遺物(2)

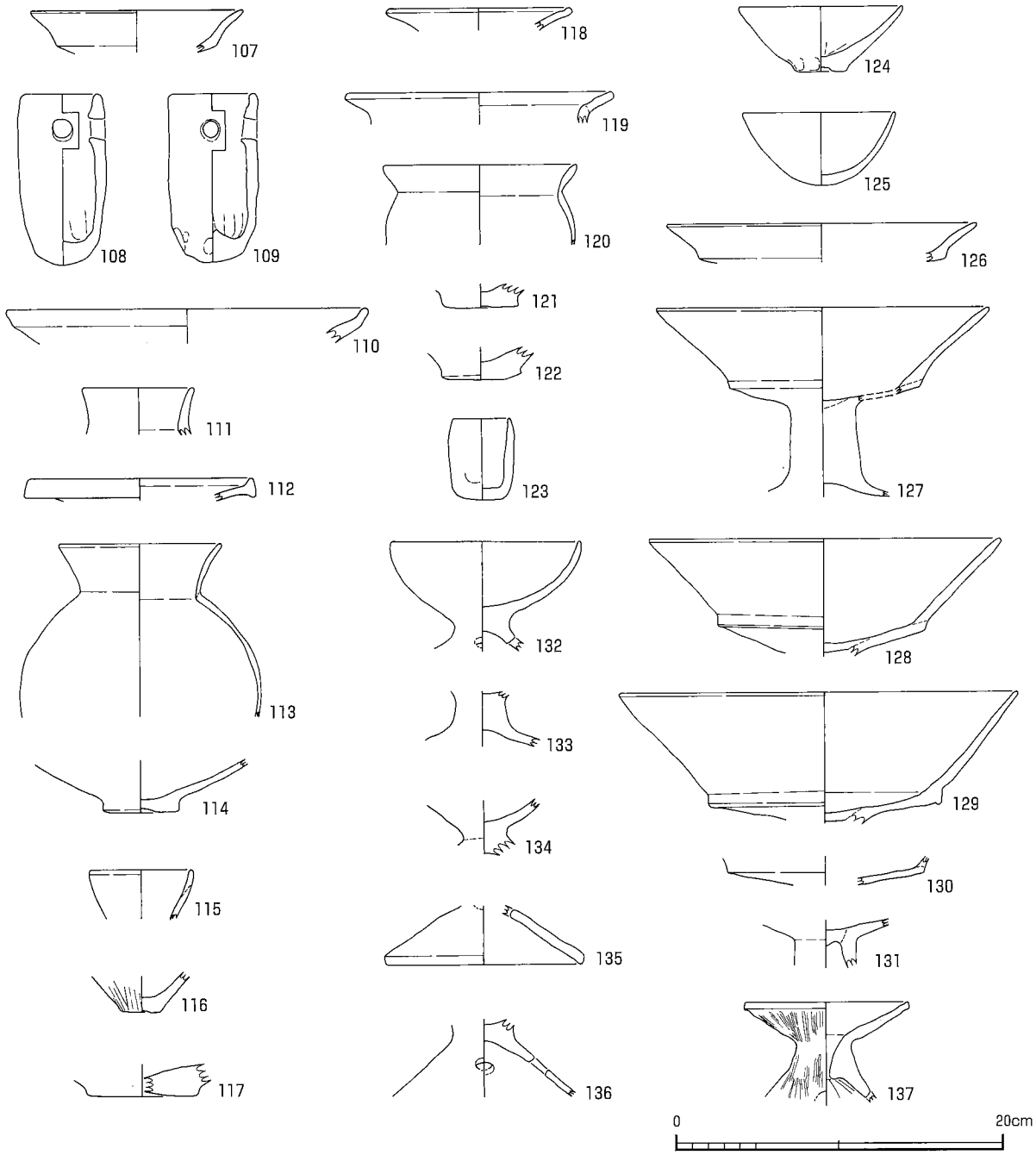


SH2202 出土遺物(3)

図版 52



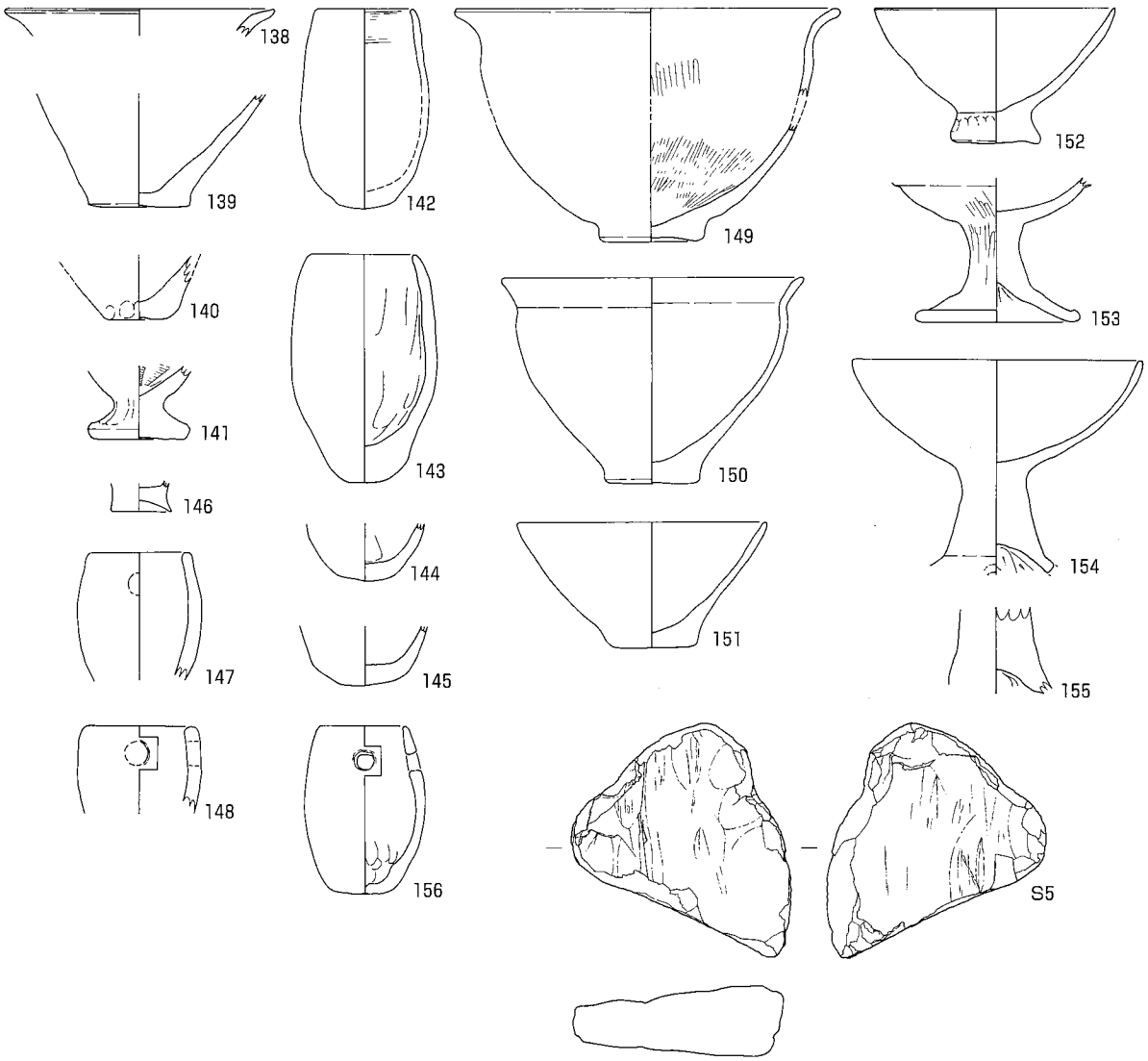
SH2202 出土遺物(4)


107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
0
20cm

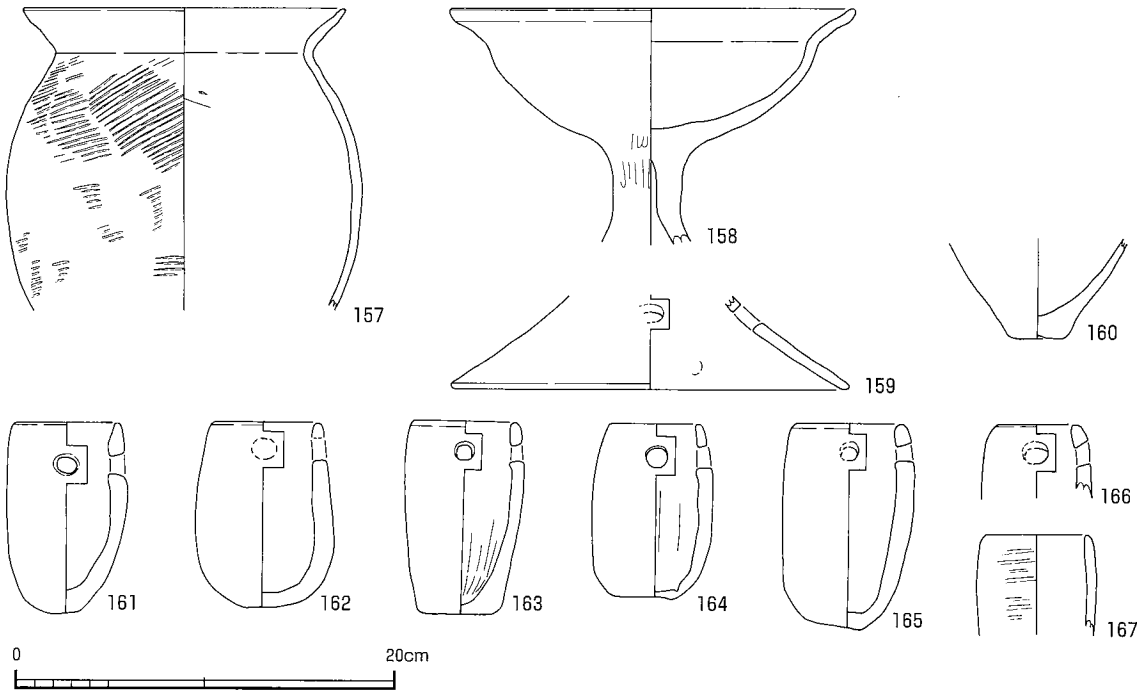
SH2203 出土土器

図版 54

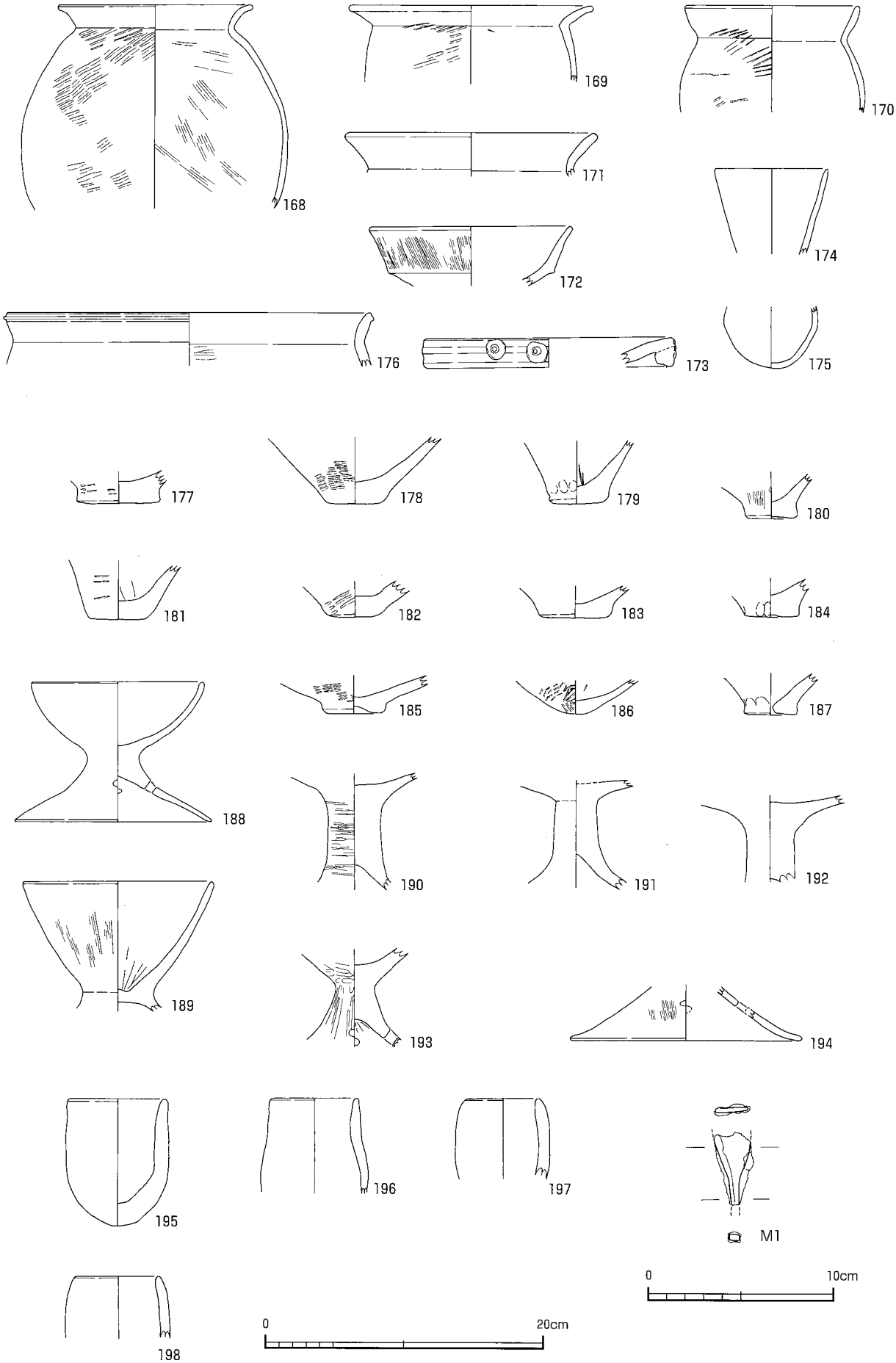
SH2204



SH2208

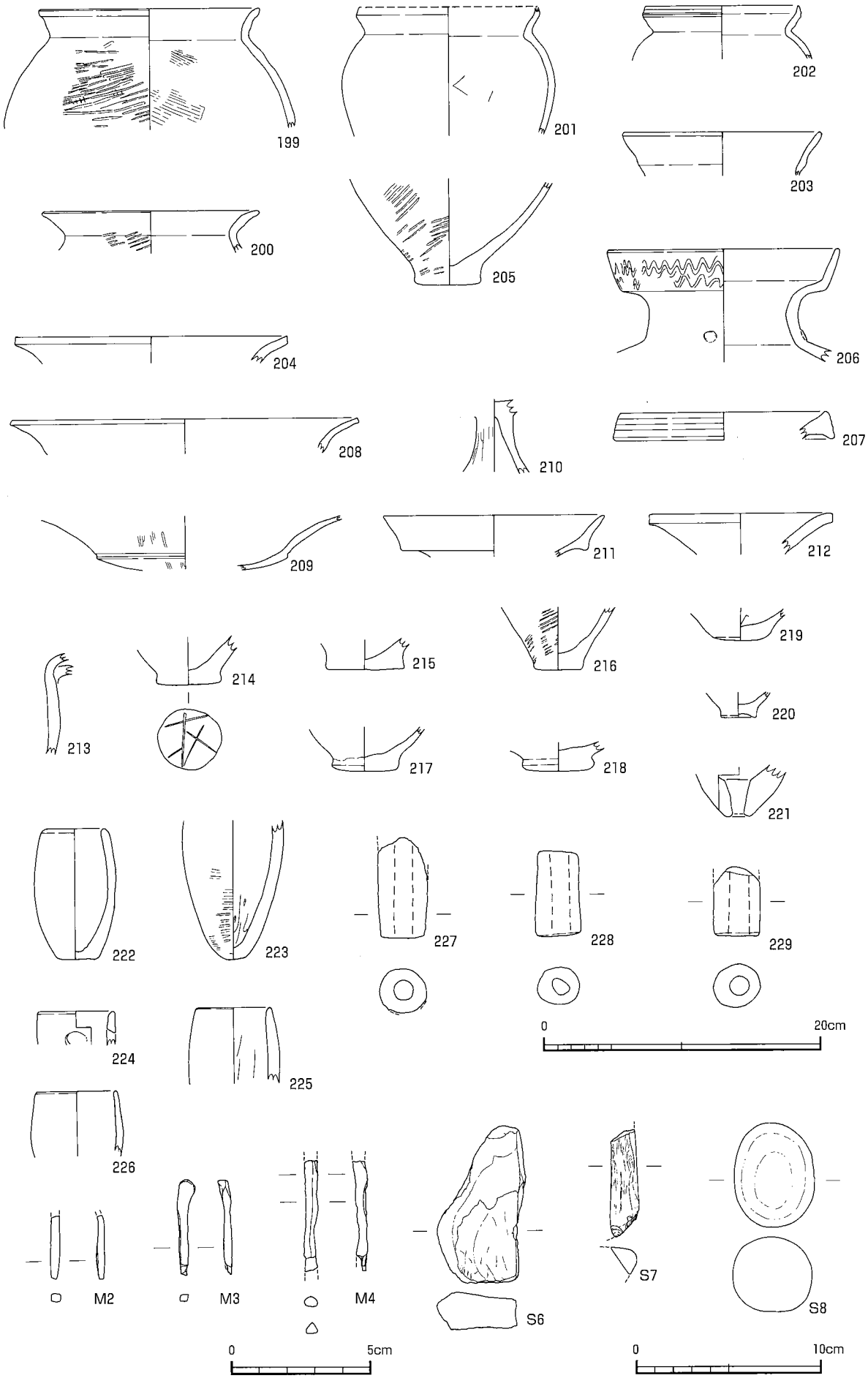


SH2204・SH2208 出土遺物


168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
M1
0
10cm
0
20cm

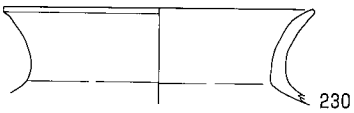
SH2205 出土遺物

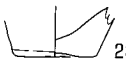
図版 56

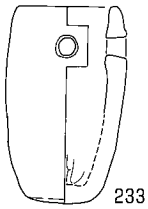


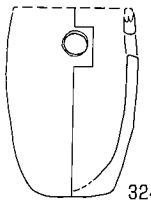
SH2206 出土遺物

SK22063

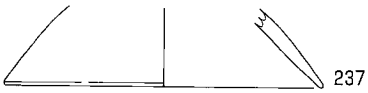


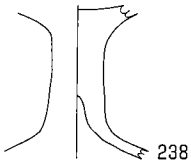


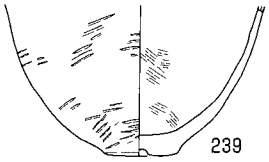


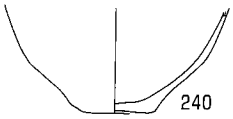


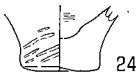
SK22080



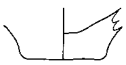




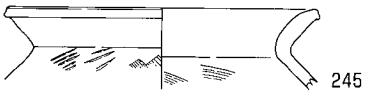


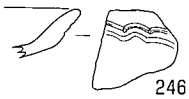


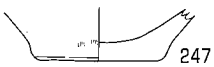
SK22089

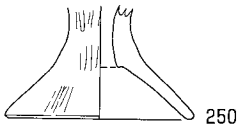


SK22091

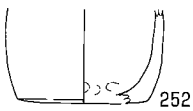


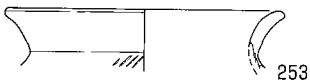


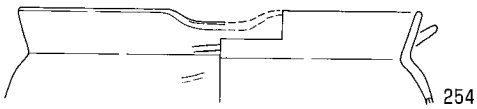


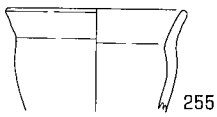


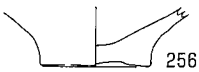
SK22118

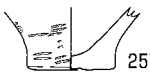


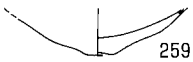


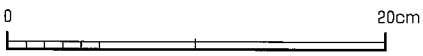






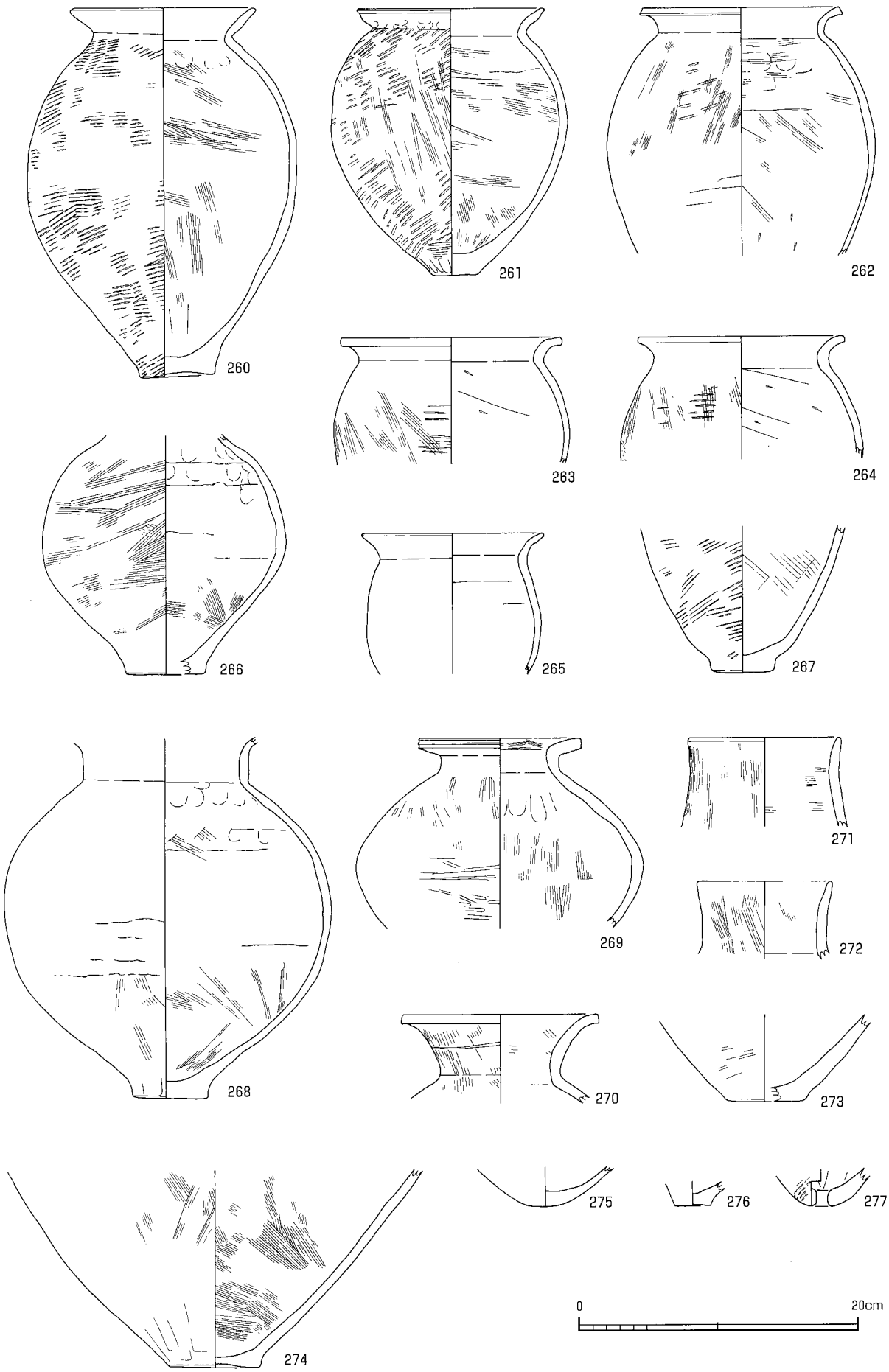




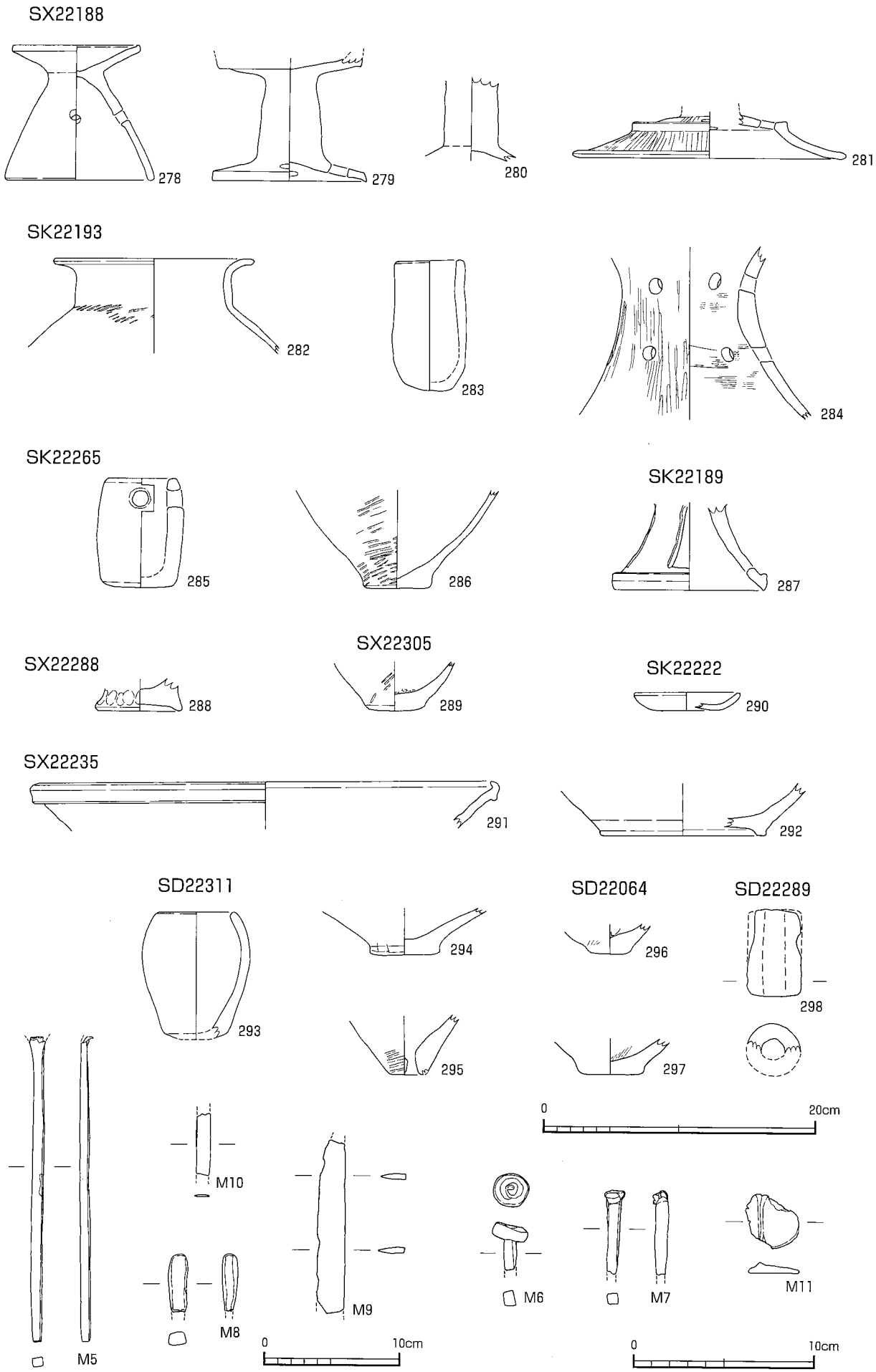


土壙出土土器(2)

図版 58

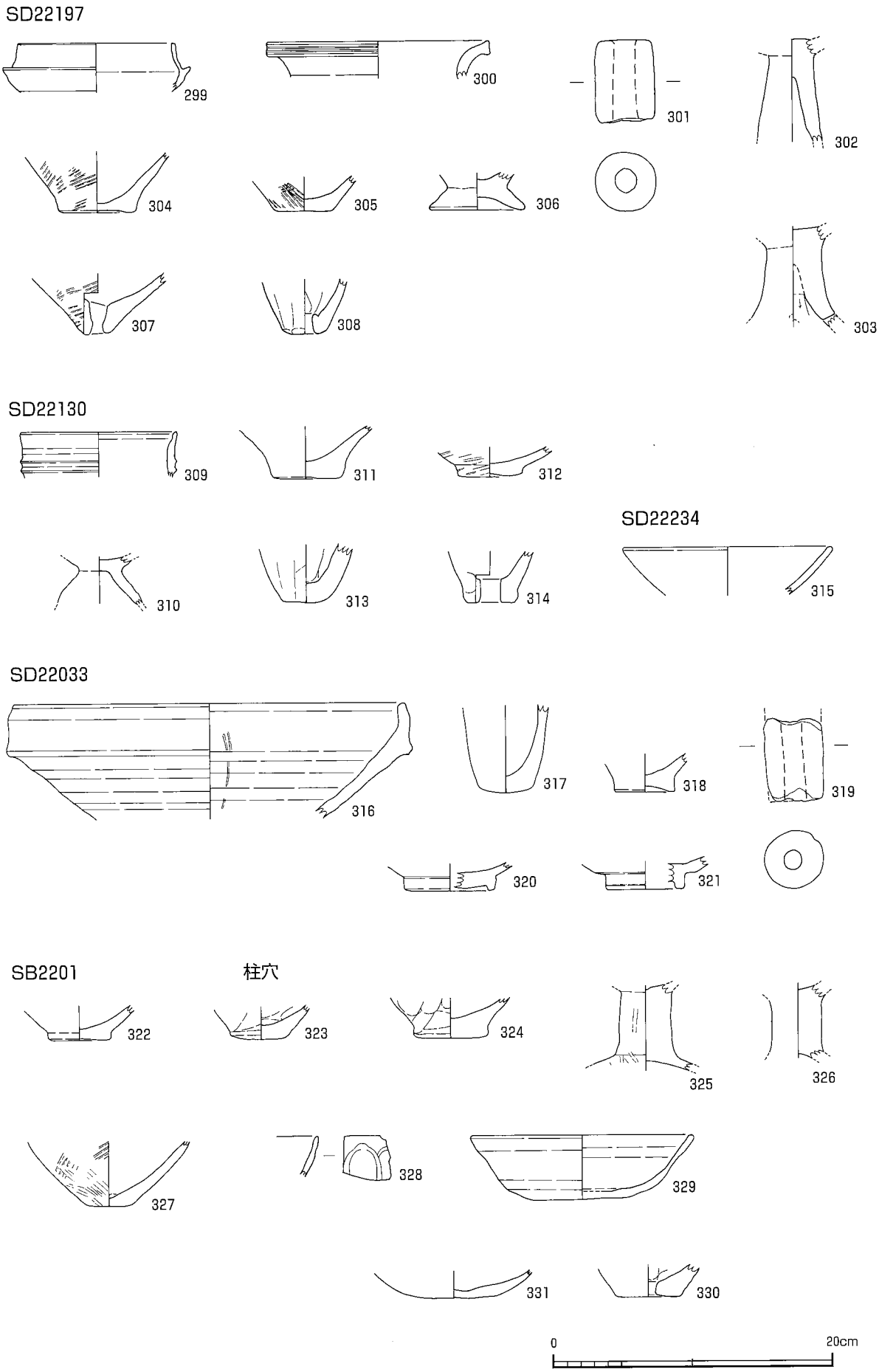


SX22188 出土土器(1)

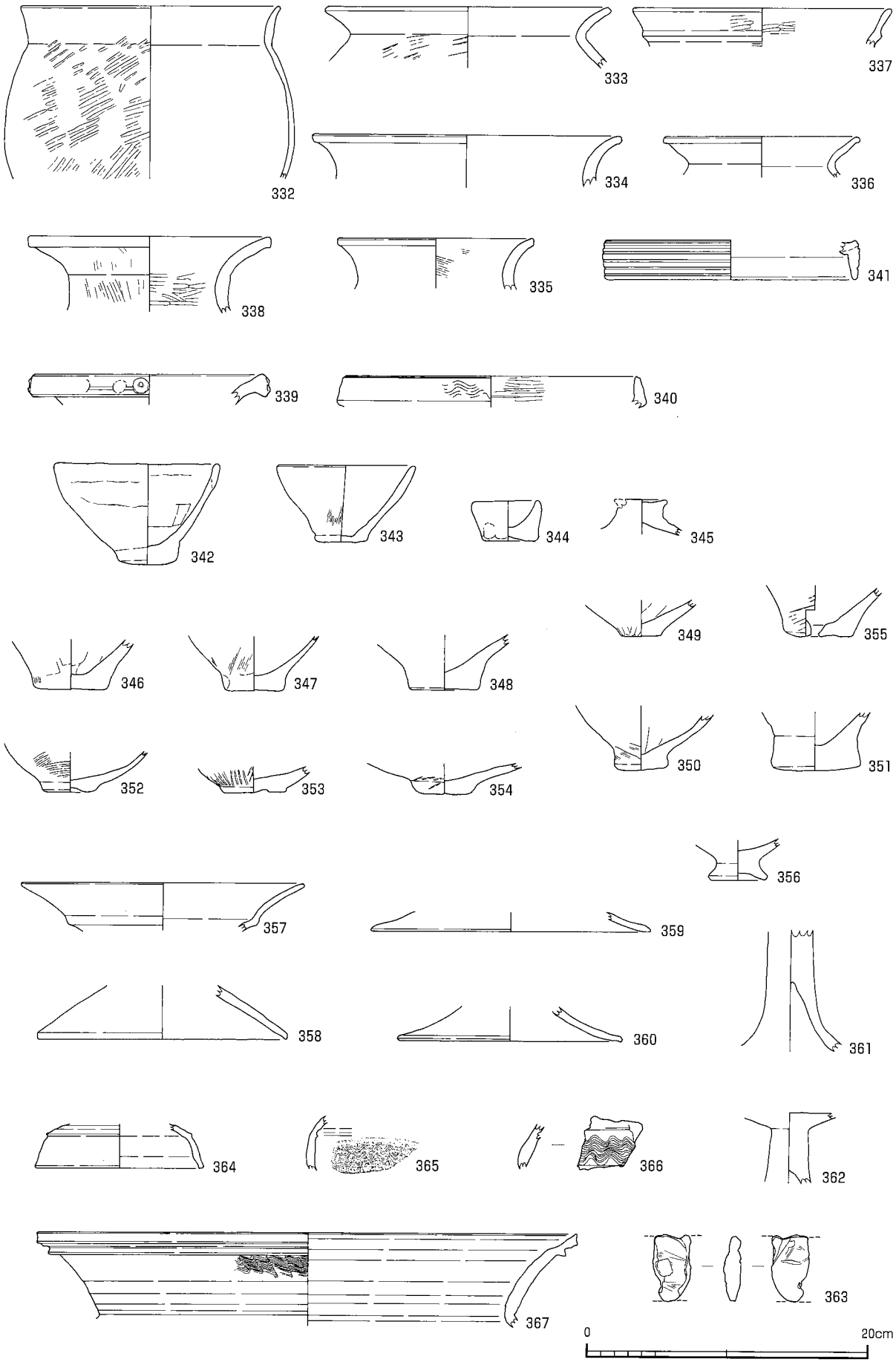


SX22188 出土土器(2)・土壙出土土器(3)・木棺墓出土土器・溝出土遺物(1)・包含層出土鉄器

図版 60

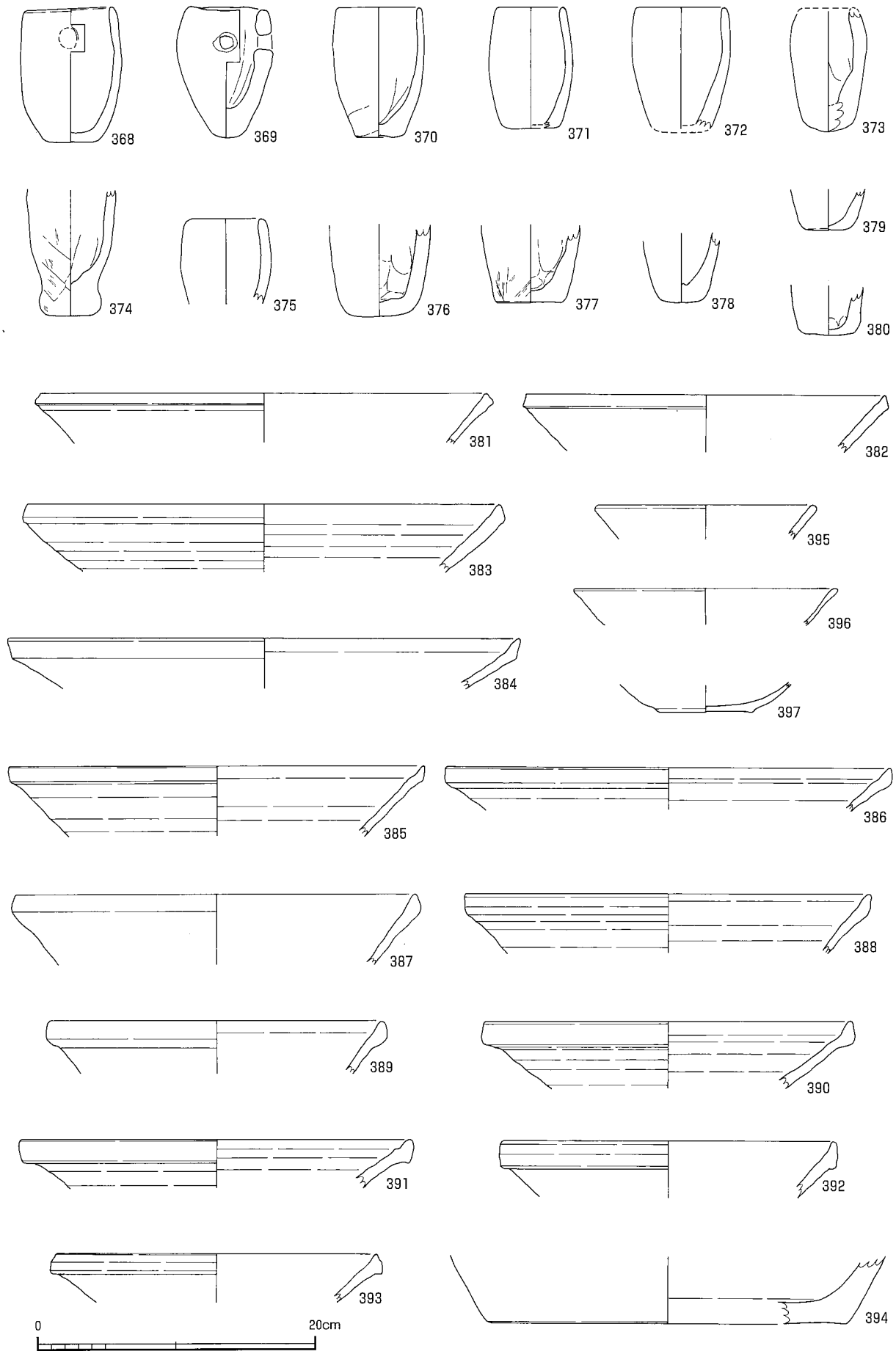


溝出土遺物(2)・柱穴出土遺物

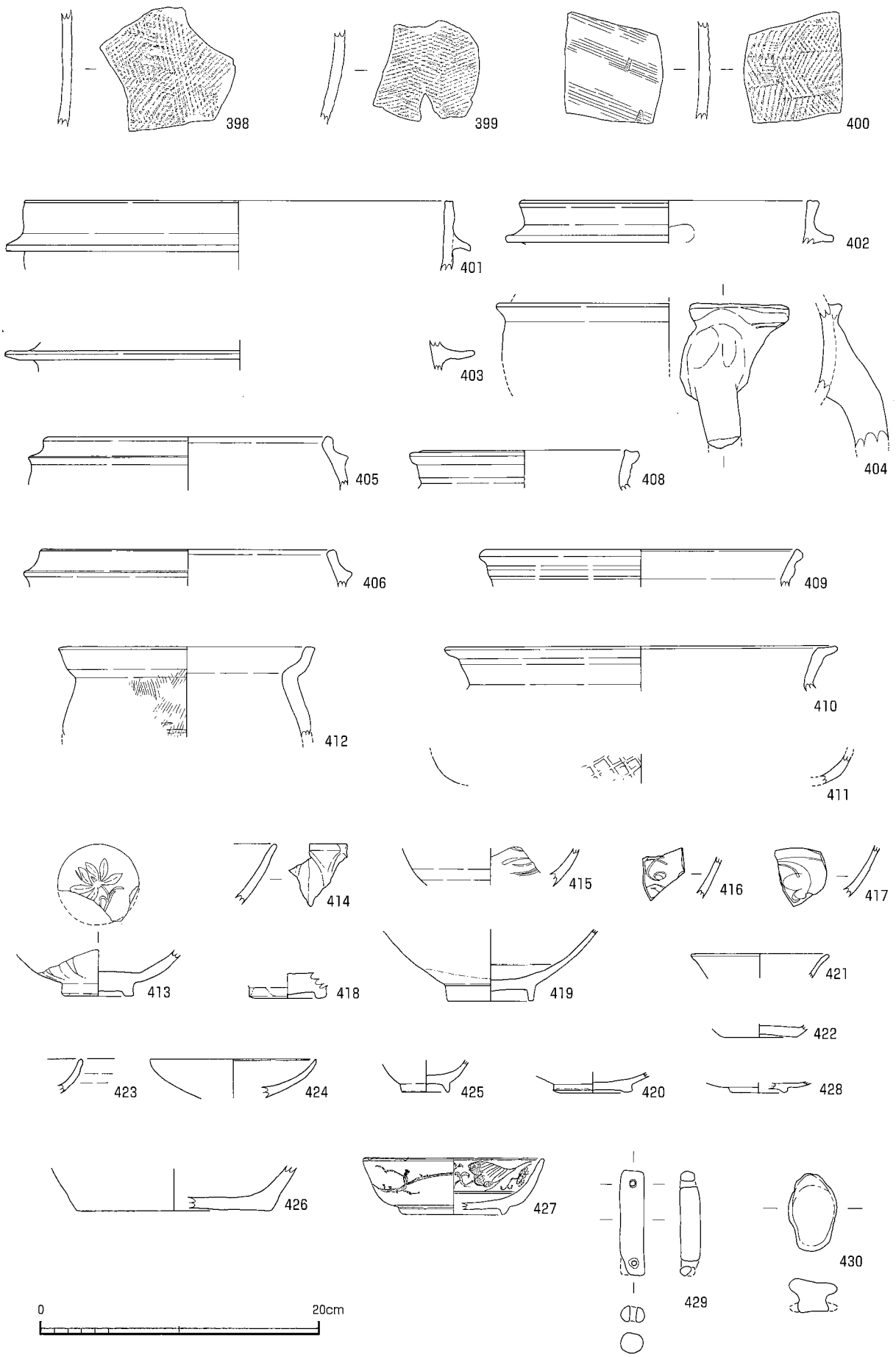

332
333
337
334
336
338
335
341
339
340
342
343
344
345
349
355
346
347
348
350
351
352
353
354
356
357
359
358
360
361
364
365
366
362
367
363
0
20cm

包含層出土遺物(1)

図版 62

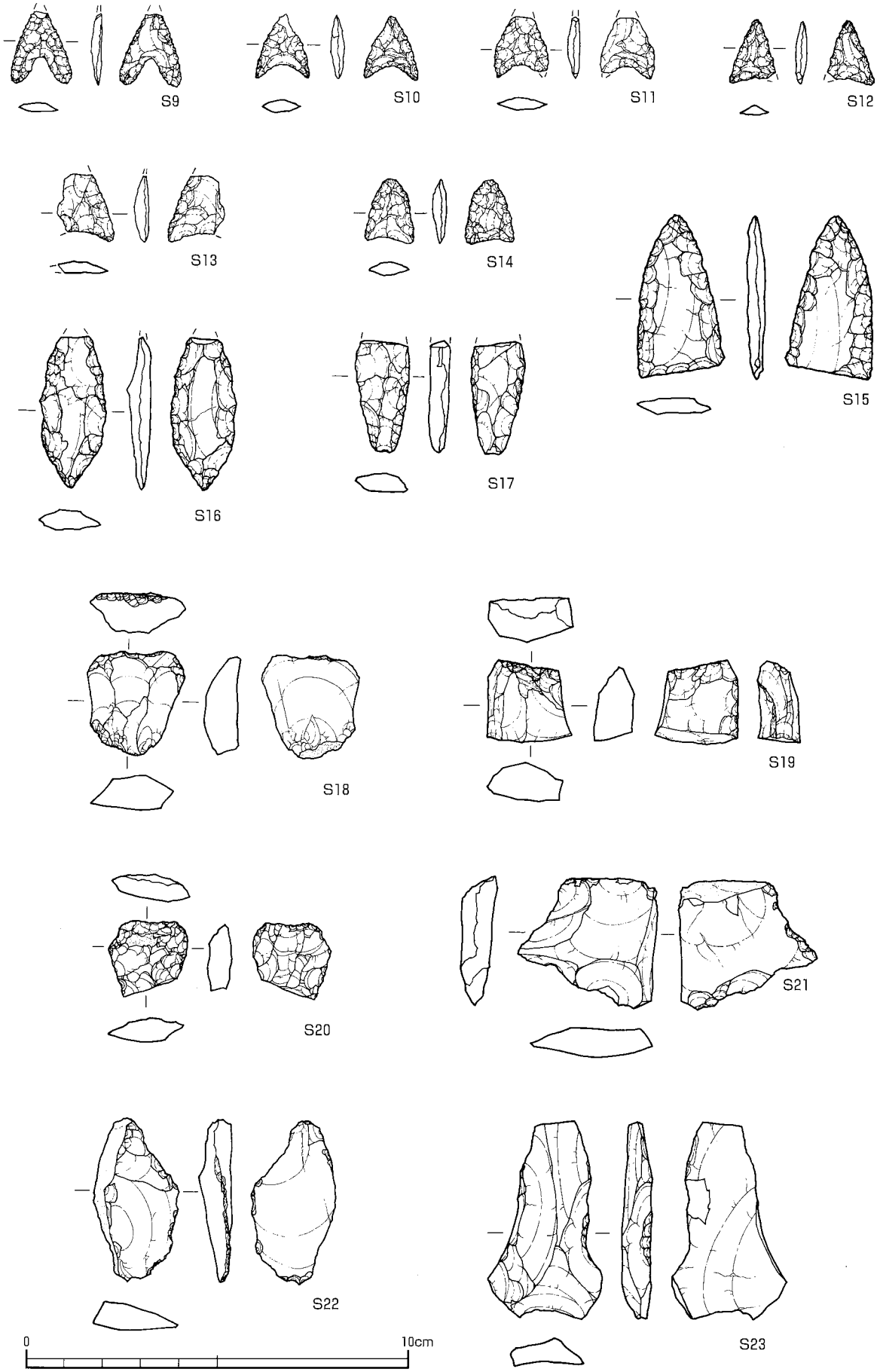


包含層出土遺物(2)

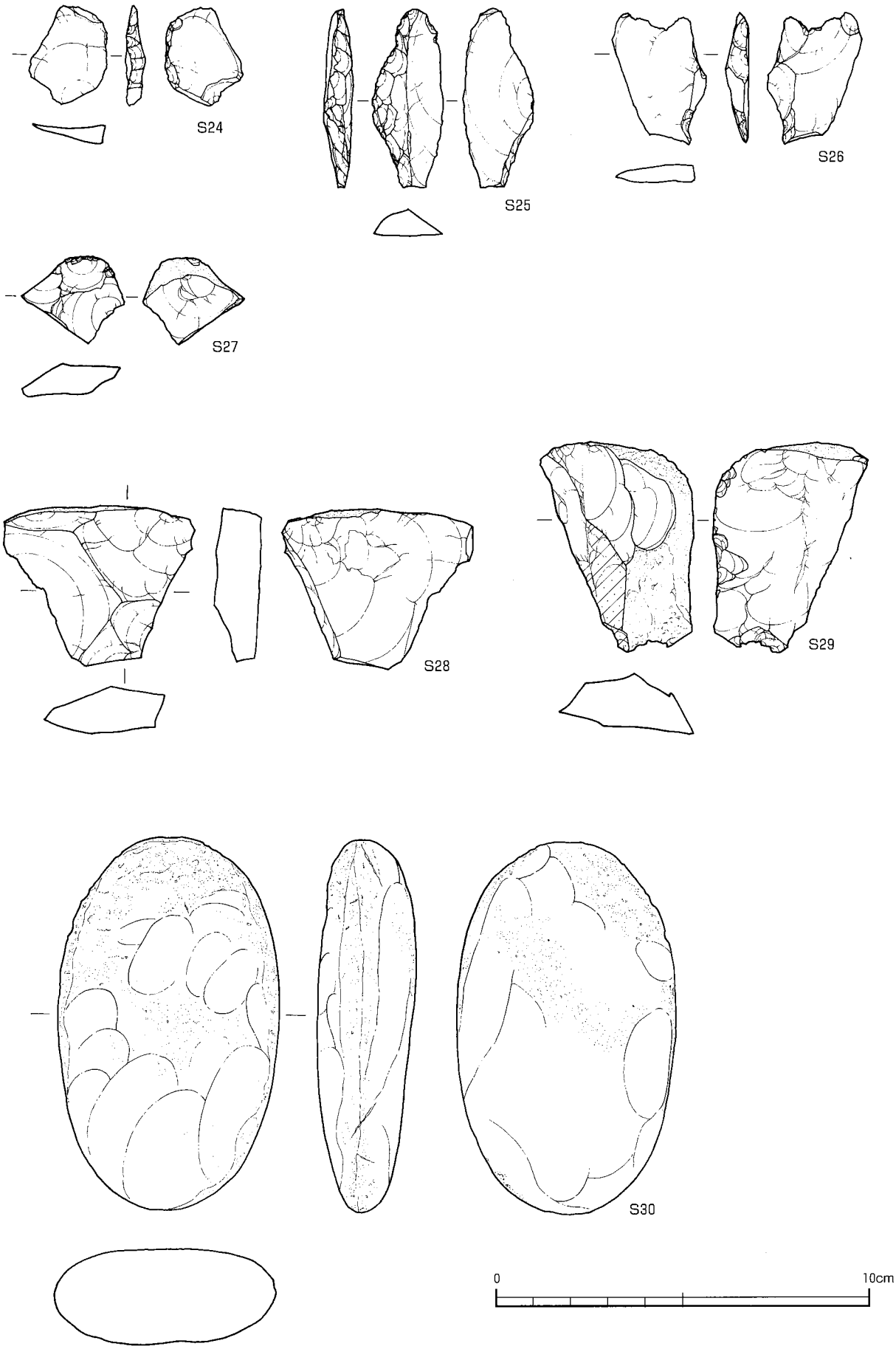

398
399
400
401
402
403
404
405
406
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
0
20cm

包含層出土遺物(3)

図版 64

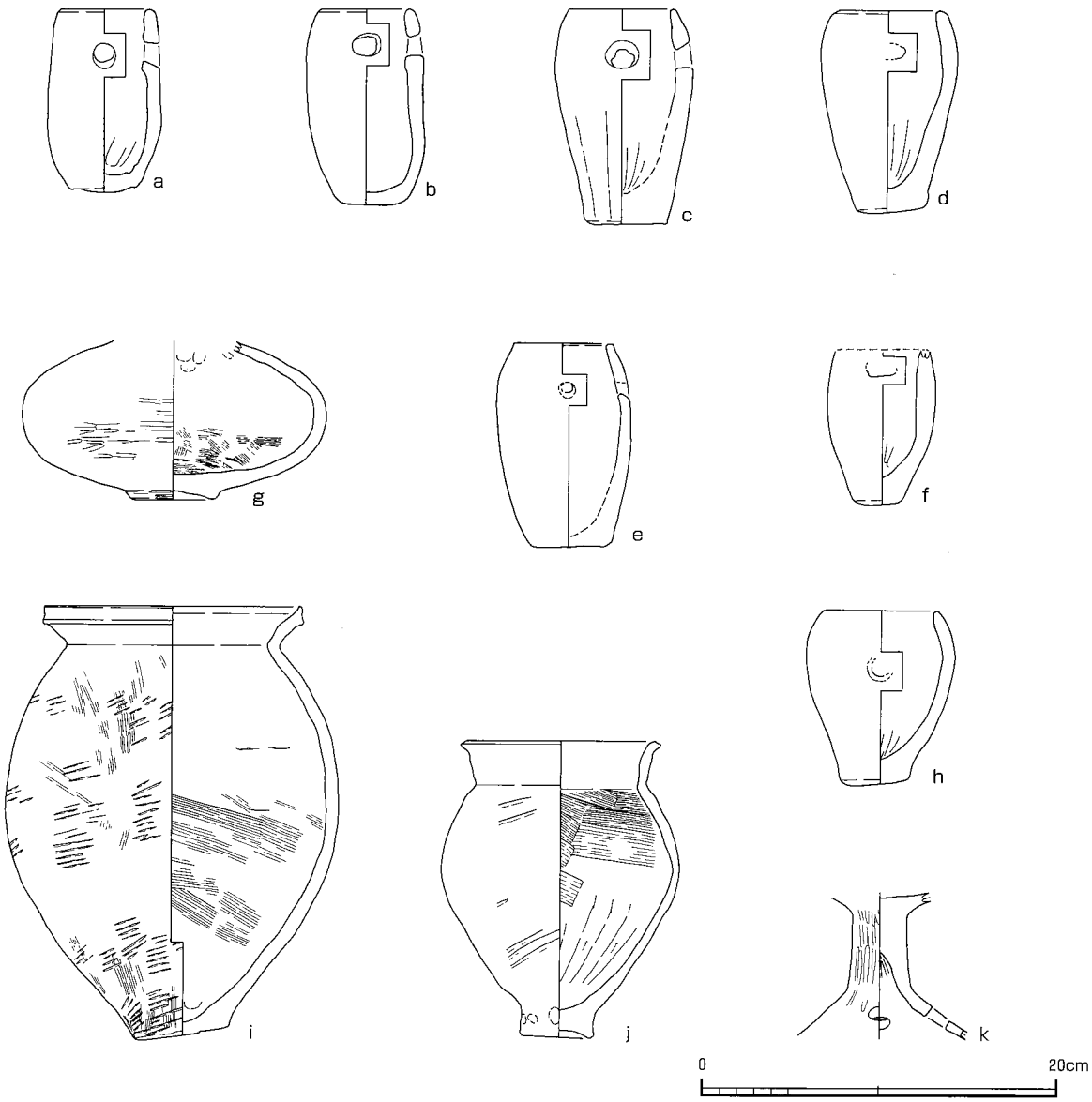


出土石器(1)



出土石器(2)

図版 66



大中遺跡第 21 次調査出土土器